

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

丹 保 遺 跡

—— 農村基盤総合整備事業(集落型)丹保地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

遺 構 編

1993. 3

長野県下伊那郡上郷町役場産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

丹 保 遺 跡

—— 農村基盤総合整備事業(集落型)丹保地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

遺 構 編

1993. 3

長野県下伊那郡上郷町役場産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

序

昭和63年度より着工した農村基盤総合整備事業（集落型）丹保地区は、受益面積38ha（面整備29ha）で、面整備をはじめ道水路をすべて整備する大事業でその規模は飯沼丹保集落をほとんど網羅することとなり、町としてもかつて類を見ない事業となりました。

また、この事業は関東農政局管内でも当地区だけであり、特に、除外地をも含めた基盤整備することで、農業地帯における宅地地帯との線引きができ、より良い農業環境と宅地環境を創り出すことができました。

当地区は、神代の昔からたくさんの人々の生活が営まれていた模様で、大小の遺跡群が密集していますが、その中でも「丹保遺跡」は、発跡調査以前から、大規模かつ重要な遺跡であろうと予想されました。また、話題の東山ルート of 解明の可能性も含み、その期待は調査と共に膨らみましました。

調査は、昭和から平成に変わり、現地調査は平成2年度と3年度に、遺物等の整理と報告書作りを平成4年度にと、長い間かけてお願いをしました。調査結果をお聞きしたところ、「丹保遺跡」は、その期待に応えたかのように、大規模な姿を平成の世に現しました。住居址140軒余、弥生時代後期としては県下最大規模の遺跡ということで新聞紙上も賑わしました。

夏の暑い中、冬の雪降る中、四季を肌感じてこの発掘作業をしていただいた方々に感謝し、序文とします。

平成5年3月19日

上郷町長 山田 隆 士

例 言

1. 本書は、農村基盤総合整備事業（集落型）丹保地区工事に伴う上郷町飯沼「丹保遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 上郷町教育委員会が組織する上郷町遺跡発掘調査団が、平成3年度に発掘調査を、平成4年度に整理作業及び報告書の作成を行った。
3. 本書は遺構編と図版編の2冊により構成されており、それぞれに目次がつく。
4. 本書は、平成4年度にまとめることが要求されており、時間的な制約により一部の資料化しかなかった。
5. 発掘調査・整理作業はTNBの記号によって実施した。
6. 本書の作成に関わる図面・遺物の整理は、調査団調査員および、その指導のもと整理作業員があたった。
7. 本書の執筆と編集は調査員の協議により、I・II・III-2・IVを山下誠一が、III-1・3・4を吉川金利が行った。
8. 本書に関連した遺物及び記録・図書類は、上郷町教育委員会が管理し、上郷考古博物館で保管している。



丹保地区全景



丹保遺跡 第I地区





丹保遺跡 第II地区



丹保遺跡 第Ⅲ地区



丹保遺跡 第Ⅳ地区

本文目次

序文

例言

I 経過

- 1. 調査に至るまで 1
- 2. 調査の経過 1
- 3. 調査の方法と概要 2
- 4. 調査組織 4
 - 1) 上郷町埋蔵文化財調査委員会 4

II 遺跡の立地と環境 6

- 1. 自然的環境 6
- 2. 歴史的環境 8
- 3. 層序 11

III 調査結果 13

- 1. 第I地区 13
 - 1) 竪穴住居址 13
 - (1)縄文時代 13
 - (2)弥生時代 13
 - 2) 溝址 76
 - 3) 土坑 83
 - 4) 井戸址 86
 - 5) 土器棺墓 90
 - 6) 囲溝址・ピット 90
- 2. 第II地区 100
 - 1) 竪穴住居址 100
 - (1)縄文時代 100
 - (2)弥生時代 100
 - (3)古墳時代 175
 - 2) 掘立柱建物址 179
 - 3) 溝址 181
 - 4) 土坑 186

5) 囲溝址・ピット	189
3. 第III地区	203
1) 竪穴住居址	203
(1) 弥生時代	203
(2) 杭列	206
(3) 溝址	207
(4) 溝状遺構	211
(5) 土坑	211
(6) 囲溝址・ピット	212
4. 第IV地区	214
1) 竪穴住居址	214
(1) 弥生時代	214
(2) 古墳時代	214
2) 竪穴状遺構	218
3) 掘立柱建物址	220
4) 溝址	222
5) トレンチ	225
IV まとめ	227

挿 図 目 次

挿図 1	大グリッド設定図及び発掘調査地区	3
挿図 2	丹保地区位置図	7
挿図 3	丹保遺跡位置図及び周辺図	9・10
挿図 4	丹保遺跡基本土層柱状図	12
挿図 5	61号住居址	14
挿図 6	23号住居址	15
挿図 7	11・12号住居址	16
挿図 8	13号住居址	17
挿図 9	14号住居址	19
挿図10	15号住居址	20
挿図11	16・17住居址	22
挿図12	18号住居址	22
挿図13	19号住居址	23
挿図14	20号住居址	24
挿図15	21号住居址	25
挿図16	24号住居址	26
挿図17	25号住居址	27
挿図18	26号住居址	28
挿図19	27・37号住居址	29
挿図20	28・38号住居址	31
挿図21	29号住居址	32
挿図22	30号住居址	33
挿図23	31号住居址	35
挿図24	32号住居址	36
挿図25	33号住居址	37
挿図26	34号住居址	38
挿図27	35号住居址	39
挿図28	36号住居址	41
挿図29	39号住居址	42
挿図30	40号住居址	43

插图31	41号住居址	44
插图32	42号住居址	46
插图33	43号住居址	47
插图34	44号住居址	48
插图35	45号住居址	50
插图36	46号住居址	51
插图37	47号住居址	52
插图38	48号住居址	53
插图39	49号住居址	54
插图40	50号住居址	55
插图41	51号住居址	56
插图42	52号住居址	57
插图43	53·56号住居址	59
插图44	53号住居址	60
插图45	54号住居址	61
插图46	55号住居址	62
插图47	57号住居址	63
插图48	58·59号住居址	65
插图49	60号住居址	66
插图50	62号住居址	67
插图51	63号住居址	68
插图52	64号住居址	69
插图53	65·141号住居址	70
插图54	66号住居址	71
插图55	67号住居址	72
插图56	68号住居址	73
插图57	69号住居址	74
插图58	22·155号住居址	75
插图59	溝址3·4	77
插图60	溝址5·6·8	79·80
插图61	溝址7	81
插图62	溝址9	81
插图63	溝址10	82
插图64	溝址12	83

挿図65	土坑16、囲溝址、ピット(1)	84
挿図66	土坑17・18、囲溝址、ピット(2)	85
挿図67	井戸址2・3・4、囲溝址、ピット(4)	87・88
挿図68	井戸址1、囲溝址、ピット(3)	89
挿図69	土器棺墓1	90
挿図70	ピット(5)	91
挿図71	囲溝址、ピット(6)	92
挿図72	囲溝址、ピット(7)	93
挿図73	囲溝址、ピット(8)	94
挿図74	囲溝址、ピット(9)	95
挿図75	囲溝址、ピット(10)	96
挿図76	囲溝址、ピット(11)	97
挿図77	囲溝址、ピット(12)	98
挿図78	囲溝址、ピット(13)	99
挿図79	144号住居址	101
挿図80	106号住居址	102
挿図81	137号住居址	103
挿図82	138号住居址及び周辺囲溝址、ピット	104
挿図83	142号住居址	105
挿図84	143号住居址	106
挿図85	70号住居址	107
挿図86	71号住居址	108
挿図87	72号住居址	109
挿図88	73号住居址	110
挿図89	75号住居址	111
挿図90	76号住居址	112
挿図91	77号住居址	113
挿図92	78号住居址	114
挿図93	79号住居址	116
挿図94	80・81号住居址	117
挿図95	82号住居址	118
挿図96	83号住居址	120
挿図97	85号住居址	121
挿図98	86号住居址	122

挿図99	87・88号住居址	123
挿図100	89号住居址	124
挿図101	90号住居址	125
挿図102	91号住居址	126
挿図103	92号住居址及び周辺ピット	127
挿図104	93号住居址	128
挿図105	94号住居址	129
挿図106	95号住居址	131
挿図107	96号住居址	132
挿図108	97号住居址	133
挿図109	98号住居址	134
挿図110	99号住居址	135
挿図111	100号住居址	137
挿図112	101号住居址	138
挿図113	102号住居址	139
挿図114	103号住居址	140
挿図115	104号住居址	141
挿図116	105号住居址	142
挿図117	107号住居址	144
挿図118	108号住居址	145
挿図119	109号住居址	146
挿図120	110号住居址	147
挿図121	111号住居址	148
挿図122	112号住居址	149
挿図123	113・116号住居址	150
挿図124	114号住居址	151
挿図125	115・117号住居址	153
挿図126	118号住居址	154
挿図127	119号住居址	155
挿図128	120号住居址	156
挿図129	121号住居址	157
挿図130	122号住居址	158
挿図131	123号住居址	159
挿図132	124号住居址	161

挿図133	126号住居址	162
挿図134	127号住居址	163
挿図135	128号住居址	164
挿図136	129号住居址	165
挿図137	130号住居址	166
挿図138	131号住居址	167
挿図139	132・133号住居址	168
挿図140	134号住居址	170
挿図141	135号住居址	171
挿図142	136号住居址	172
挿図143	139号住居址	173
挿図144	140号住居址、土坑18	174
挿図145	145号住居址	175
挿図146	74号住居址	175
挿図147	74号住居址	176
挿図148	84号住居址	177
挿図149	125号住居址	178
挿図150	125号住居址、炉址	179
挿図151	掘立柱建物址 1	180
挿図152	溝址11	181
挿図153	溝址20	182
挿図154	溝址21	183
挿図155	溝址24	184
挿図156	溝址25・26	185
挿図157	土坑21・22、ピット	187
挿図158	土坑24	188
挿図159	囲溝址、ピット(1)	189
挿図160	囲溝址、ピット(2)、土坑(20)	190
挿図161	囲溝址、ピット(3)	191
挿図162	囲溝址、ピット(4)	192
挿図163	囲溝址、ピット(5)	193
挿図164	囲溝址、ピット(6)	194
挿図165	囲溝址、ピット(7)	195
挿図166	囲溝址、ピット(8)、土坑(19)	196

挿図167	囲溝址、ピット(9)	197
挿図168	囲溝址、ピット(10)	198
挿図169	囲溝址、ピット(11)	199
挿図170	囲溝址、ピット(12)	200
挿図171	ピット(1)	201
挿図172	ピット(2)	202
挿図173	146号住居址	204
挿図174	147・148号住居址	205
挿図175	149号住居址	206
挿図176	杭列 1	207
挿図177	溝址13	208
挿図178	溝址14 1516	209
挿図179	溝址17、Iトレンチ土層図	210
挿図180	溝状遺構	211
挿図181	土坑25、囲溝址、ピット(1)	213
挿図182	150号住居址	215
挿図183	153号住居址	216
挿図184	151号住居址	217
挿図185	152号住居址	218
挿図186	154号住居址	219
挿図187	竪穴状遺構 1	220
挿図188	掘立柱建物址 2・3	221
挿図189	溝址18・19	223
挿図190	溝址22、Iトレンチ土層図	224

I 経 過

1. 調査に至るまで

昭和63年度において、上郷町飯沼丹保地区に農村基盤総合整備事業（集落型）が昭和64～68年度で施工されることが決定した。当該地域は上郷町有数の遺跡地帯で、一丁田・釜ノ口・ママ下・堂垣外・丹保・矢劔・橋爪・長橋・藪上遺跡に工事範囲がかかることが明らかとなった。そこで、工事を実施する上郷町役場産業課と協議を重ね、昭和63年9月27日に長野県教育委員会文化課指導主事・上郷町役場産業課担当職員・上郷町教育委員会担当職員による保護協議を実施し、遺跡の一部が破壊されることが余儀なくなったために、事前に発掘調査を実施して記録保存を計ることとなった。なお、円滑な発掘調査の実施を計るため、「上郷町埋蔵文化財調査委員会」を組織することとした。

その後、事業規模や計画の変更等があり、その都度産業課と調整を重ねた。また、年度毎に県教育委員会文化課担当職員を加えた保護協議を実施し、その結果一丁田・釜ノ口・矢劔遺跡が調査対象から除外されることとなった。なお、年度毎の保護対象遺跡は以下のとおりである。

平成元年度……………藪上遺跡・堂垣外遺跡の発掘調査

平成2年度……………堂垣外遺跡・橋爪遺跡の発掘調査

平成3年度……………丹保遺跡・長橋遺跡・橋爪遺跡の発掘調査

平成4年度……………堂垣外遺跡の発掘調査、藪上遺跡の整理作業、丹保遺跡の整理・報告書刊行

平成5年度……………堂垣外遺跡・橋爪遺跡・長橋遺跡の整理・報告書刊行、藪上遺跡の報告書刊行を予定

2. 調査の経過

丹保遺跡の発掘調査は平成3年度に実施した。調査対象地域は丹保遺跡の半分程を占め、広大な範囲にわたるものであった。調査期間・費用に限られるため、効率的な調査が必要となった。当初から集落範囲にかかると考えられたので、重機を効率的に使用してなるべく広範囲の調査になるよう留意した。重機で広げた調査区のみとまりで、第I地区から第IV地区までを設定し、ほかに第I～Vのトレンチ調査も実施した。

実際の調査は、平成3年4月26日に重機を使って第I地区の拡張から開始し、作業員を使った本格調査は5月1日から始めた。予想以上に遺構が密集して遺物が多出したので、時間がかかり、8月中旬に測量を除いたおおよその作業を終了させた。

8月5日に重機を導入して第II地区の拡張を開始し、8月17日より遺構調査を始める。排土の関係から9月と10月に重機を使用して順次調査区を拡張し、11月中旬に測量と炉址の断ち割り調査を除いたおおよその作業が終了した。

第III地区の拡張は11月13日に開始して引き続き第IV地区と第I～V地区も実施し、第III地区の調査は11月14日から始める。12月からは並行して第IV地区の調査も行い、第I～Vトレンチを含めて平成5年1月13日に発掘作業が終わり、翌14日に発掘器材を搬出して現場におけるすべての作業が終了した。

この間、平成4年8月3日に第I地区、11月2日に第II地区の現地見学会を実施し、延べ100人の参加があった。

その後、大量の遺物が出土したので基本的な整理作業を実施することとし、3月10日まで遺物の洗浄作業を実施した。

平成4年度は整理作業を実施し、平成4年4月27日より遺物洗浄作業を開始し、平成5年1月まで遺物復元等を行い、並行して図面の整理を実施した。2月に遺物実測・トレースと遺構のトレースを済ませ、本報告書刊行となった。

3. 調査の方法と概要

農村基盤整備事業（集落型）丹保地区工事に関わる遺跡は、複数にわたりかつ広大な面積に及んでおり、総合的に調査する必要があった。そこで、丹保地区全体に国家座標軸第VIII系を使って50m四方の大グリットを設定し、その中に2m四方の小グリットをおとして、調査測量に当ることとした。大グリットの南北方向はアルファベットの大文字、東西方向をローマ数字を使い、小グリットの南北方向はアルファベットの小文字のa～y、東西方向は算用数字の1～25を使ってあらわすこととした。今次調査の発掘面積と調査した遺構は以下のとおりである。

第I地区……………3,298m²、竪穴住居址61軒、溝址8本、土坑2基、井戸址4基、囲溝址・ピット多数

第II地区……………4,175m²、竪穴住居址76軒、掘立柱建物址1棟、溝址3本、土坑6基、囲溝址・ピット多数

第III地区……………1,122m²、竪穴住居址4軒・溝址5本・杭列1本、ピット

第IV地区……………1,110m²、竪穴住居址5軒・掘立柱建物址2棟、溝址3本、ピット

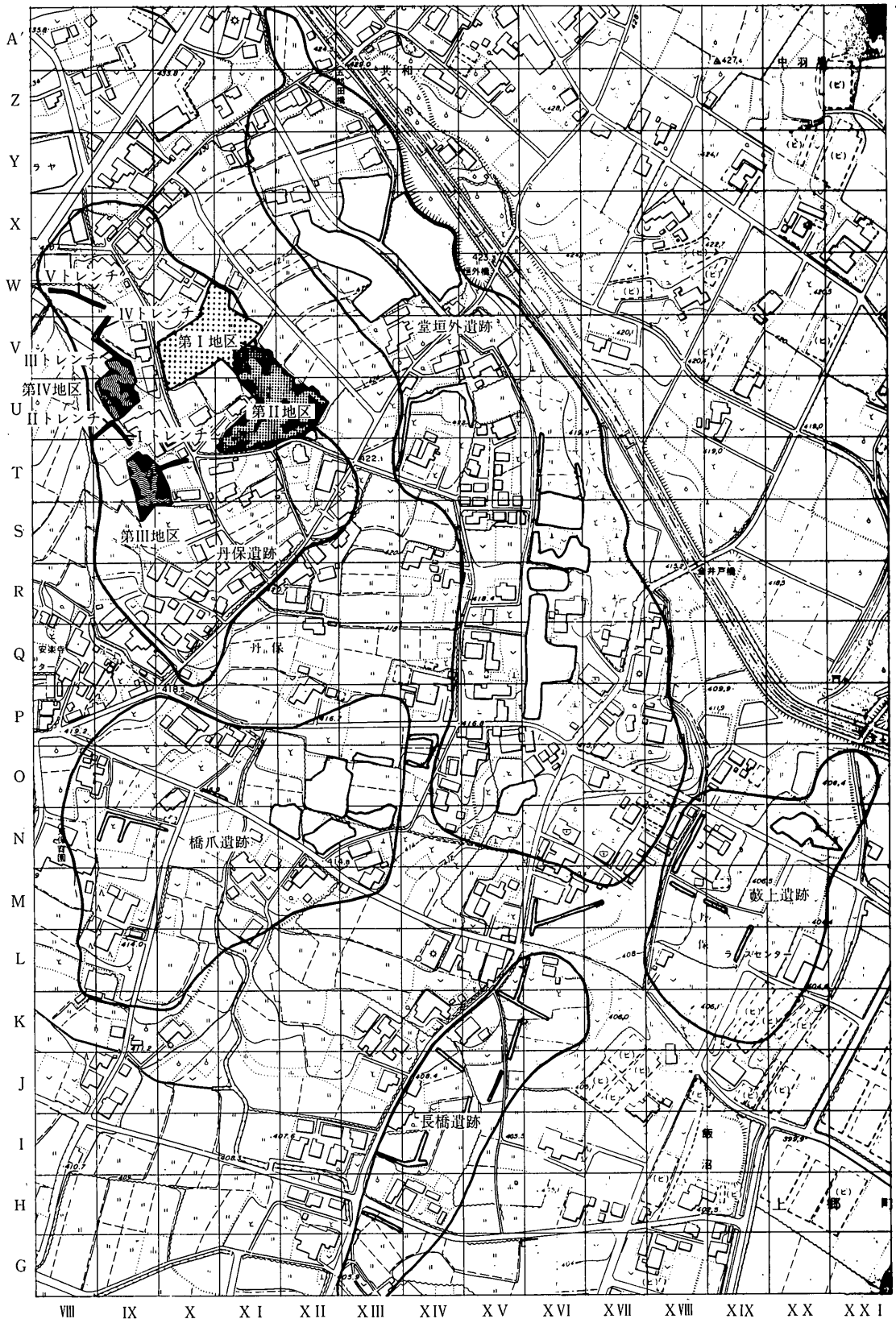
第Iトレンチ……………54m²、検出遺構なし

第IIトレンチ……………41m²、検出遺構なし

第IIIトレンチ……………54m²、検出遺構なし

第IVトレンチ……………46m²、検出遺構なし

第Vトレンチ……………117m²、検出遺構なし



挿図1 大グリット設定図及び発掘調査地区

(1 : 5,000)

4. 調査組織

1) 上郷町埋蔵文化財調査委員会

① 規約

(設置)

第1条 この会は、「上郷町埋蔵文化財調査委員会」(以下委員会という)と称し、事務局を上郷町教育委員会事務局に置く。

(目的)

第2条 この委員会は、上郷町内の関係各機関・団体及び考古学関係者の相互協力により、上郷町埋蔵文化財保護事業の円滑な実施をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 この委員会は、前条の目的達成のため、次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 遺跡調査の総合企画、連絡・調整に関すること。
- (2) 土地所有者等の発掘承諾に関すること。
- (3) 発掘調査員及び作業員の確保に関すること。
- (4) そのほか目的達成に必要なこと。

(役職員)

第4条 この委員会に次の役職員を置く。

- (1) 顧問1名、会長1名、副会長2名、委員若干名、事務局員若干名
- (2) 顧問は町長とし、そのほかの役員は委員会に於いて互選する。
- (3) 委員は次の通りとする。

教育委員5名、文化財保護委員5名、考古学関係者3名、産業常任委員長、建設常任委員長、土地改良事業等地元代表者

- (4) 事務局員は関係各課局の職員を充てる。

(役員の仕事)

第5条 会長は委員会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する。

(会議)

第6条 この委員会の会議は、会長の招集により開催する。

(その他)

第7条 この規約に定めるもののほか、会の運営に必要な事項は委員会において決定する。

付則

1. この規約は、昭和62年4月10日より施行する。

② 役職員

顧問	山田 隆士 (町長)		
会長	小室 伊作 (教育委員会委員長 ~3.4)	北原 勝 (同左 3.6~)	
副会長	中田 裕康 (産業林務常任委員長~3.3)	横田 昭男 (同左 3.4~)	
	牧野 光弥 (文化財保護委員長)		
委員	北原 勝 (教育委員 3.5~)	麦島 正吉 (文化財保護委員)	
	井浦 汪 (教育委員 ~3.6)	小木曾英寿 (同上)	
	矢崎 和子 (同上)	菊本 正義 (同上)	
	北原政治郎 (同上)	稲垣 隆 (同上)	
	吉川 昭文 (教育委員会教育長)	篠木 俊寛 (建設常任委員長 ~3.4)	
	中田 裕康 (建設常任委員長 3.5~)	岡田 道人 (丹保地区)	
	今村 善興 (日本考古学協会員)	野口 兼昭 (同上)	
	佐藤 甦信 (同上)	岡田 勇雄 (同上)	
	岡田 正彦 (同上)		
事務局員	吉川 昭文 (教育委員会教育長)	北原 克司 (産業課課長 ~2.3)	
	林 慶一 (同上 ~1.4)	菅沼 広二 (同上 ~3.3)	
	吉川 勝一 (同上 社会教育課長)	池田 丈夫 (同上 3.4~)	
	山下 誠一 (同上 社会教育係)	中園 紘 (同上 課長補佐)	
	吉川 金利 (同上)	井上 弘司 (同上 工務係長)	
	下島 美和 (同上 ~3.3)	小室 勇治 (同上 主事)	
	牧内 功 (同上 4.4~)	角池 紀子 (教育委員会主査 3.4~)	

③ 調査団

調査担当者	山下 誠一				
調査主任	吉川 金利				
調査員	竹内 稔 (下條小学校教諭)		桜下 光男 (飯田高等学校教諭)		
作業協力員	新井 幸子	井坪 芳一	伊藤 愛子	伊部あき子	太田 沢男
	岡島 亘	岡田 紀子	大原 久和	上沼 文代	川上 一子
	北林 覚男	北原久美子	桑原かほる	小西 広司	小林百合子
	下井 正俊	下沢 貞満	下沢 敏文	菅沼 庄三	鋤柄 広一
	塚本千代美	寺平 崇	中島 潤子	中村 妙子	西山あい子
	野牧 安美	原 祐三	広瀬しず子	古井 純男	古林登志子
	細田 明	松下 光利	松沢美和子	宮沢 由充	宮沢紀美子
	水落佳代子	麦島 孝男	吉川なみえ	若松富美子	

II 遺跡の立地と環境

1. 自然的環境

丹保遺跡の所在する長野県上郷町は、長野県の南端を南北に走行する南・中央アルプスの谷間に広がる飯田盆地の中央に位置する。町を象徴する野底山が北西にあり、ここを源として清流野底川と土曾川が南流して飯田松川と天竜川に注いでいる。町の東側には天竜川を境として喬木村が、西は野底川をはさんで飯田市街地が、南は松川を境として飯田市松尾が、北は土曾川によって高森町と飯田市座光寺がそれぞれ隣接する。面積は約26km²で、東西に細長い緩傾斜の地域である。一帯は諏訪湖に源を發して南流する天竜川とその支流によって形成された河岸段丘や扇状地上に、往古から現在に至る人々の生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積にを基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱの五段階に編年されている。上郷町の地形の特徴として、町の中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼称される洪積土地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱとがみられる。その段丘崖の比高差は約50mあり、前者には黒田地籍が、後者には別府・飯沼地籍がある。低位段丘Ⅱ地帯は天竜川の現河床面海拔398mとの比高差30～3mを測り、大段丘崖下を中心にして湧水や地下水が豊富である。そのため、かつての沼沢となっていた凹地は、現在では典型的な水田地帯となっている。この段丘中央部を国道153号線が、突端部を農免道路が南北に走行する。ちなみに、低位段丘Ⅱ地帯は三大別でき、天竜川現川床面に近い海拔398～405mの南条面、それから一段高い海拔407～418mの別府面、さらに上段の飯沼面に細別される。

丹保遺跡は上郷町飯沼字中島・井ノ上・久保田・釜ノ口・屋敷畑・蓮池・マネゾイに所在し、低位段丘Ⅱ飯沼面の海拔420～430mに立地する。北西側を除いた三方が湿地帯をなす凹地となっており、その中央部にある150×300mに及ぶ微高地全面が遺跡の範囲となる。国道153号をはさんだ北西側は的場遺跡に連続し、凹地を間にして北東側に丹保遺跡、南側に橋爪遺跡、南西側に矢剣遺跡が位置している。このように、本遺跡周辺は上郷町でも密に遺跡が立地する箇所であり、周囲に生産域と想定できる湿地帯に面する微高地上に立地している。その地目は水田が主で、宅地化された箇所も多い。

生産地や湧水などの生活条件に恵まれ、洪水などの自然災害の危険が少なく、集落を営むのに絶好の自然条件といえる。



插图2 丹保地区 位置图

(1:50,000)

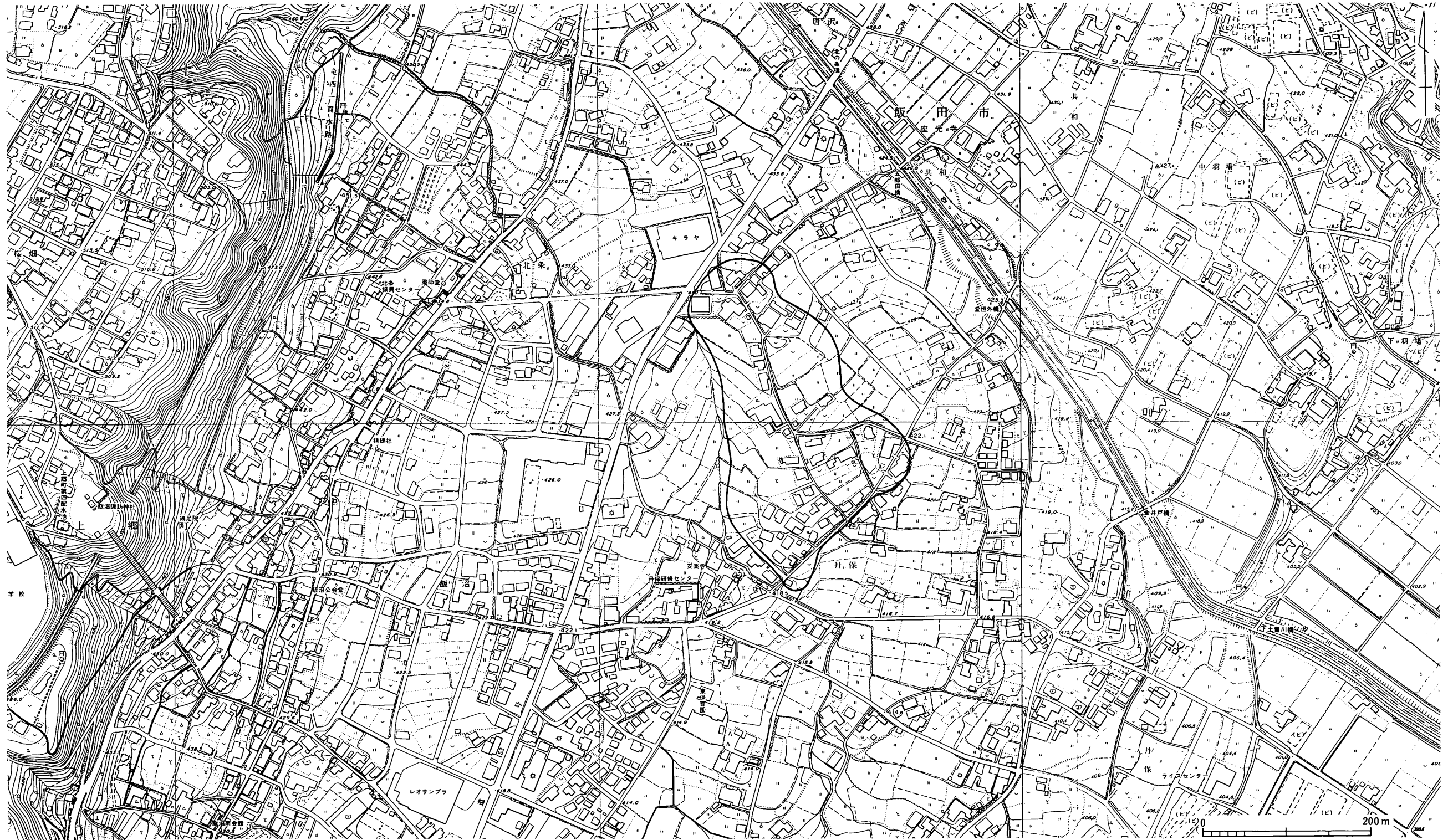
2. 歴史的環境

上郷町の遺跡調査は、大正13年鳥居龍蔵博士が『下伊那の先史及び原始時代図版』を編纂する際、市村成人氏と郡下一帯を調査したのを端緒とする。現在の上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査により明確にされたもので、一般遺跡69カ所・古墳32基・中世城跡3カ所の合計104遺跡が登録され、平成元年3月に古墳4基が追加された。一般遺跡を時代別に区分すると、縄文時代50、弥生時代47、古墳時代21、奈良・平安時代65、中世42を数えるが、単純遺跡は少なくその大半が複合遺跡である。

まず上郷町の歴史的変遷を概観してみると、12000年前の旧石器時代の遺構・遺物は現在のところない。上郷町最古の文化は、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文土器片と、同じく柏原A遺跡出土の石器剥片とより、縄文時代草創期からその黎明を知ることができる。次の縄文時代早期になると比較的山寄り八王子遺跡など5遺跡から、押型土器や繊維を含む条痕文及び撚糸土器が出土しており、平成元年1月の西浦遺跡の町道新設に伴う調査において押型文の住居址が検出されている。約6000年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・大明神原など8遺跡があるが、いずれも上段の中位段丘と低位段丘I地帯であり、下段の飯沼・別府地域からの発見がなく、未だ沖積地帯への進出はなかったと考えられていたが、町道改良による矢崎遺跡の発掘調査において前期後半の竪穴住居址が検出されており（上郷町教育委員会1989B）、見直しが必要となった。しかし、次の縄文時代中期になると、低位段丘II地帯の南条面下段を除き、全町内に遺物の散布が目立ち、人々の生活の舞台の広がりを示している。特に、中期の遺跡49カ所中栗屋元・大明神原遺跡は重要遺跡である。この後に続く約4000～3000年前の縄文時代後期には遺跡は極端に減少し、上段を中心にして8遺跡が判明している。さらに、最終末の縄文時代晩期の遺跡は3カ所が知られていたが、近年矢崎遺跡より該期土器片が多量に発見され（上郷町教育委員会1988）、弥生時代の始まりとも関連して、その出土意義が注目されている。

次の弥生時代は水稻栽培を経済基盤とする新文化であり、下伊那地方へは美濃・尾張・三河地方から東漸したものと推定される。弥生時代前期の遺物は少なく、中期に至って遺跡数が増える。特に、南条面に立地する棚田遺跡は、県下初の弥生時代の水田址が発見されたことで有名である（上郷町教育委員会1987）。また、該期の遺跡の大半は下段の飯沼・別府地籍に集中することから、低位段丘II地帯にみられた湿地帯を利用しての水稻耕作の展開が類推されている。約1800年前の弥生時代後期になると、その遺跡は山麓地帯から天竜川氾濫原に至る間に44カ所あり、高燥段丘上での陸耕と稲作が考えられる。その代表的なものが、住居址43軒を検出した高松原遺跡（飯田高等学校1977・上郷町教育委員会1984）と木炭棺などの新知見を提供した垣外遺跡（上郷町教育委員会1989A）である。

古墳時代は集落址と墓域に区別される。上郷町の古墳は煙滅古墳を含めて36基で、その大部分



(1:5,000)

挿図3 丹保遺跡位置図及び周辺図

は別府地籍の台地端に立地するが、いずれも後期古墳であり、天神塚と番神塚の両前方後円墳以外は全て円墳である。当時の集落は古墳の近在にみられ、現在のところ上段になく、下段の経済的基盤の豊かな地域に発見されている。代表的な集落として、古墳時代の前期及び後期の土師器が出土した南条の藪越遺跡（上郷町教育委員会1991）と飯沼北的的場遺跡がある。また、矢崎遺跡内には煙滅した鳥屋場古墳と久保古墳があり、当該期の土師器や須恵器が周辺一帯から発見されている。

次の奈良・平安時代の遺物は全町内に散布しているが、下段地帯の栗沢川・土曾川の右岸に所在する高屋・堂垣外遺跡には多量の須恵器片がみられる。また、昭和62年度に調査した矢崎遺跡は平安時代の大集落址で、大規模な鍛冶遺構の検出とフイゴ羽口や鉄滓等の多量の出土遺物により（上郷町教育委員会1988）、上郷町の重要遺跡となった。この低位段丘II地帯は、伊那郡衙と推定される飯田市座光寺の恒川遺跡群と同一段丘面上にあり、しかも古代条里制遺構の存在が地割と地名から推測される地帯であり、古代史研究上注目すべき地域である。また、海拔410mラインは都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地であり、製鉄史研究者の注目の的となっている。この地方は『和名抄』、『伊呂波字類抄』等の文献から、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末期には近衛家領の郡戸庄であった。

3. 層 序

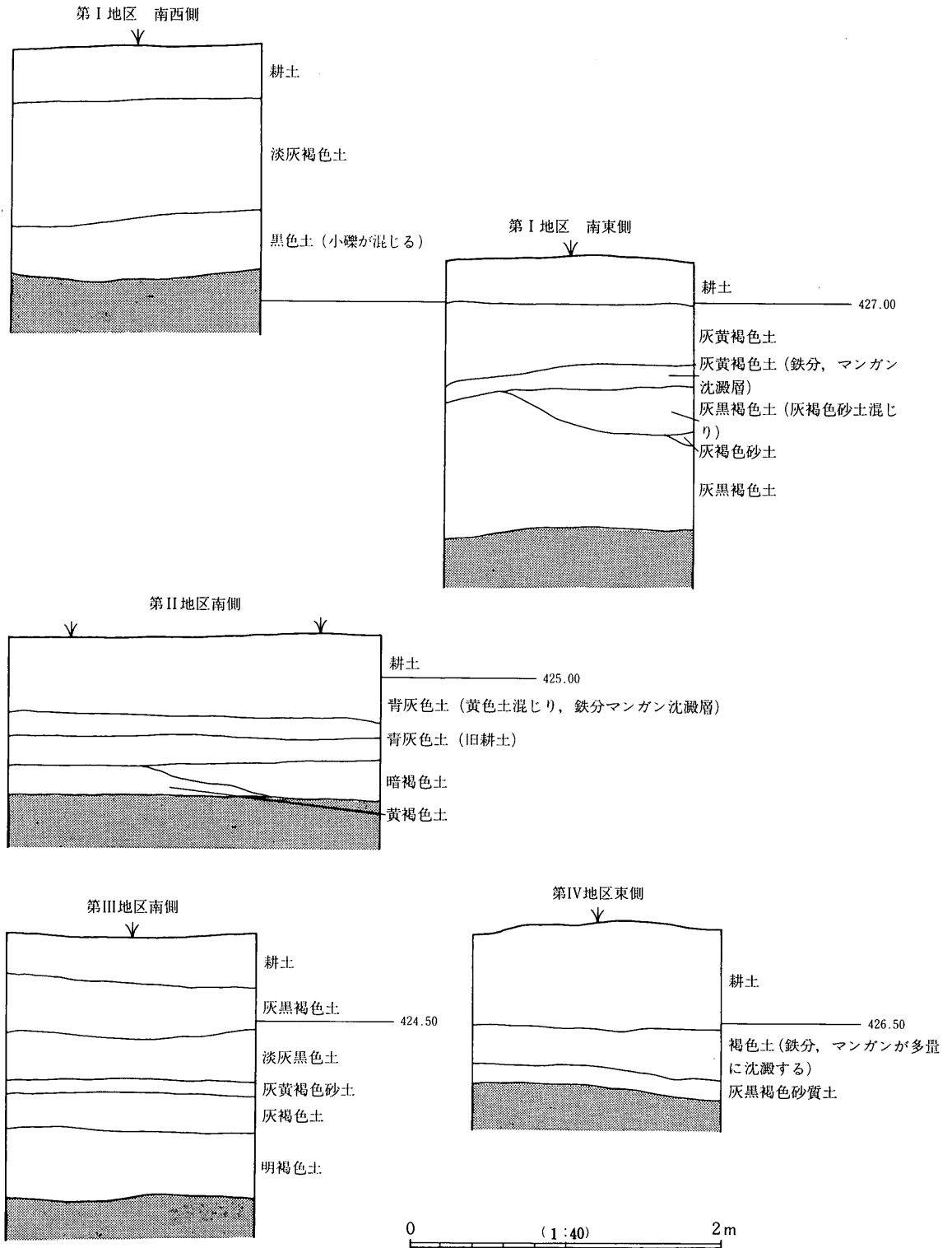
遺跡が立地する微高地が北西側から南東側に緩やかに傾斜しており、そこに水田の造成を行われかつ遺構検出面まで浅いため、水田耕土のすぐ下が遺構検出面という箇所が多かった。比較的残りの良い箇所を選んで説明を加える。第I地区は南西側の37号住居址北側と南東側の19号住居址の北西側、第II地区は南側の103号住居址西側、第III地区は南側の溝址13東側、第IV地区は東側の150号住居址南側の用地境界壁で作成した。

遺跡が沖積地に立地するため、土層は一定でなく変化に富んでいる。第I地区と第IV地区の基盤は黄褐色砂土、第II地区と第III地区の基盤は粘質の強い黄色土であり、その面で遺構が検出できた。ただし、基盤も変化に富んでおり、礫の混じる箇所や黒褐色の箇所も認められた。とくに、第I地区は変化に富んでおり、遺構検出が容易ではなかった。

第II地区では水田耕土が2層認められ、最低2回にわたって水田が造成されたと考えられた。遺構も水田の造成による削平の影響を受けており、破壊された遺構の存在を考慮に入れる必要がある。

第III・IV地区は南西側にも傾斜しており、ここも水田の造成による地形改変の影響を受けているが、残りの良い箇所では何層かにわたっての堆積が認められた。

いずれにせよ、基盤より上面に生活面があったと考えられるが、基盤まで下ろさないと遺構を検出することはできなかった。



挿図4 丹保遺跡基本土層柱状図

III 調査結果

1. 第 I 地区

1) 竪穴住居址

(1) 縄文時代

① 61号住居址 (挿図5)

XV11l を中心にして検出した。弥生時代後期の24・33・62号住居址に切られているが、全面を調査した。5×4.6mの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN32°Wを示す。壁高は住居址の切り合いの関係から37～4cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は炉址付近の破線内が貼床状で良好であるが、全体に柔らかく不良である。主柱穴はP1・P2・P7～P9で、P3～P6は主柱穴もしくは入口施設と考えられる。炉址は中央からやや北西に位置し、石はあまり残っていないが石組炉であり、115×110cmの円形を呈する。焼土・炭等は検出されなかった。

遺物は多くが床面直上で出土している。

出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。

(2) 弥生時代

① 23号住居址 (挿図6)

XV11p を中心にして検出した。上層部がほぼ削平されており床面状の広がりが出たため住居址と判断した。弥生時代後期の22・62・155号住居址に切られており、全体の2/3程を調査した。規模は不明であるが、主軸方向はN140°Wと思われる。壁高・壁面とも不明である。床面はたたき状で良好であり、一部、2段になっている箇所もある。主柱穴は不明である。炉址は中心の南西側にあり、覆土中に炭が多量に残存していたため、炉址と判断した。形状は側面に4個の礫が置かれている地床炉で65×46cmを測る。

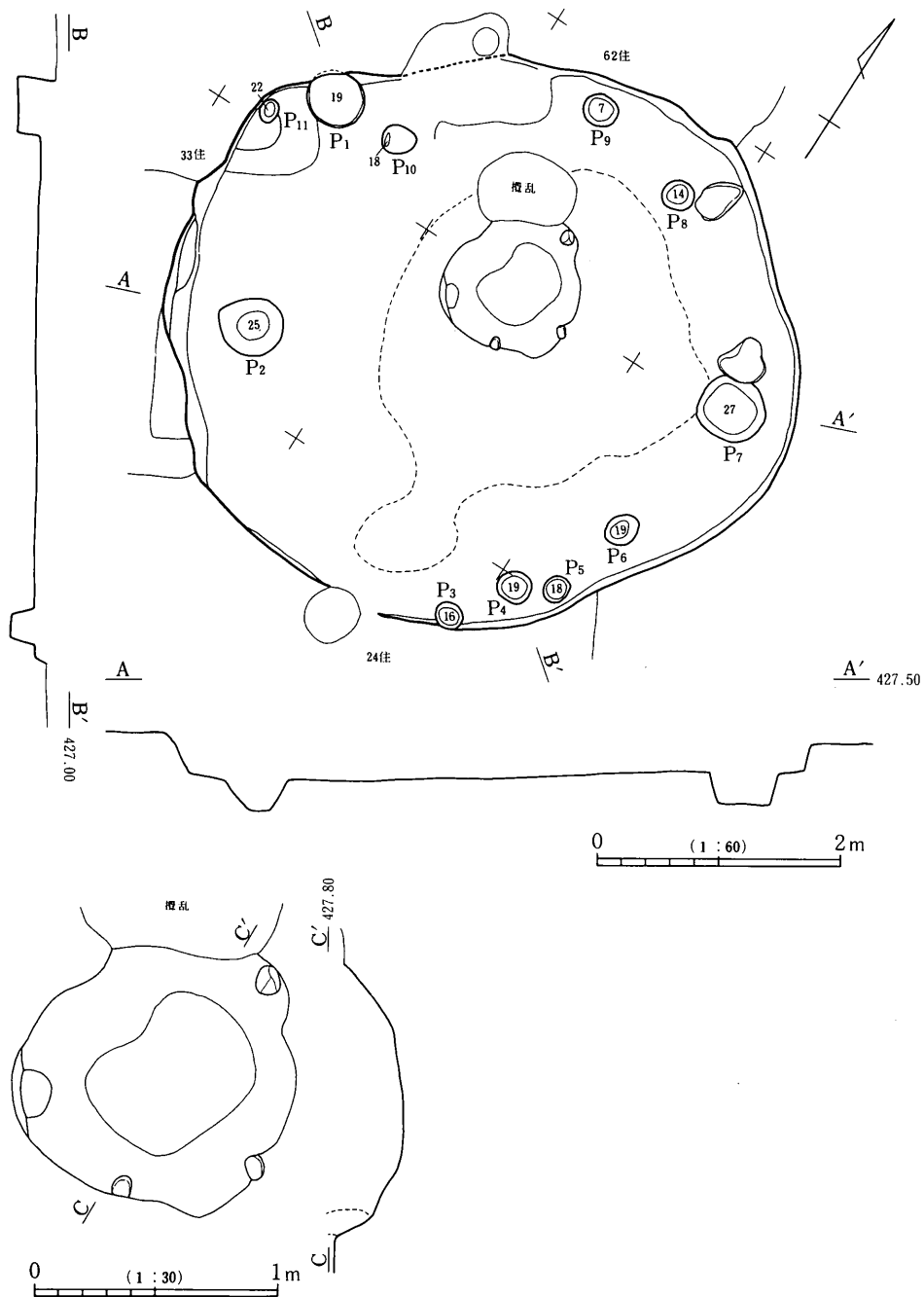
遺物は多くが床面直上で出土している。

出土遺物から弥生時代中期中葉に位置づけられる。

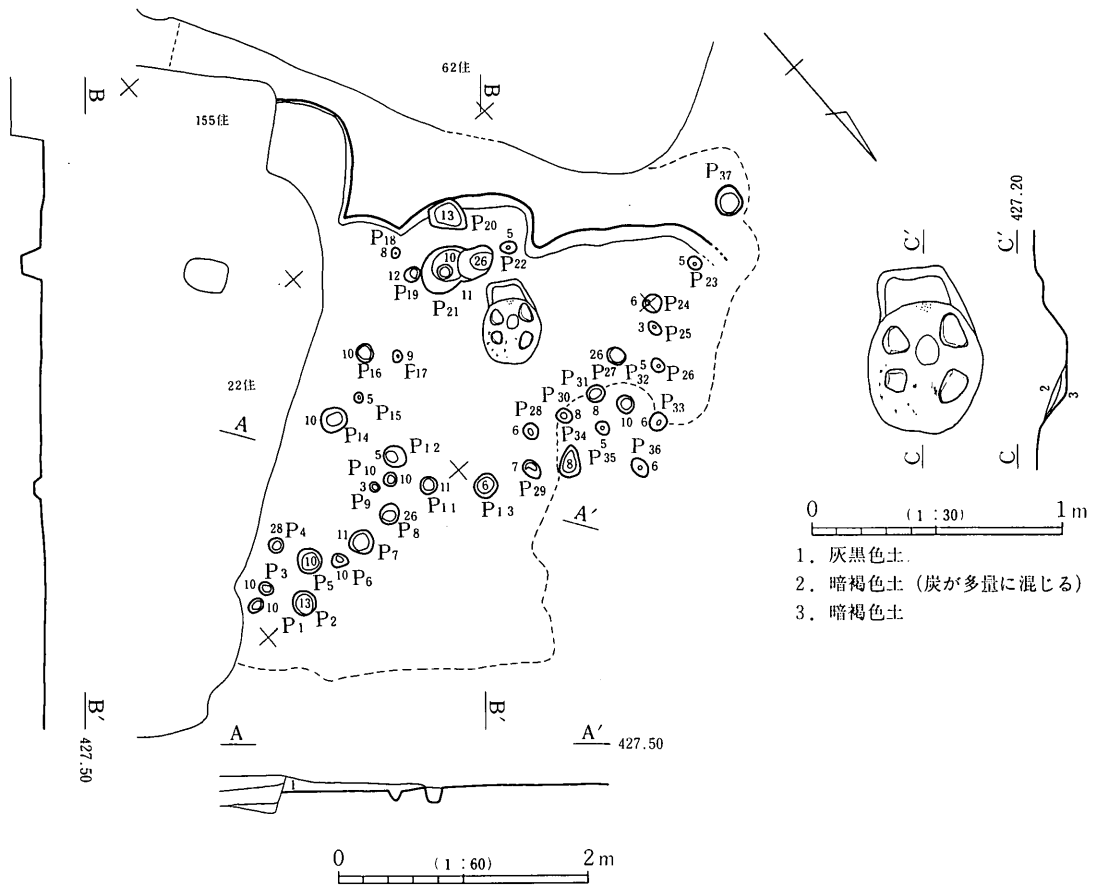
② 11号住居址 (挿図7)

XV2n を中心にして検出した。弥生時代後期の12号住居址を切る。北西側が未調査で、全体の1/4程を調査した。主軸に直行する方向の長さが3.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向

は N28°W を示す。壁高は12号住居址の床下になるため、2cm 以下である。床面はたたき状で良好である。支柱穴は P2 で、P1 は146×62cm・深さ21~9cm を測る溝状のものであるが、入口施設と考えられる。



挿図5 61号住居址



挿図 6 23号住居址

遺物はほとんどが床面直上で出土している。
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

③ 12号住居址 (挿図 7)

XV3n を中心として検出した。弥生時代後期の11・13号住居址に切られ、全体の1/3程を調査した。主軸に直行する方向の長さが5.1mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN36°Wを示す。壁高は30~8cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴はP1・P2で、P16・P17は間仕切りピットと思われる。

遺物はほとんどが床面直上で出土している。
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

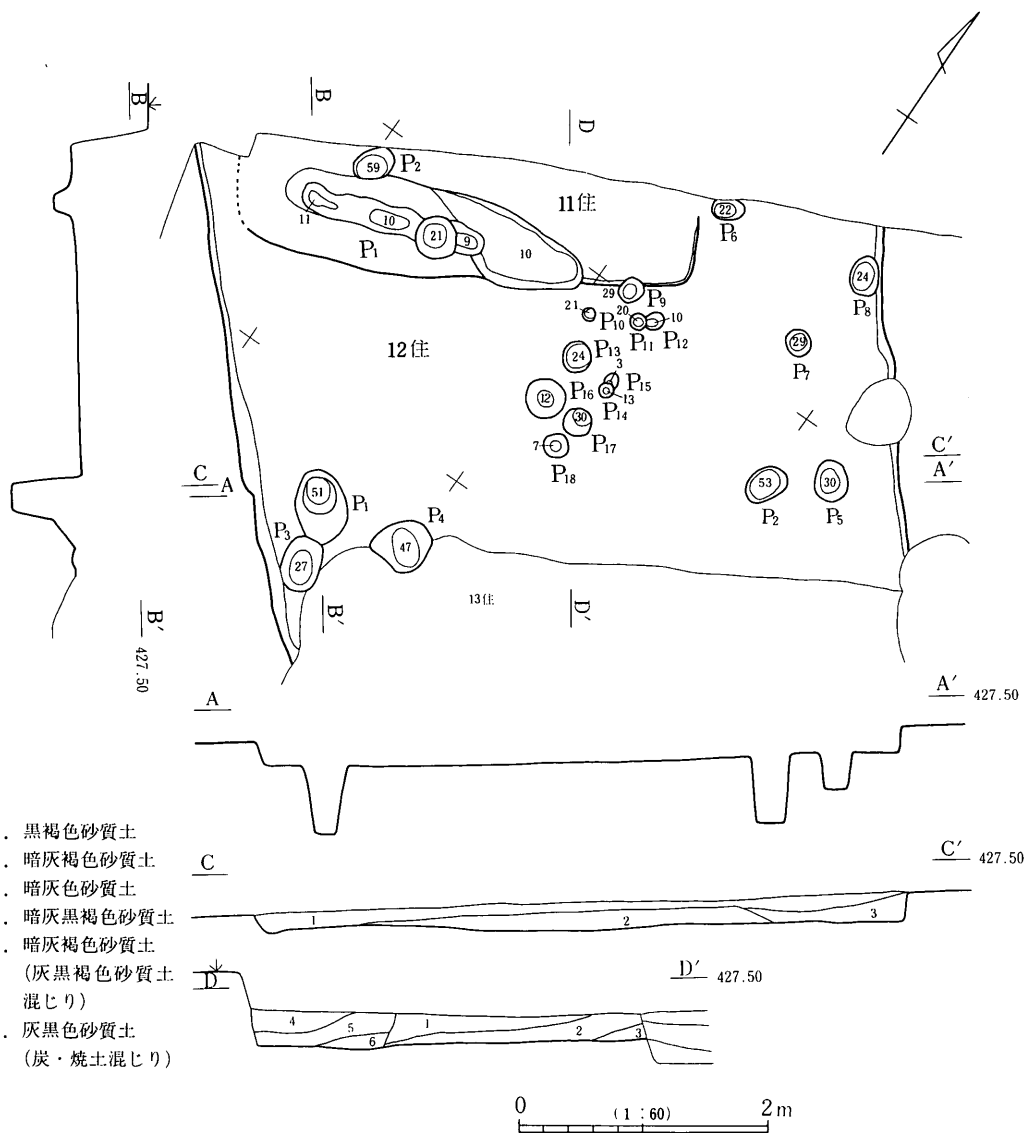
④ 13号住居址 (挿図 8)

XV4m を中心として検出し、全体を調査した。弥生時代後期の12号住居址を切る。4.8×5.4

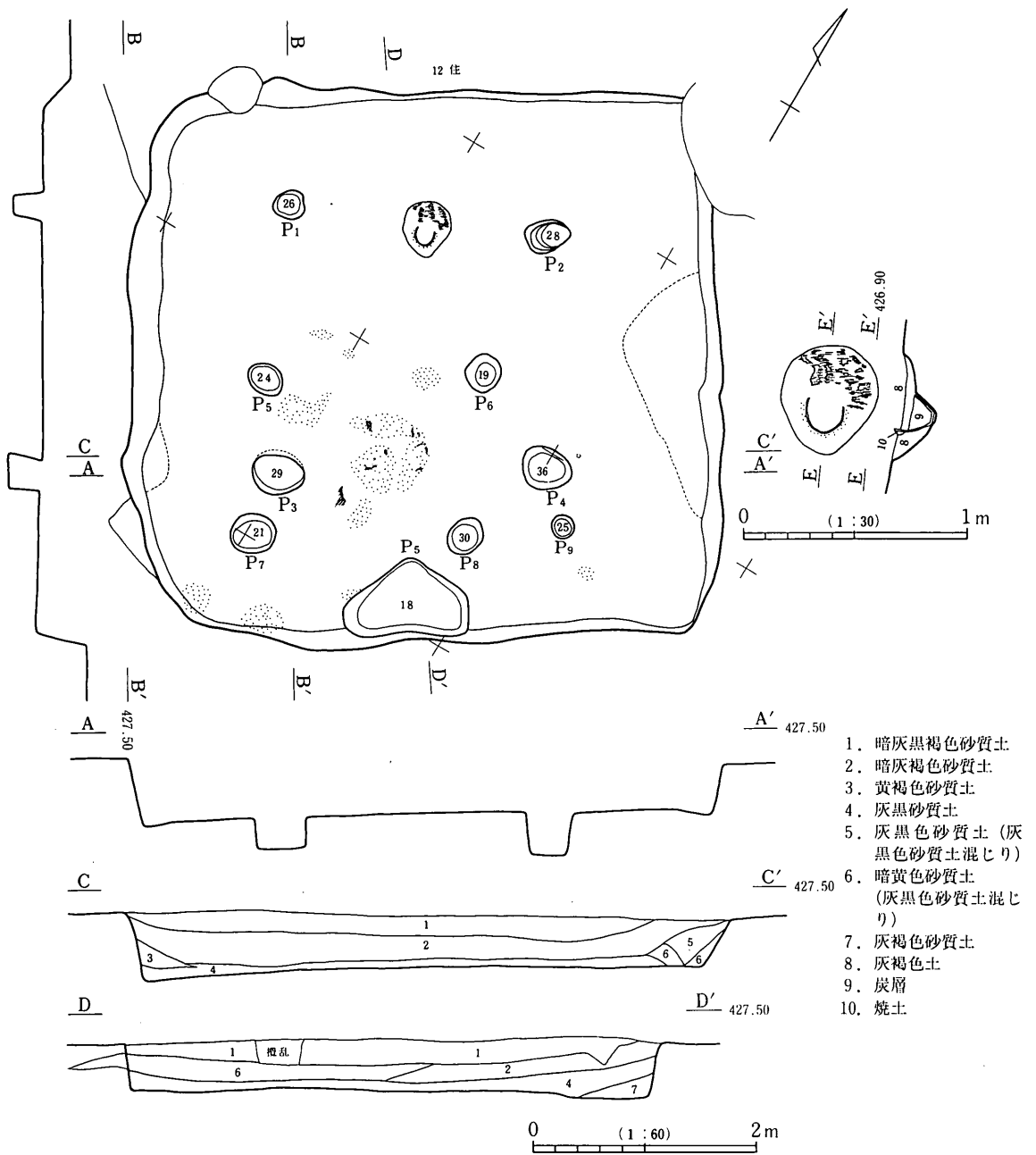
mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN31°Wを示す。壁高は57~19cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状で良好であるが、東壁側破線内は不良である。主柱穴はP1~P4で、P5は110×60cm、深さ18cmを測るピットで、入口施設と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する土器埋設炉で、床面を49×43cmの楕円形に掘り凹め、甕を埋めている。埋設された甕の内部から多量の炭を検出した。また、床面からやや浮いた位置で焼土を検出した。住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。

遺物は多くが床面直上で出土している。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図7 11・12号住居址



挿図8 13号住居址

⑤ 14号住居址 (挿図9)

XV6j を中心として検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の15号住居址に切られる。5.1×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN37°Wを示す。壁高は24~13cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は壁際を除き、たたき状で良好である。壁際の床面不良部分は周溝の可能性はある。主柱穴はP1~P4である。炉址は、北西側主柱穴の中間やや内側に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を61×55cmに掘り凹め内側に1個の石を配置している。なお、炉縁石北東側の礫は炉址とは直接関係ないものと思われる。主柱穴P3の北西に台石が床面直上で出土した。

遺物は多くが床面よりやや浮いた状態で出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

⑥ 15号住居址 (挿図10)

XV7h を中心として検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の14・16号住居址を切る。5.0×5.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN29°Wを示す。壁高は32~5cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は破線から壁際部と炉址北側を除き、たたき状で良好である。壁際の床面不良部分は周溝の可能性はある。主柱穴はP1~P4で、P5は54×54cm、深さ30cmを測るピットで、入口施設と考えられる。P6・P7は、間仕切りピットと思われる。炉址は、北西側主柱穴の中間やや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を52×49cmに掘り凹め底部を一部欠く甕を埋設し、その南東側に石を配置している。

遺物は覆土中より多くが出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

⑦ 16号住居址 (挿図11)

XV5g を中心として検出した。弥生時代後期の15・17・66号住居址に切られるため、全体の1/3程を調査した。主軸方向が4.6mを測る隅丸方形と思われる竪穴住居址で、主軸方向はN217°Wを示す。壁高は切り合いのない箇所22cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴はP1・P2で、17号住居址の調査時に確認した。炉址は、主柱穴P1の北東側に位置する土器埋設炉で、床面を55×40cmに掘り凹め甕を埋設する。甕内の下部には、炭・焼土が多量に残存していた。

遺物は多くが床面直上で出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

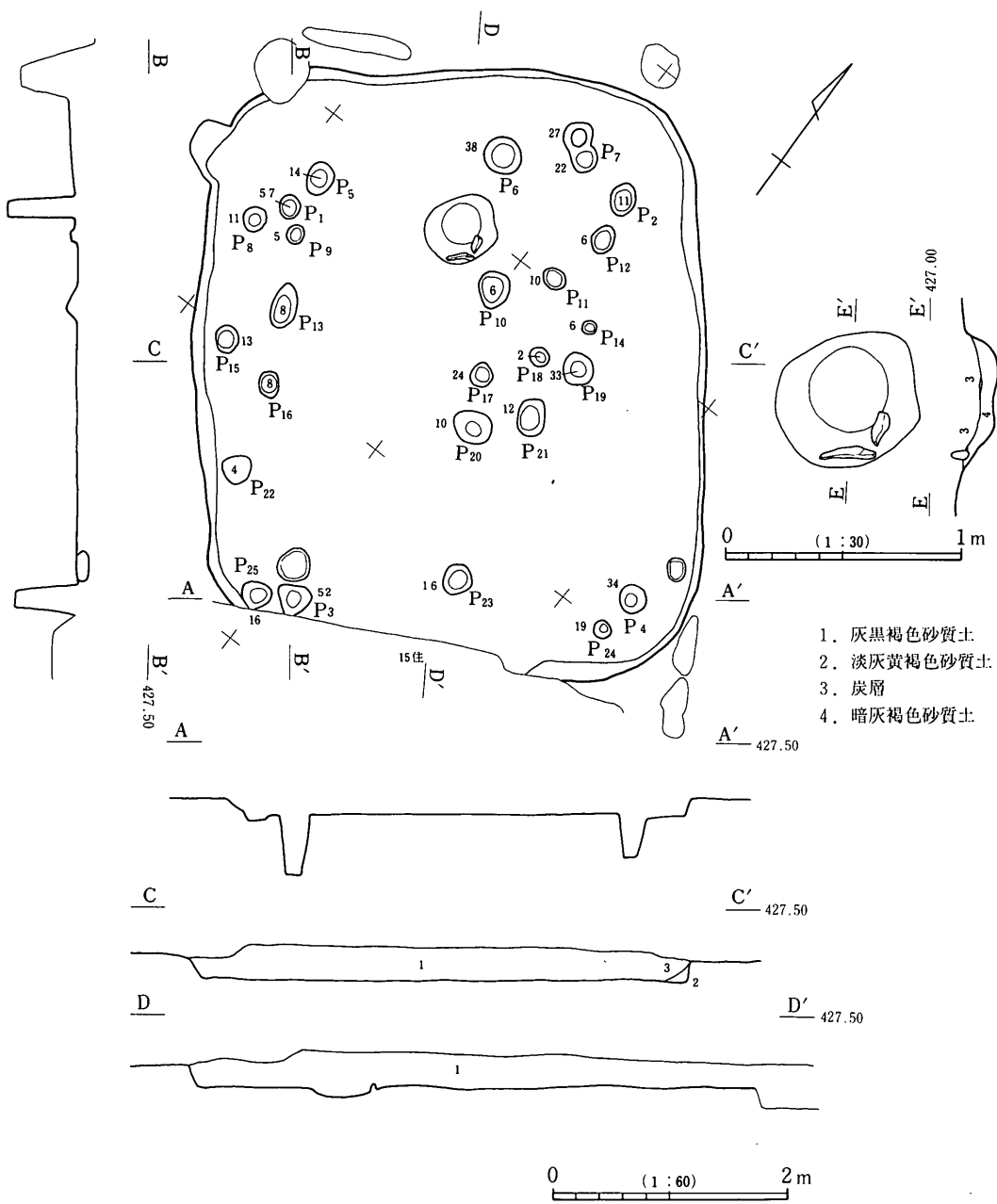
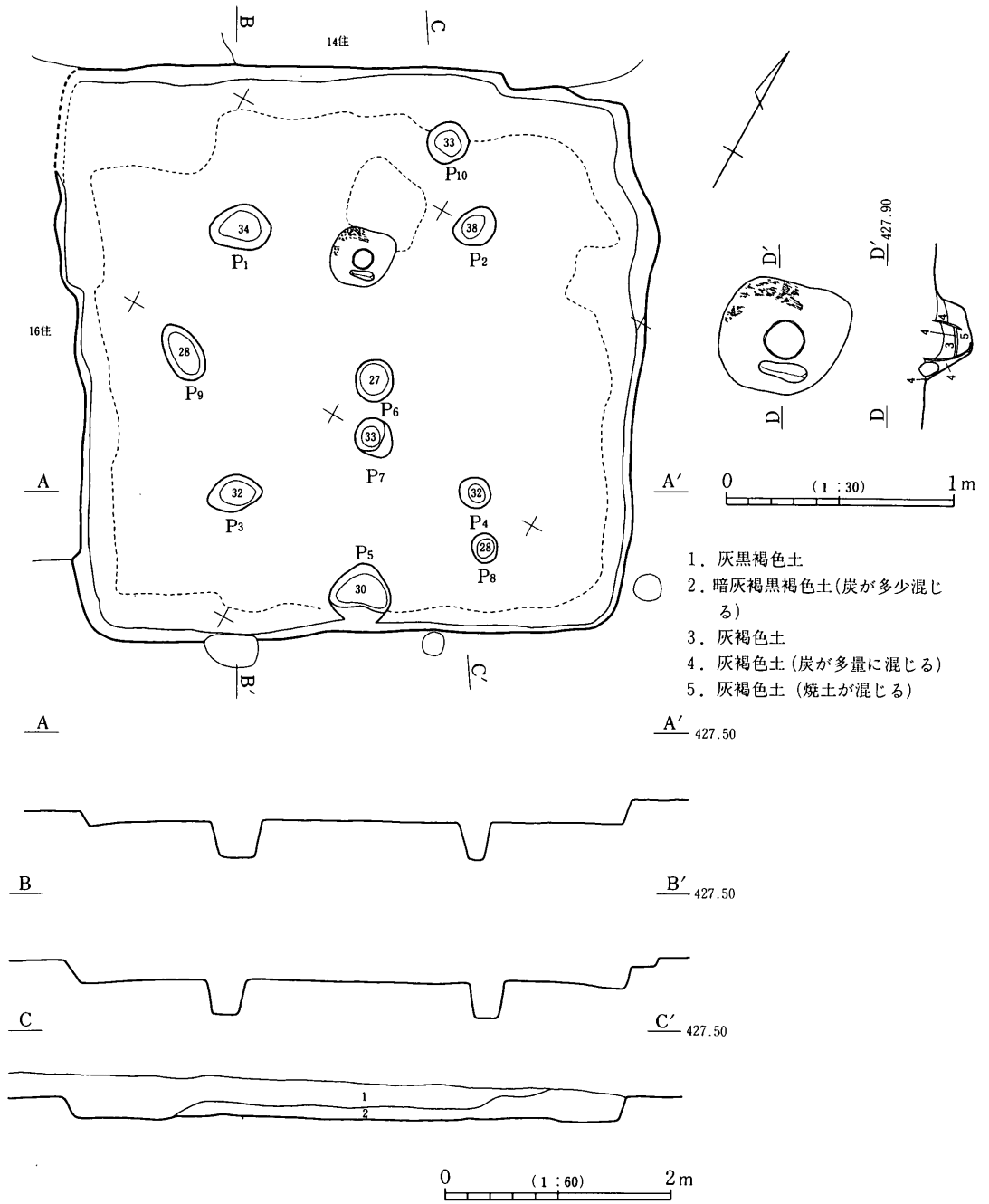


插图9 14号住居址



挿図10 15号住居址

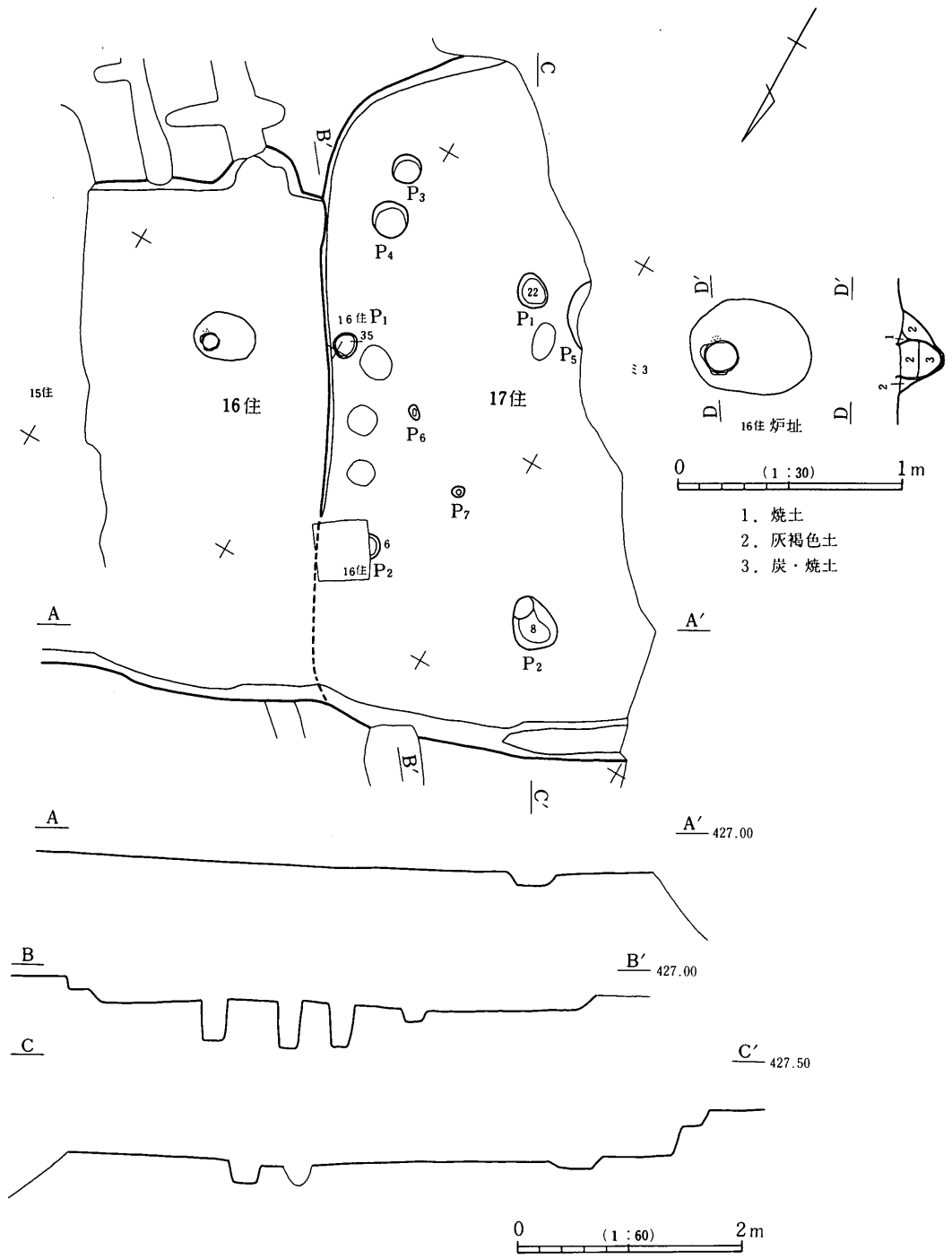


插图11 16·17号住居址

⑧ 17号住居址 (挿図11)

XV4f を中心として検出した。弥生時代後期の16号住居址を切り、古墳時代前期の溝址3と弥生時代後期の66号住居址に切られ、全体の1/2程を調査した。主軸方向が6.2mを測る隅丸方形と思われる竪穴住居址で、主軸方向はN210°Wを示す。壁高は切り合いのない箇所では39~23cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴はP1・P2である。北東側壁に土壇があり、入口施設の一部の可能性はある。

遺物は覆土中から床面直上まで幅広く出土している。

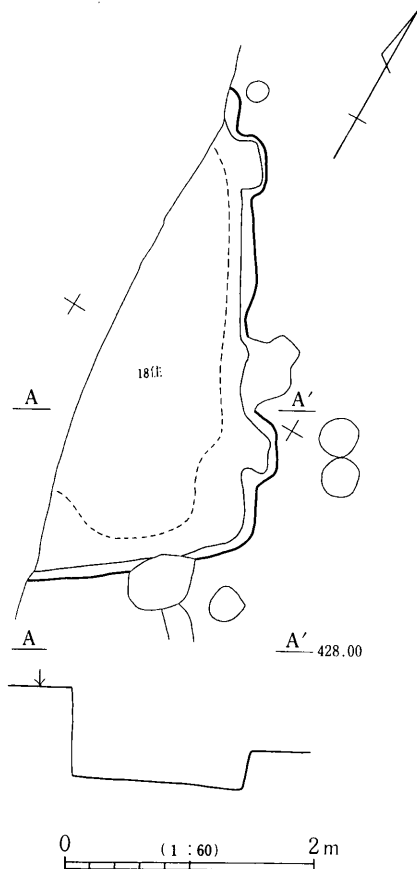
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

⑨ 18号住居址 (挿図12)

XV2k を中心として検出した。東側が未調査で、全体の1/2程を調査した。規模・主軸方向とも不明である。壁高は27~10cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は、破線内はたたき状で良好である。壁際床面不良部分は周溝の可能性はある。

遺物はあまり出土していない。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図12 18号住居址

⑩ 19号住居址 (挿図13)

XIV1h を中心として検出し、8割程を調査した。弥生時代以降の溝址6に切られる。4.8×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN32°Wを示す。壁高は38~26cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は、破線内がたたき状で良好である。支柱穴はP1~P4で、P5は66×56cm、深さ30~11cmを測るピットで、入口施設と考えられる。P6・P7・P8は、間仕切りピットと思われる。炉址は、北西側支柱穴の間に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、床面を72×57cmの楕円状に掘り凹め、外側に底部を欠く壺を埋設する。検出時は壊れていたが、破片を並べていた可能性もある。また、内側土器寄りの部分は土器がなかった。内側は、口縁部を欠く甕を埋設する。内側土器覆土下層には大量の炭が残存し、外側土器中央部覆土に

は、炭・焼土が残存していた。二重土器埋設炉としたが、炉址掘り方が2段になっていた点や、外側の土器の欠損、炉址土層の状況から、改築の可能性も指摘しておく。

遺物は北西隅から礫と共に出土が多く、所謂吹上パターンを呈していた。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

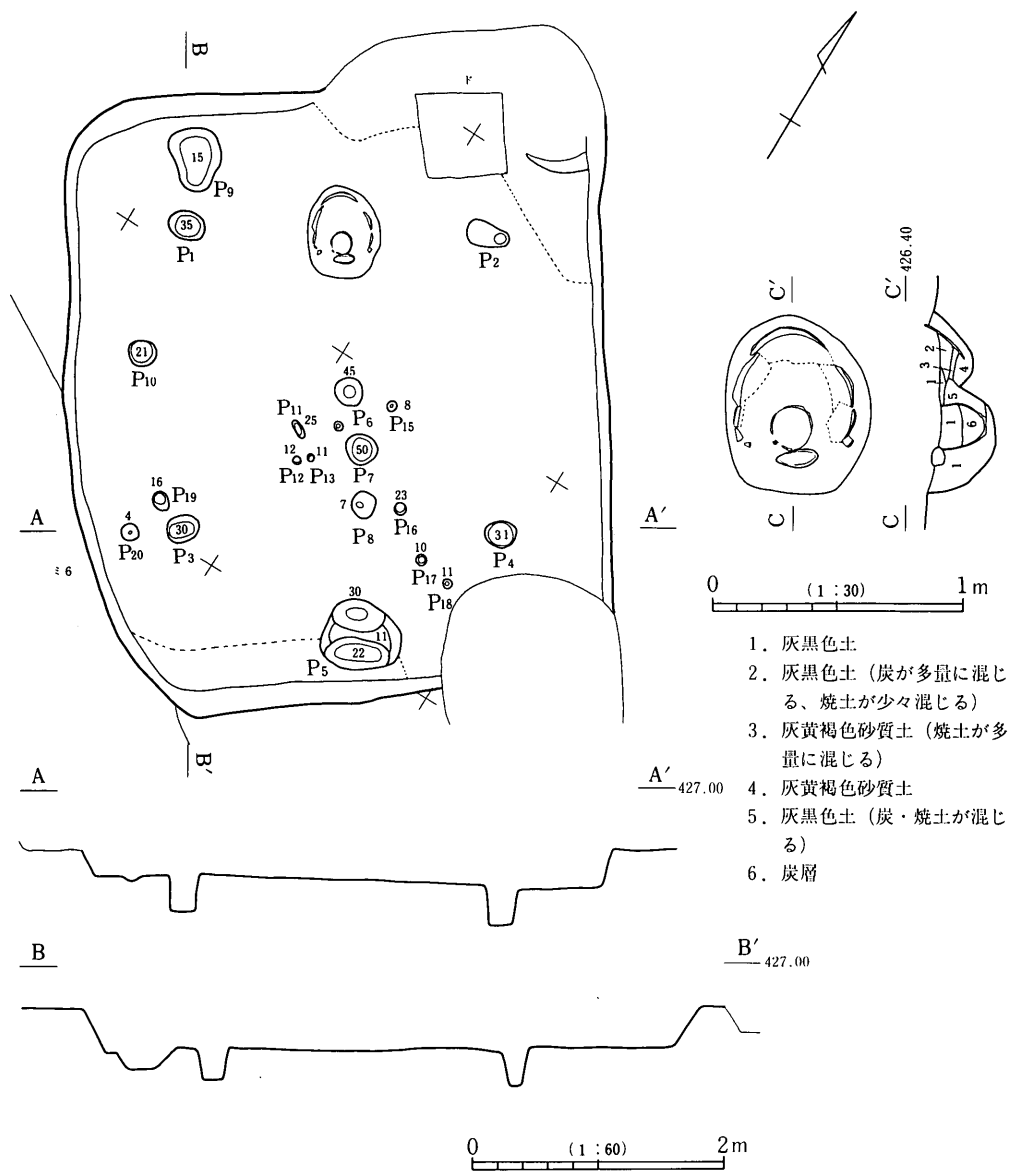
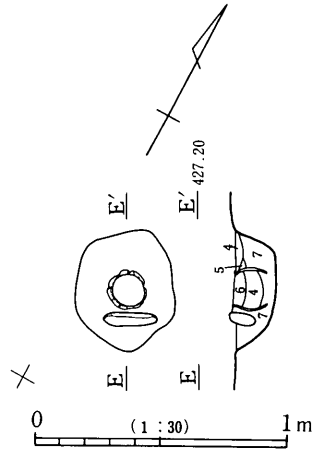
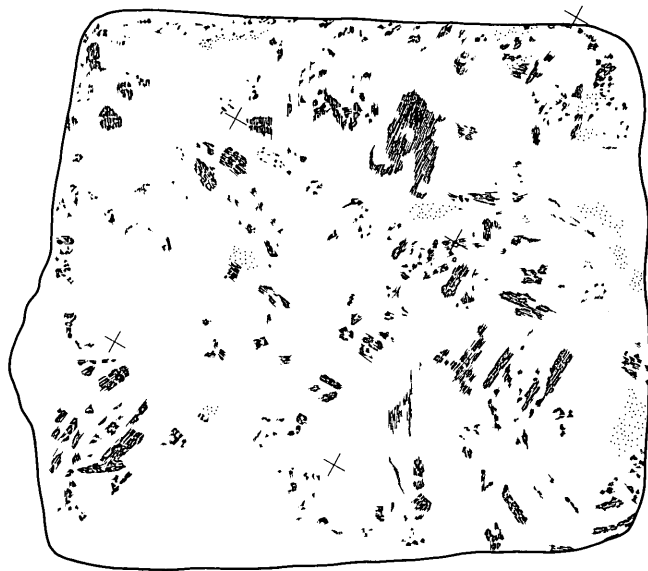
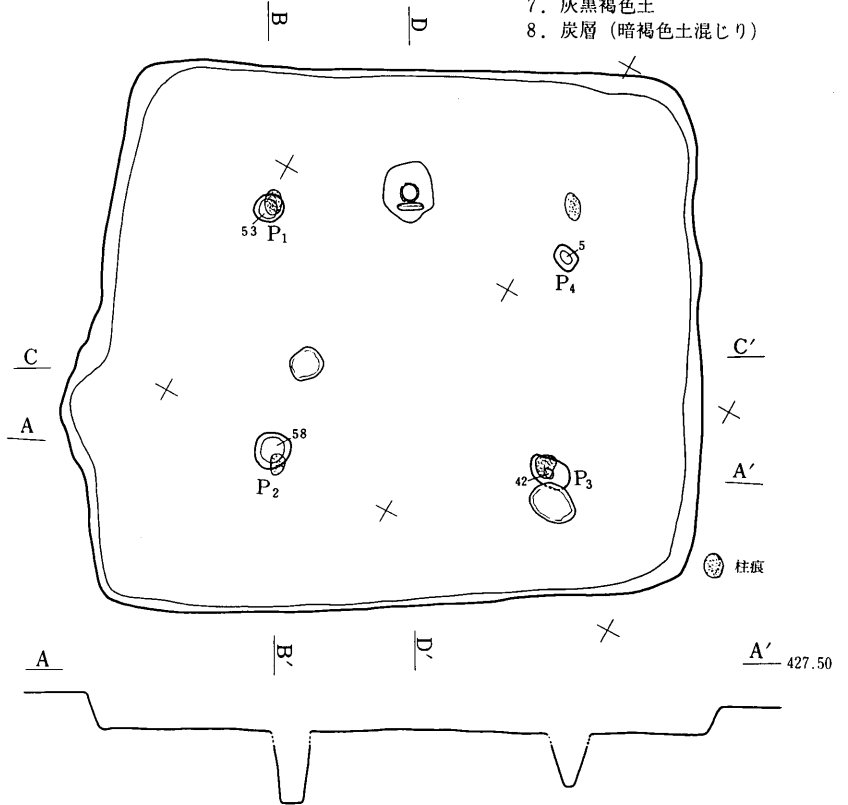
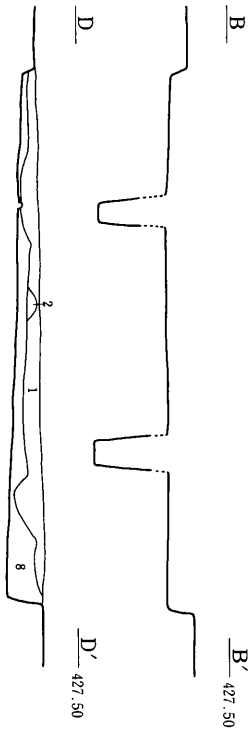


插图13 19号住居址



1. 暗灰色土（わずかに炭・焼土が混じる）
2. 暗灰色土（炭混じり）
3. 灰色砂土
4. 炭層
5. 焼土
6. 灰色土
7. 灰黒褐色土
8. 炭層（暗褐色土混じり）



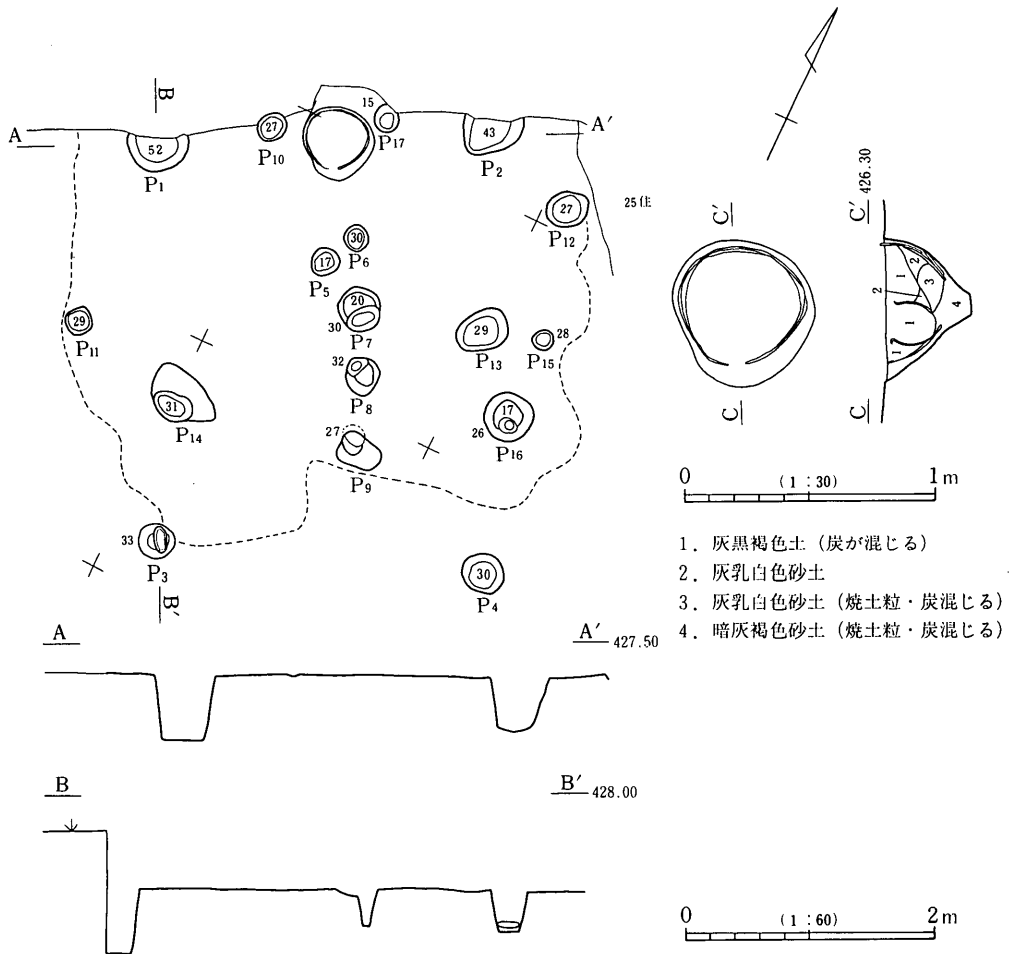
挿図14 20号住居址

⑪ 20号住居址 (挿図14)

XV9nを中心として検出し、全体を調査した。弥生時代後期の33・62号住居址を切る。4.3×4.7mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN29°Wを示す。壁高は30～9cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴はP1～P4で、本址調査時には炭化した柱痕しか確認できなかったが、33・62号住居址の調査時に確認した。P2北西側、P3南東側に台石を検出した。炉址は、北西側主柱穴の中間よりやや外側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を47×39cmに掘り凹め、胴部以下を欠く甕を埋設する。甕内には、炭が多量に残存していた。本址は覆土下層から床面にかけて焼土・炭化材が検出されており、焼失家屋址である。

遺物は覆土下層から床面にかけて多く出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



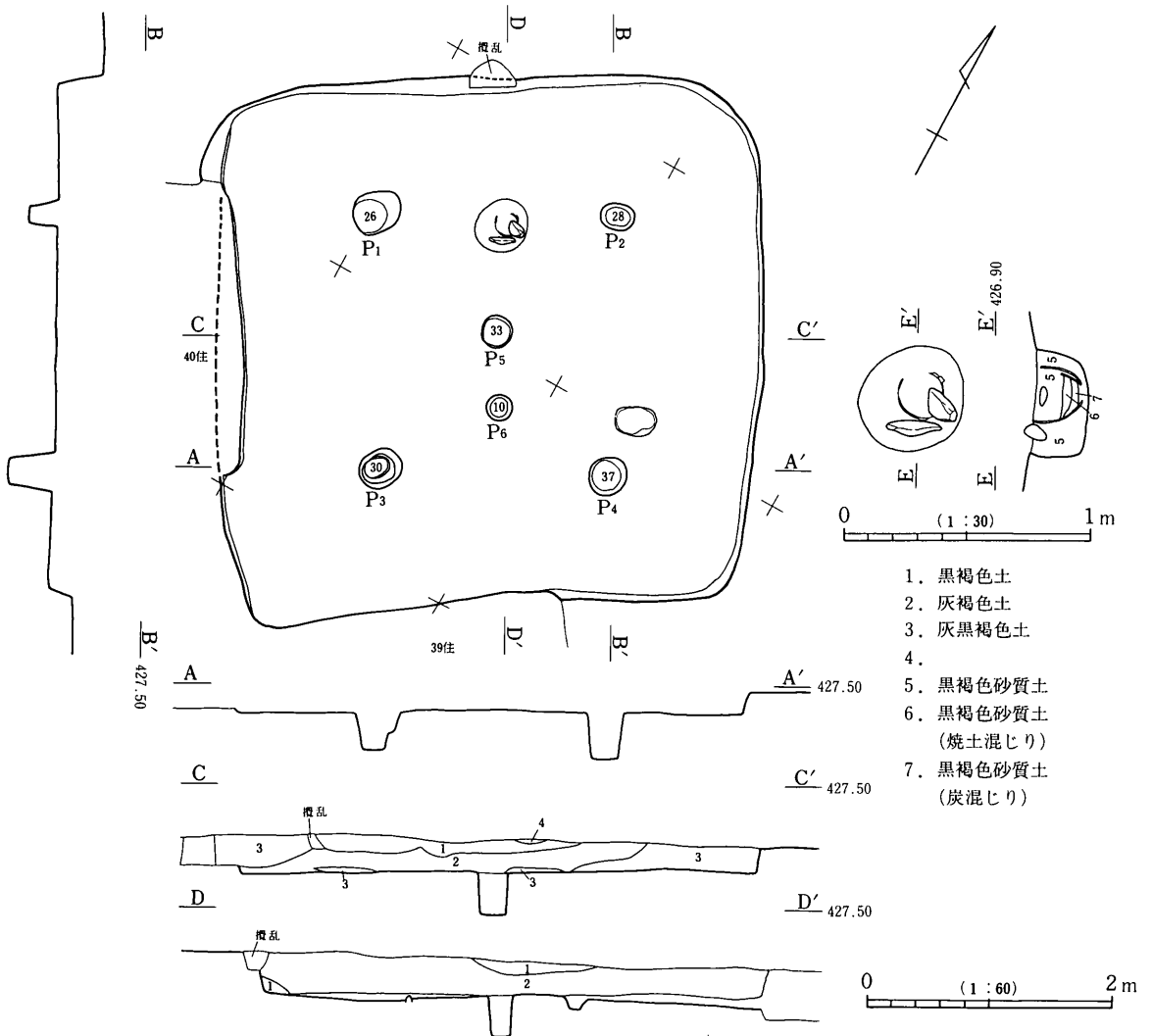
挿図15 21号住居址

⑫ 21号住居址 (挿図15)

XV8g を中心として検出し、2 / 3 程を調査した。弥生時代後期の25号住居址に切られる。上層部が削平されてしまい、規模等は不明である。主軸方向は N26°W を示す。床面は破線範囲内がたたき状で良好である。支柱穴は P1~P4 としたが、P13・P14 も支柱穴の可能性もある。P5~P9 は間仕切りピットと思われる。炉址は、北西側支柱穴の中間に位置する二重土器埋設炉で、床面を 59×53cm に掘り凹め、外側に頸部から胴部までの壺を逆位に埋設し、一部二重になる。内側の土器は底部を欠く甕を外側の土器の中心よりやや南東側に埋設する。甕内には、炭が多量に残存していた。

遺物は床面で多く出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図16 24号住居址

⑬ 22号住居址 (挿図58)

XV13o を中心として検出し、全体を調査した。弥生時代後期の155号住居址に切られる。4.7×4.5m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N27°W を示す。壁高は切り合いのない箇所ので23cm を測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1～P4 で、P5 は155号住居址の P4 に切られているが、入り口施設と考えられる。P6・P7 は間仕切りピットと思われる。炉址は、北西側主柱穴の中間のやや内側に位置する土器敷炉で、床面を70×65cm 程掘り凹め、土器片を敷いている。覆土中に炭・焼土が残存していた。

遺物は多くが覆土中から出土した。

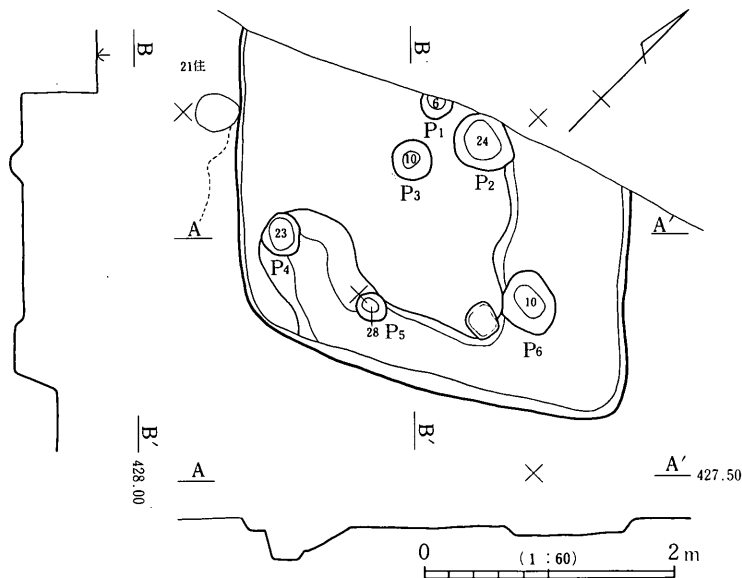
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑭ 24号住居址 (挿図16)

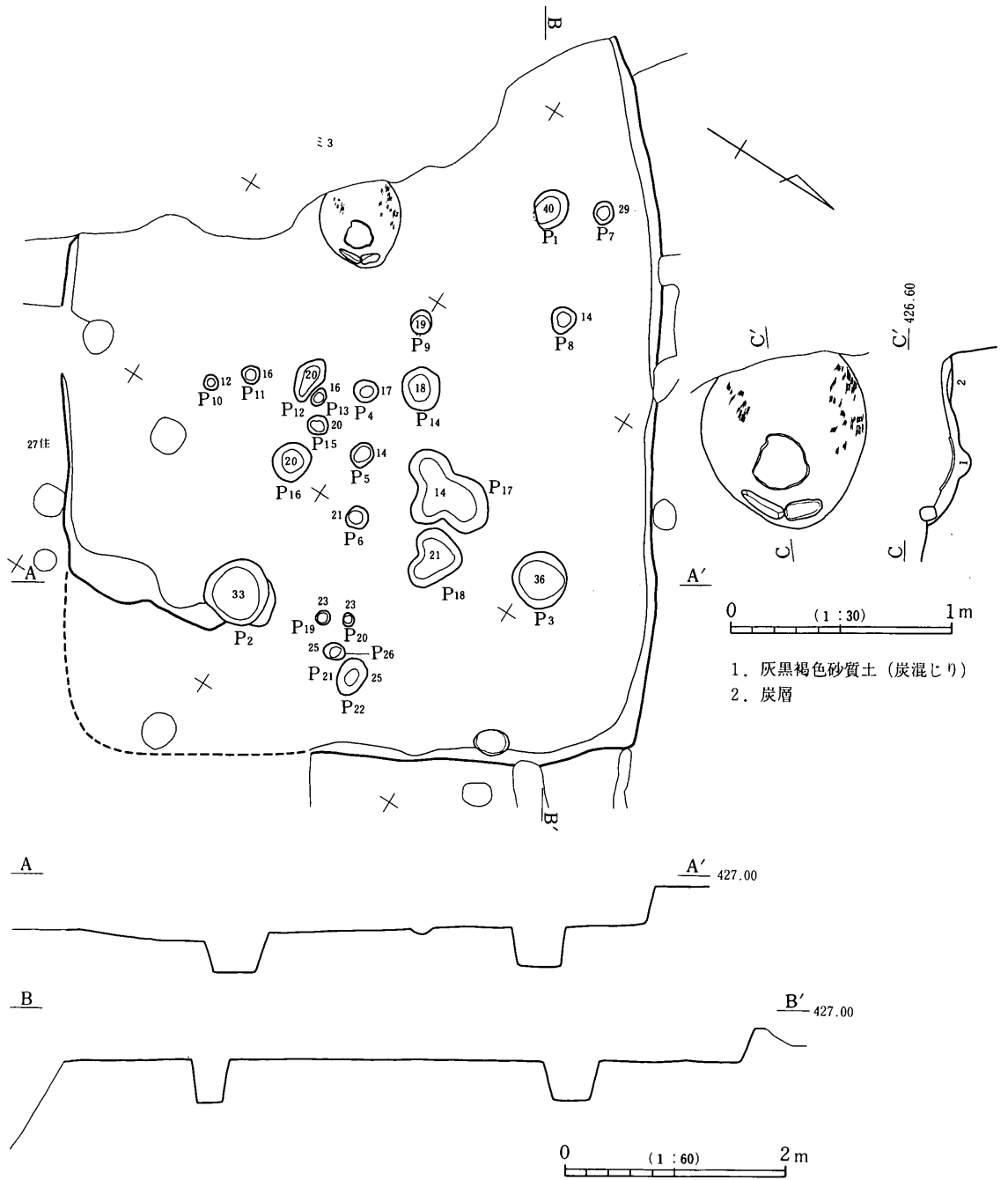
XV11j を中心として検出し、全体を調査した。弥生時代後期の39号住居址を切り、同期40号住居址に切られる。4.2×4.3m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N29°W を示す。壁高は切り合いのない箇所ので36cm を測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は炉址周辺を除き、たたき状で良好である。主柱穴は P1～P4 で、P5・P6 は間仕切りピットと思われる。炉址は、北西側主柱穴の中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を42×42cm 程掘り凹め、底部を欠いた甕を埋設する。一部、二重になる。

遺物は多くが覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図17 25号住居址



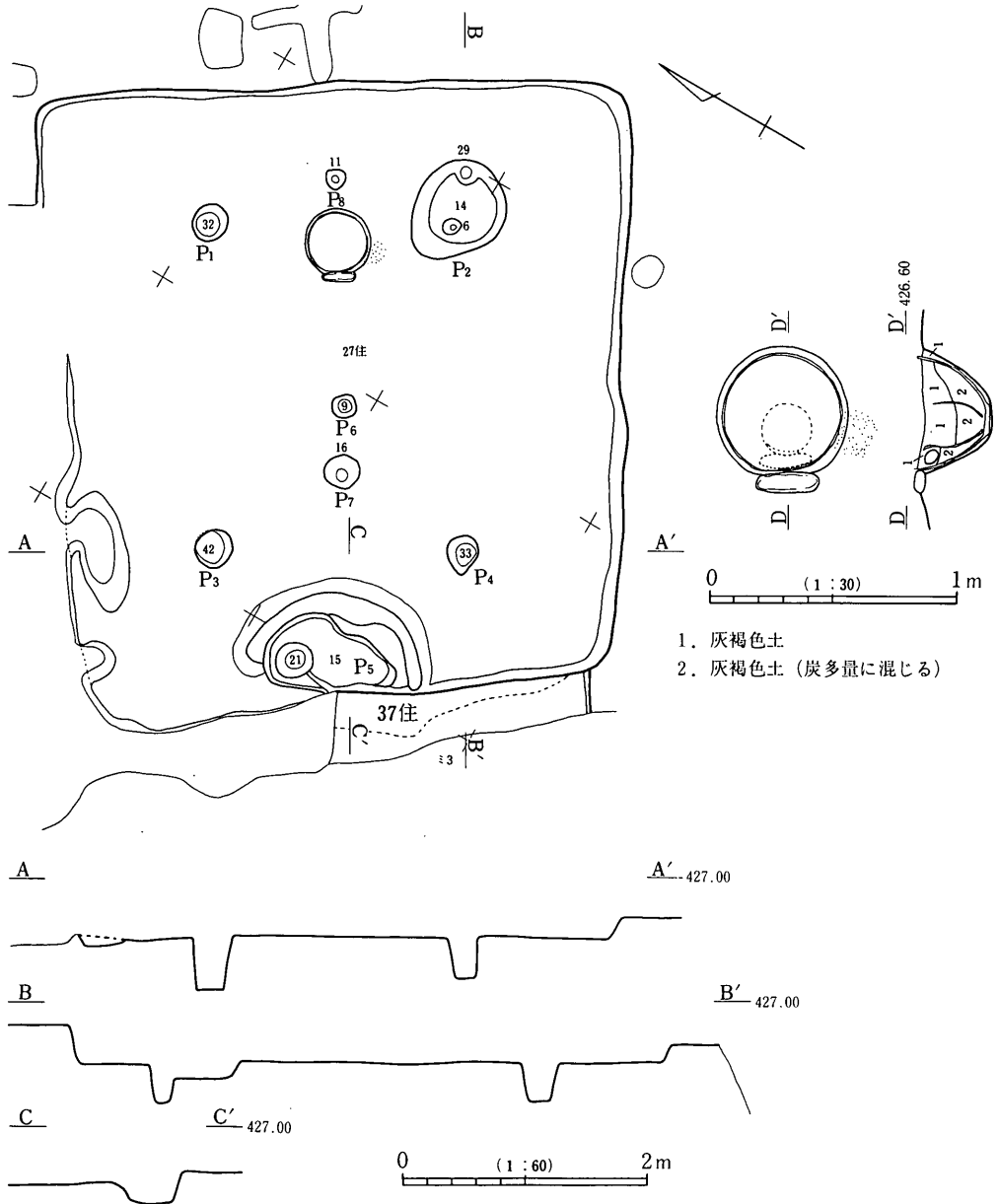
挿図18 26号住居址

⑮ 25号住居址 (挿図17)

XV10r を中心として検出し、全体を調査した。弥生時代後期の21号住居址を切る。短軸方向が3mを測る隅丸の竪穴住居址で、主軸方向はN46°Wと推定される。壁高は14~6cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は南西部はたたき状で良好であるが、北東側は砂質で不良である。ピットはあるが、主柱穴等は不明である。

遺物は多くが覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図19 27・37号住居址

⑩ 26号住居址 (挿図18)

XV7e を中心として検出し、弥生時代後期の27号住居址・古墳時代前期の溝址3に切られ、全体の3/4程を調査した。主軸に直行する方向の長さが5.3mを測る隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN122°Wを示す。壁高は切り合いのない箇所で34cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴はP1~P3で、P4~P6は間仕切りピットと考えられる。炉址は、支柱穴P1の南東側に位置する炉縁石を有する土器敷炉で、床面を幅75cm程掘り凹め、甕胴部片を敷いている。土器片と掘り方の間に炭混じりの土層を確認した。

遺物は多くが覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑪ 27号住居址 (挿図19)

XV9d を中心として検出し、全体を調査した。弥生時代後期の26号住居址を切る。4.9×4.9mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN61°Wを示す。壁高は切り合いのない箇所で35cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は壁際を除きたたき状で良好である。壁際床面不良部分は周溝の可能性はある。支柱穴はP1~P4で、周囲に4~2cm程の土手状縁部を伴うP5は入口施設と考えられる。炉址は、北東側支柱穴の中間に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、床面を59×53cm程掘り凹め、外側に胴部以下の壺を、内側に底部を欠く甕を埋設する。外側と内側の土器の間と、外側の土器の南西外側にそれぞれ炉縁石を設置している。それぞれの土器の内部に炭が大量に残存していた。

遺物は多くが覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑫ 28号住居址 (挿図20)

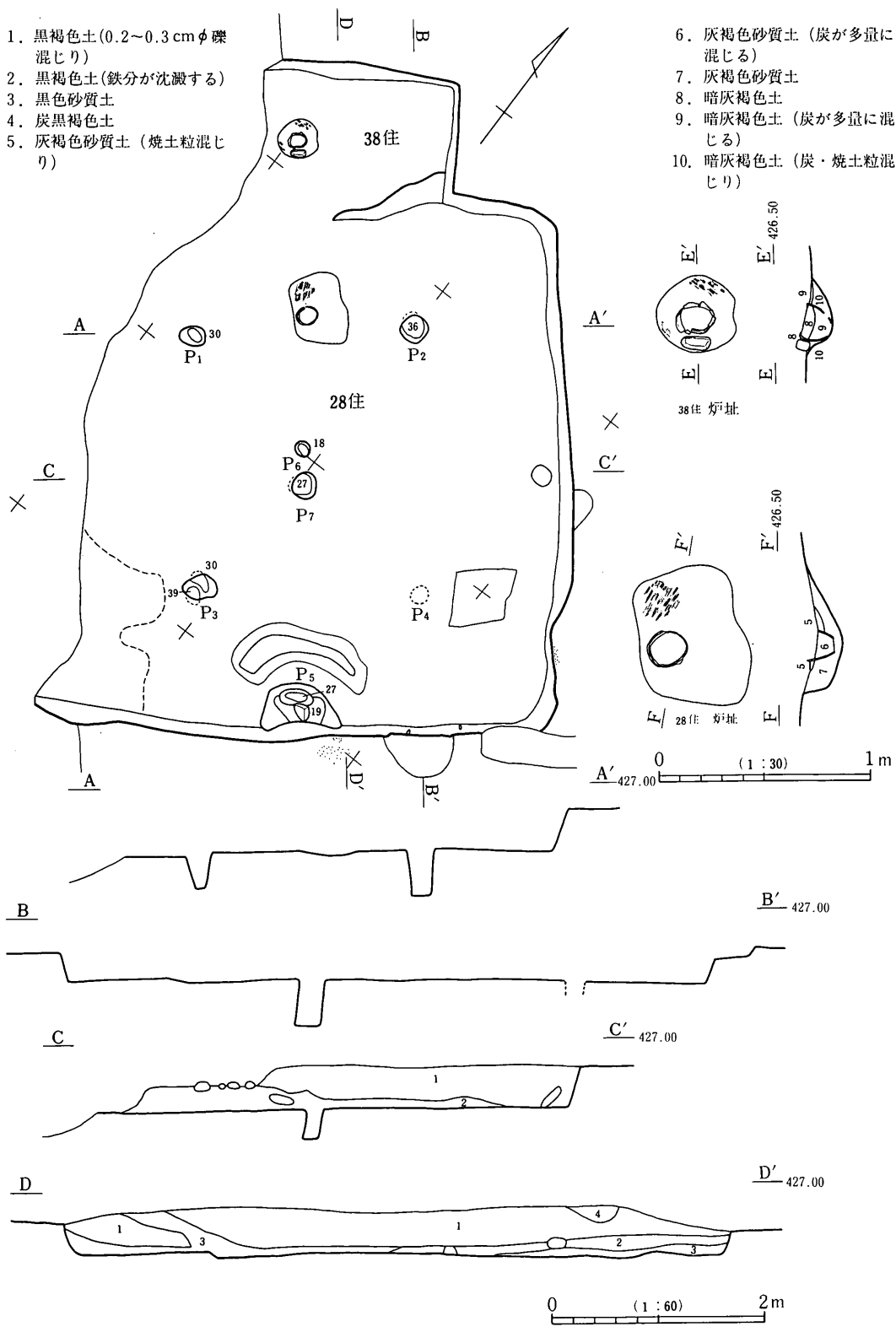
XV9a を中心として検出し、弥生時代後期の26号住居址を切り、古墳時代前期の溝址3に切られるため、全体の4/5程を調査した。主軸方向が5.1mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN38°Wを示す。壁高は切り合いのない箇所で41cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴はP1~P4で、P4は、遺構実測の際書き忘れてしまい、写真で位置・大きさを確認した。P5は入口施設と考えられ、北西側に4~2cm程の土手状縁部を伴う。P6・P7は間仕切りピットと思われる。炉址は、北西側支柱穴の中間に位置する土器埋設炉で、床面を68×51cm程の方形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋設する。甕の内部には大量の炭が残存していた。南東壁面に何等かのものを差し込んだ痕跡が見られ、焼けて硬化している。壁外の焼土と関連する可能性がある。

遺物は多くが覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

1. 黒褐色土(0.2~0.3 cm φ 礫混じり)
2. 黒褐色土(鉄分が沈澱する)
3. 黒色砂質土
4. 炭黒褐色土
5. 灰褐色砂質土(焼土粒混じり)

6. 灰褐色砂質土(炭が多量に混じる)
7. 灰褐色砂質土
8. 暗灰褐色土
9. 暗灰褐色土(炭が多量に混じる)
10. 暗灰褐色土(炭・焼土粒混じり)



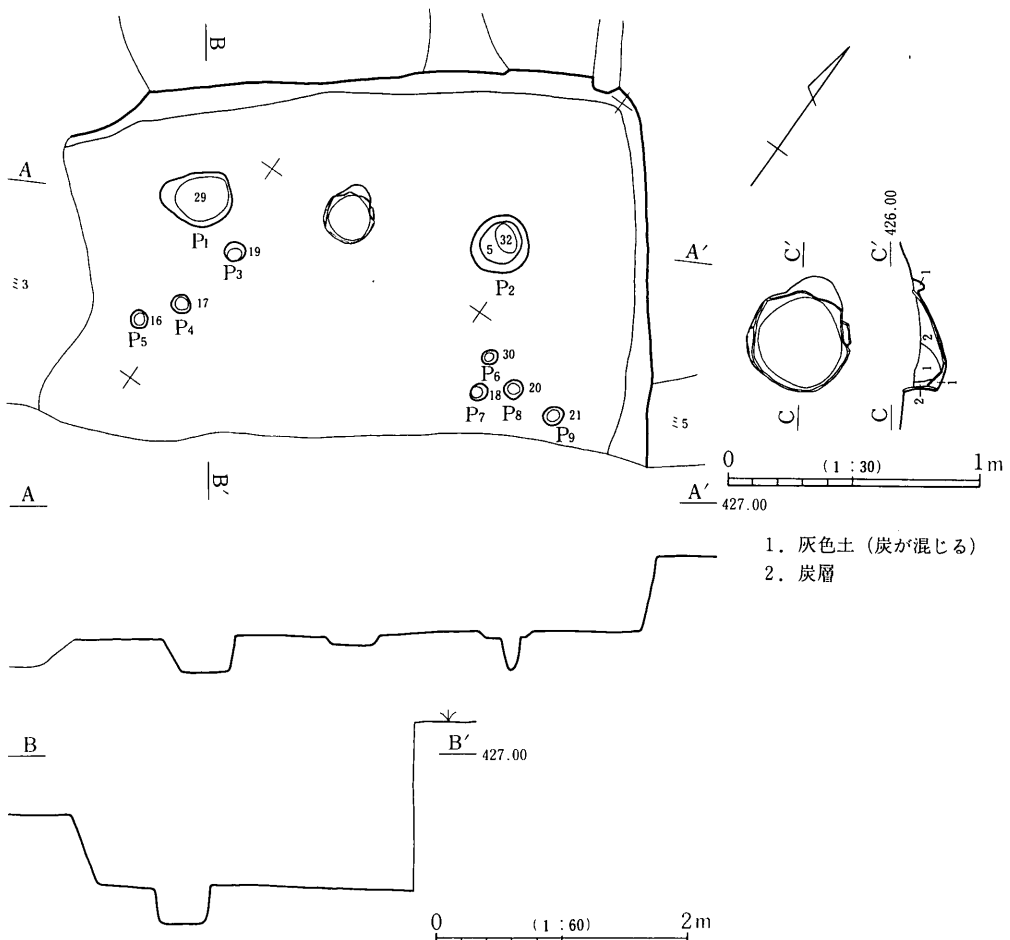
挿図20 28・38号住居址

⑬ 29号住居址 (挿図21)

XU12v を中心として検出し、南東側は未調査で全体の半分程を調査した。古墳時代前期の溝
 址 3・5 に切られる。主軸に直行する方向の長さが 5 m 程と推定される隅丸方形の竪穴住居址
 で、主軸方向は N35°W を示す。壁高は切り合いのない箇所で 60cm を測り、ほぼ垂直な壁面を
 なす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1・P2 である。炉址は主柱穴の中間に位置する
 土器埋設炉で、床面を 46×40cm に掘り凹め、口縁部を欠く大型の壺を斜めにして逆位に埋設す
 る。埋設土器の内部下層には大量の炭が残存していた。

遺物は覆土中から多くが出土し、また、上層にはまとまって拳大の礫が出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



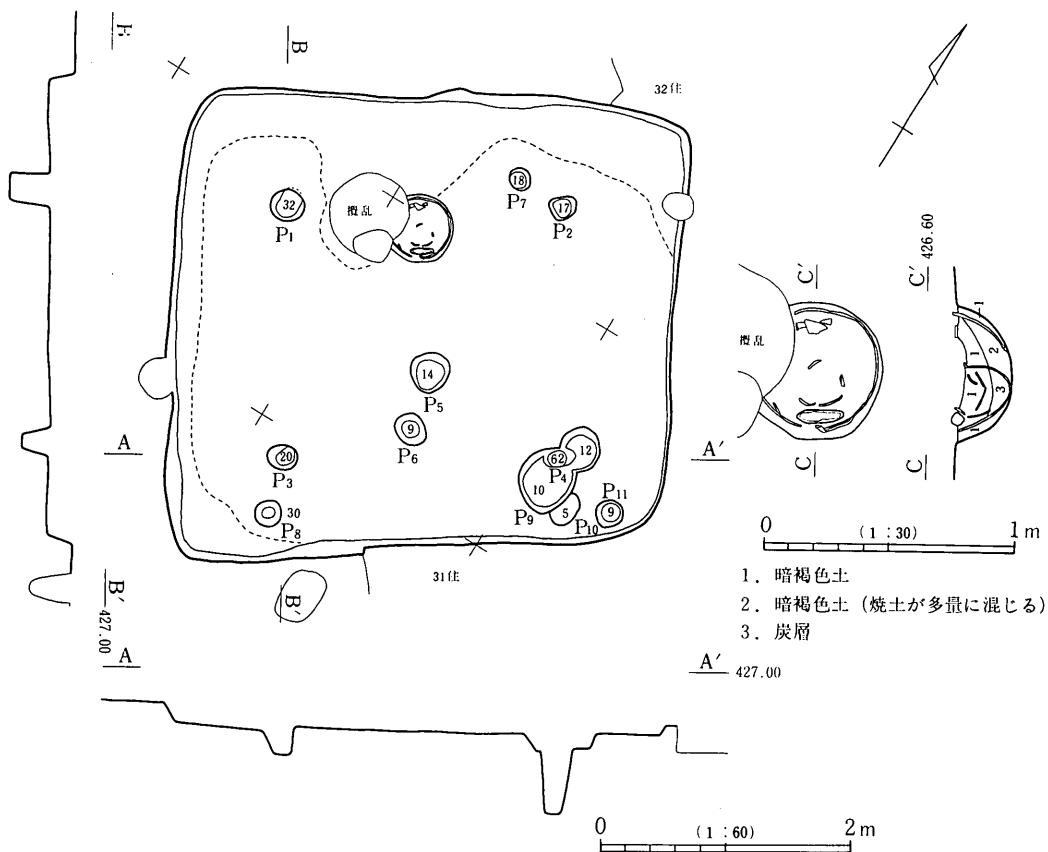
挿図21 29号住居址

⑳ 30号住居址 (挿図22)

XV13c を中心として検出し、全体を調査した。弥生時代後期の31・32号住居址を切る。3.6×4 m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N31°W を示す。壁高は24~7cm を測り、ほぼ垂直な壁面をなす。床面は破線外側を除きたたき状で良好である。壁際床面不良部分は周溝の可能性ある。支柱穴は P1~P4 で、P5・P6 は間仕切りピットと思われる。炉址は、北西側支柱穴の間に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、攪乱と中世のピットに切られる。床面を直径54cm 程円形に掘り凹め、外側に胴部以下の壺を、内側に胴部の一部を欠く甕を埋設する。外側と内側の土器の間に、炉縁石を設置している。内側埋設土器の内部下層に炭が大量に残存していた。

遺物は多くが覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図22 30号住居址

㉑ 31号住居址 (挿図23)

XV14c を中心にほぼ全体を調査した。弥生時代後期の30号住居址・中世の井戸址1に切られる。32号住居址との切り合い関係は確認できなかった。4.9×5.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN218°Wを示す。壁高は切り合い関係のない箇所が37～35cmで、ほぼ垂直である。床面は北西壁際を除きたたき状で良好である。壁際床面不良部分は周溝の可能性はある。主柱穴はP1～P4で、P5は入口施設、P6～P8は間仕切りピットと思われる。炉址は南東側主柱穴の中間に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、床面を90×56cmの楕円形に掘り凹め外側に胴部から頸部までのほぼ半分の壺を逆位に埋設し、その内側に胴部を穿孔した甕を埋設する。外側・内側の埋設土器の覆土下層には炭が大量に残存していた。二重土器埋設炉としたが、外側埋設土器の半分が欠損している点や、炉址土層の状況から、炉址の改築の可能性も指摘しておく。

遺物は覆土・床面から多く出土した。また、32号住居址出土遺物との検討から、本址のほうが32号住居址より新しいと判断した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

㉒ 32号住居址 (挿図24)

XV14f を中心にほぼ全体を調査した。弥生時代後期の30号住居址・中世の井戸址2・3・4に切られる。31号住居址との切り合い関係は確認できなかった。6.1×6.1mの隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向はN38°Wを示す。壁高は48cmで、やや緩やかである。床面は破線部内側を除きたたき状で良好である。壁際床面不良部分は周溝の可能性はある。主柱穴はP1～P4で、P5は入口施設、P6～P11は間仕切りピットと思われる。炉址は2箇所あり、両者とも北西側主柱穴の中間に位置する。前者は炉縁石を有する地床炉で、床面を66×55cmの円形に掘り凹め南東側に炉縁石を配置する。覆土には大量の炭が残存していた。

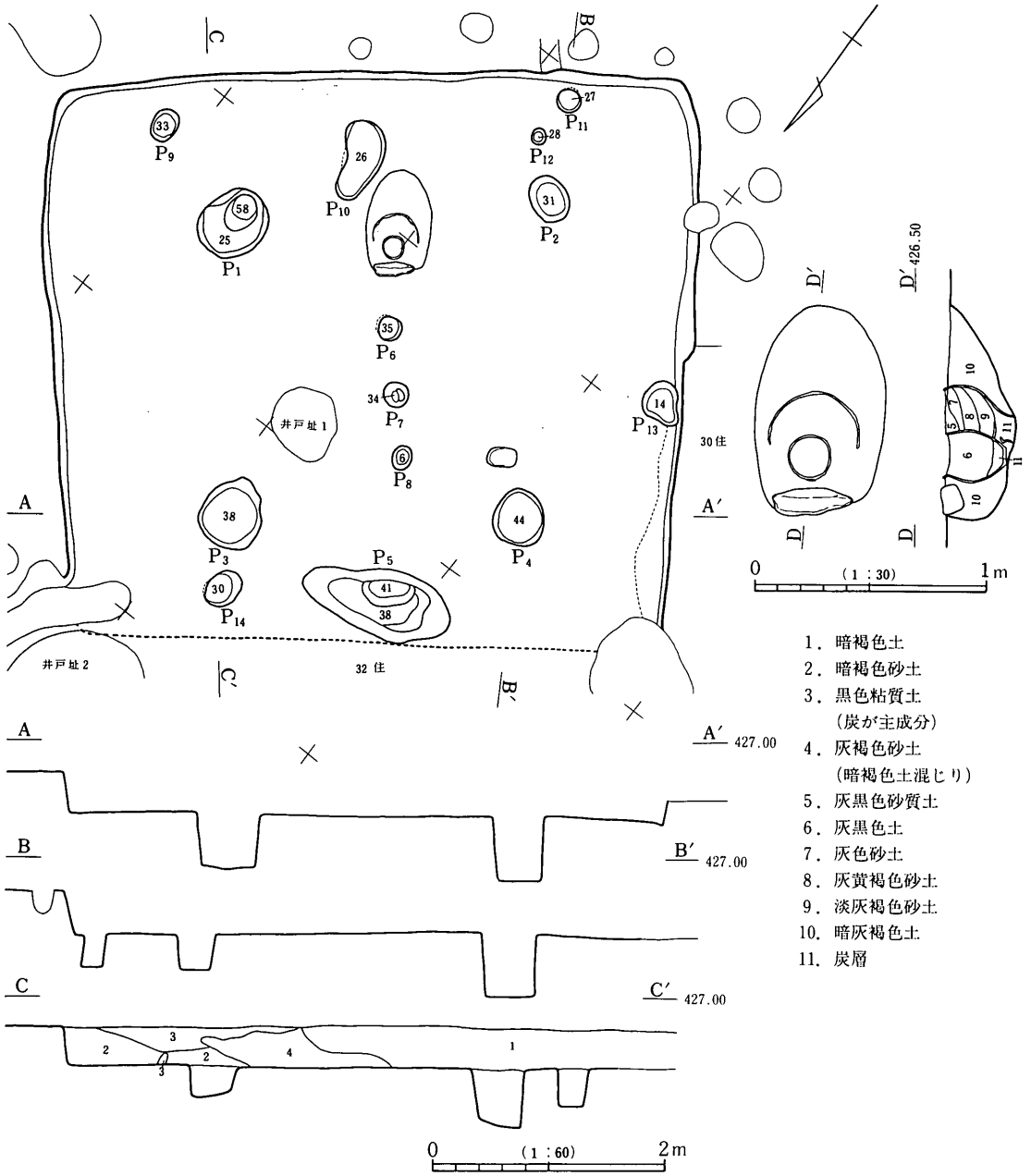
後者は前者の南東側にあり、一部重複する。形態は土器埋設炉で、床面を22×20cmに掘り凹め、底部を欠く甕を埋設する。埋設土器覆土には炭が残存していた。これらの炉址は、新旧あると思われるが、断面土層を検討すると、炉縁石を有する地床炉が古く、土器埋設炉が新しいと考えられる。

遺物は覆土から多く出土した。また、31号住居址出土遺物との検討から、本址のほうが31号住居址より古いと判断した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

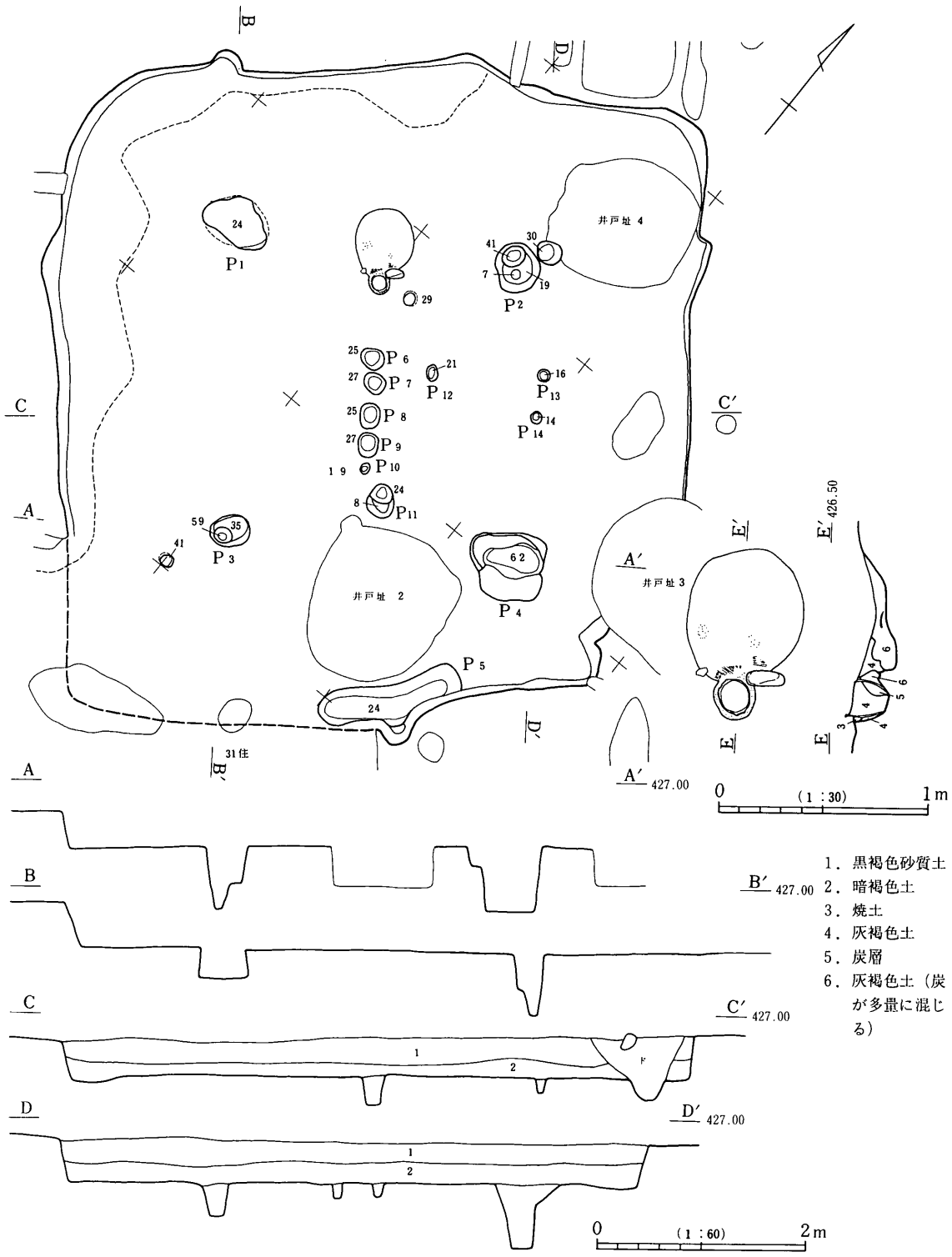
㉓ 33号住居址 (挿図25)

XV9m を中心にほぼ全体を調査した。弥生時代後期の62号住居址を切り、同期20号住居址に切られる。4.8×4.8mと推定される隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向はN25°Wを示す。壁高は切り合いのない箇所は32cmで、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱



1. 暗褐色土
2. 暗褐色砂土
3. 黑色粘質土
(炭が主成分)
4. 灰褐色砂土
(暗褐色土混じり)
5. 灰黑色砂質土
6. 灰黑色土
7. 灰色砂土
8. 灰黄褐色砂土
9. 淡灰褐色砂土
10. 暗灰褐色土
11. 炭層

挿図23 31号住居址

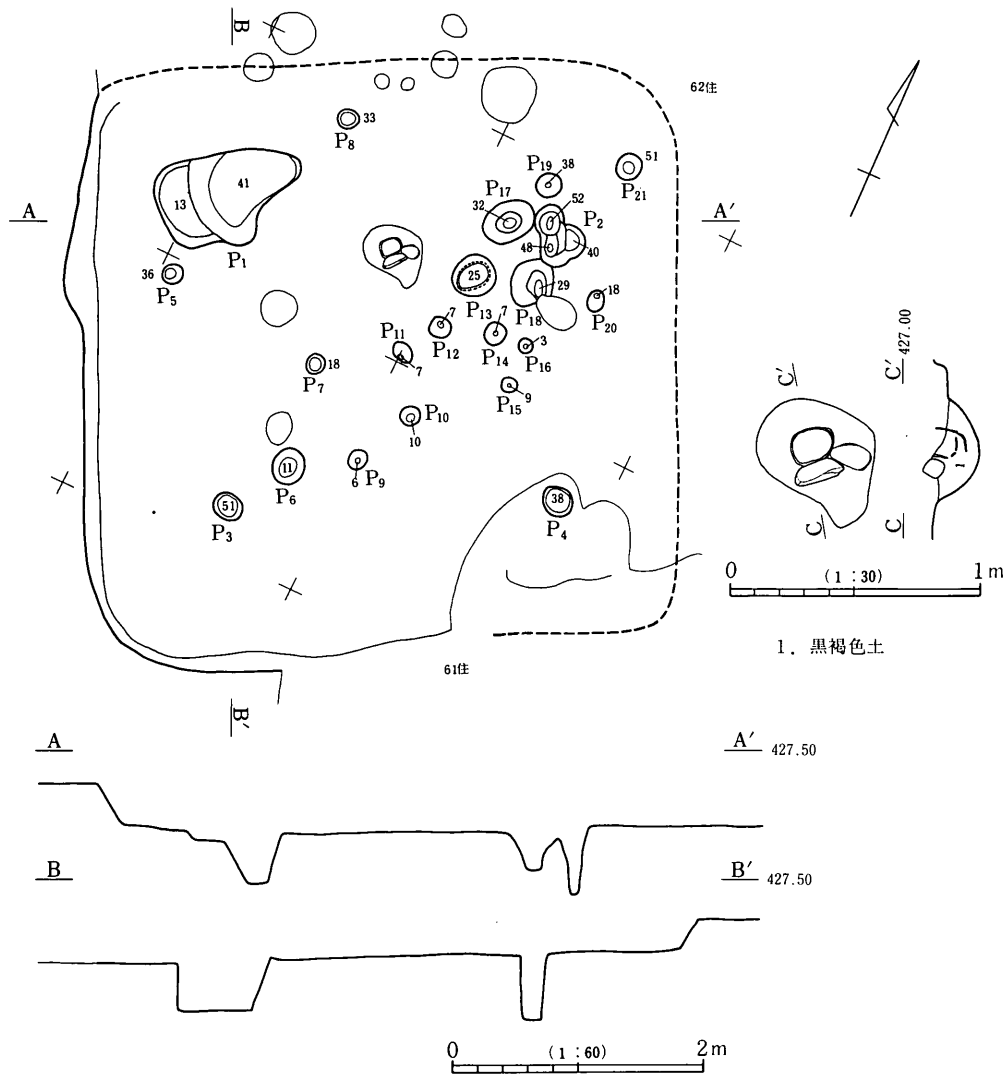


- 1. 黒褐色砂質土
- 2. 暗褐色土
- 3. 焼土
- 4. 灰褐色土
- 5. 炭層
- 6. 灰褐色土 (炭が多量に混じる)

挿図24 32号住居址

穴はP1~P4で、P10・P11は間仕切りピットと思われる。本址は完全に62号住居址と切り合っている。他のピットは62号住居址の可能性もある。炉址は北西側主柱穴の中間よりやや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を55×46cmに掘り凹め底部を欠く甕を埋設する。遺物は床面からやや浮いた位置から多く出土した。

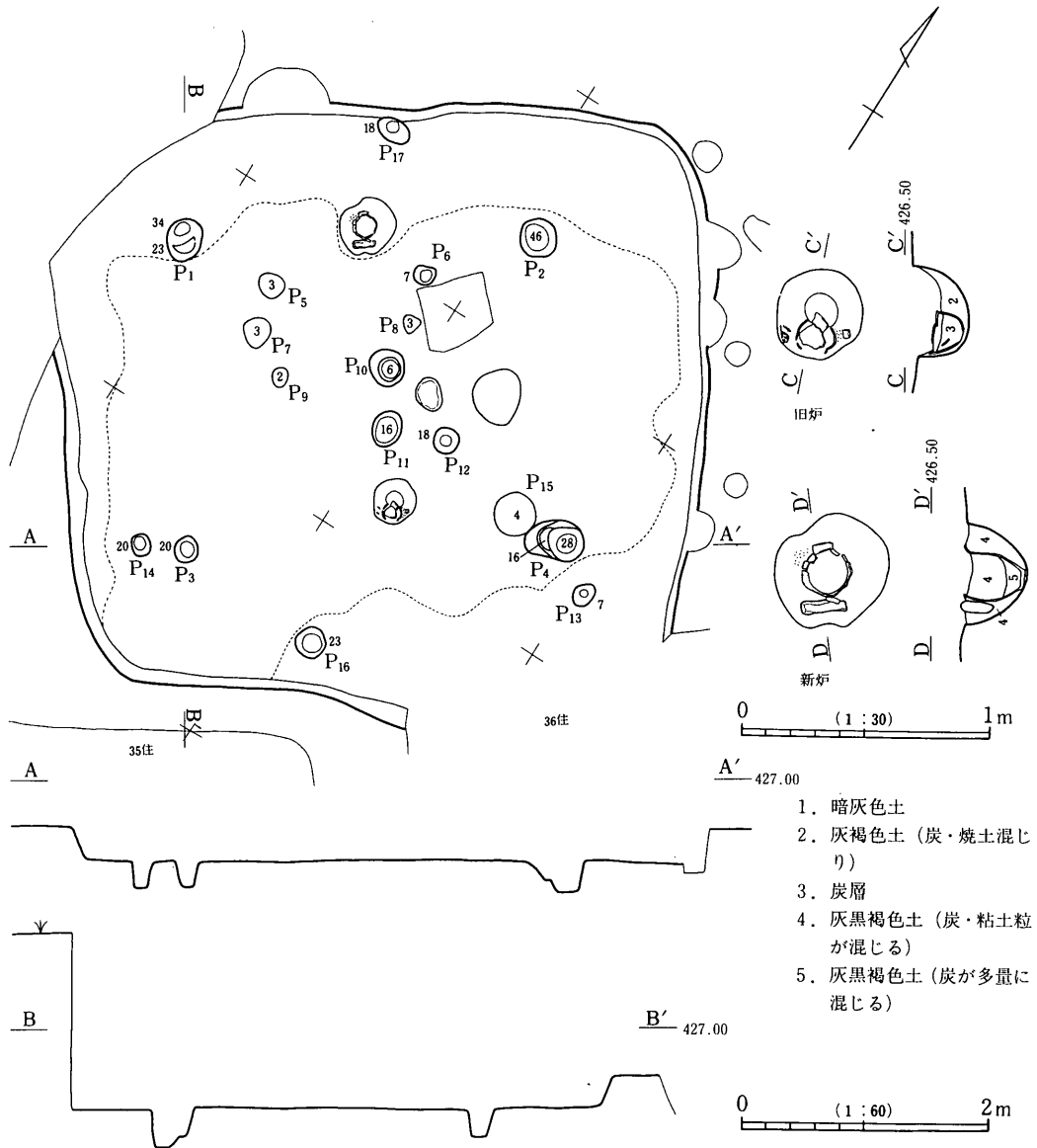
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



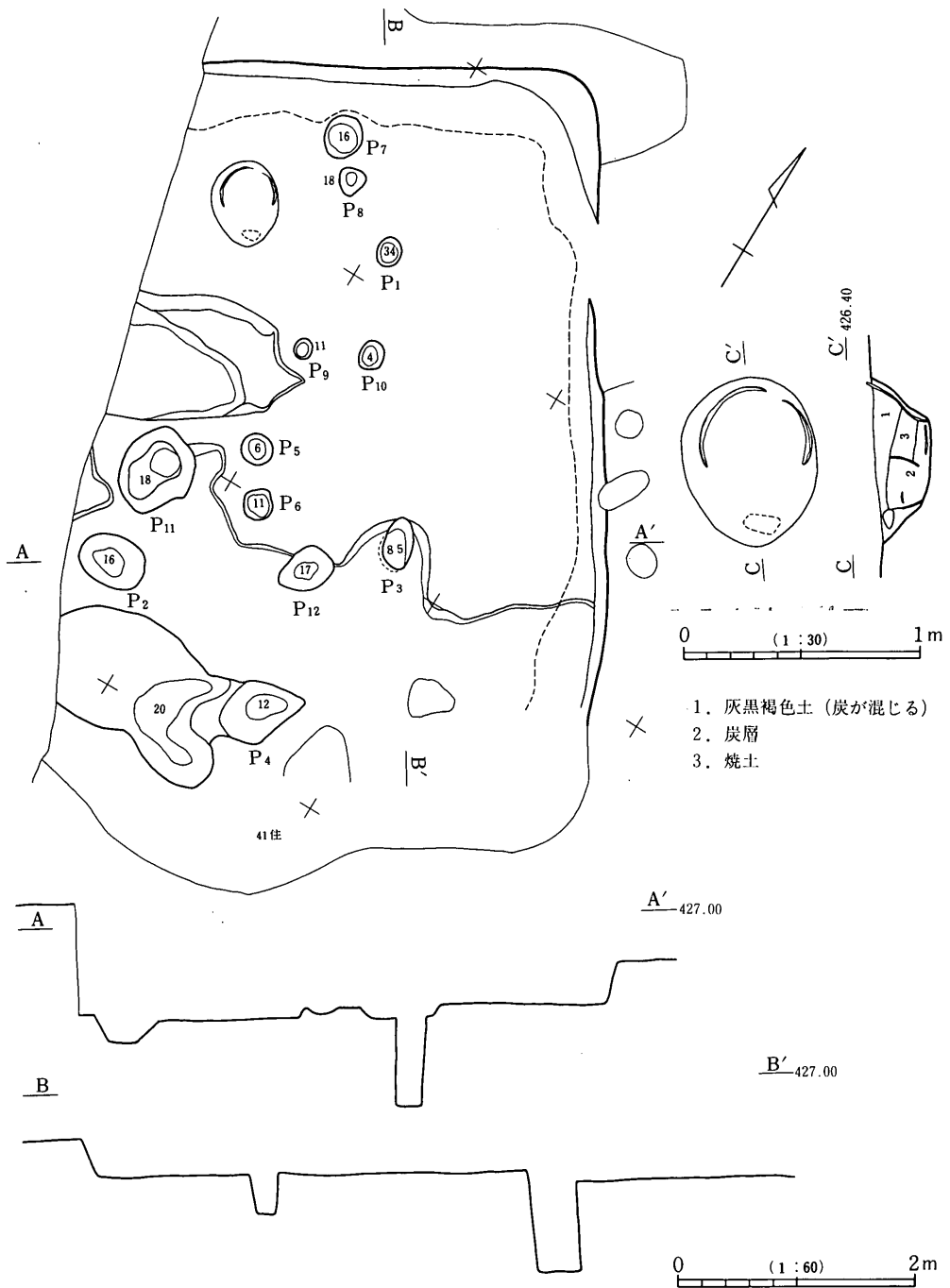
挿図25 33号住居址

㊤ 34号住居址 (挿図26)

XU6y を中心に 9 割程を調査した。弥生時代後期の36号住居址を切る。4.6×5.1mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N32°W を示す。壁高は切り合いのない箇所では38cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は、破線外を除きたたき状で良好である。主柱穴は P1~P4 で、P10・P11は間仕切りピットと思われる。炉址は 2 箇所にあり、旧炉と思われるものは南東側主柱穴の中間よりやや内側に位置する土器埋設炉で、床面を48×42cmの円形に掘り凹め口縁部及び底部を欠く甕を埋設する。埋設土器覆土には炭が大量に残存していた。廃絶後、埋設土器に土器



挿図26 34号住居址



挿図27 35号住居址

片にて蓋をしたようである。新炉は北西側支柱穴の中間に位置し、形態は炉縁石を有する土器埋設炉である。床面を37×35cmの円形に掘り凹め、ほぼ完形の甕を埋設する。埋設土器覆土下層には炭が大量に残存していた。

遺物は覆土から多く出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

㊸ 35号住居址 (挿図27)

XU6uを中心に、東側は未調査であり2／3程を調査した。弥生時代後期の36号住居址を切り、古墳時代前期の溝址4に切られる。5.2×6mと推定される隅丸の竪穴住居址で、主軸方向はN33°Wを示す。壁高は切り合いのない箇所38cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は、破線外を除きたたき状で良好である。壁際床面不良部分は周溝の可能性がある。南東床面は不良であったため、下層の41号住居址の床まで、掘り過ぎてしまった。支柱穴はP1～P3で、P4の一部が入口施設、P5・P6は間仕切りピットと思われる。炉址は支柱穴P1の東側に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、床面を70×56cmの楕円形に掘り凹め、外側に頸部から胴部までの約1／2の壺を逆位に埋設し、底部に土器片を敷いて底にしてある。内側の土器は、底部を欠く甕で、南東側に炉縁石を配置する。外側の埋設土器覆土中層には多量の焼土、内側の埋設土器覆土下層には多量の炭が残存していた。

遺物は覆土から多く出土した。

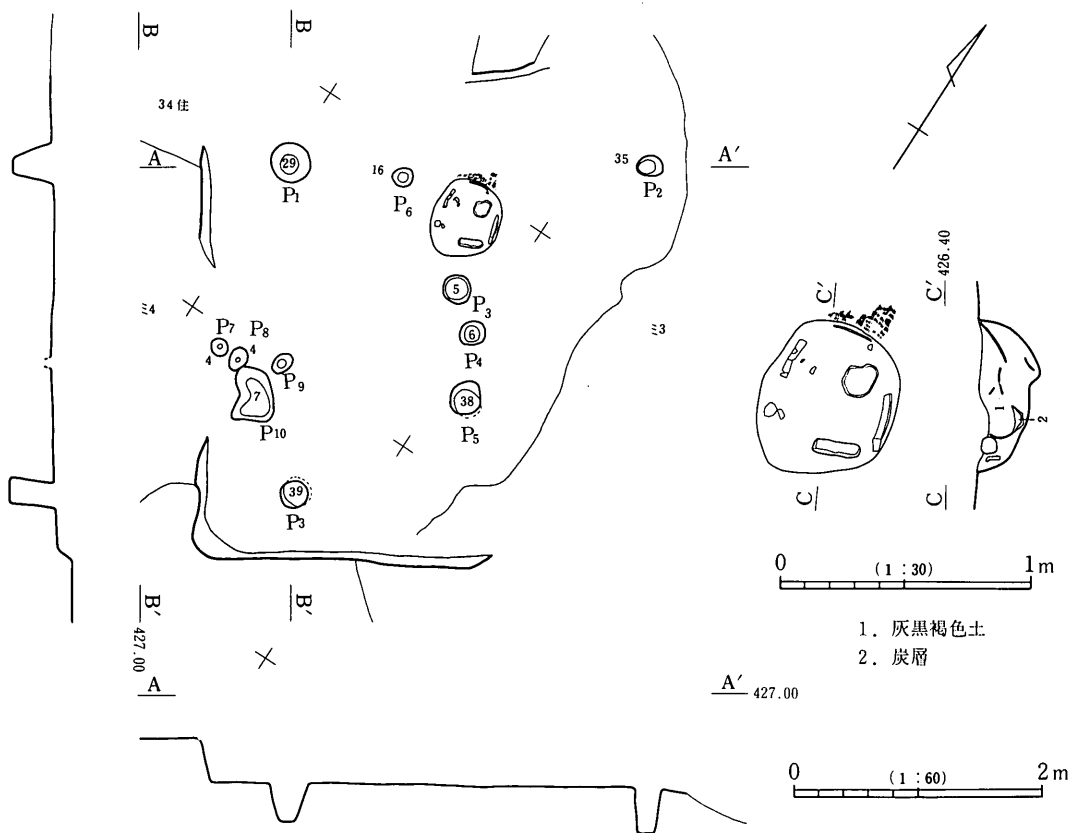
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

㊹ 36号住居址 (挿図28)

XU7xを中心に、3／4程を調査した。弥生時代後期の34号住居址・古墳時代前期の溝址3・4に切られる。主軸方向に3.9mを測る隅丸の竪穴住居址で、主軸方向はN33°Wを示す。壁高は切り合いのない箇所33cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴はP1～P3で、P4～P6は間仕切りピットと思われる。P7～P10は溝址4の底部の可能性がある。炉址は北西側支柱穴のやや内側に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、床面を64×54cmの楕円形に掘り凹め、外側に壺の胴部を埋設する。検出時はほとんど破損していた。内側の土器は、口縁部から頸部を欠く甕で、南東側に炉縁石を配置する。内側の埋設土器覆土下層には大量の炭が残存していた。外側の土器の出土状況、炉址土層断面の状況より、炉址の改築の可能性も指摘しておく。

遺物は覆土から多く出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図28 36号住居址

⑳ 37号住居址 (挿図19)

XV8c を中心に調査した。弥生時代後期の27号住居址・古墳時代前期の溝址3に切られる。たたき状の床面を検出したので住居址と判断した。規模等は不明である。

出土遺物等がなく、時期も断定できないが、床面の状況、他の遺構との切り合い関係から、弥生時代後期と推定される。

㉑ 38号住居址 (挿図20)

XV9b を中心に、1/4弱を調査した。弥生時代後期の28号住居址・古墳時代前期の溝址3に切られ、規模等は不明であるが、主軸方向がN33°Wを示す竪穴住居址である。壁高は32cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴は確認できなかった。炉址は北西側壁のやや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を38×36cmの円形に掘り凹め底部を欠く甕を埋設してある。埋設土器覆土下層に炭が大量に残存していた。

遺物は少なく、多くが覆土より出土した。

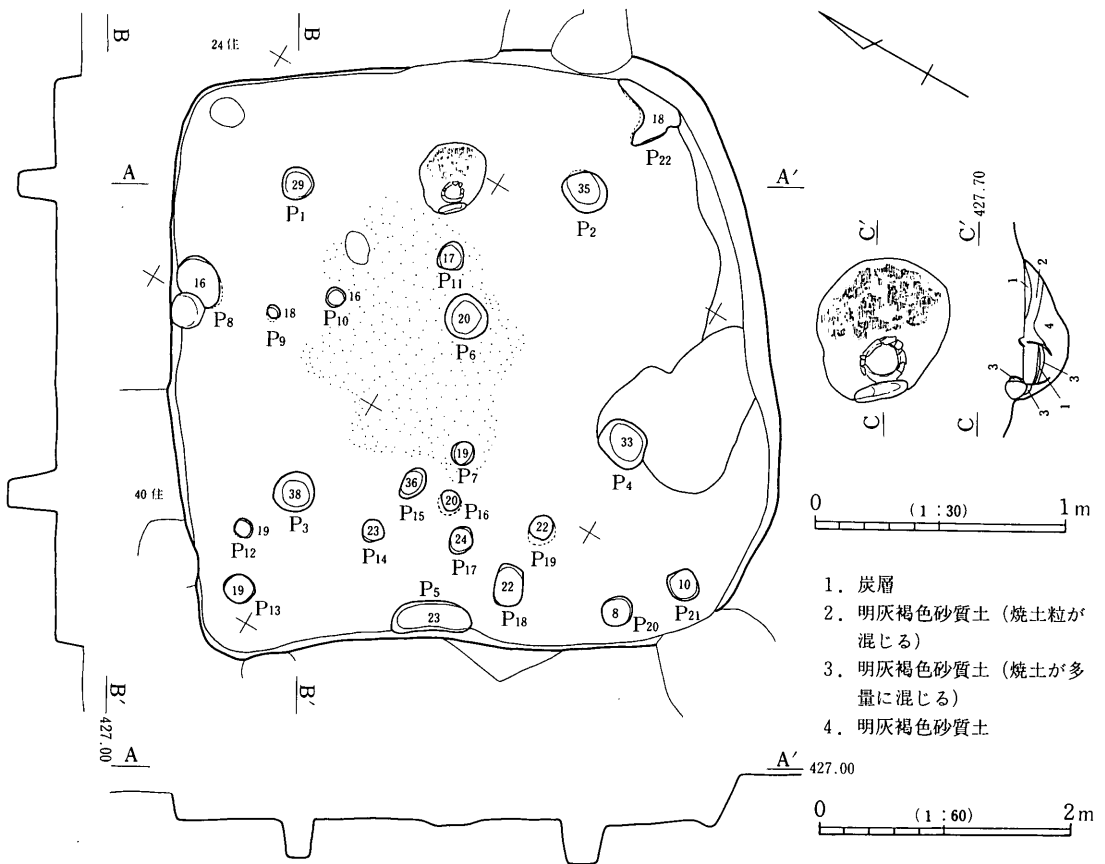
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

㊸ 39号住居址 (挿図29)

XV11iを中心に、全体を調査した。弥生時代後期の24・40号住居址に切られる。4.5×4.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN120°Wを示す。壁高は41~15cmを測り、ほぼ垂直な壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴はP1~P4で、P5は入口施設、P6・P7は間仕切りピットと考えられる。炉址は北東側支柱穴の中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を55×54cmの楕円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋設してある。表層及び、埋設土器覆土中層に炭が多量に残存し、炉縁石周辺、埋設土器覆土中層に焼土を確認した。

遺物は主要なものは床面直上で出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



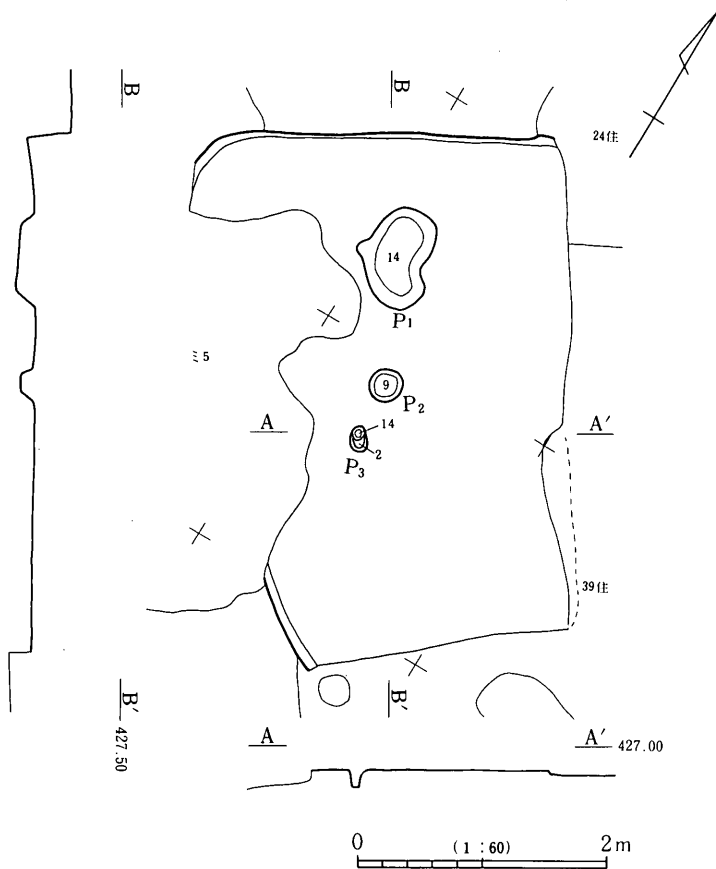
挿図29 39号住居址

⑩ 40号住居址 (挿図30)

XV10j を中心にして検出し、1 / 3 程を調査した。弥生時代後期の24・39号住居址を切り、古墳時代前期の溝址5に切られる。隅丸の竪穴住居址であるが、規模・主軸方向とも不明である。壁高は切り合いのない箇所では34cmを測り、ほぼ垂直な壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は確認できなかった。また、他のピットについても39号住居址のもの可能性がある。炉址も、主柱穴同様確認できなかった。

遺物は覆土から多く出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



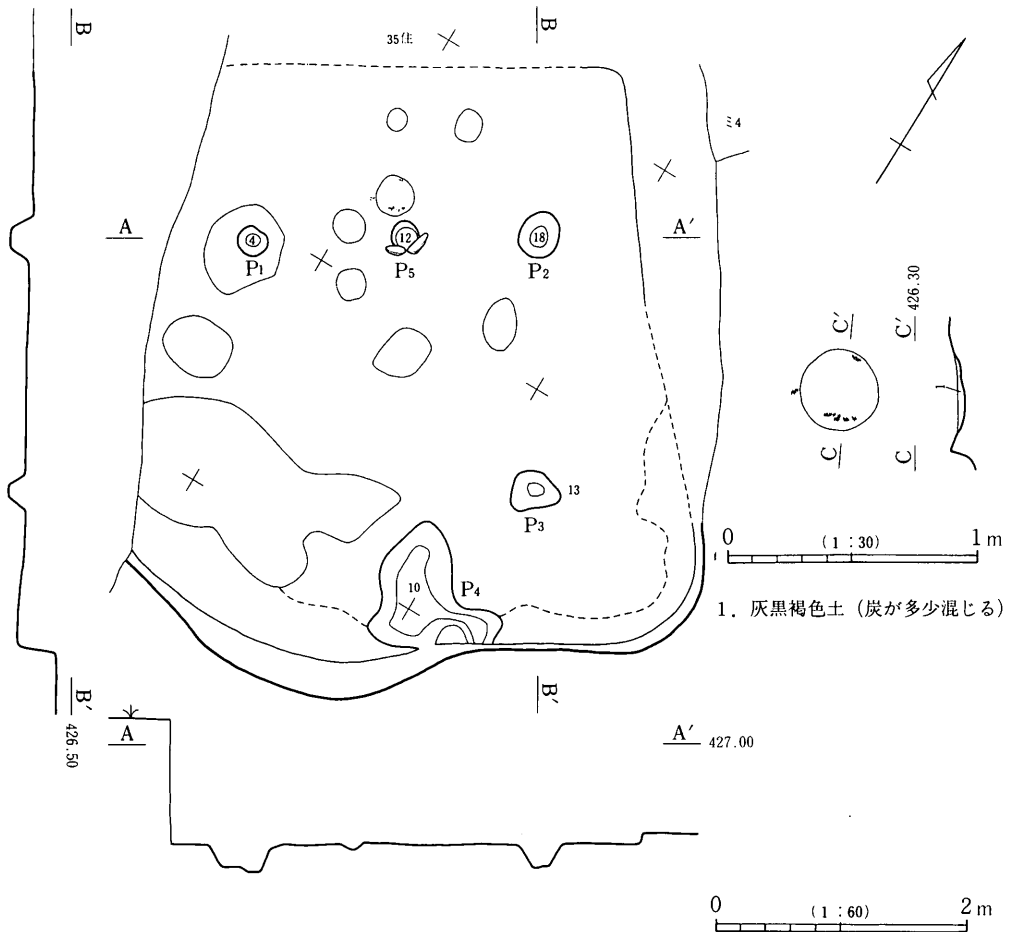
挿図30 40号住居址

③ 41号住居址 (挿図31)

XU6u を中心にして検出し、1 / 3 程を調査した。弥生時代後期の35号住居址・古墳時代前期の溝址 4 に切られる。4.6×3.9m と推定される隅丸の竪穴住居址で、主軸方向は N30°W を示す。壁高は44~14cm を測り、ほぼ垂直な壁面をなす。床面は南東壁際を除きたたき状で良好である。支柱穴は P1~P3 で、P 4 は入口施設と思われる。炉址は北西側支柱穴の中間よりやや外側に位置する地床炉で、床面を31×31cm の楕円形に掘り凹めてある。覆土に少々の炭が認められた。

遺物は多くが覆土から出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図31 41号住居址

③② 42号住居址 (挿図32)

XV21f を中心にして検出し、グリット杭周辺を除きほぼ全体を調査した。弥生時代後期の43号住居址を切り、弥生時代後期以降の溝址6に切られる。4.6×4.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN33°Wを示す。壁高は31cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は南東部を除きたたき状で良好である。主柱穴はP1～P3で、P4は入口施設、P5・P6は間仕切りピットと考えられる。また、P3南側に台石がある。炉址は北西側主柱穴の中間に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、床面を53×51cmに掘り凹め、外側は壺の胴部を北西側に埋設する。内側は口縁部と底部を欠く甕を埋設し、底部は土器片で塞いでいる。外側・内側の土器覆土には多量の焼土が残存していた。一応、二重土器埋設炉としたが、外側土器の部分的欠損、炉址土層断面の状況より、炉址の改築の可能性も指摘しておく。

遺物は多くが覆土から出土したが、主要なものは床面直上より出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

③③ 43号住居址 (挿図33)

XV19h を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の44・45号住居址を切り、弥生時代後期の42号住居址に切られる。5.5×5.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN44°Wを示す。壁高は最大22cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。南東側壁はプランが確定できず、掘り過ぎてしまった。床面はたたき状で良好であるが、西側は不良であったため掘り過ぎてしまった。ピットは確認できたが、主柱穴と断定できるものはない。炉址は住居址中央部やや北西側に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を61×50cmに掘り凹め、炉縁石を配置している。炉址北西側のピットは中世のものである。

遺物は多くが覆土から出土している。

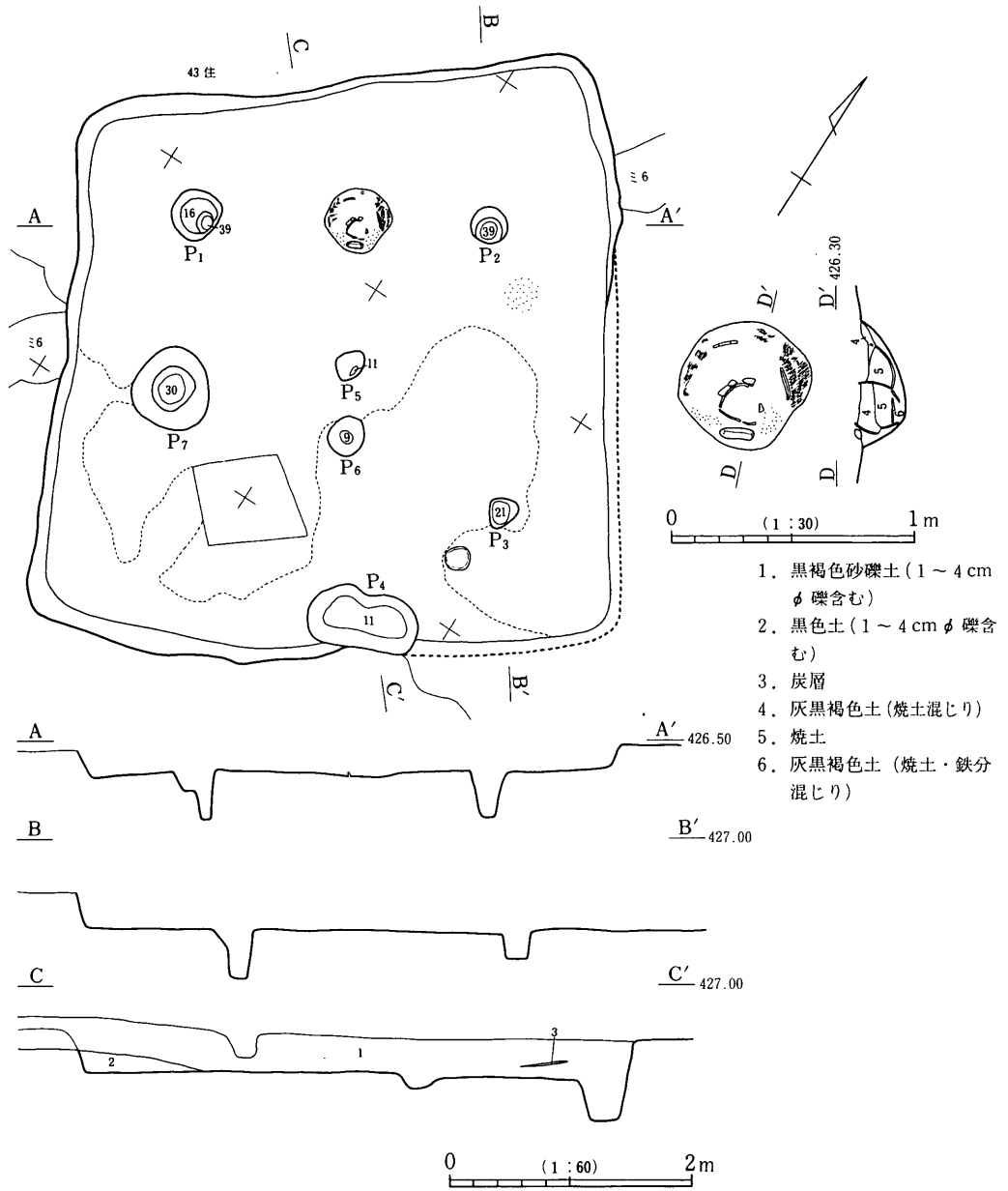
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

③④ 44号住居址 (挿図34)

XV18i を中心にして検出し、9割程調査した。弥生時代後期の43・45号住居址に切られる。4.4×4.4mと推定される隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN35°Wを示す。壁高は最大32cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。北東側壁はプランが不明瞭であったため、掘り過ぎてしまった。床面は南東側を除きたたき状で良好である。主柱穴はP1～P3で、P4～P6は間仕切りピットと考えられる。炉址は北西側主柱穴の中間に位置する土器埋設炉で、床面を45×41cmに掘り凹め、土器片を幾重にも重ねたり囲ったりして形成されている。一番内側の埋設土器覆土中には多量に炭が残存していた。名称を土器埋設炉としたが、従来のそれとは異なっている。

遺物は多くが覆土から出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図32 42号住居址

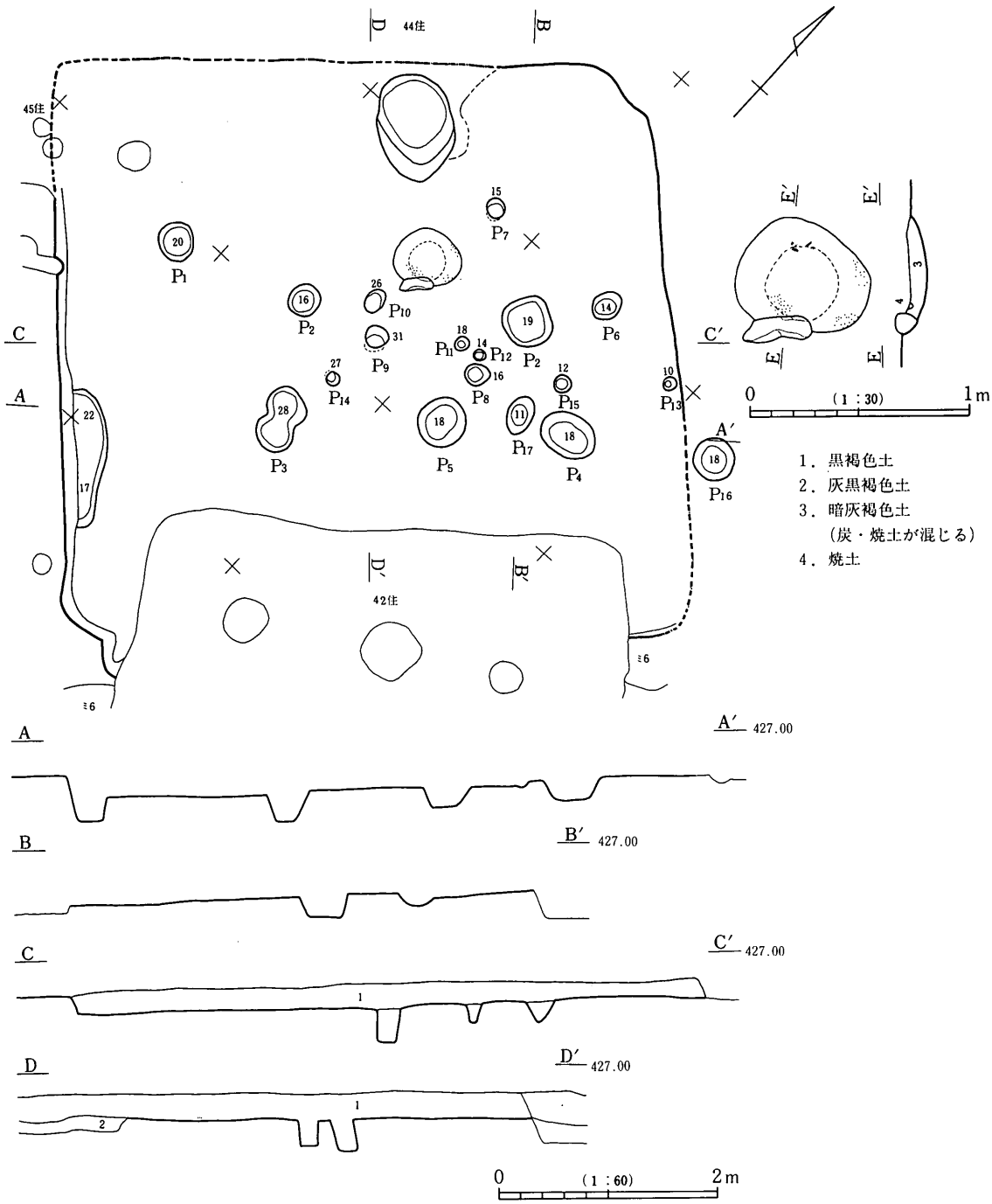
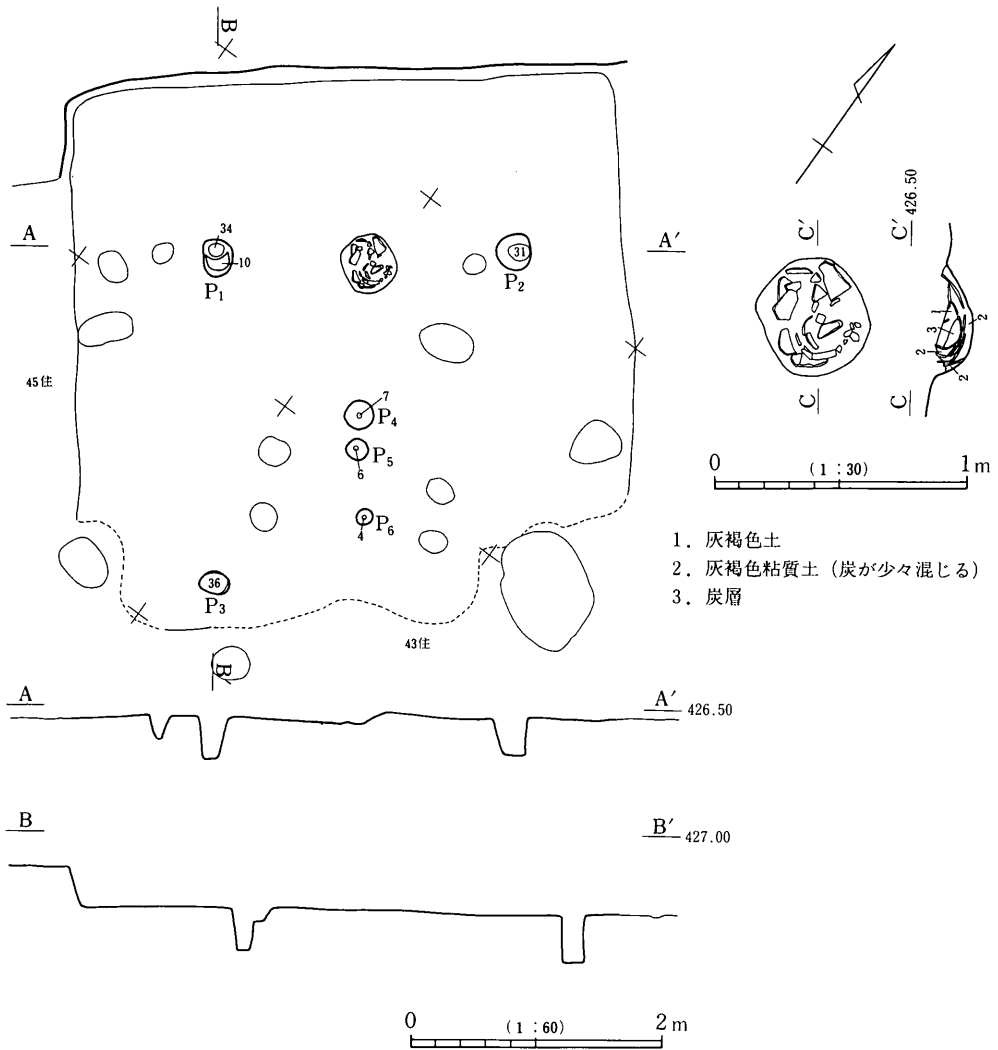


插图33 43号住居址



挿図34 44号住居址

③⑤ 45号住居址 (挿図35)

XV17 i を中心にして検出し、9 割程調査した。弥生時代後期の43・44号住居址に切られる。4.2×5.5mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向は N33°W を示す。壁高は最大37cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。北東側壁はプランが不明瞭であったため、掘り過ぎてしまった。床面は北西壁際を除きたたき状で良好である。主柱穴は P1~P4 で、P5・P6 は間仕切りピットと考えられる。炉址は北西側主柱穴の中間に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、床面を56×56cmの円形に掘り凹め、外側は胴部以上の壺を逆位に埋設し、口縁部に土器片を敷き、底を形成してある。また、部分的に土器片を用いて二重にしている。外側は底部穿孔された甕を埋設す

る。外側と内側の埋設土器の間の南東側に炉縁石を設置する。覆土上層には炭が、中層及び下層には焼土が、それぞれ多量に残存していた。炉縁石は磨製石斧の転用である。また、炉址断面土層から考察すると、まず、外側の土器を埋設した後、淡褐色砂土で内側の土器を固定したようである。そして両方の土器の中を使用したようである。

遺物は床面よりやや浮いた位置で多くが出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

③⑥ 46号住居址 (挿図36)

XV17m を中心として検出し、ほぼ全面を調査した。弥生時代後期以降の溝址7に切られる。5.2×5.5m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N51°E を示す。壁高は42~4cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴は P1~P3 で P4~P6 は間仕切りピットと考えられる。炉址は旧炉・新炉と2基あり、いずれも北東側支柱穴中間に位置する。旧炉は、新炉断ち割り調査時に確認した。上部は新炉により破壊されているが、土器埋設炉である。新炉は炉縁石を有する土器埋設炉で掘り方は旧炉と重複している関係で不明である。埋設土器は底部が穿孔された甕である。埋設土器覆土下層には多量に炭が残存していた。

遺物は多くが覆土より出土したが、主要な遺物は床面直上で出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

③⑦ 47号住居址 (挿図37)

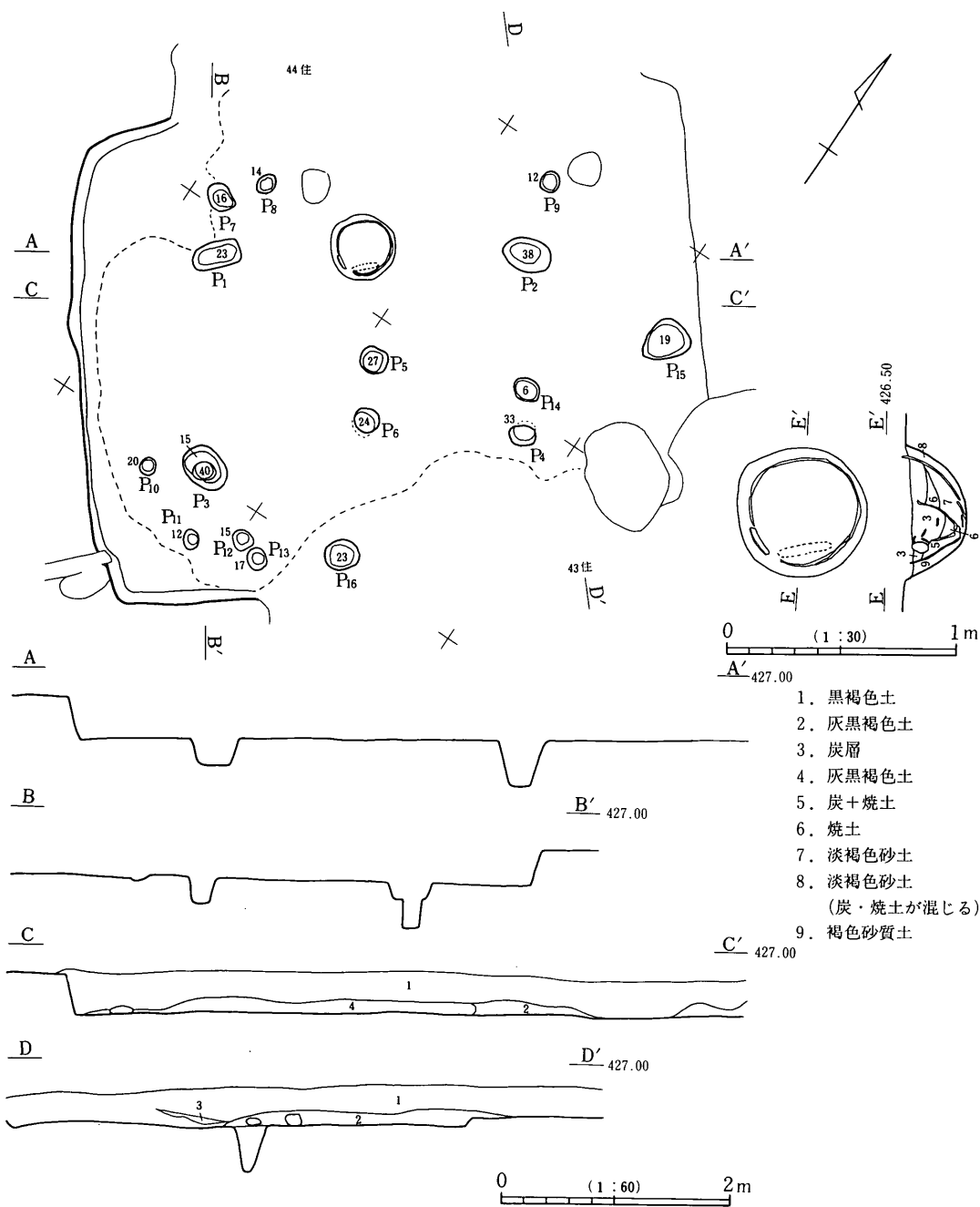
XV24m を中心として検出し、ほぼ全面を調査した。弥生時代後期の48号住居址を切る。4.7×4.8m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N32°W を示す。壁高は16~5 cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は破線部壁際と北側床面を除きたたき状で良好である。壁際床面不良部分は周溝の可能性もある。また、北側床面は不良であったため、掘り過ぎてしまった。支柱穴は P1~P4 で、P2 は、48号住居址支柱穴 P3 と共有した可能性がある。P5 は高さ6~4cm の土手状縁部を伴う入口施設、P6・P7は間仕切りピットと考えられる。炉址は北西側支柱穴中間に位置する土器埋設炉で、床面を70×65cm に掘り凹め、大型の壺の胴部以上を逆位に埋設する。

遺物は多くが覆土より出土している。

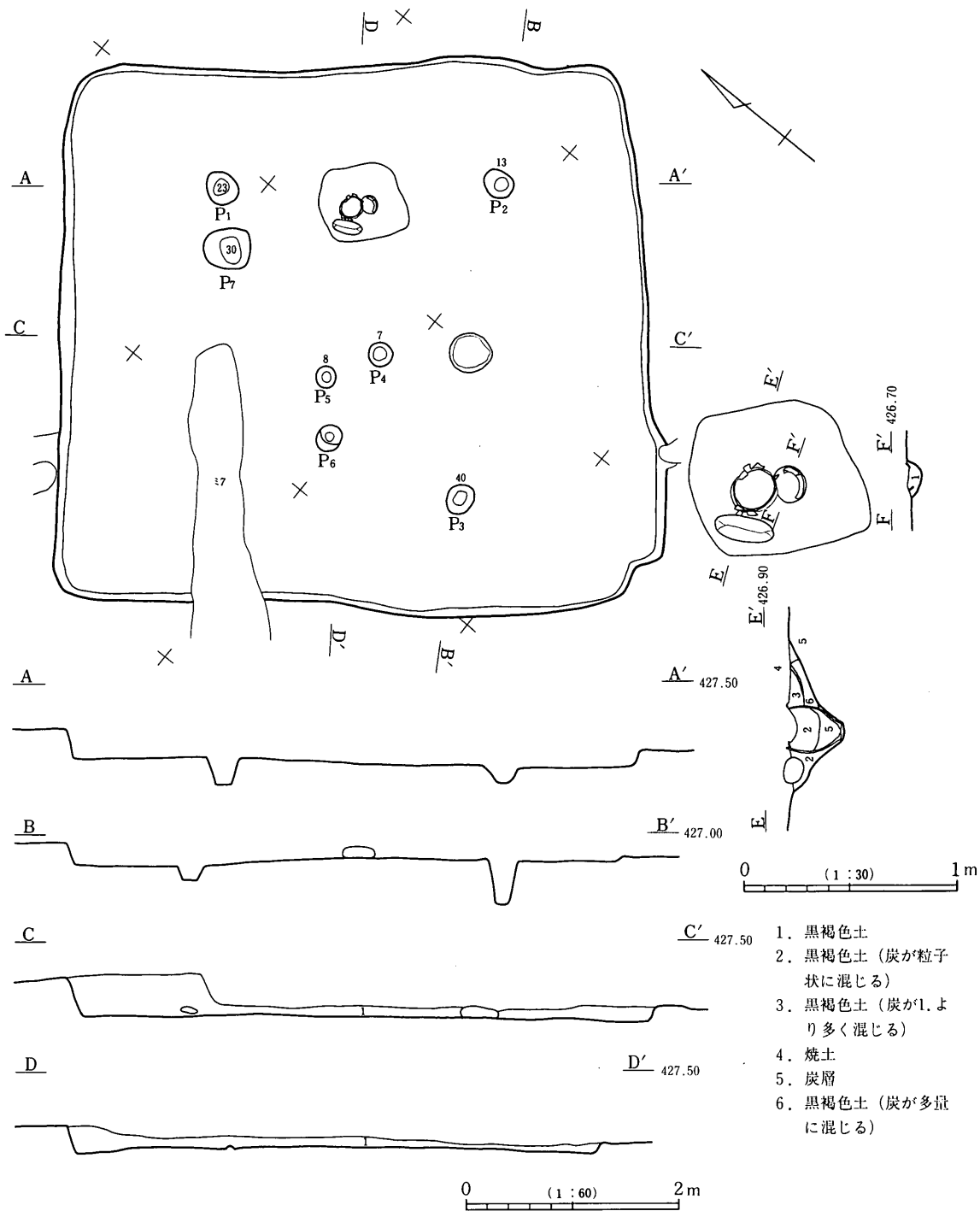
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

③⑧ 48号住居址 (挿図38)

XV24o を中心として検出し、ほぼ全面を調査した。弥生時代後期の78号住居址に切られる。5.7×5.2m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N37°W を示す。壁高は22~9cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は新旧2枚あるが、旧床面は床より12~8cm 下に構築されており、北東側壁際を除きたたき状で良好である。新床面は破線部壁側を除きたたき状で良好である。壁



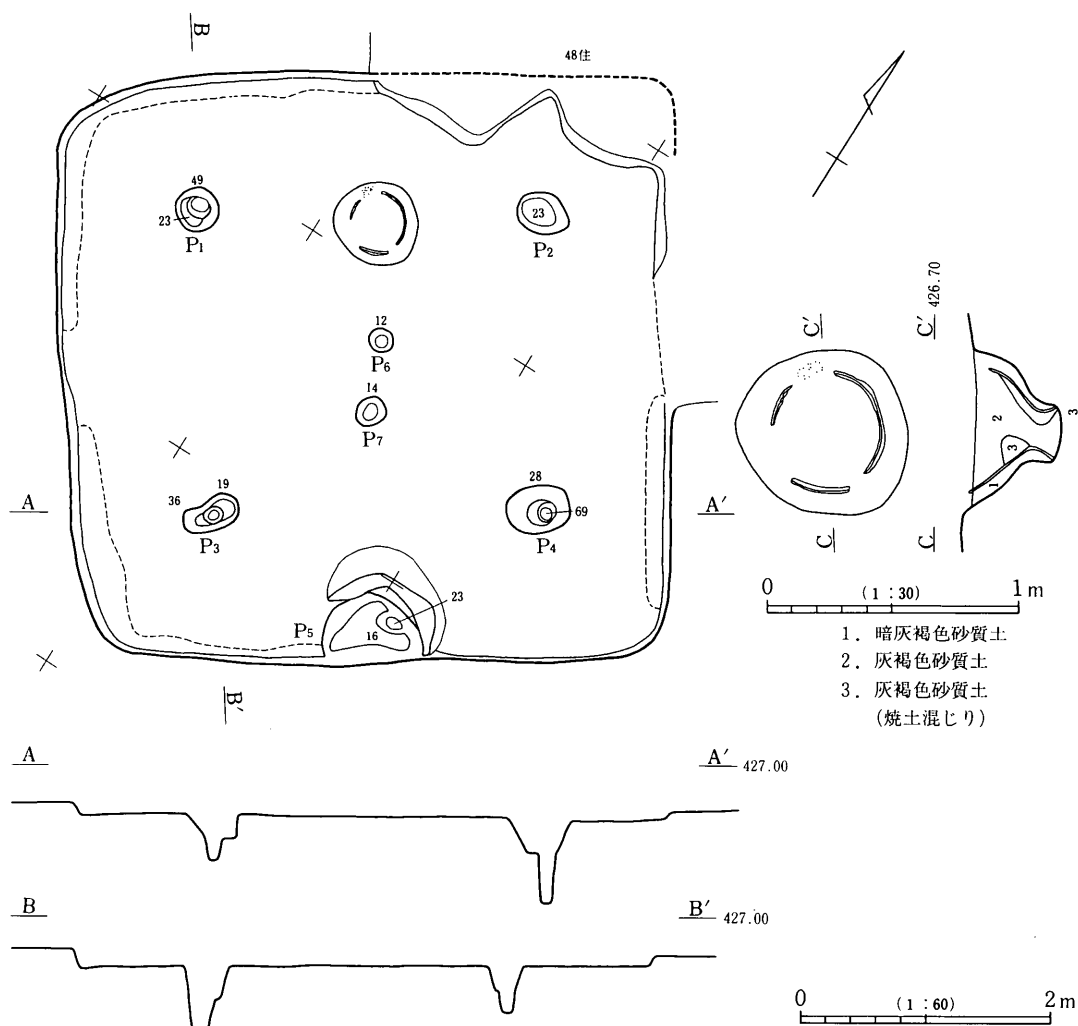
挿図35 45号住居址



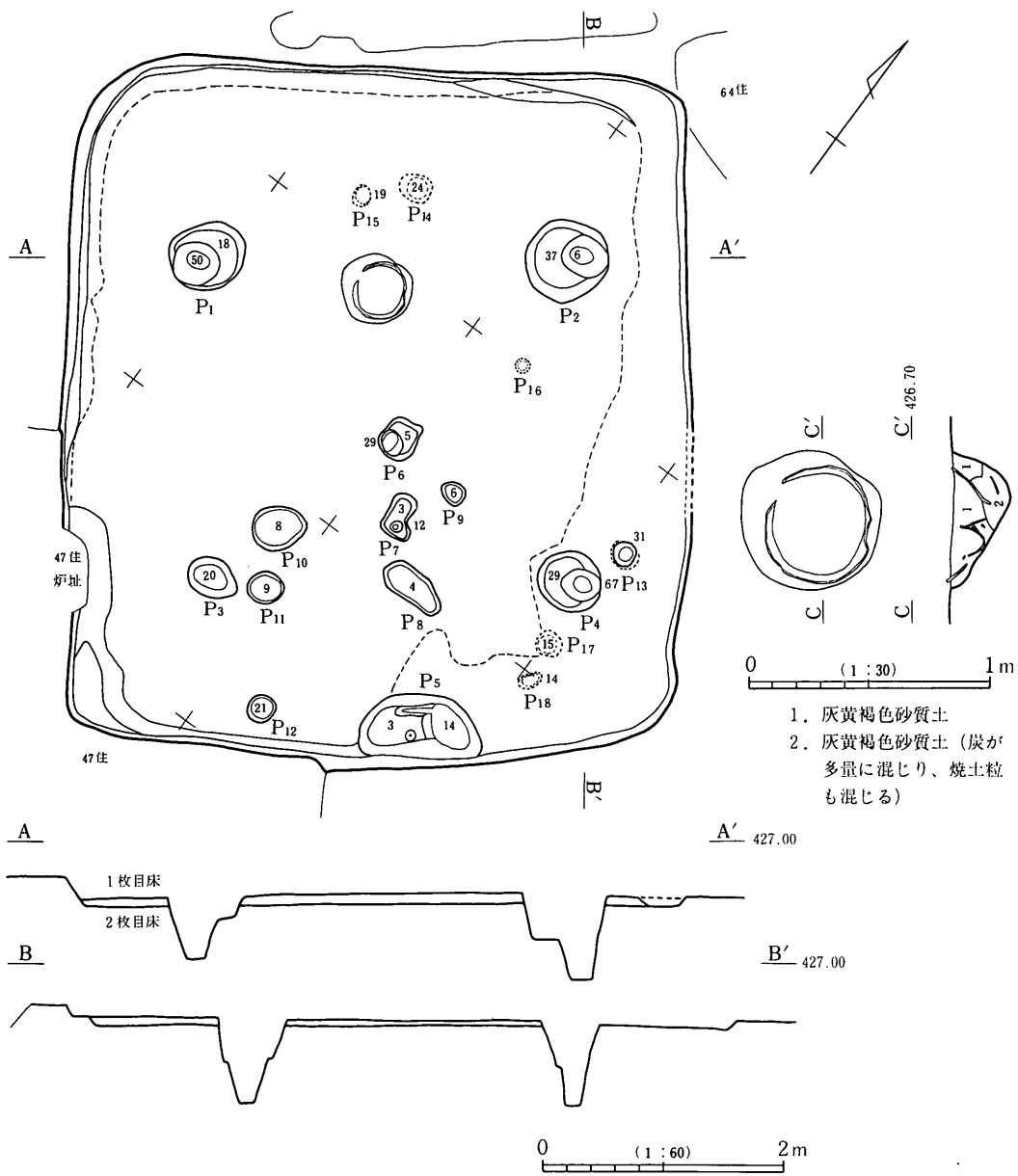
挿図36 46号住居址

際床面不良部分は、周溝の可能性ある。主柱穴は新旧床面とも共通のP1~P4で、P3は、47号住居址主柱穴P2として共有された可能性がある。P5は入口施設、P6~P8は間仕切りピットと考えられるが、新旧床面共通かは不明である。破線で示したP14~P18は、旧床面で確認したものである。炉址は北西側主柱穴中間に位置する二重土器埋設炉で、新旧床面共通のものと考えられる。床面を59×56cmの円形に掘り凹め、外側に胴部以上の壺を逆位に埋設する。内側には胴部以下の甕を外側の土器の一部を破壊し、埋設する。また、外側埋設土器の頸部を用いて支えてある。炉址覆土下層には炭が多量に残存していた。

遺物は多くが覆土から出土しているが、新旧床面の間層からも若干出土している。
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図37 47号住居址

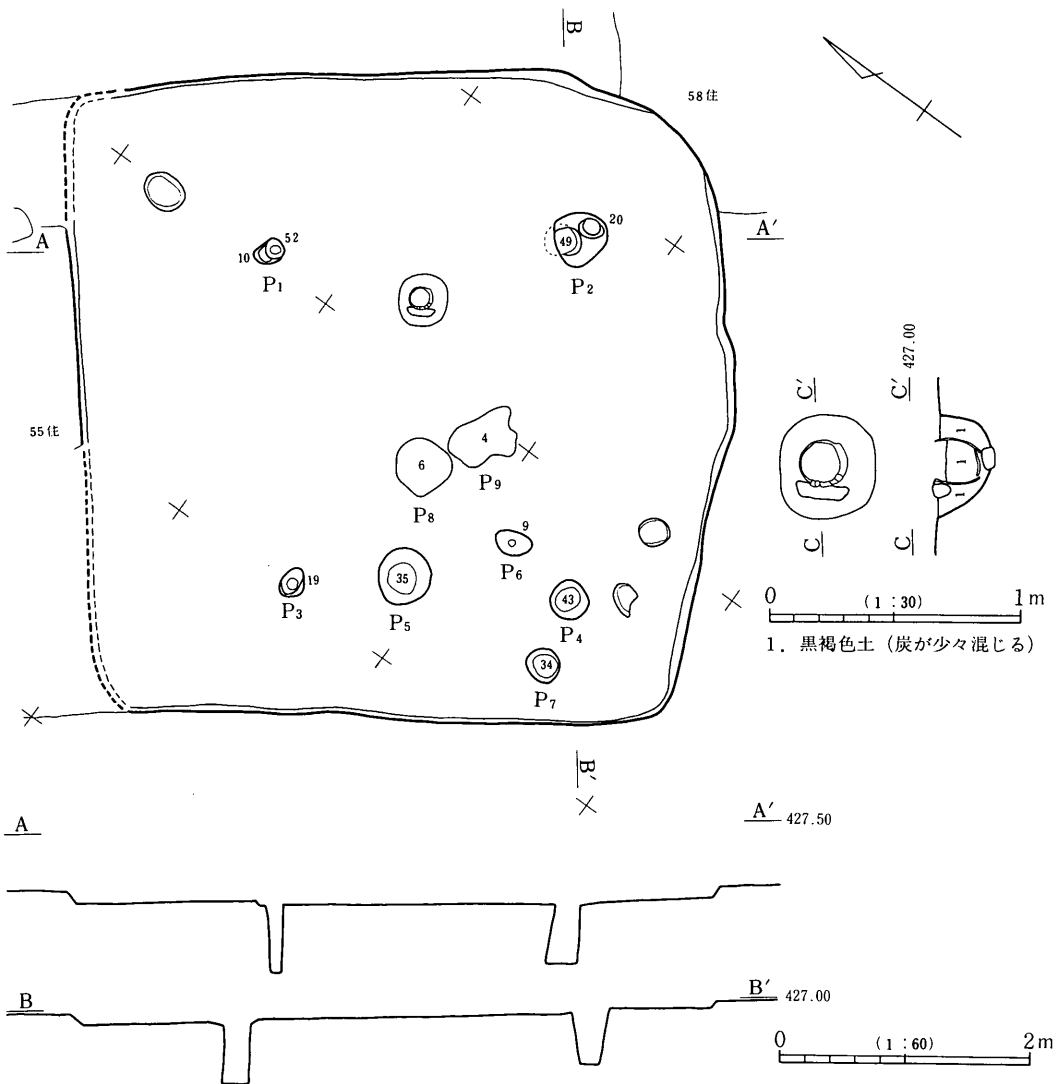


挿図38 48号住居址

㊦ 49号住居址 (挿図39)

XV18p を中心として検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の55・58号住居址を切る。5.1×5.2mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN53°Eを示す。壁高は最大17cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴はP1~P4で、P1の北、P4の東にそれぞれ台石がある。炉址は北東側主柱穴中間よりやや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を41×38cmの円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋設し、土器片を底に敷いてある。遺物は多くが覆土から出土しているが、主要なものは床面直上から出土している。

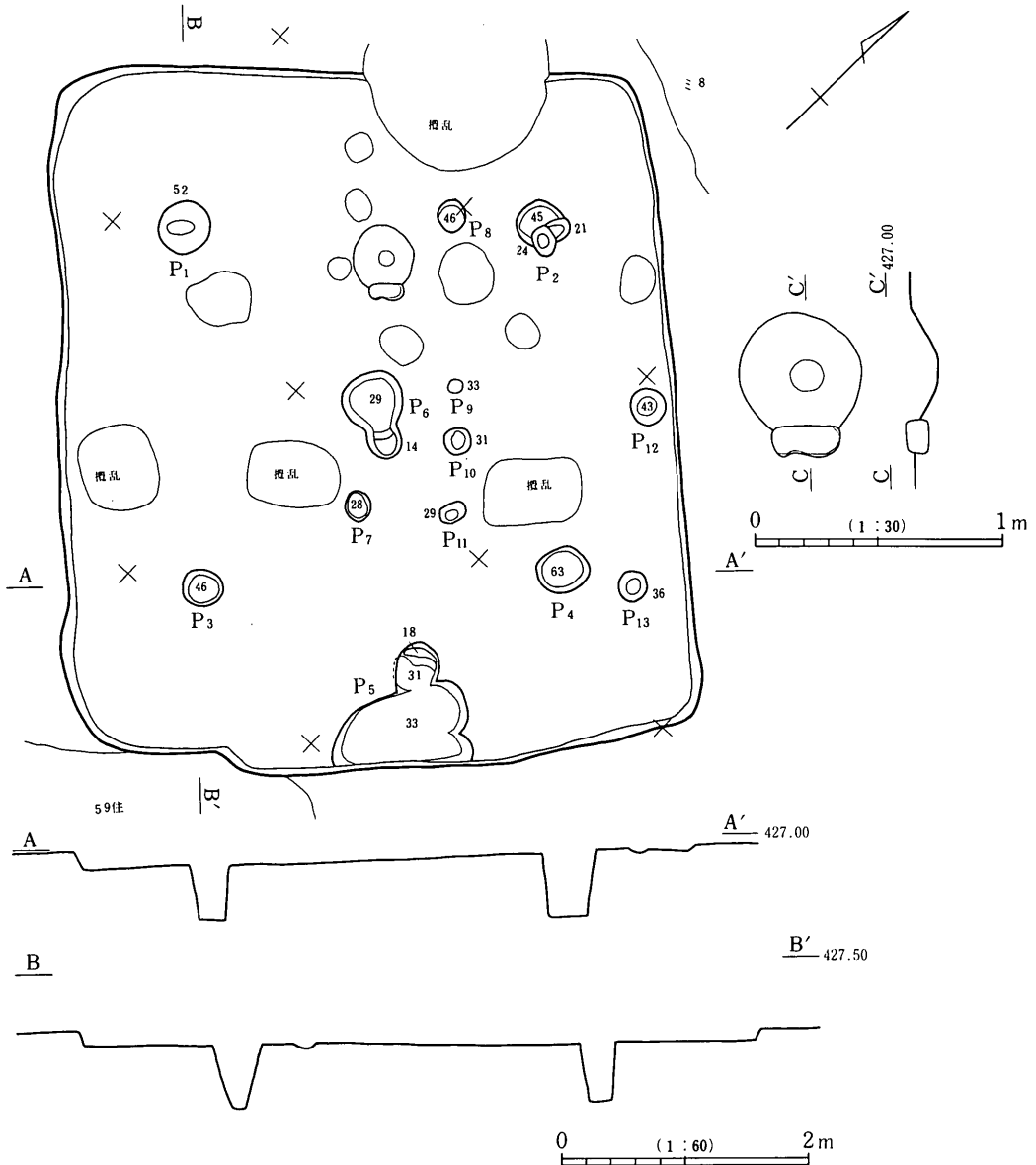
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図39 49号住居址

④ 50号住居址 (挿図40)

XV20s を中心として検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の59号住居址を切り、弥生時代後期の52号住居址に切られる。5.5×5m の隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向は N44°W を示す。壁高は16~4cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1~P4 で、P5 は入口施設、P6・P7 は間仕切りピットと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を57×50cm の楕円形に掘り凹め、炉縁石を配

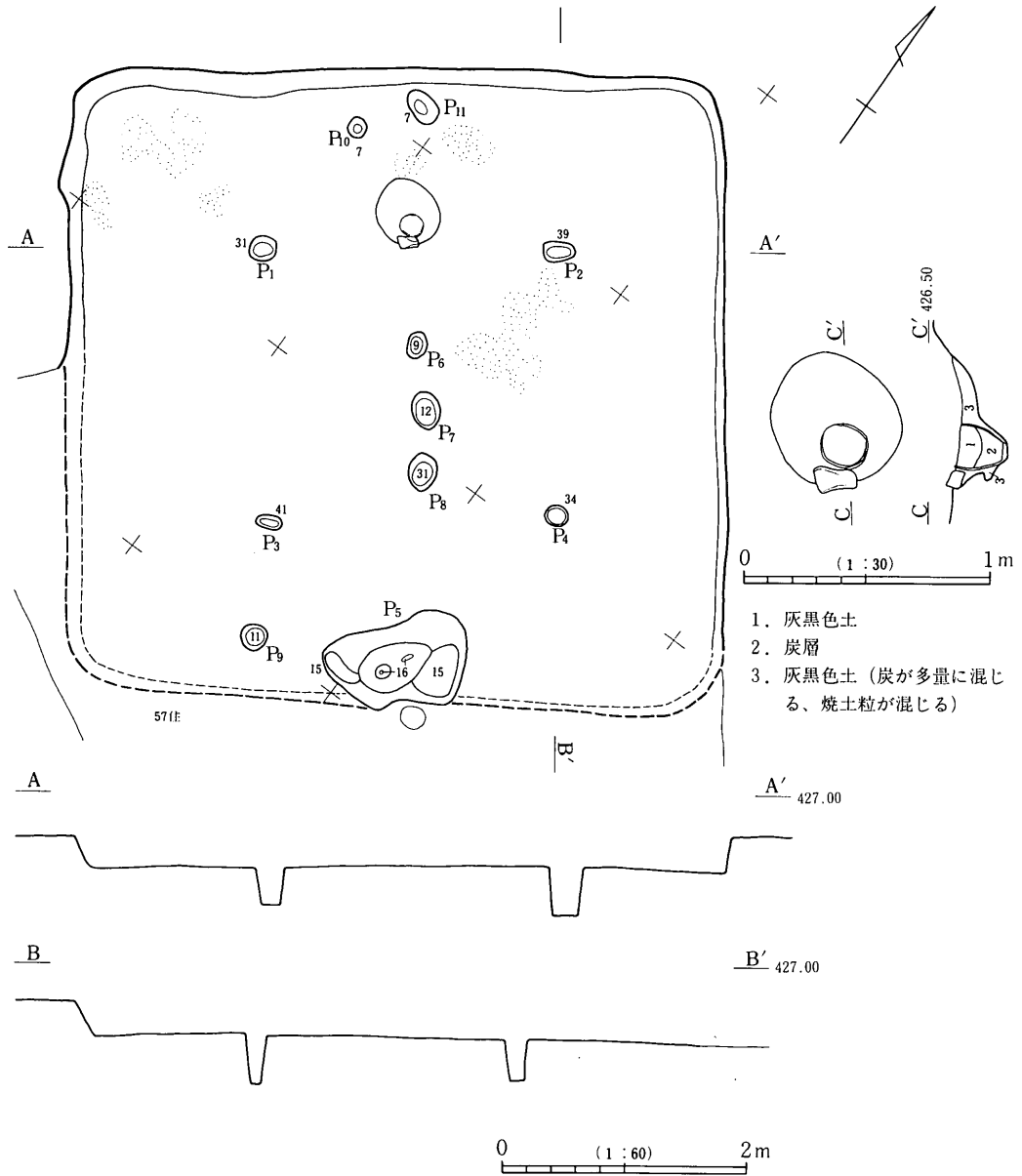


挿図40 50号住居址

置している。

遺物は多くが覆土から出土している。

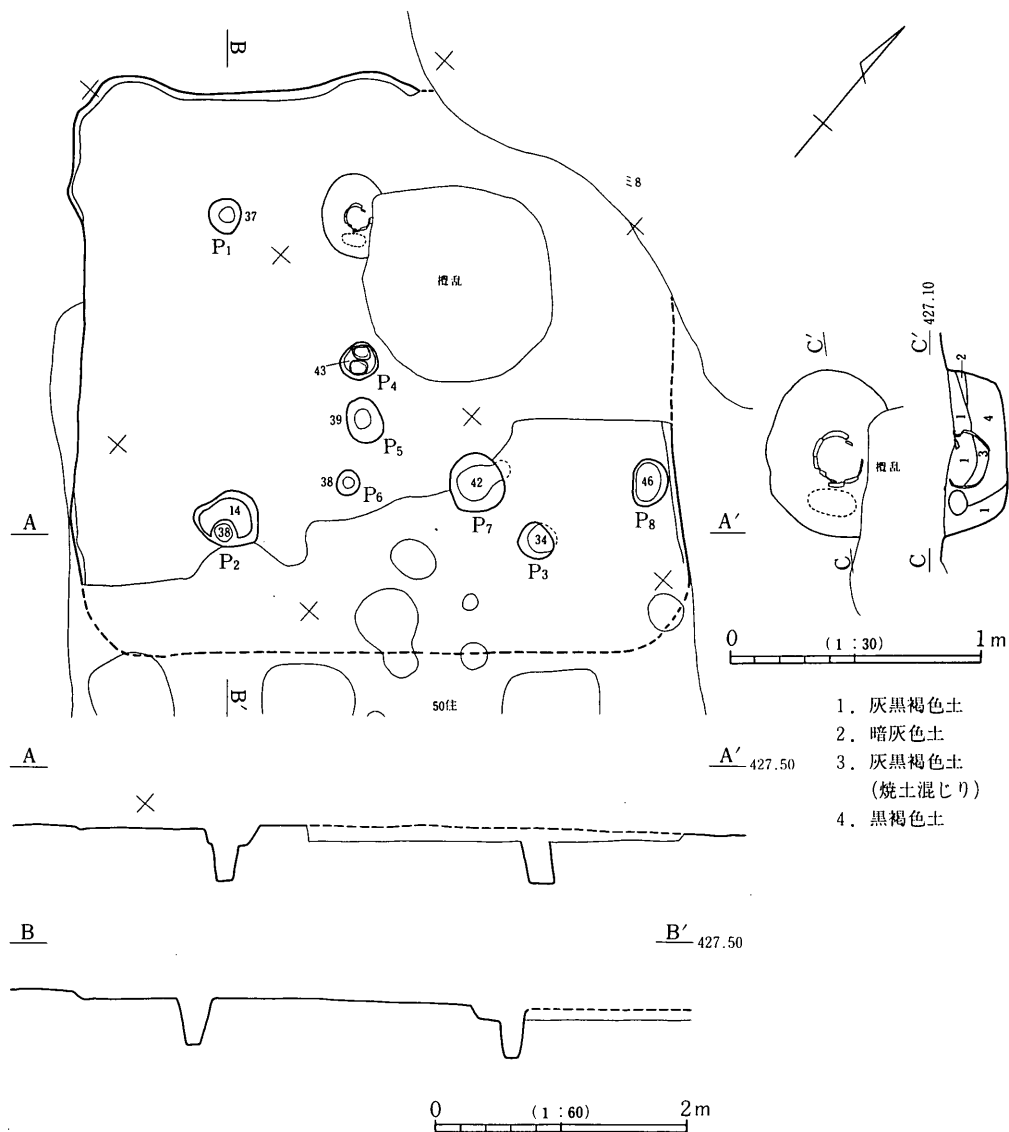
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図41 51号住居址

④ 51号住居址 (挿図41)

XV21k を中心として検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の57号住居址を切る。5.1×5.3m と推定される隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N36°W を示す。壁高は最大33cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は壁際を除きたたき状の貼床で良好である。主柱穴は P1~P4 で、P5 は入口施設、P6~P8 は間仕切りピットと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間よりやや外側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を55×52cm の円形に掘り凹め、口縁部及び底部を欠く甕を埋設する。一部二重になる。埋設土器覆土下層に炭が多量に残存している



挿図42 52号住居址

た。北西側床面に焼土を確認したが、住居廃絶後に廃棄されたものと判断した。

遺物は覆土～床面と広い範囲から多く出土している。前述の焼土と同範囲から出土している遺物が多いので所謂吹上パターンと推定できる。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

④ 52号住居址 (挿図42)

XV19s を中心として検出し、1/3程を調査した。弥生時代後期の50号住居址を切り、弥生時代後期以降の溝址8に切られる。4.6×4.8mと推定される隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN40°Wを示す。壁高は最大8cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は南西側を除き、たたき状で良好である。南西側は掘り過ぎてしまった。主柱穴はP1～P3で、P4～P6は間仕切りピットと考えられる。炉址は主柱穴P1の北東側に位置し、東側を攪乱によって破壊されているが、炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を65cm程の円形に掘り凹め、胴部以下を欠く甕を埋設する。埋設土器覆土下層に焼土が残存していた。

遺物は多くが覆土から出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

④ 53号住居址 (挿図43・44)

XV14t を中心として検出し、約半分を調査した。弥生時代後期の56号住居址を切る。主軸方向が5.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN53°Eを示す。壁高は26～4cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は合計5枚あるので、以下、床面ごとに記述する。

一番新しい床面(1枚目床面)は、破線範囲内がたたき状で良好である。主柱穴はP1・P2で、P3が入口施設、P4～P6は間仕切りピットと考えられる。炉址は主柱穴P1の北西に位置する土器埋設炉で、南西側が攪乱によって破壊されている。胴部以下の底部を欠く壺を埋設する。各床面でほとんど同じ場所で使用されていたと思われる。

2枚目床面は1枚目より6～2cm下にあり、主軸方向に4.7mを測り、たたき状で良好な床面である。主柱穴はP9で、他は1枚目と同じである。北東側壁際に幅12～10cm、深さ4cmの周溝が認められた。

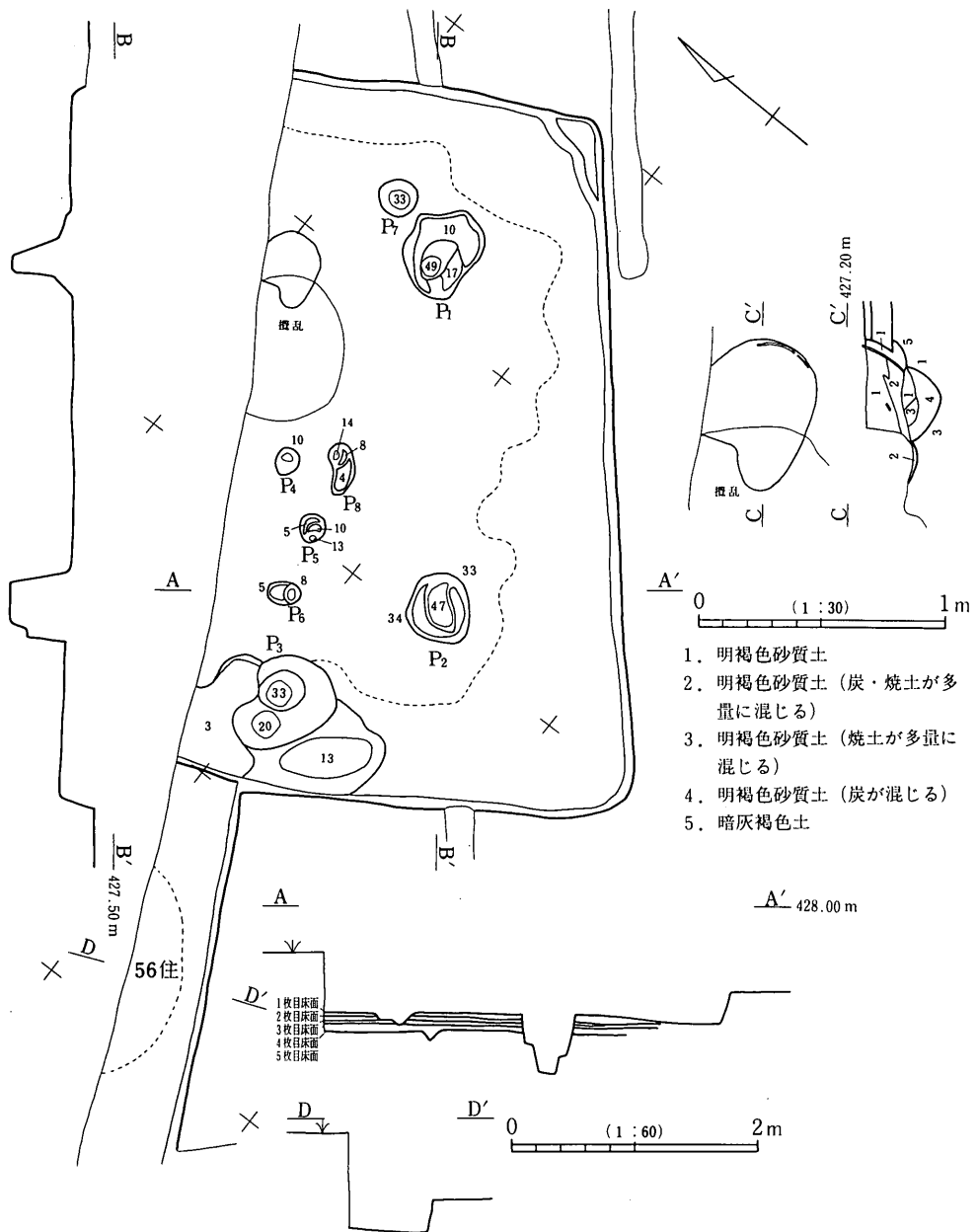
3枚目床面は2枚目より4～0cm下にあり、主軸方向に4.7mを測り、東側床面を除きたたき状で良好な床面である。主柱穴は1～2枚目と同じである。

4枚目床面は3枚目より4～3cm下にあり、主軸方向に4.7mを測り、南東側を除きたたき状で良好な床面である。主柱穴はP26の可能性があり、他は1～3枚目と同じである。P25は間仕切りピットと考えられる。

最も古い床面(5枚目床面)は4枚目より7～2cm、1枚目の床面より16～14cm下にある。主軸方向に4.4mを測り、南東側を除きたたき状で良好な床面である。また5枚の床面の中では

最も良好なものである。支柱穴は P32 の可能性があり、他は 1～4 枚目と同じである。P37 は入口施設、P35・P36 は間仕切りピットと考えられる。

各床面の規模を見ると、最も古い床面が最も狭いので、増築と考えられるが、他の床面はほぼ規模が同じであるため、一概に断定できない。



挿図43 53・56号住居址

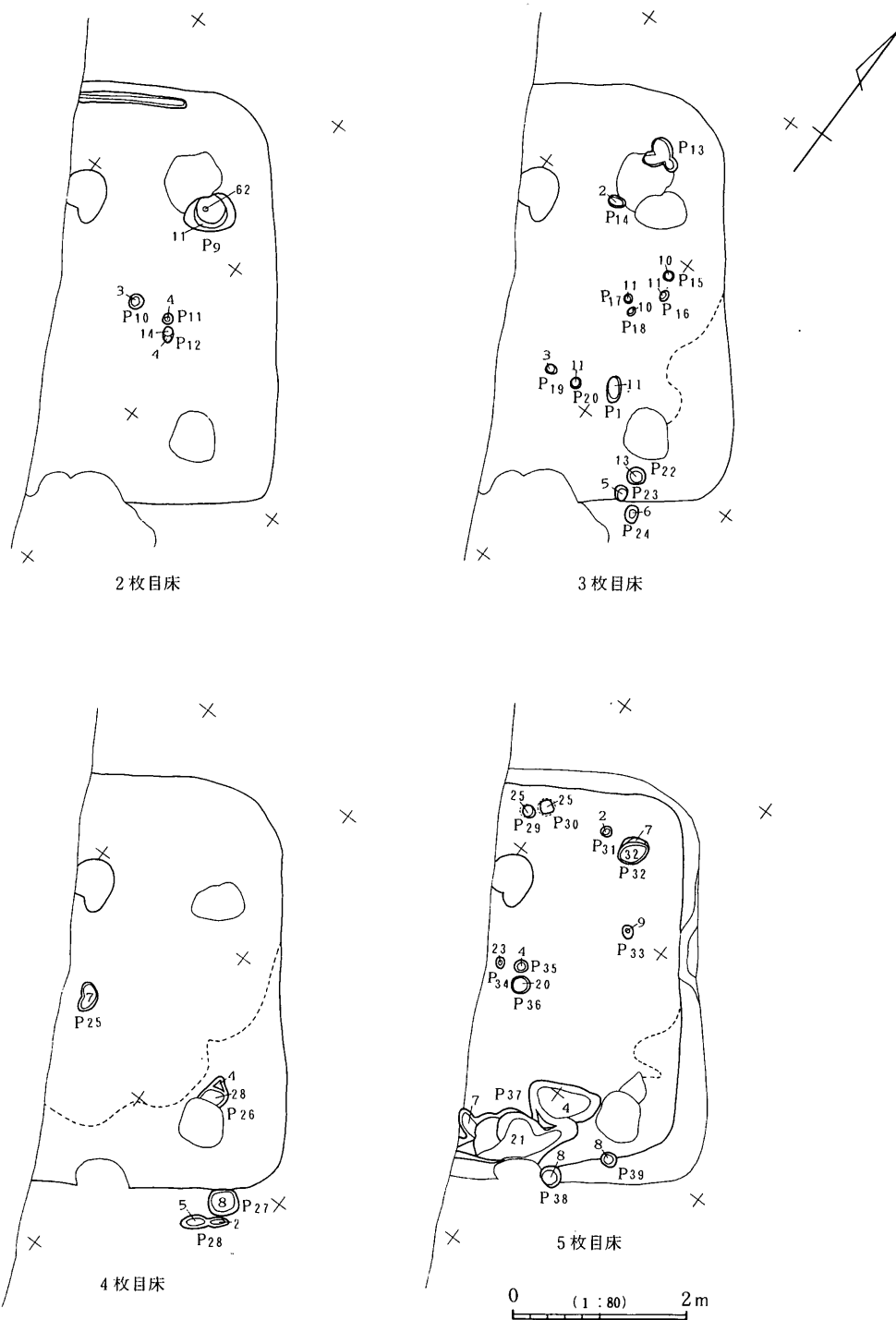


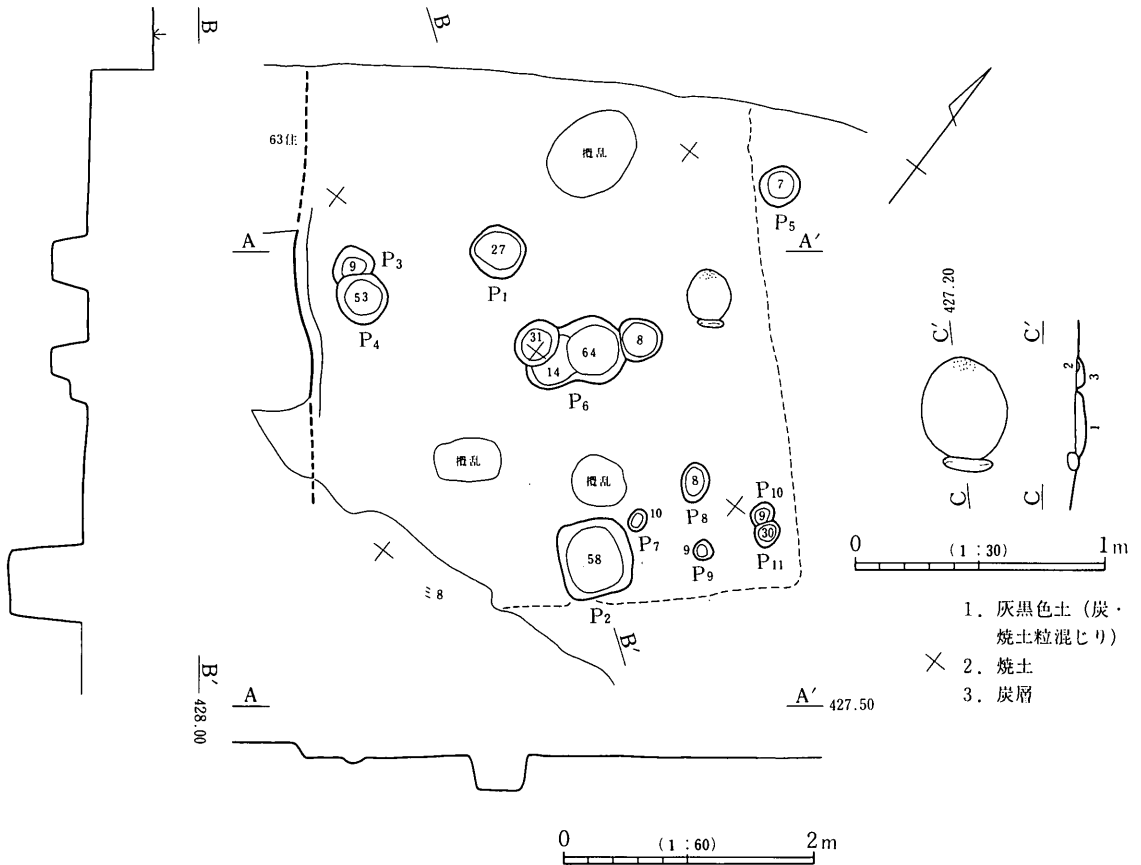
插图44 53号住居址

遺物は多くが覆土から出土しているが、各床面の間層からも出土している。
 出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

④ 54号住居址 (挿図45)

XV20W を中心として検出し、半分程調査した。弥生時代後期以降の溝址 8 に切られる。63号住居址と切り合い関係があるが、新旧は不明である。規模・プランとも不明であるが、主軸方向は N38°W を示すと考えられる。壁高は最大 6cm を測り、緩やかな壁面をなす。床面は破線範囲内はたたき状で良好である。範囲外は不良であるため規模等が不明である。支柱穴は P1・P2、P10・P11 は間仕切りピットと考えられる。炉址は支柱穴 P 1 の北東側に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を 45×34cm の楕円形に掘り凹め、南東側に炉縁石を設置する。覆土には多量に炭が残存していた。

遺物は多くが覆土から出土している。
 出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図45 54号住居址

④⑤ 55号住居址 (挿図46)

XV17rを中心として検出し、半分程調査した。弥生時代後期の48号住居址に切られる。短軸が4.8mを測る隅丸方形と推定される竪穴住居址である。主軸方向は不明である。壁高は最大17cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面はしまりがあるが、たたき状ではなくはっきりしない。支柱穴・炉址等も検出できなかった。

遺物は多くが覆土から出土している。

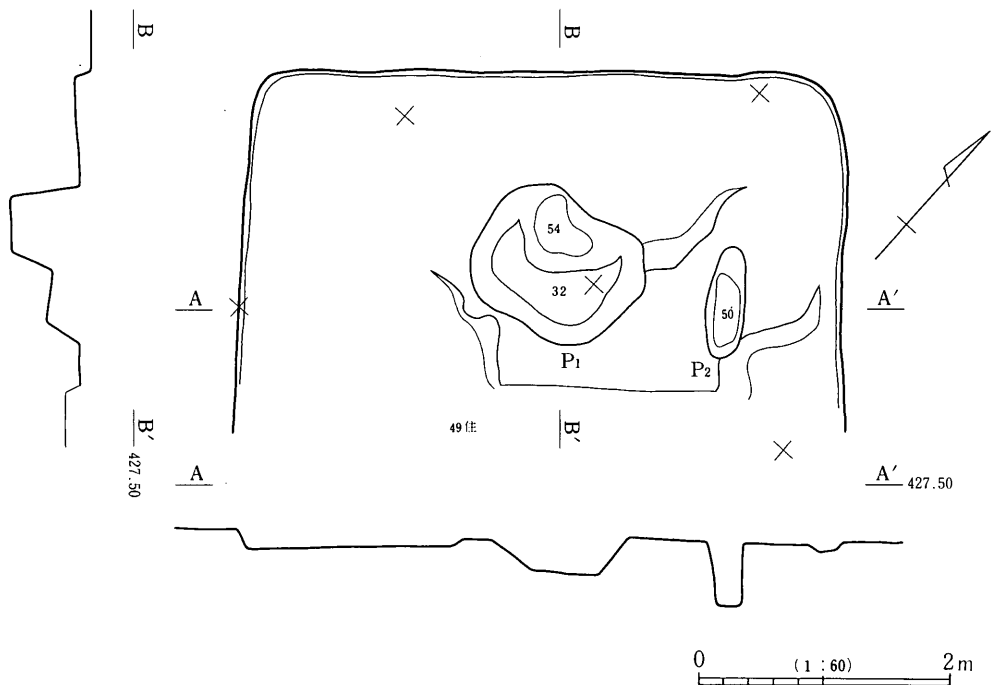
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

④⑥ 56号住居址 (挿図43)

XV17rを中心として検出し、半分程調査した。弥生時代後期の53号住居址に切られる。規模等は不明である。壁高は最大27cmを測り、ほぼ垂直な壁面をなす。床面は点線範囲内がたたき状で良好である。

遺物は少ないが、覆土から出土している。

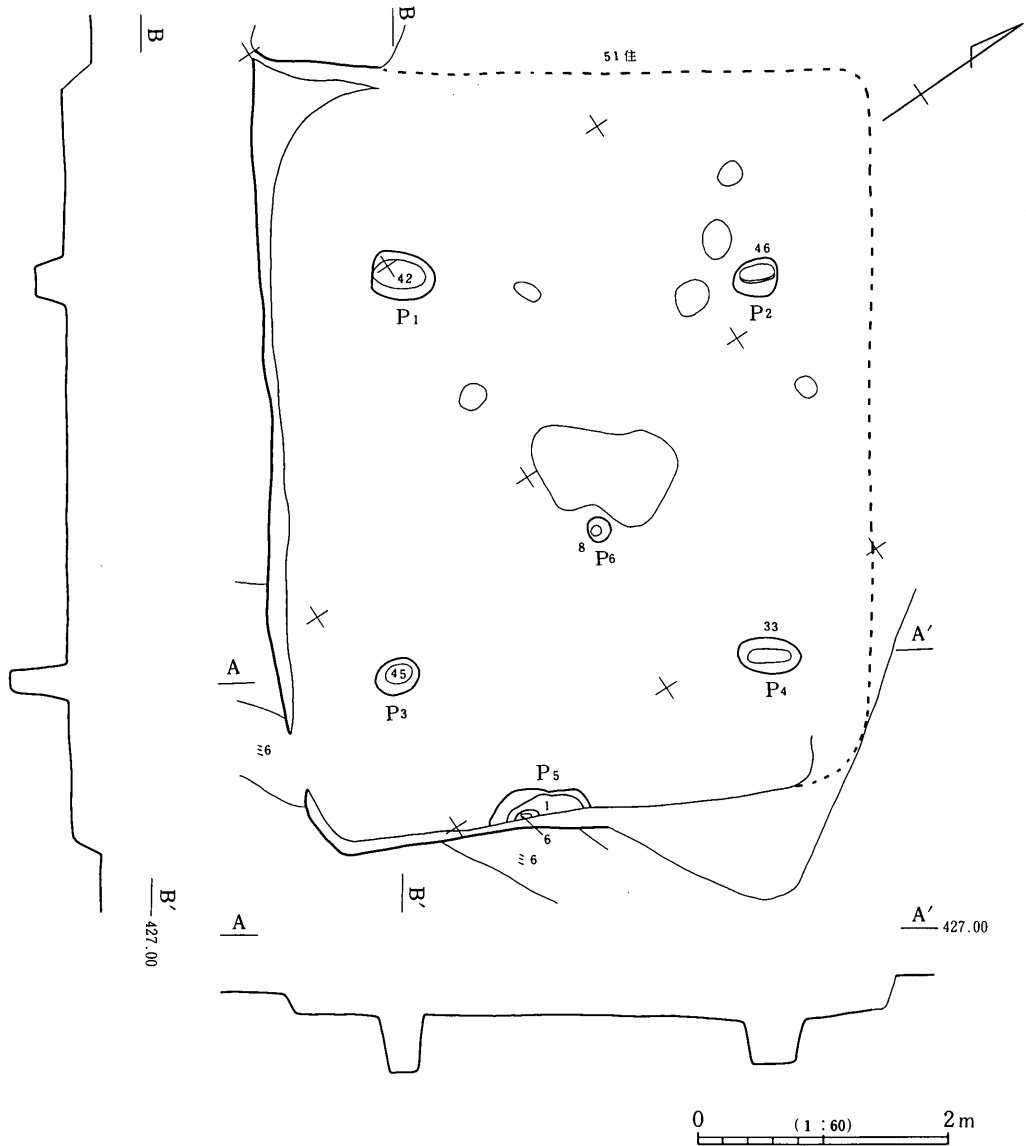
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図46 55号住居址

④7 57号住居址 (挿図47)

XV21j を中心として検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の51号住居址・弥生時代後期以降の溝址6に切られる。プラン確認時、51号住居址として調査していたが調査途中で57号住居址と判断した。5.9×4.8mと推定される隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN57°Wを示す。壁高は最大17cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は部分的にたたき状になっているが、



挿図47 57号住居址

全体的にゆるく不良である。南東壁は掘り過ぎてしまった。主柱穴は P1～P4 で、P5 は入口施設、P6 は間仕切りピットと考えられる。炉址は確認できなかった。

遺物は前述したように覆土出土遺物は51号住居址としたため、詳細は不明であるが覆土からの出土が多い。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

④⑧ 58号住居址 (挿図48)

XV22p を中心として検出し、ほぼ全面を調査した。弥生時代後期の59号住居址を切る。たたき状の床面を検出したため、住居址と判断した。4×4m、隅丸方形の竪穴住居址と推定され、主軸方向は N45°W と考えられる。壁高は最大で5cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は破線範囲内がたたき状で良好である。主柱穴は P1～P3 で、P4 は高さ 5～2cm の土手状縁部を伴う入口施設、P5 は間仕切りピットと考えられる。炉址は確認できなかった。

遺物は非常に少ないが、覆土から出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

④⑨ 59号住居址 (挿図48)

XV21p を中心として検出し、ほぼ全面を調査した。弥生時代後期の49・58号住居址に切られる。たたき状の床面を検出したため、住居址と判断した。6×6.6m、隅丸方形の竪穴住居址と推定され、主軸方向は N42°W と考えられる。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1・P2 で、P3 は間仕切りピットと考えられる。炉址は 2 基あり、旧炉と考えられるものは北西側主柱穴の中間に位置する土器埋設炉で、北西側の礫は炉址とは直接関係ないと思われる。床面を32×30cmに掘り凹め、口縁部と胴部以下を欠く甕を埋設する。掘り方と埋設土器の間に多量に焼土が残存していた。新炉は北西側主柱穴の中間より外側に位置する土器埋設炉で、胴部以上の甕を逆に埋設する。掘り方と埋設土器の間に多量に焼土が残存していた。

遺物は覆土から多く出土している。

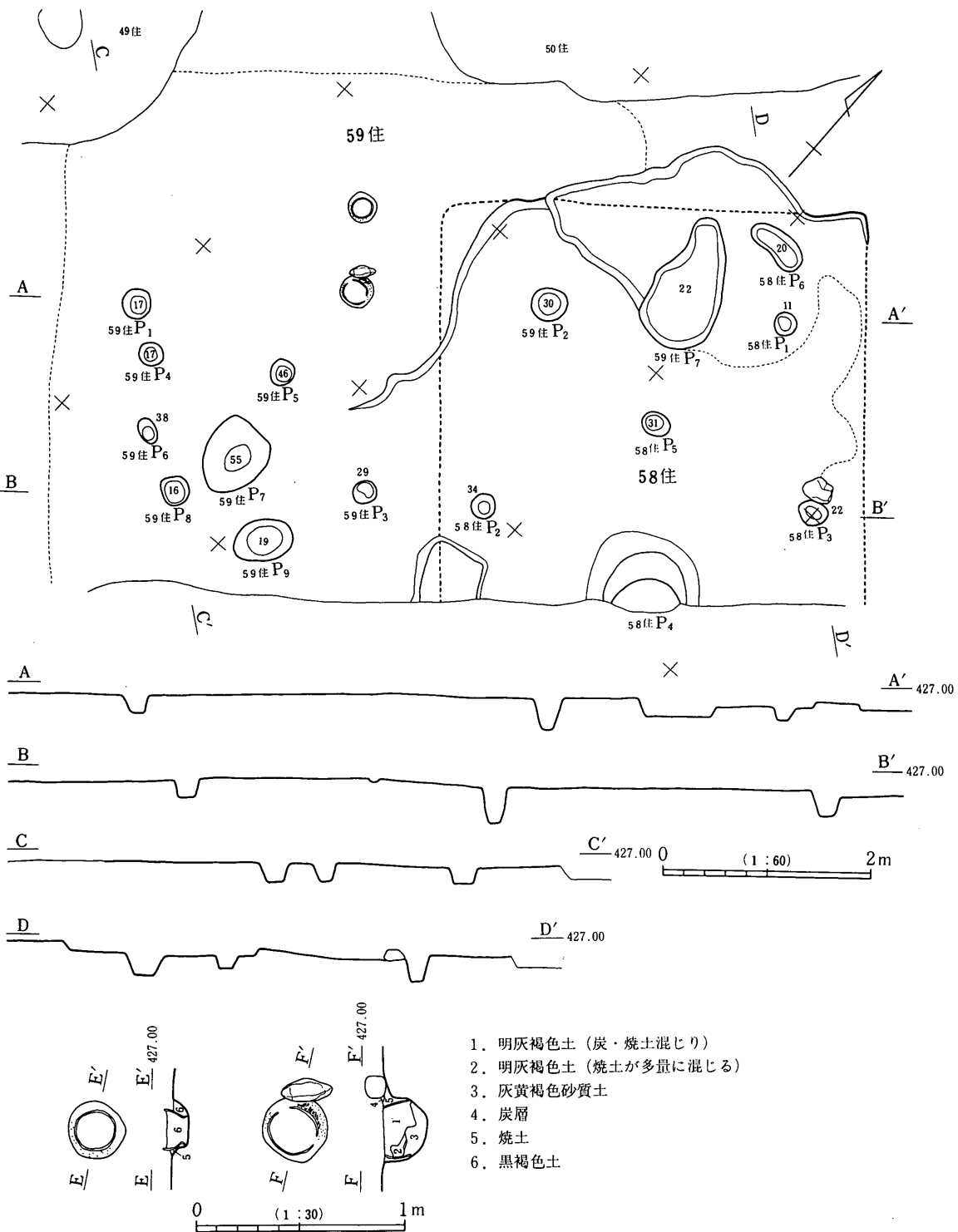
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

④⑩ 60号住居址 (挿図49)

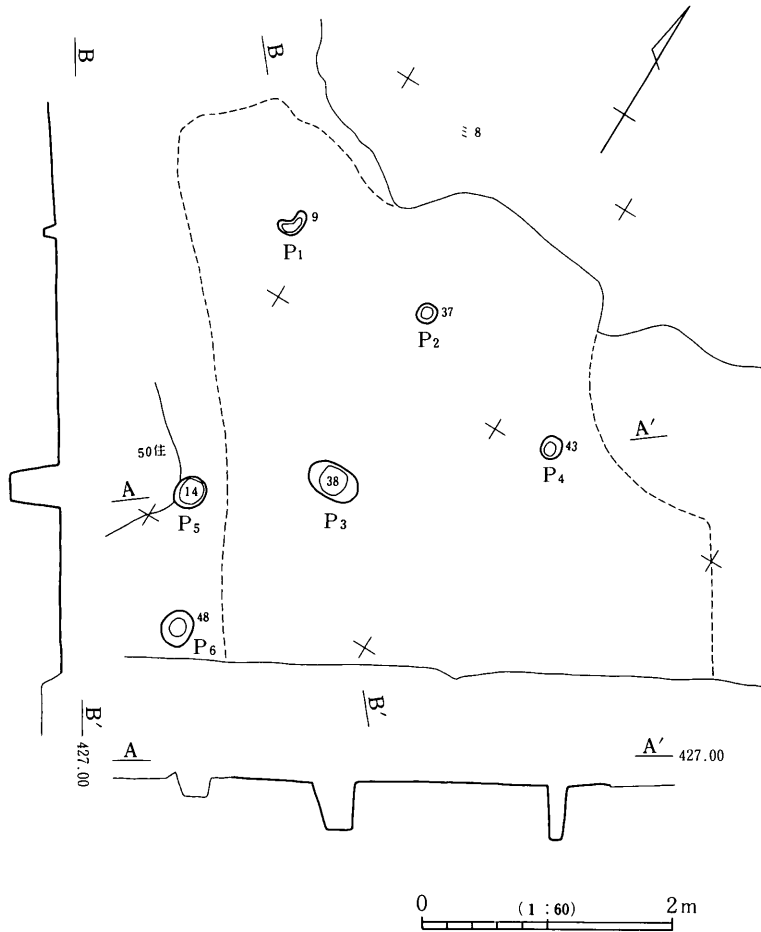
XV22s を中心として検出し、2/3程度を調査した。弥生時代後期以降の溝址 8 に切られる。たたき状の床面を検出したため、住居址と判断した。規模・主軸等が不明の竪穴住居址である。床面はたたき状で良好である。主柱穴は不明であるが、P3 が唯一可能性がある。炉址は検出できなかった。

遺物は覆土から多く出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図48 58・59号住居址



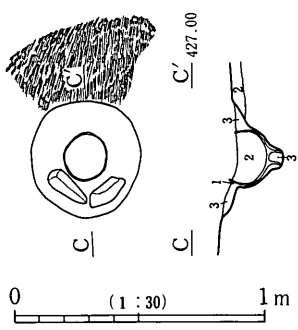
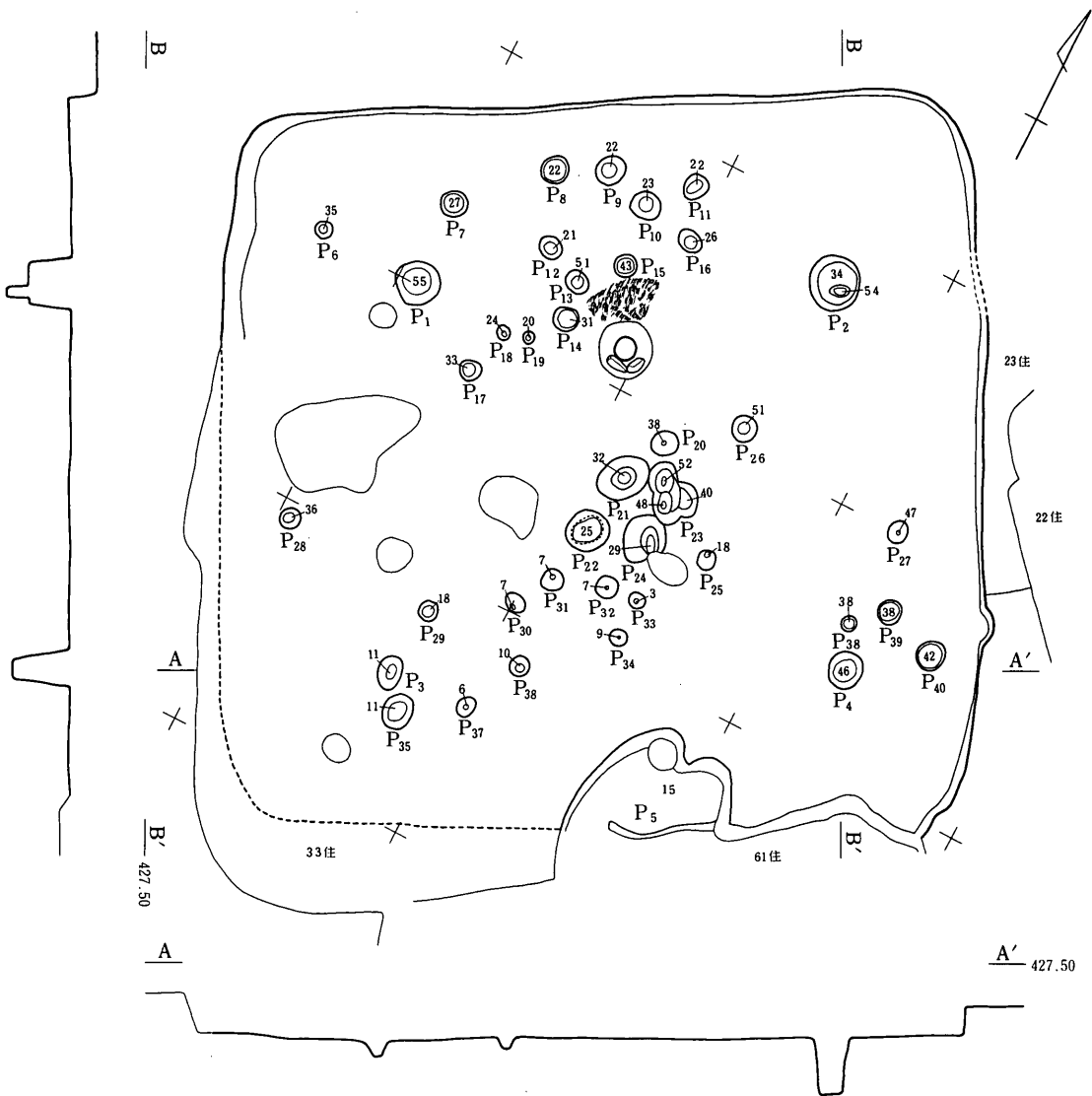
挿図49 60号住居址

⑤1 62号住居址 (挿図50)

XV10o を中心として検出し、ほぼ全面を調査した。弥生時代後期の33号住居址を切り、同期20号住居址に切られる。6×6.2m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N27°W を示す。壁高は最大35cm を測り、ほぼ垂直な壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴は P1~P4 で、P5 は入口施設と考えられる。また、他のピットは20・33号住居址の可能性があるもので、断定できたもの以外は図化してある。炉址は北西側支柱穴の中間のやや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を46×44cm に掘り凹め、口縁部と脚部の一部を欠く台付甕を埋設する。炉址北西側、埋設土器覆土には炭が残存していた。

遺物は出土量が多く、覆土から床面まで幅広く出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



1. 焼土
2. 炭層
3. 灰黒褐色土 (炭が多量に混じる)

挿図50 62号住居址

⑤② 63号住居址 (挿図51)

XV17v を中心として検出し、北西側が未調査のため、1/4 程度を調査した。弥生時代後期以降の溝址 8 に切られる。弥生時代後期 54 号住居址と切り合い関係があるが、新旧は不明である。規模・プランとも不明な竪穴住居址である。壁高は 14~11cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1 であると思われる。他のピットは検出されていない。また、炉址も確認できなかった。

遺物は出土量が少なく、覆土から出土している。

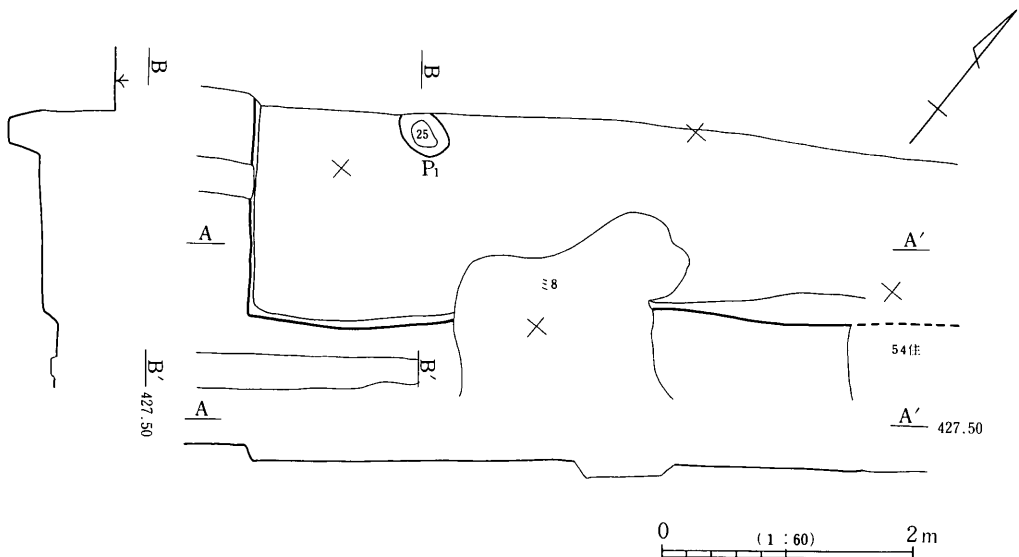
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

⑤③ 64号住居址 (挿図52)

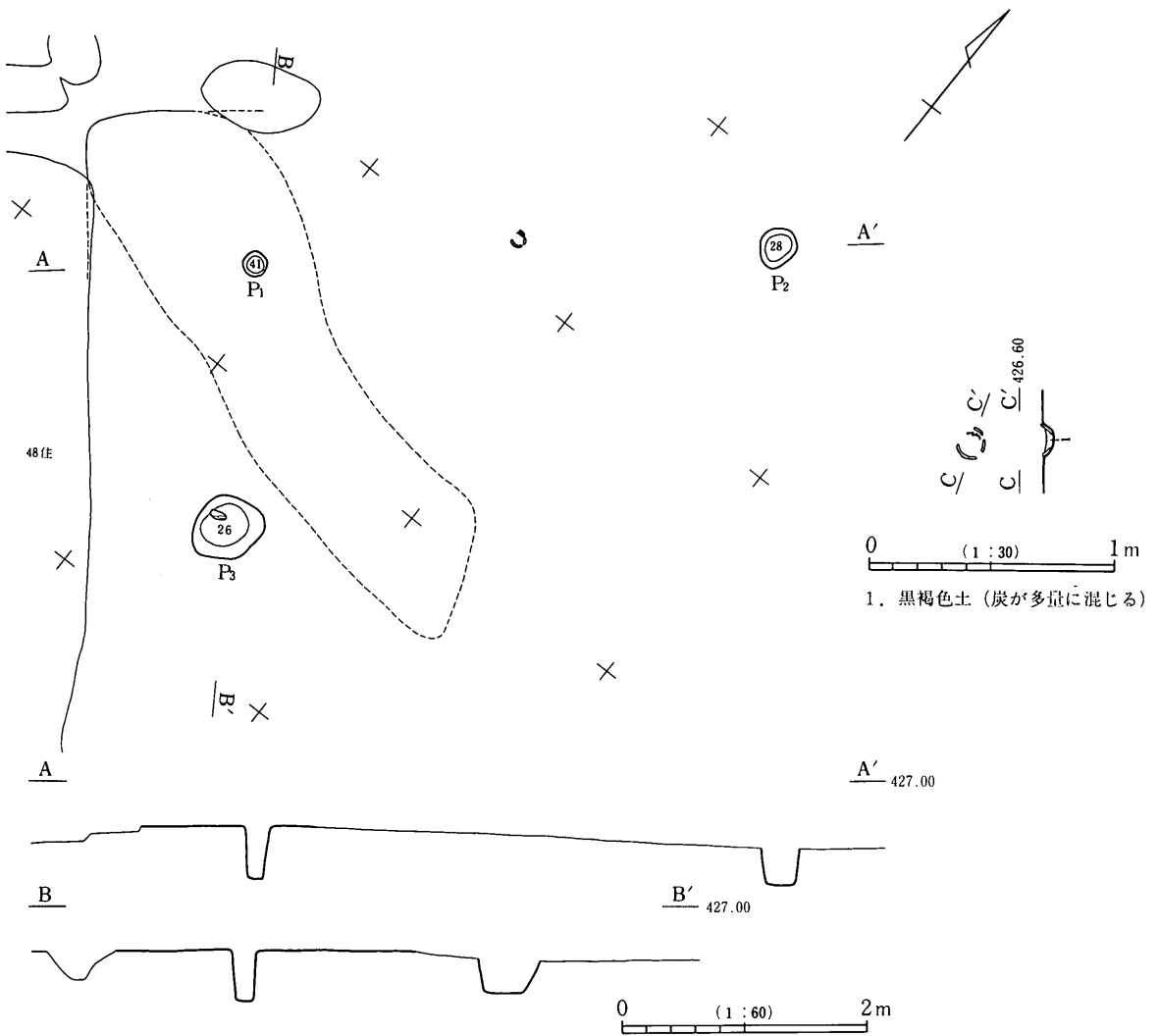
XV1q を中心として検出したが、上層が削平されてしまっており、一部の床面と一部のピット・炉址下層のみを調査した。4.8×6.8m と推定される竪穴住居址で、主軸は N38°W を示す。床面は残存部がたたき状で良好である。主柱穴は P1~P3 であると思われる。他のピットは検出されていない。炉址は北西側主柱穴の中間に位置する土器埋設炉で、下層のみ確認した。底部を欠く甕が埋設されていたようである。埋設土器覆土には炭が多量に残存していた。

遺物は住居址範囲と考えられる部分のものであるが、比較的多く出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図51 63号住居址



挿図52 64号住居址

⑤4 65号住居址 (挿図53)

XIV6j を中心として検出し、ほぼ全面を調査した。弥生時代後期の141号住居址を切り、同期67号住居址に切られる。5.5×4.9m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N54°W を示す。壁高は最大53cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1~P4 で、P5 は溝状の入口施設と考えられる。炉址は北西側主柱穴の中間に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を54×47cm に掘り凹め南東側に2個の炉縁石を配置する。掘り方底部に深さ11~8cm のピットを確認した。覆土には焼土と、多量の炭が残存していた。

遺物は多くが覆土から出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

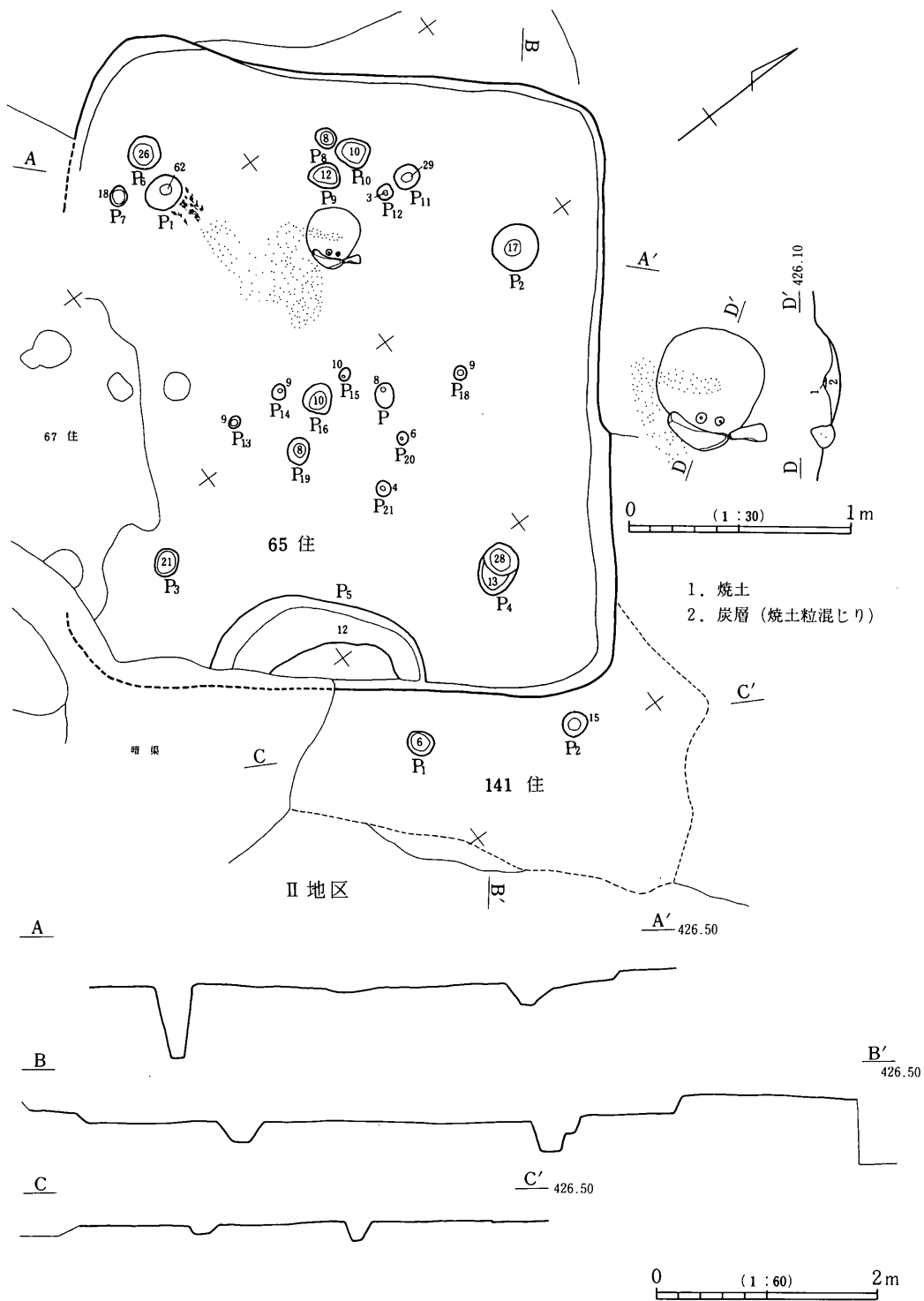


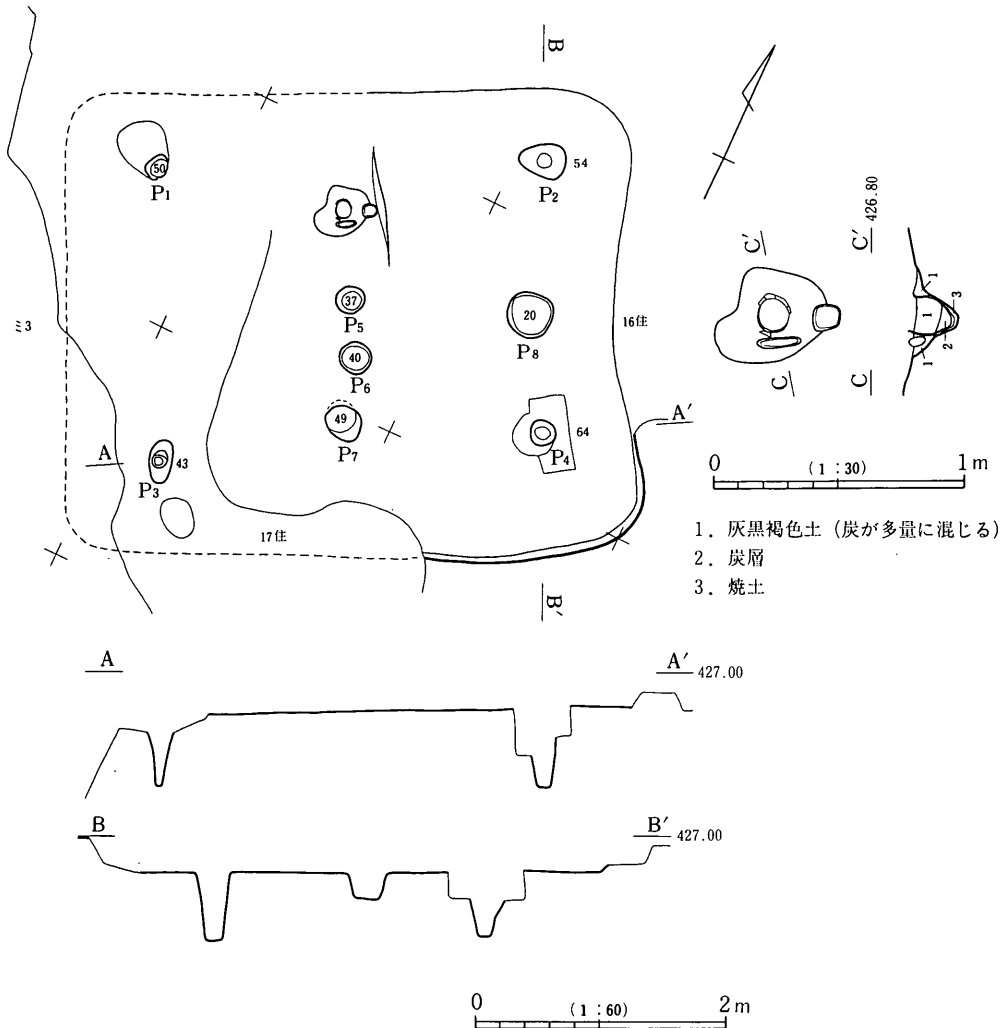
插图53 65・141号住居址

㊦ 66号住居址 (挿図54)

XV4gを中心として検出し、16・17号住居址調査時に確認し、ほぼ全面を調査した。弥生時代後期の16・17号住居址を切り、古墳時代前期の溝址3に切られる。3.8×4.5mと推定される隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN25°Wを示す。壁高は最大7cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴はP1～P4で、P5～P7は間仕切りピットと考えられる。炉址は北西側主柱穴の中間よりやや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を47×38cmの不定形に掘り凹め、ほぼ完形の甕を埋設する。埋設土器覆土下層には多量の炭が残存していた。

遺物は覆土のものは16・17号住居址出土としてしまったが、床面から出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



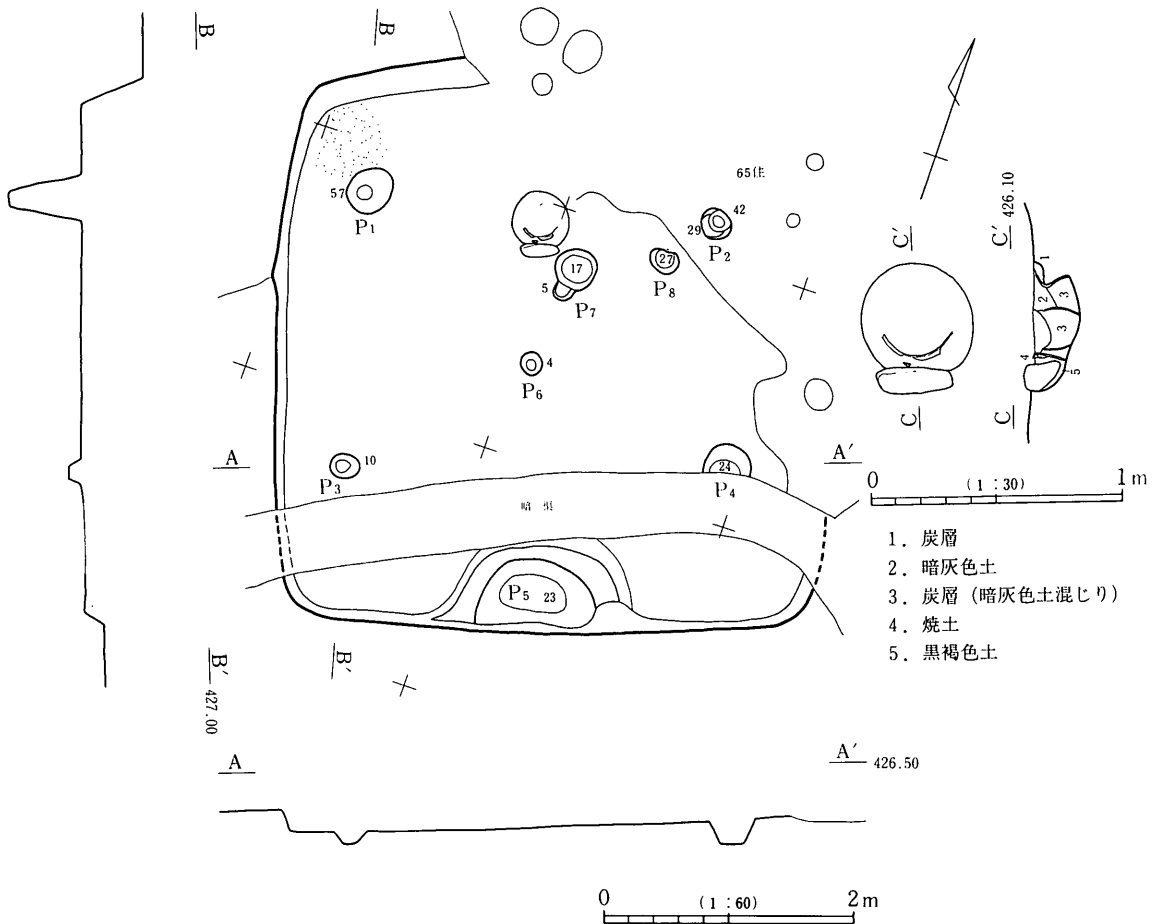
挿図54 66号住居址

⑤⑥ 67号住居址 (挿図55)

XIV5i を中心として検出し、3/4程度を調査した。弥生時代後期の65号住居址を切り。現代の暗渠排水に切られる。4.5×4.3mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN20°Wを示す。壁高は55~11cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。65号住居址と切り合う東側床面は、不良で掘り過ぎてしまった。支柱穴はP1~P4で、P5は比高2~1cmの土手状縁部を伴う入口施設、P6は間仕切りピットと考えられる。炉址は北西側支柱穴の中間に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、床面を52×44cmの不定形に掘り凹め、外側に胴部以下を欠く大型の甕を埋設し、内側に頸部以上と底部を欠く甕を埋設する。二重土器埋設土器の外側埋設土器に甕を使用するものは本址のみである。埋設土器覆土には多量の炭が残存していた。

遺物は多くが覆土から出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



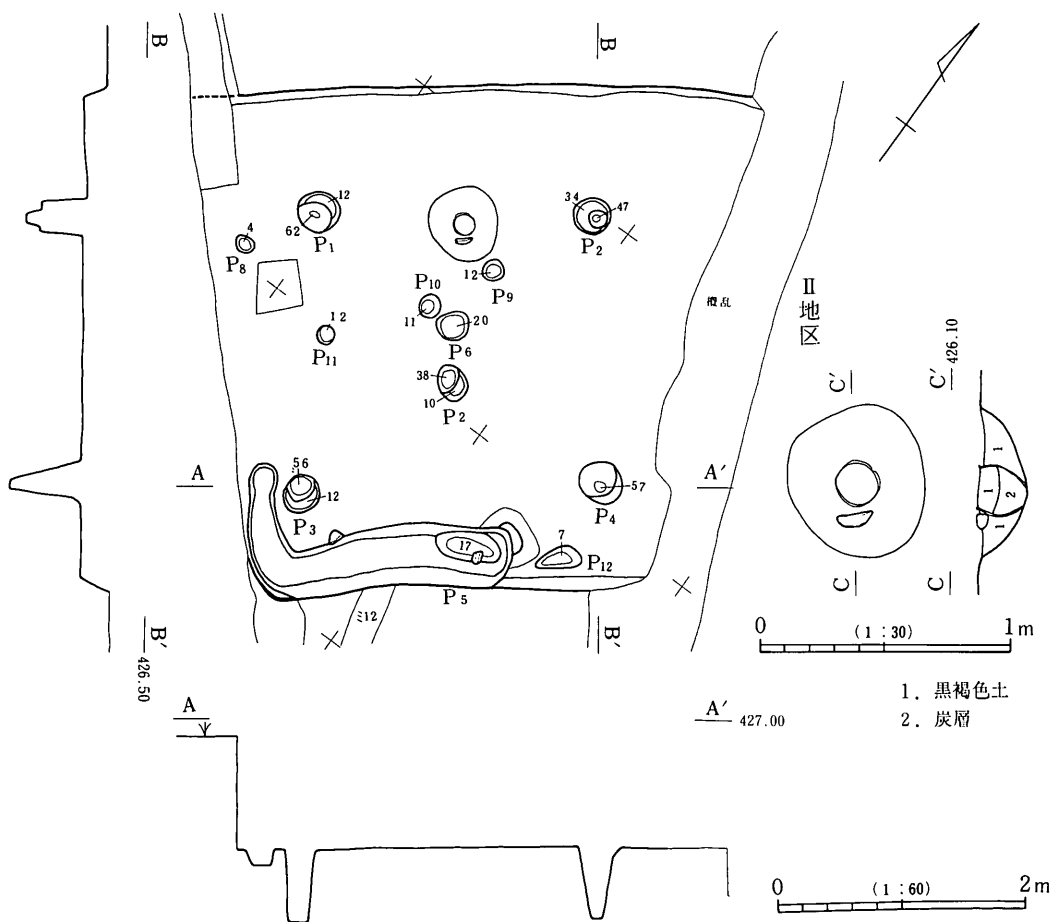
挿図55 67号住居址

⑤7 68号住居址 (挿図56)

XIV6f を中心として検出し、3 / 4 程度を調査した。主軸方向に4mを測る隅丸の竪穴住居址で、主軸方向はN36°Wを示す。壁高は最大24cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。支柱穴はP1~P4で、P5は入口施設、P6・P7は間仕切りピットと考えられる。南東壁際に幅50~34cm、深さ12~10cmの周溝状溝を確認した。炉址は北西側支柱穴の中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を59×54cmの不定形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋設する。埋設土器覆土下層には多量の炭が残存していた。

遺物は多くが覆土から出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図56 68号住居址

⑤⑧ 69号住居址 (挿図57)

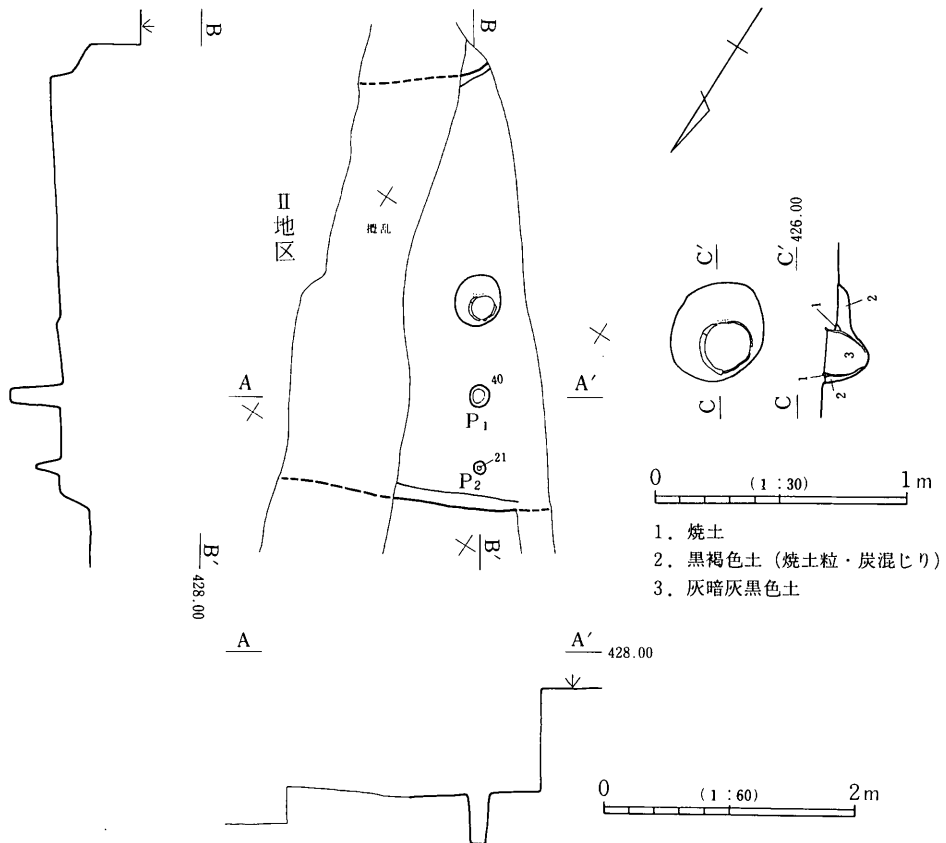
XIV8c を中心として検出した。東側は未調査で、西側はII地区で1/3程度を調査した。南北方向に3.5mを測る竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は25~18cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。P1が主柱穴の可能性ある。炉址はP1の北東側に位置する土器埋設炉で、床面を41×36cmの楕円形に掘り凹め、底部穿孔の甕を埋設する。埋設土器周囲に焼土が残存していた。

遺物は多くないが覆土から出土している。

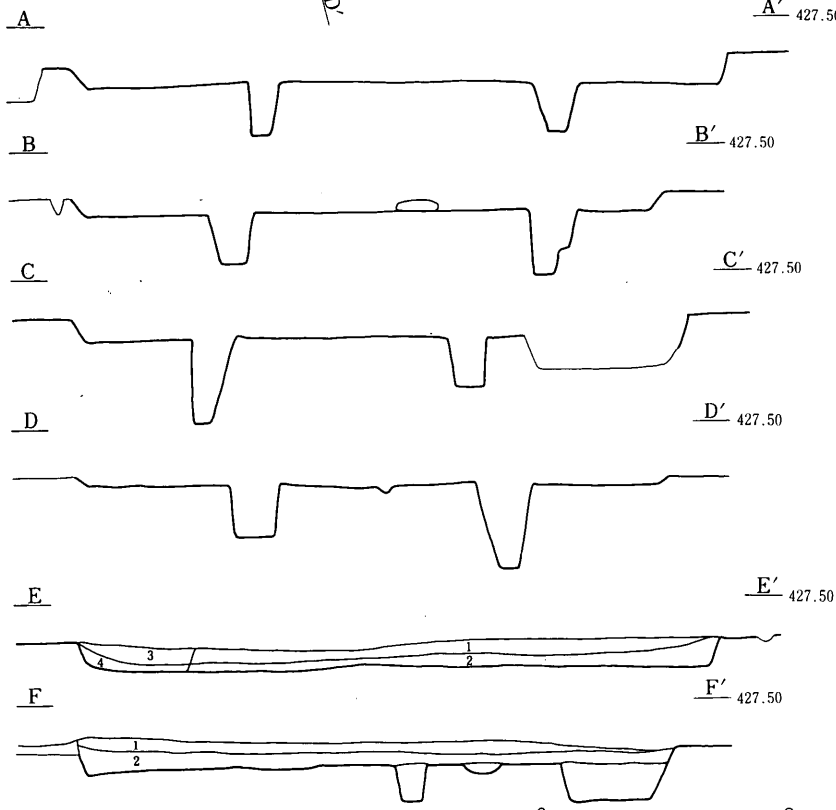
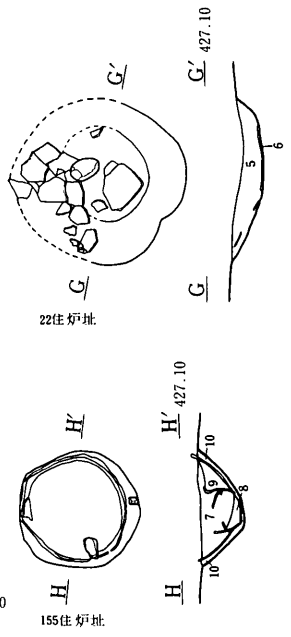
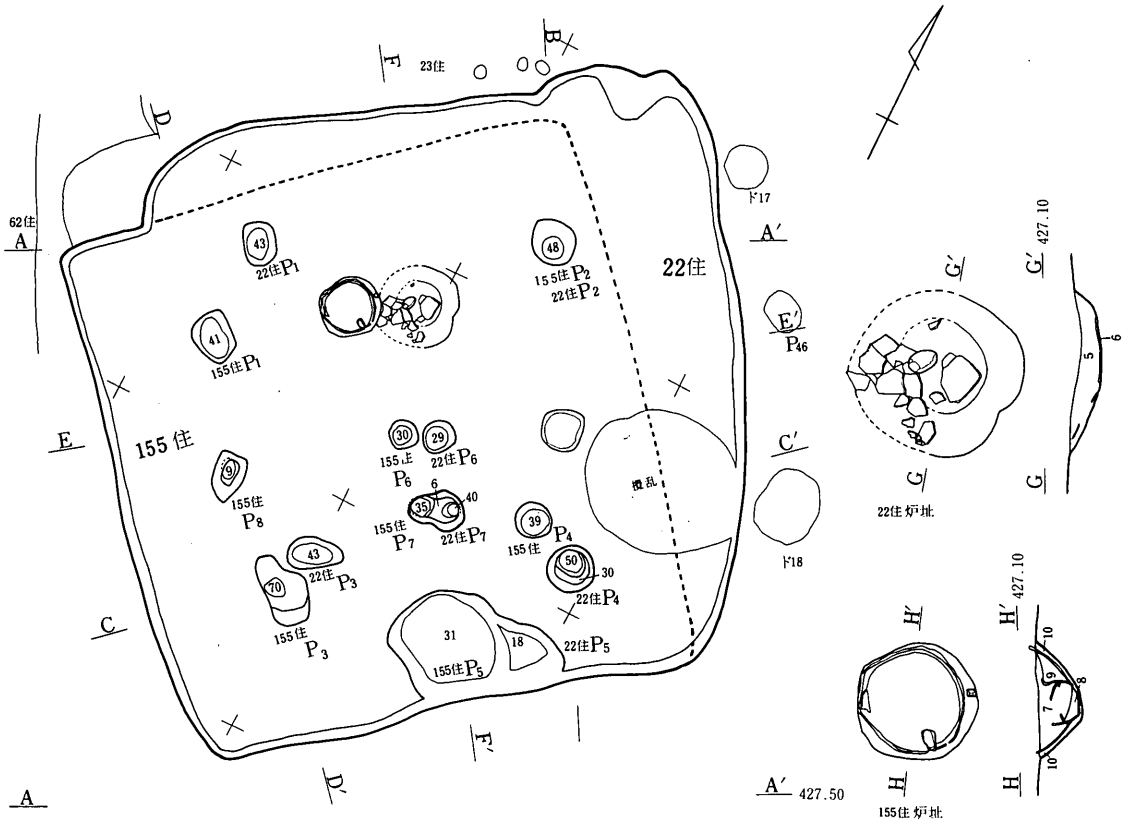
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

⑤⑨ 141号住居址 (挿図53)

XIV7j を中心として検出した。たたき状の床面を検出したので住居址と断定した。弥生時代後期の65号住居址に切られる。規模・プラン等は不明な竪穴住居址である。床面はたたき状で良好である。主柱穴等も断定できなかった。



挿図57 69号住居址



- 0 (1 : 30) 1 m
1. 暗灰褐色土
 2. 暗灰色土
 3. 暗灰褐色土 (焼土混じり)
 4. 灰色土
 5. 褐色土 (炭・焼土粒混じり)
 6. 炭層
 7. 明灰褐色粘質土
 8. 暗灰褐色粘質土 (炭混じり)
 9. 暗灰褐色粘質土 (粘土粒混じり)
 10. 灰褐色砂質土

挿図58 22・155号住居址

遺物は出土していない。

床面の状況・切り合い関係等より弥生時代後期に位置づけられる。

㊦ 155号住居址 (挿図58)

XV12o を中心として検出し、全体を調査した。図面修正中に確認したものである。弥生時代中期後半23号住居址・後期22号住居址を切る。4.2×4.2m と推定される隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N41°W を示す。壁高は最大19cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は西側を除き22号住居址と共有しておりたたき状で良好である。主柱穴は P1～P4 で、P2 は22号住居址主柱穴 P2 と共有する。P5 は入口施設、P6・P7 は間仕切りピットと考えられる。炉址は北西側主柱穴の中間に位置する二重土器埋設炉で、床面を48×46cm の円形に掘り凹め、外側に胴部以上の口縁部から頸部を欠く壺を逆位に埋設し、内側に胴部以上の甕を埋設する。また、内側埋設土器の底に土器片を敷いてある。

遺物は前述したように22号住居址として取り上げてあるので、遺物の精査が必要である。

炉址遺物・住居址の状況から弥生時代後期に位置づけられる。

2) 溝 址

① 溝址 3 (挿図59)

XV4e から XU10u にかけて検出した。北西側は調査をしたが、土砂崩れのため、遺構実測ができなかった。弥生時代後期の17・26～29・36～38・66号住居址を切る。調査延長は26m で、北西側と南東側の用地外に続いている。方向は XV8a 付近まで N60°W で、方向を変えて N35°W を示す。幅6.8～2m・深さ1.22～0.58m を測り、断面形は様々である。遺構の状況から環濠若しくは区画溝と考えられ、後に水が流れたものと思われる。

遺物は覆土下層の明灰褐色砂質土層から古墳時代前期の遺物が多く出土している。また、流れ込みによる弥生時代後期の遺物も多量に出土している。

主体となる遺物から、古墳時代前期に位置づけられる。

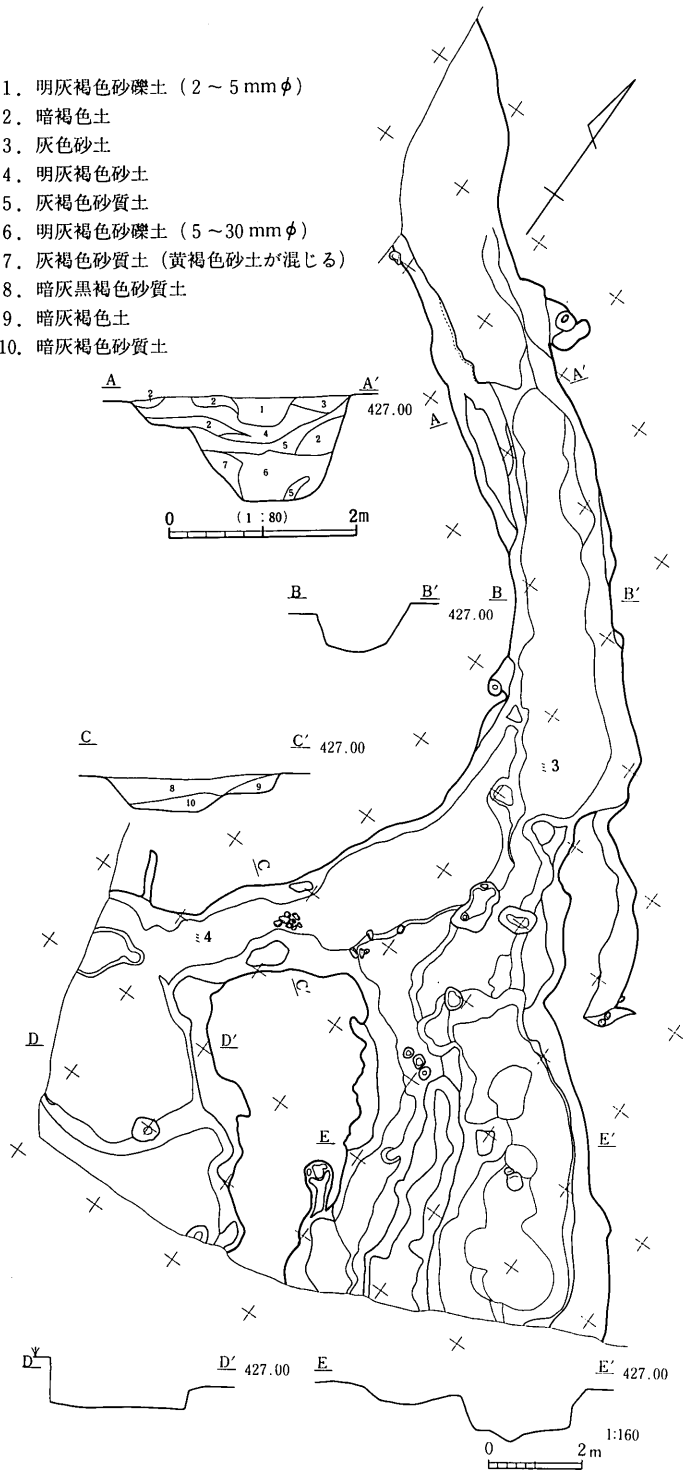
② 溝址 4 (挿図59)

Xu7y から XU6u にかけて検出した。弥生時代後期の35・36・41号住居址を切る。調査延長は10m で、南西側の用地外に続いている。方向は N40°E を示す。幅 8～1.52m・深さ0.46～0.34m を測り、断面形は様々である。一部掘り過ぎて切り合い関係のある住居址の床面を出してしまった箇所がある。遺構の状況を見ると溝址3の分流のようである。

遺物は流れ込みによる弥生時代後期の遺物が出土している。

時期決定の根拠に乏しいが、溝址3の分流とすれば、古墳時代前期以降に位置づけられる。

1. 明灰褐色砂礫土 (2 ~ 5 mm ϕ)
2. 暗褐色土
3. 灰色砂土
4. 明灰褐色砂土
5. 灰褐色砂質土
6. 明灰褐色砂礫土 (5 ~ 30 mm ϕ)
7. 灰褐色砂質土 (黄褐色砂土が混じる)
8. 暗灰黒褐色砂質土
9. 暗灰褐色土
10. 暗灰褐色砂質土



挿図59 溝址 3・4

③ 溝址 5 (挿図60)

XV6p から XU14w にかけて検出した。弥生時代後期の40号住居址を切り、弥生時代後期以降の溝址 6 に切られる。調査延長は54m で、南東側の用地外に続いている。一部、遺構実測の際、書き忘れてしまった箇所がある。方向は XV 7 0 までが N35°W、XV8l までが N5°W で、方向を変えて N25°W を示す。幅1.12~0.2m・深さ48~1cm を測り、断面形は様々である。また、XV9i 付近に3.7×3.5m、深さ51~14cm を測るほぼ方形の貯水池的な落ち込みを検出した。遺構の状況から小沢川の痕跡と考えられるが、貯水池的な遺構もあるので生活用水路的な役割を果たしていた可能性も指摘できる。

遺物は古墳時代前期の遺物を主体として流れ込みの縄文・弥生時代の遺物も出土している。出土遺物より古墳時代前期に位置づけられる。

④ 溝址 6 (挿図60)

XU13v から XIV1h にかけて検出した。弥生時代後期の29・42・57号住居址、弥生時代後期以降の溝址 5 を切る。調査延長は39m で、南東側の用地外に続いている。方向は N36°E で、XU23i 付近で方向を変えて N49°W を示す。幅84~24cm・深さ43~15cm を測り、断面形は逆台形を呈する。遺構の状況から区画溝的性格のものと考えられる。

遺物は流れ込みによる縄文時代中期・弥生時代後期の遺物が出土している。

時期決定の根拠に乏しいが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期以降に位置づけられる。

⑤ 溝址 7 (挿図61)

XV16m から XV14k にかけて検出した。弥生時代後期の46号住居址を切る。調査延長は7.8m を測る。方向はほぼ直線的で N52°W を示す。幅125~35cm・深さ49~12cm を測り、断面形は逆台形を呈する。本址の性格は断定できないが、区画溝的性格の可能性はある。

遺物は覆土中から弥生時代後期・古墳時代・平安時代の遺物が出土している。

時期決定の根拠に乏しいが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期以降に位置づけられる。

⑥ 溝址 8 (挿図60)

XV18u から XIU6v にかけて検出した。東側は上層が削平されて底部のみ残存している。弥生時代後期の52・54・60・63号住居址・溝址 9 (湿地帯) を切る。調査延長は28m を測る。方向はほぼ直線的で N91°E を示す。幅292~40cm・深さ53~13cm を測り、断面形は基本的に逆台形を呈する。XV21u から24u にかけて70×40cm 程の礫がほぼ等間隔で設置してある。遺構の状況から環濠若しくは区画溝の可能性はある。後に水が流れたものと考えられる。

遺物は覆土中から弥生時代後期・古墳時代・平安時代の遺物が出土している。

時期決定の根拠に乏しいが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期以降に位置づけられる。

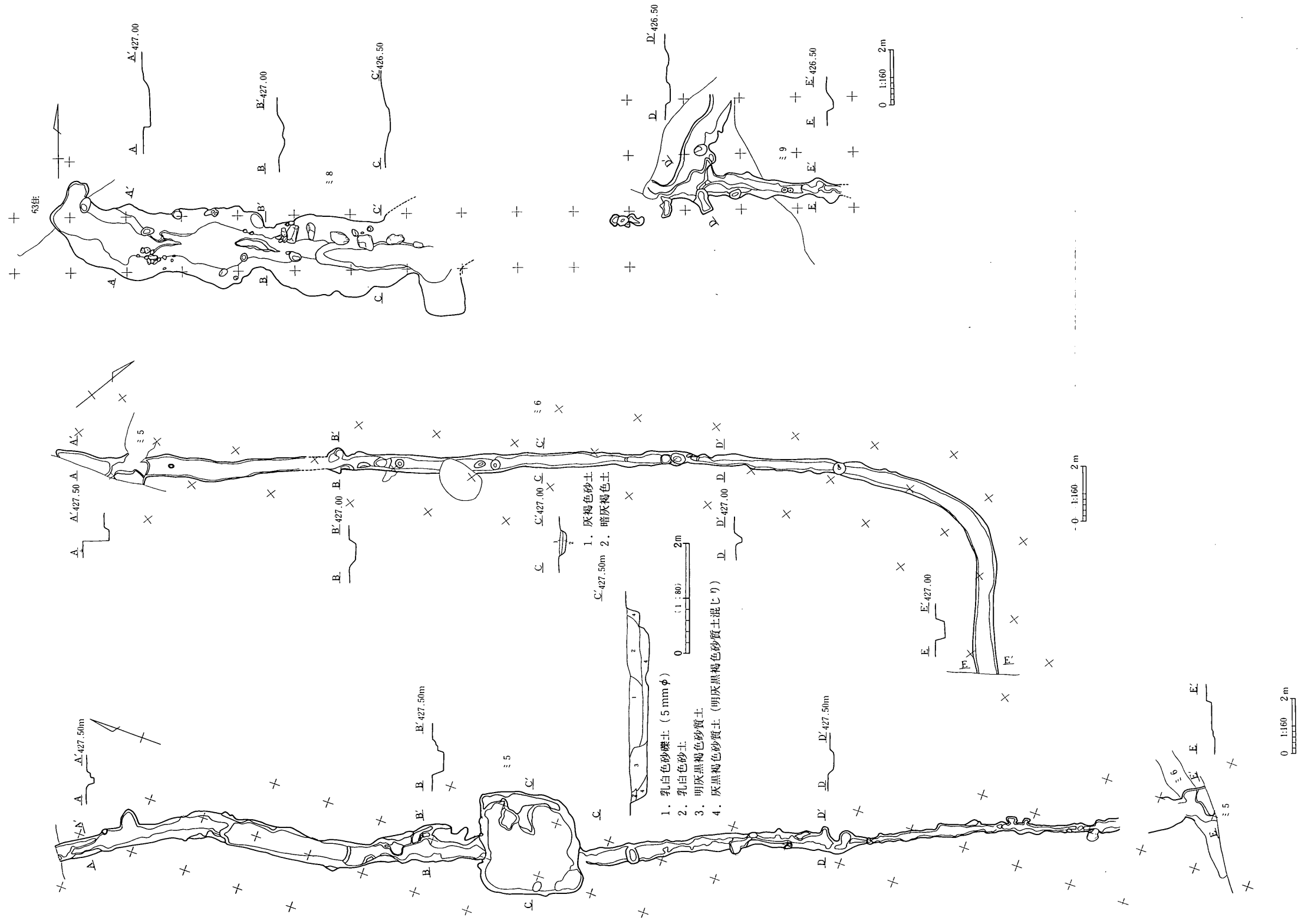
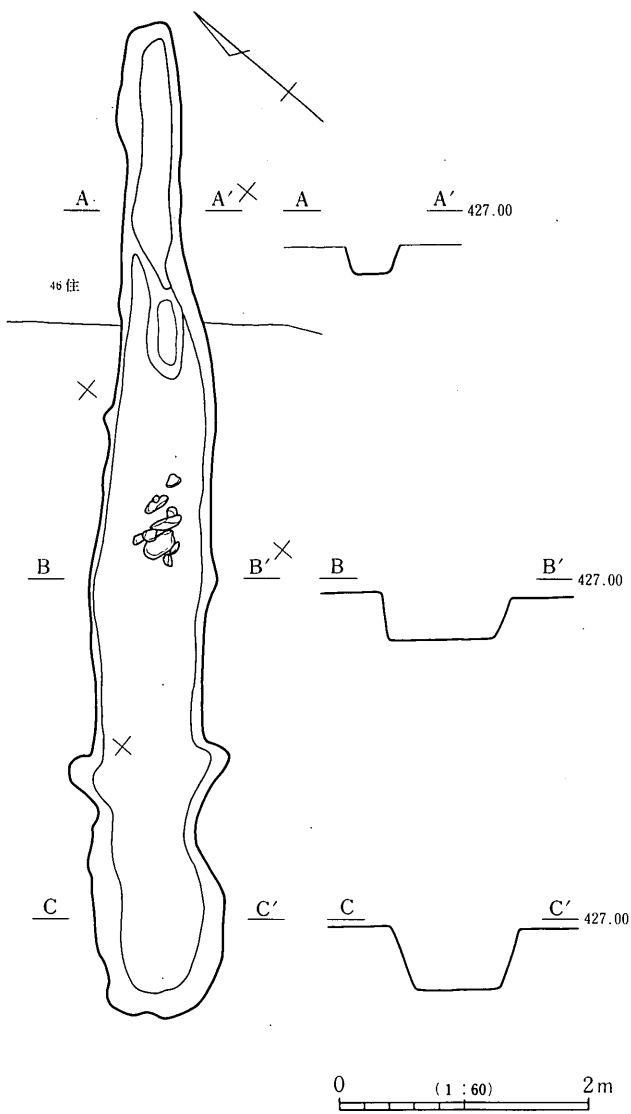
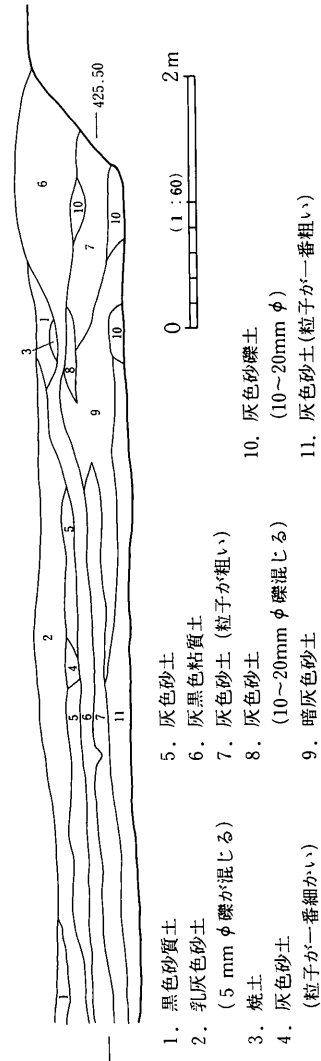


插图60 沟址5.6.8



挿図61 溝址7



挿図62 溝址9 土層図

⑦ 溝址9 (挿図62・全体図)

XIU5w から XIV14o にかけて検出した。全面的調査は時間的に不可能であったため、トレンチを設定し溝址9 I トレンチとして調査した。確認できたのは前述した範囲であるが、北側は確認できなかった。弥生時代後期以降の溝址8に切られる。トレンチは落ち込みに直行するように幅1.5mで設定した。やや緩やかに落ち込み、深さは77~64cmを測る。遺構の状況から溝址としたが湿地帯と思われる。

覆土の灰黒色粘質土層中から古墳時代を主体として、弥生時代後期の遺物も出土している。

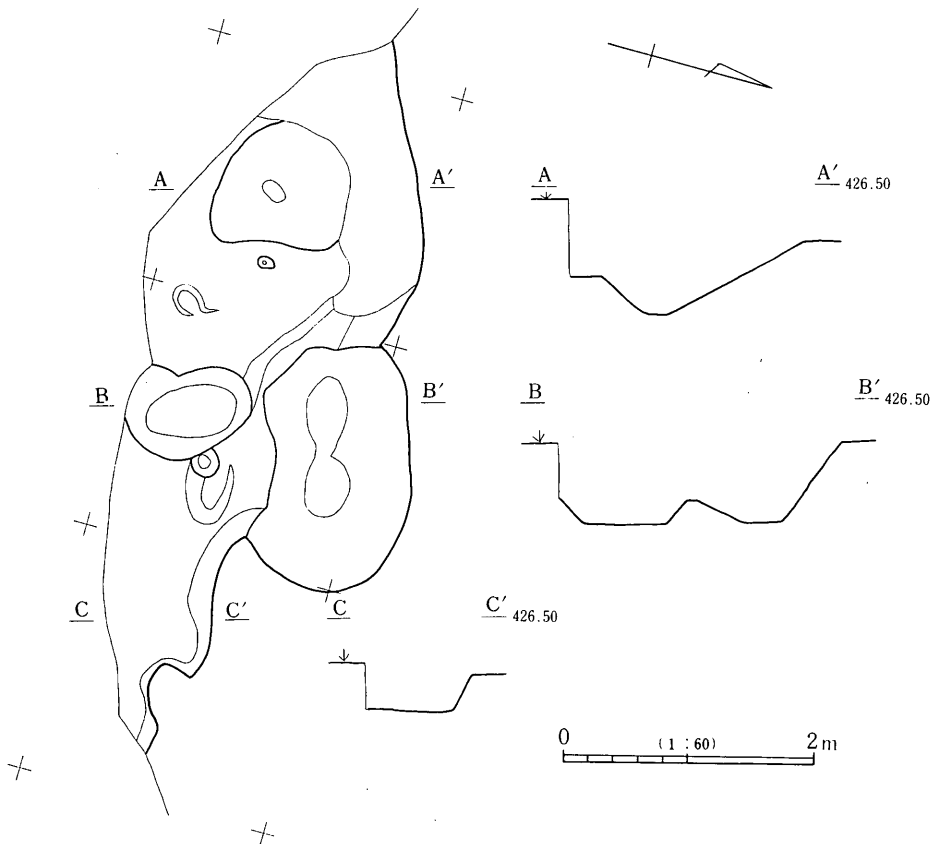
灰黒色粘質土層は覆土中層なので古墳時代より以前から湿地帯が存在していたと思われる。

⑧ 溝址10 (挿図63)

XIV11n から13n にかけて検出した。調査延長は5.9m で、南・東・西側の用地外に続いている。方向は一部しか調査していないので詳細は不明であるが、N74°E を示すと考えられる。幅は調査できた部分で最大232cm・深さ56~25cm を測り、断面形は様々である。遺構の状況から環濠若しくは区画溝と考えられ、後に水が流れたと考えられる。

底部からは古墳時代前期の遺物が、覆土中からは流れ込みと考えられる弥生時代後期の遺物が出土している。

主体となる遺物から、古墳時代前期に位置づけられる。



挿図63 溝址10

⑨ 溝址12 (挿図64)

XIV7f から 7d にかけて検出した。弥生時代後期の68号住居址を切る。調査延長は5.8mで、南側の用地外とII地区の方向に続いている。方向は XIV7f 付近で N39°E を示し、方向を変えて N8°W を示す。幅48~19cm・深さ7~4cm を測り、断面形は逆台形である。遺構の状況から区画溝的なものと考えられる。

覆土中から流れ込みによる縄文時代・弥生時代の遺物が出土した。

時期決定のできる根拠に乏しいが切り合い関係から弥生時代後期以降に位置づけられる。

3) 土 坑

① 土坑16 (挿図65)

XV11s で検出した。90×79cm の不定形を呈し、深さは15~13cm を測る。断面形は逆台形を呈し、途中で段を持つ。

縄文土器片が出土した。

出土遺物より縄文時代中期後半に位置づけられる。

② 土坑17 (挿図66)

XV13p で検出した。37×37cm の円形を呈し、深さは37cm を測る。断面形は逆台形を呈する。

縄文時代土偶と縄文土器片が出土した。

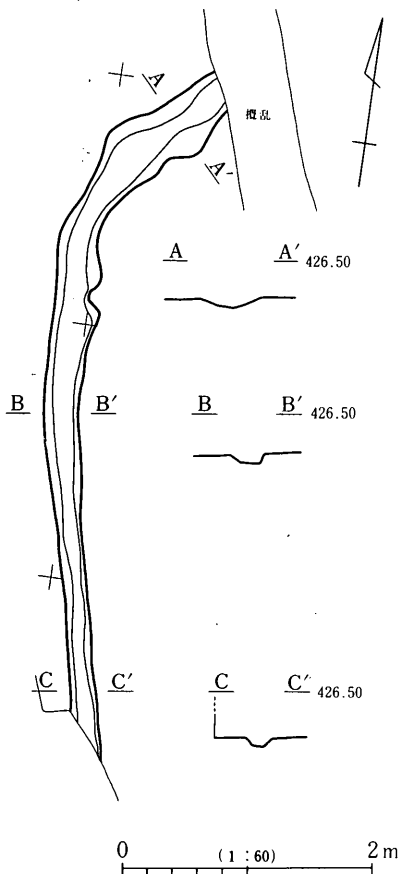
出土遺物より縄文時代中期後半に位置づけられる。

③ 土坑18 (挿図66)

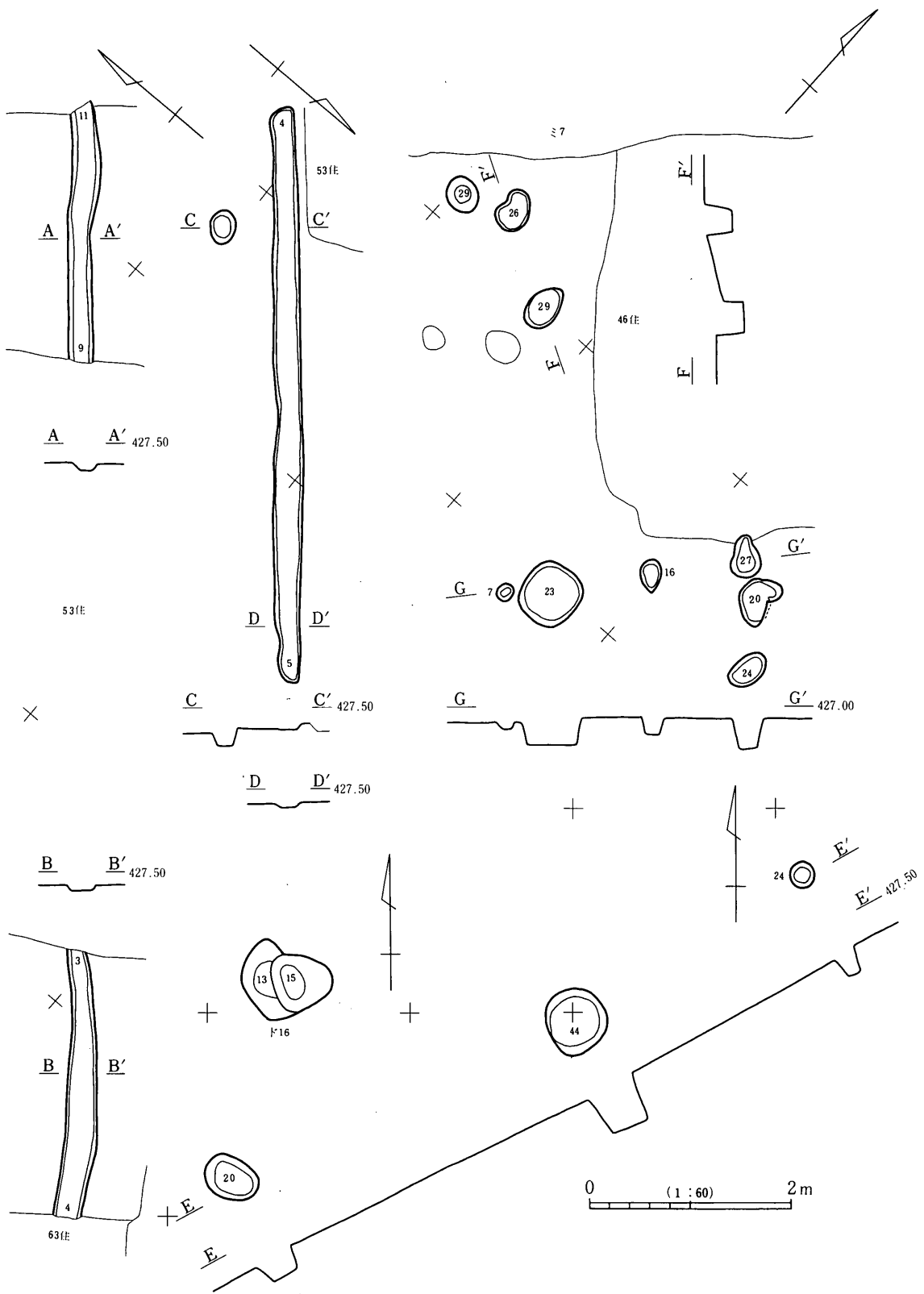
XV13o で検出した。58×50cm の楕円形を呈し、深さは30cm を測る。断面形は逆台形を呈する。

縄文土器片が出土した。

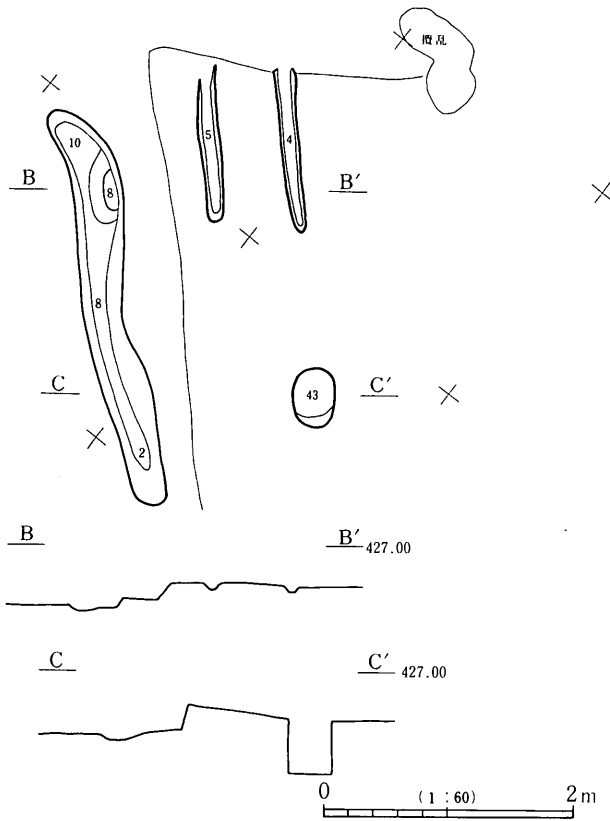
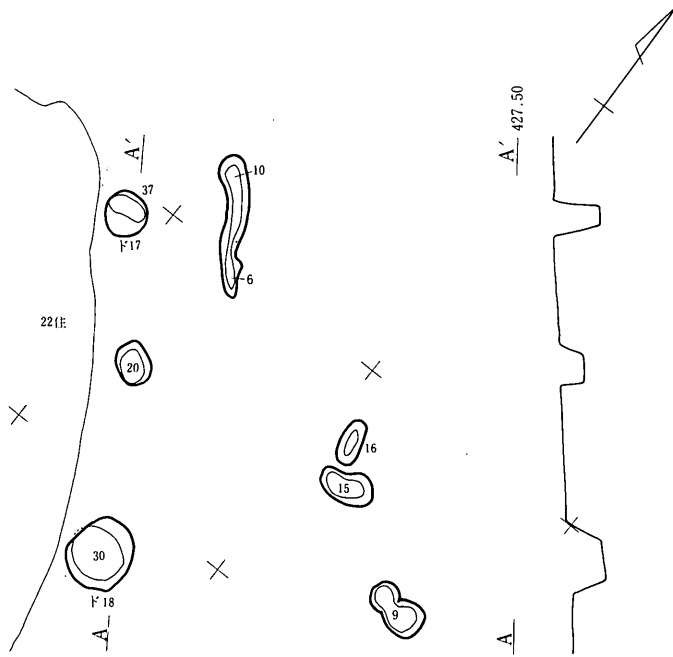
出土遺物より縄文時代中期後半に位置づけられる。



挿図64 溝址12



挿図65 土坑16・囲溝址・ピット(1)



挿図66 土坑17、18・囲溝址・ピット(2)

4) 井戸址

① 井戸址1 (挿図68)

XV14c で検出し、弥生時代後期の31号住居址を切る。調査時は土坑12としたが、検討の結果、井戸址とした。69×68cm のほぼ円形を呈し、深さは36cm を測る。断面形は逆台形を呈する。底部に4個の礫が認められた。

流れ込みの弥生土器片が出土した。

隣接した井戸址2・3・4の状況より、中世に位置づけられる。

② 井戸址2 (挿図67)

XV14e から15e にかけて検出し、弥生時代後期の32号住居址を切る。調査時は土坑13としたが、検討の結果井戸址とした。187×124cm の楕円形を呈し、深さは67cm を測る。断面形は逆台形を呈する。底部に礫が認められた。

覆土中から遺物が出土した。中世の青磁・常滑・かわらけを主体として、流れ込みによる弥生時代の遺物も認められた。

出土遺物より中世に位置づけられる。

③ 井戸址3 (挿図67)

XV15f から16f にかけて検出し、弥生時代後期の32号住居址を切る。調査時は土坑14としたが、検討の結果井戸址とした。260×150cm の楕円形を呈し、深さは65～52cm を測る。断面形は逆台形を呈し、途中で段を持つ。底部及び覆土下層に礫が認められた。

覆土中から遺物が出土した。中世の山茶碗を主体として、流れ込みによる弥生時代の遺物も認められた。

出土遺物より中世に位置づけられる。

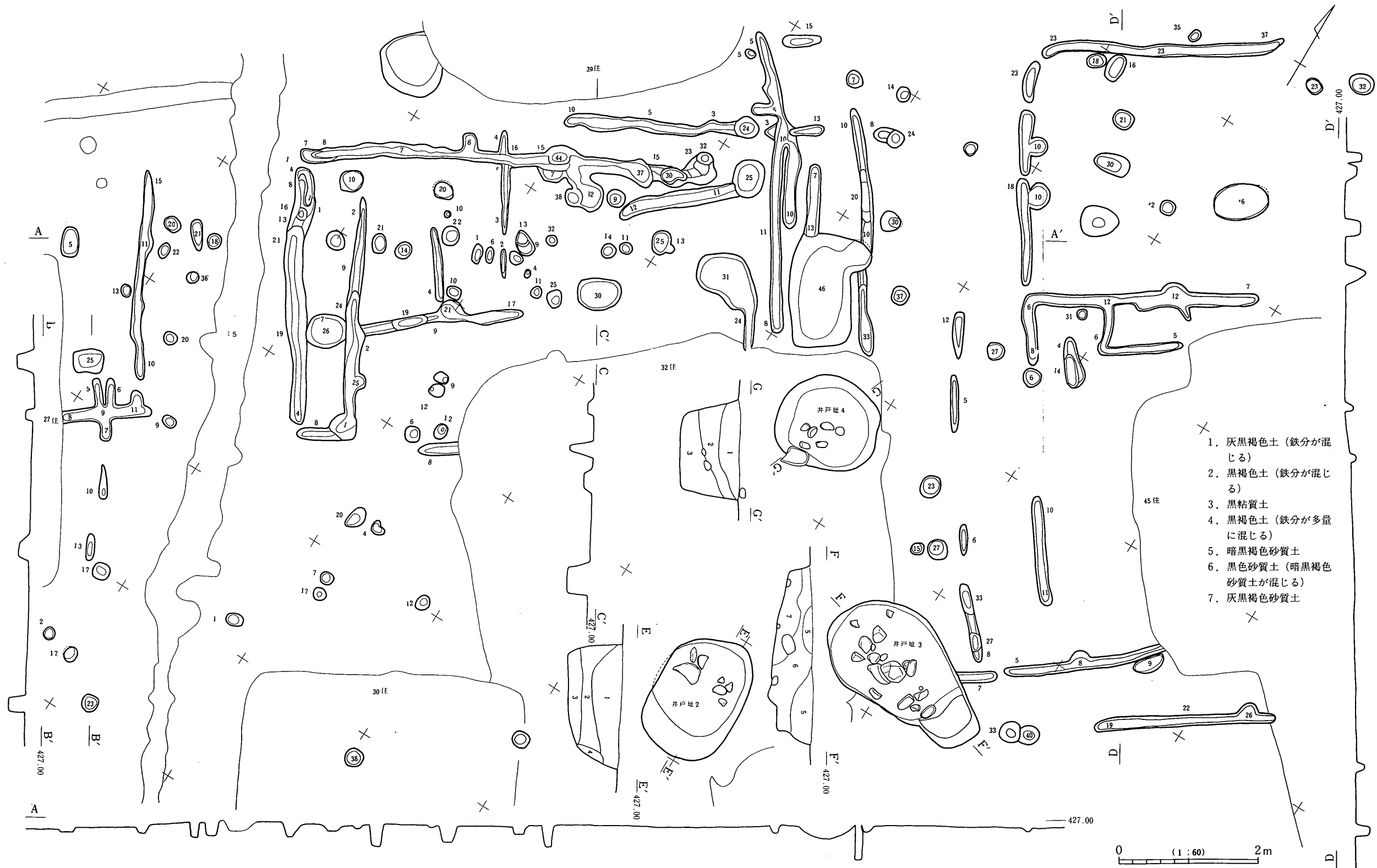
④ 井戸址4 (挿図67)

XV14g から15g にかけて検出し、弥生時代後期の32号住居址を切る。調査時は土坑15としたが、検討の結果井戸址とした。150×140cm のほぼ円形を呈し、深さは84cm を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土中層に礫が認められた。

底部及び覆土中から遺物が出土した。底部からは木製の杓子と、井筒の残骸と思われる板を検出した。井筒の型式等は不明である。

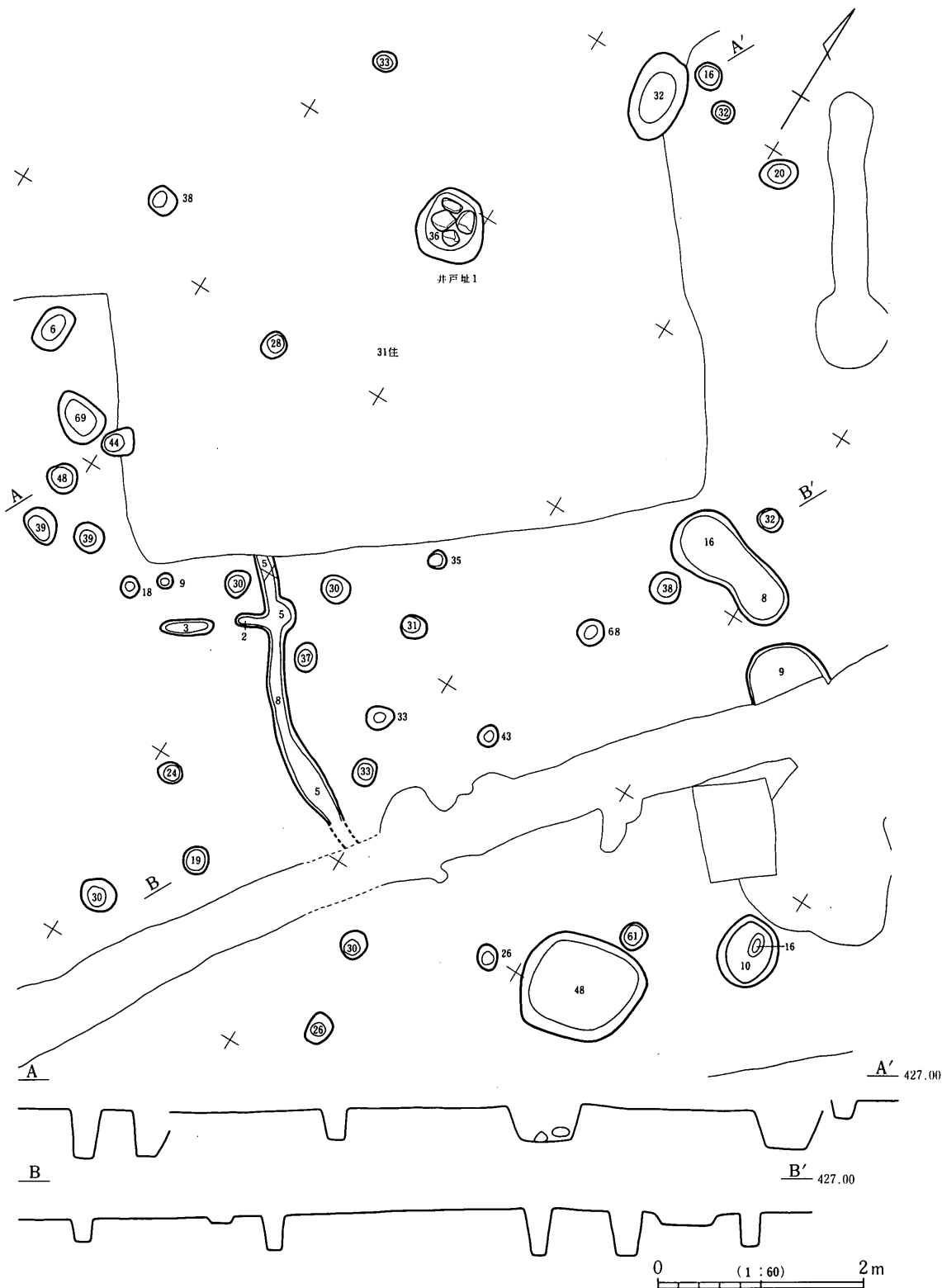
中世陶器を主体として、流れ込みによる弥生時代の遺物も認められた。

出土遺物より中世に位置づけられる。



1. 灰黒褐色土 (鉄分が混じる)
2. 黒褐色土 (鉄分が混じる)
3. 黒粘質土
4. 黒褐色土 (鉄分が多量に混じる)
5. 暗黒褐色砂質土
6. 黒色砂質土 (暗黒褐色砂質土が混じる)
7. 灰黒褐色砂質土

挿図67 井戸址2、3、4・囲溝址・ピット(4)

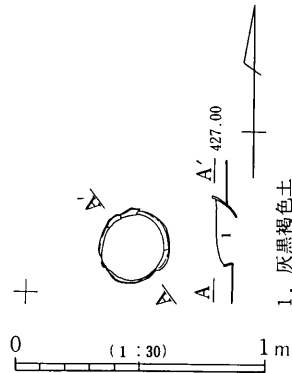


挿図68 井戸址1・囲溝址・ピット(3)

5) 土器棺墓

① 土器棺墓 1 (挿図69)

XV13I で検出した。確認時は、上層部が削平されており、下部のみが残存していた。底部を欠く甕を使用している。胴部径30×27cm を測る。掘り方は確認できなかった。覆土は灰黒褐色土で、遺構検出面の土層と違いがなかった。土器棺より弥生時代中期に位置づけられる。



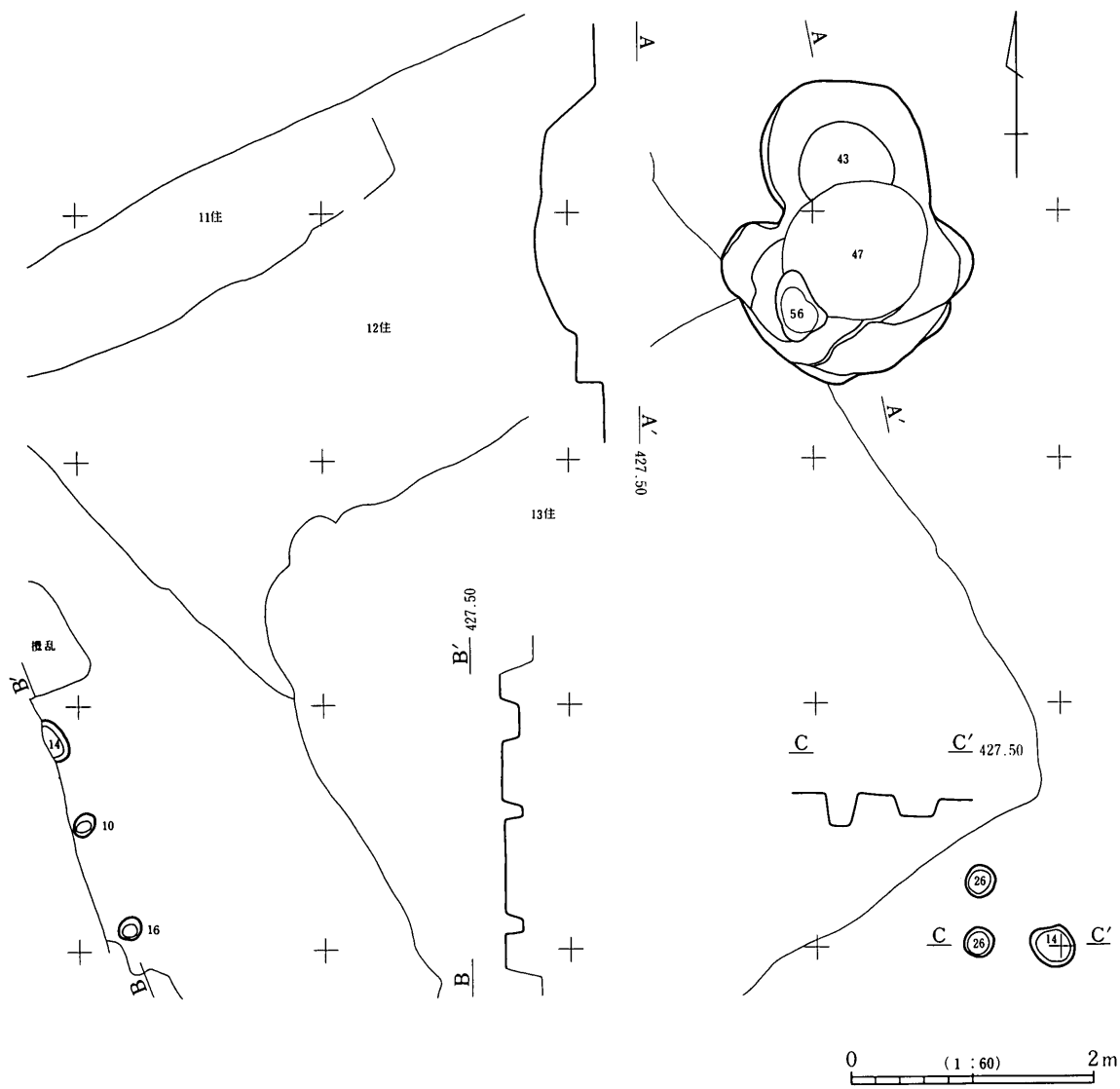
挿図69 土器棺墓 1

6) 罎溝址・ピット

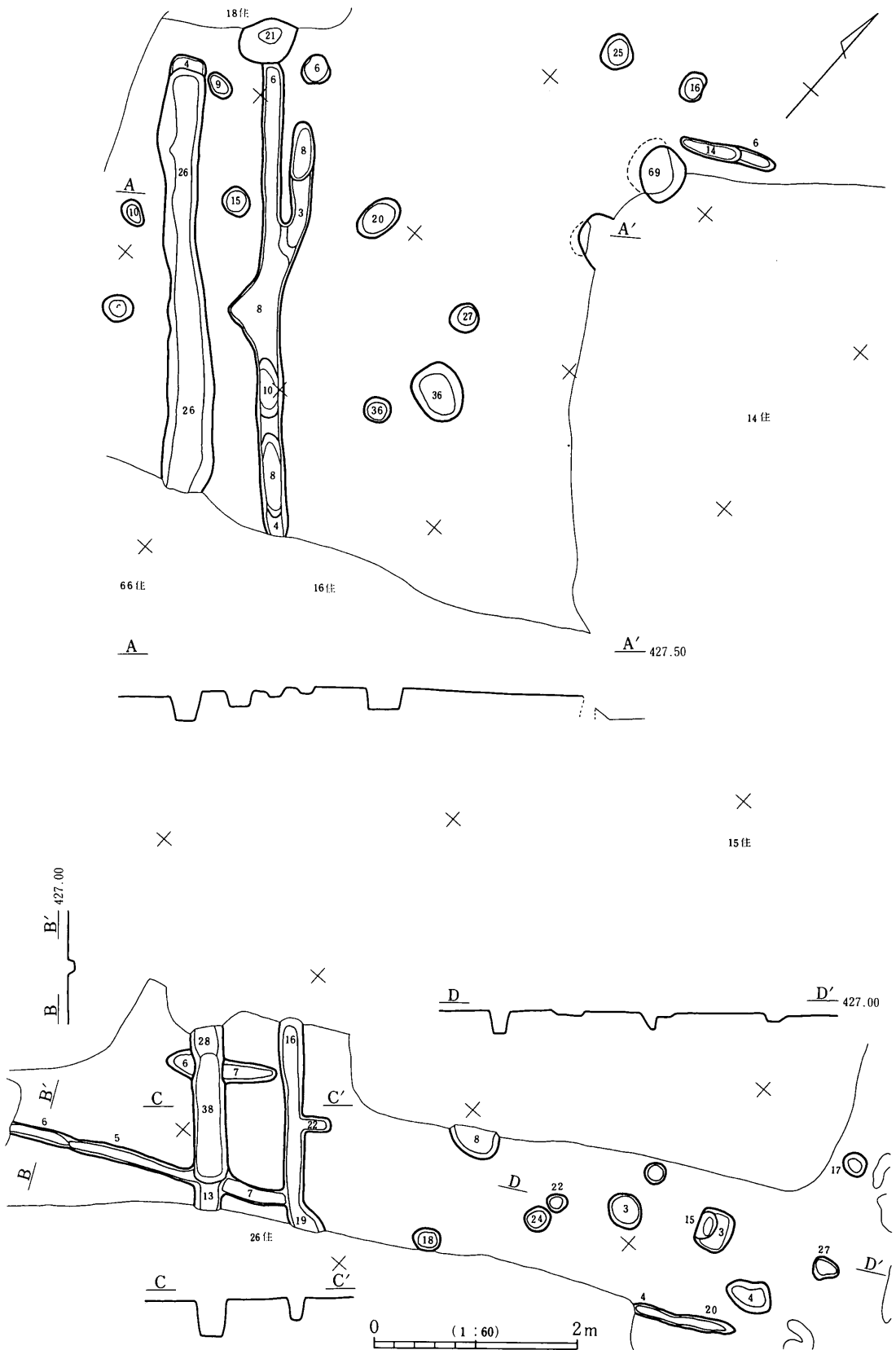
従来罎溝址と呼称されてきた幅の狭い溝が方形に巡る遺構が認められた。罎溝址でも重複が著しく、かつ竪穴住居址とも重なっていて、その部分では覆土の見極めができなかったので把握できない部分も多い。よって個々のつながりの把握に留意したが十分に果たせなかった。よってここでは全体の傾向を指摘するのにとどめたい。

罎溝址の密度が濃いのは集落の中心域と推定される地区南西側である。竪穴住居址との関係は切っていたり、切られていたりしてほぼ同時に存在していたと考えられる。また、重視すべき点は罎溝址の方向がほぼ住居址の方向と類似して北西側を示す点である。

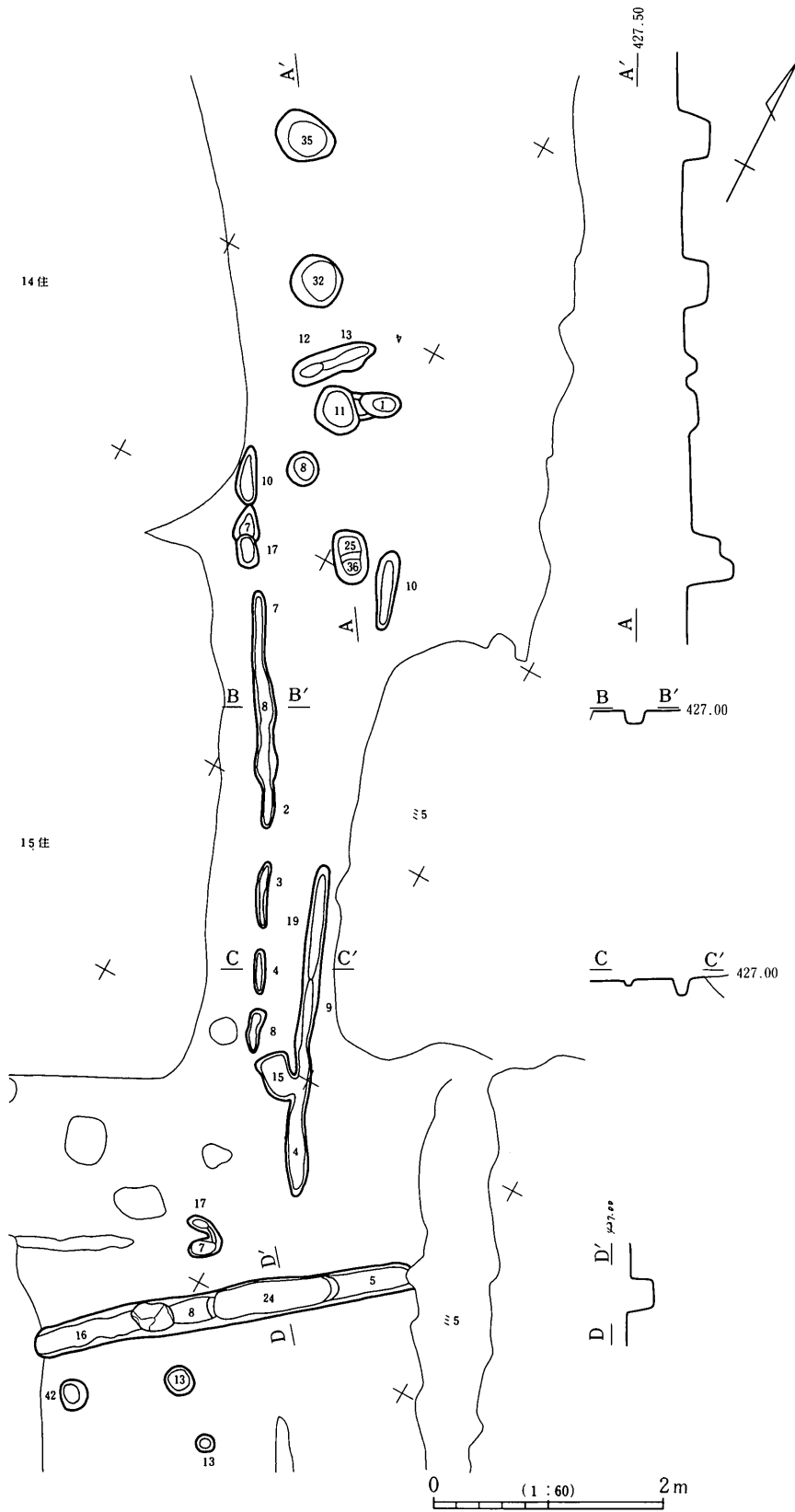
ピットはほぼ他の遺構と同様に地区南西側に多い。時期決定ができないのがほとんどである。個々の説明は省略し、遺構図はすべて掲載してある。



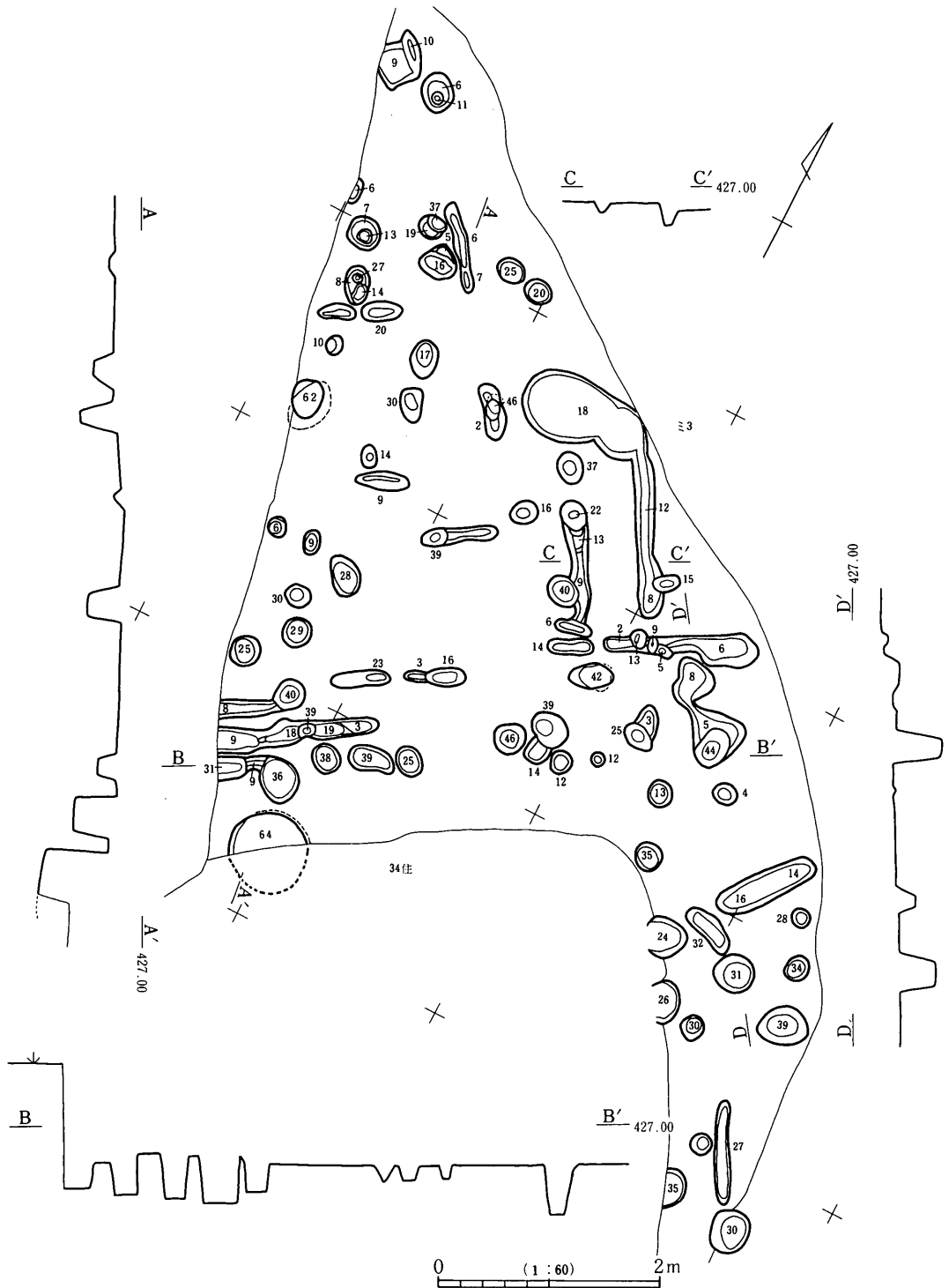
挿図70 ピット(5)



挿図71 囲溝址・ピット(6)



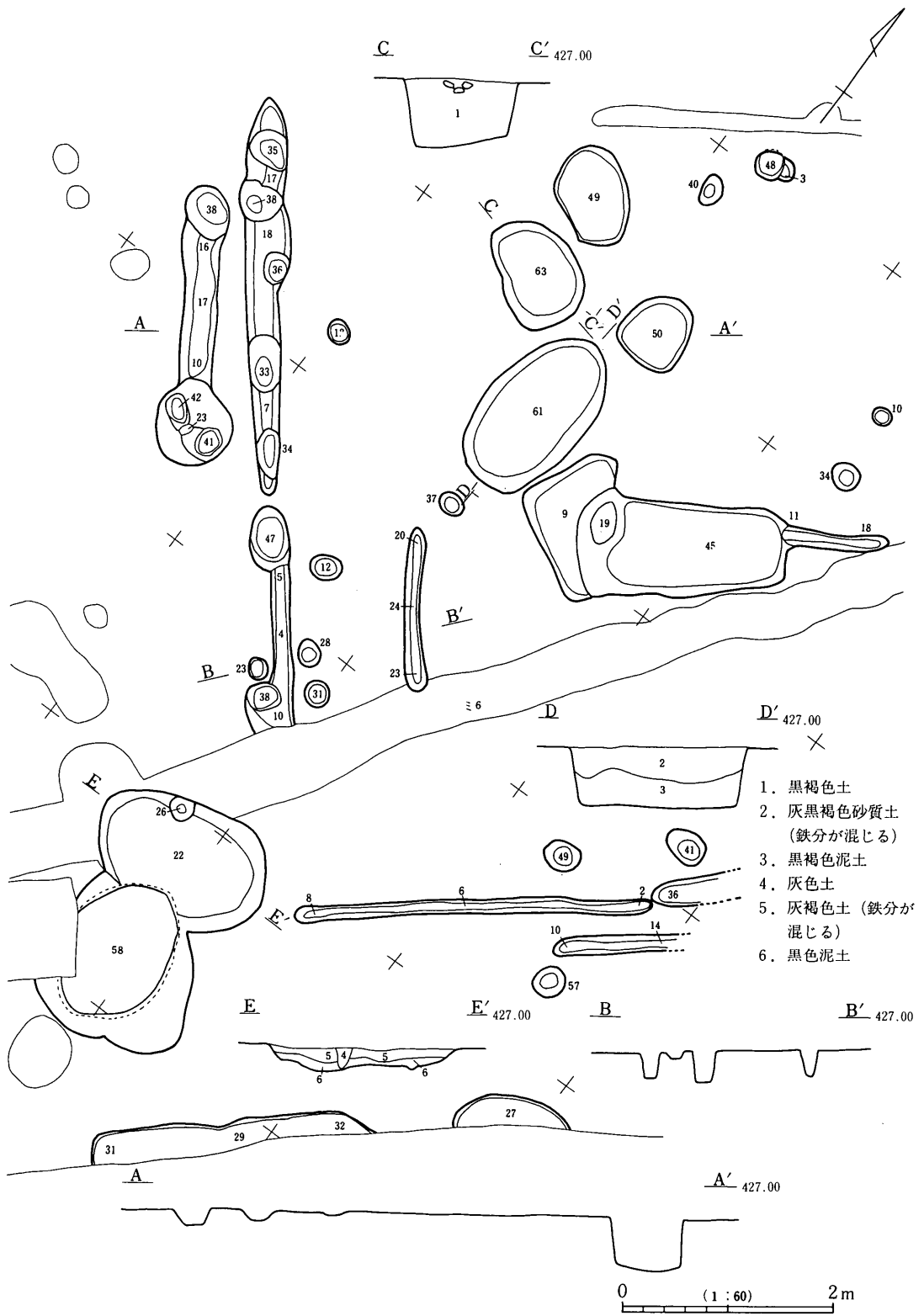
挿図72 囲溝址・ピット(7)



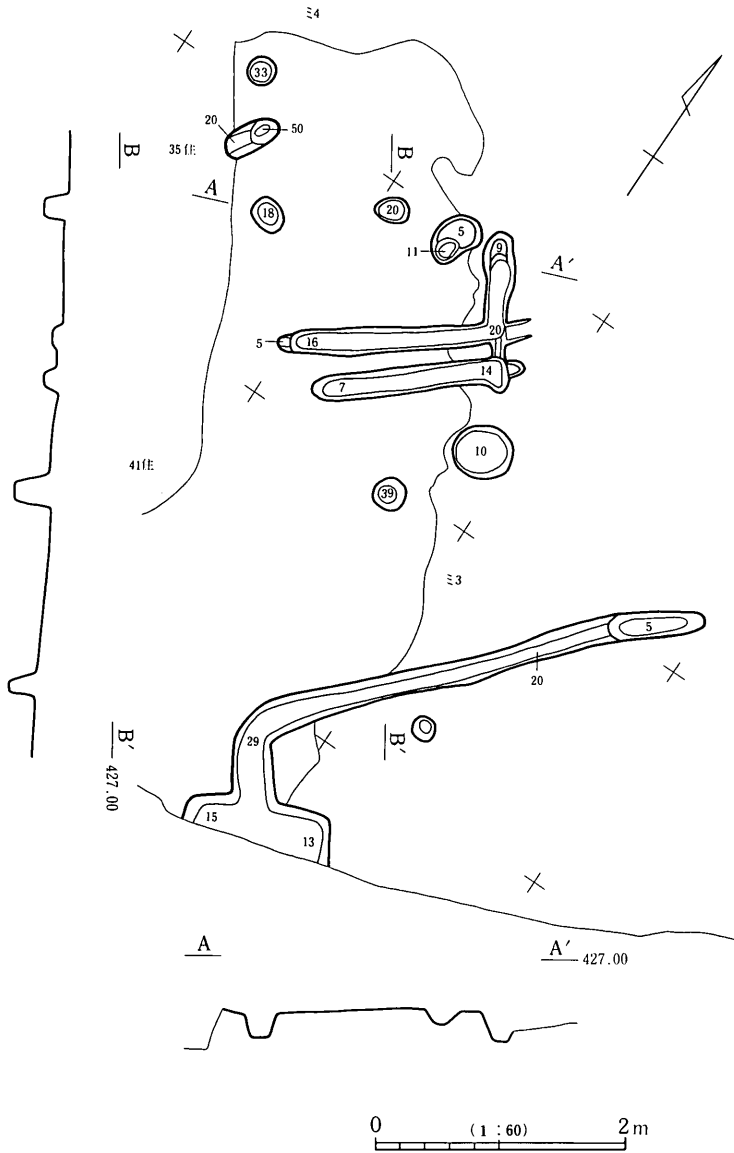
挿図73 囲溝址・ピット(8)



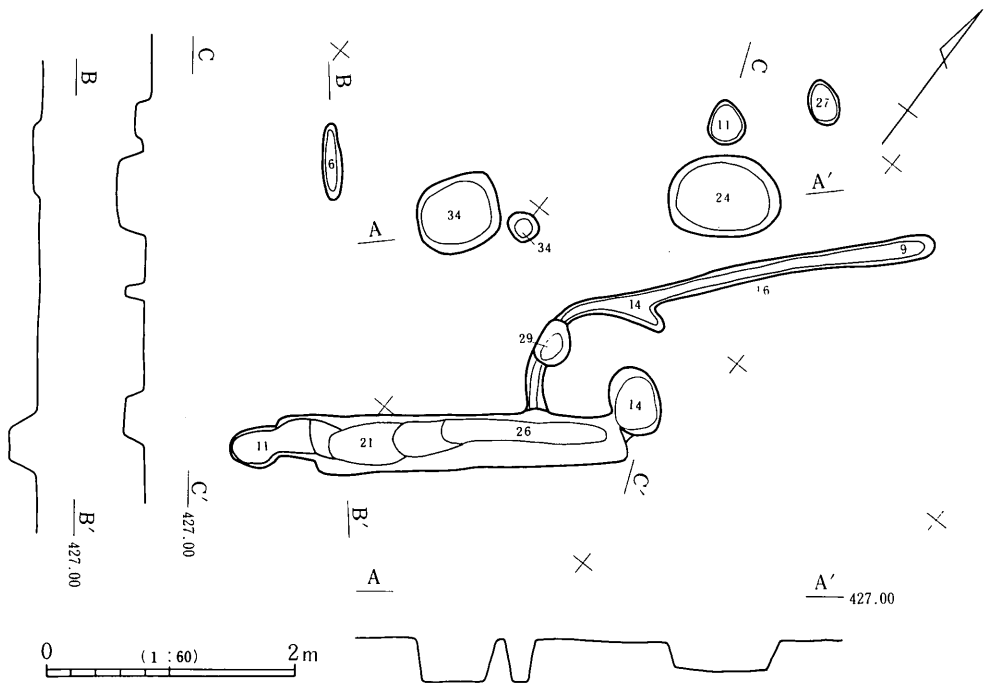
挿図74 囲溝址・ピット(9)



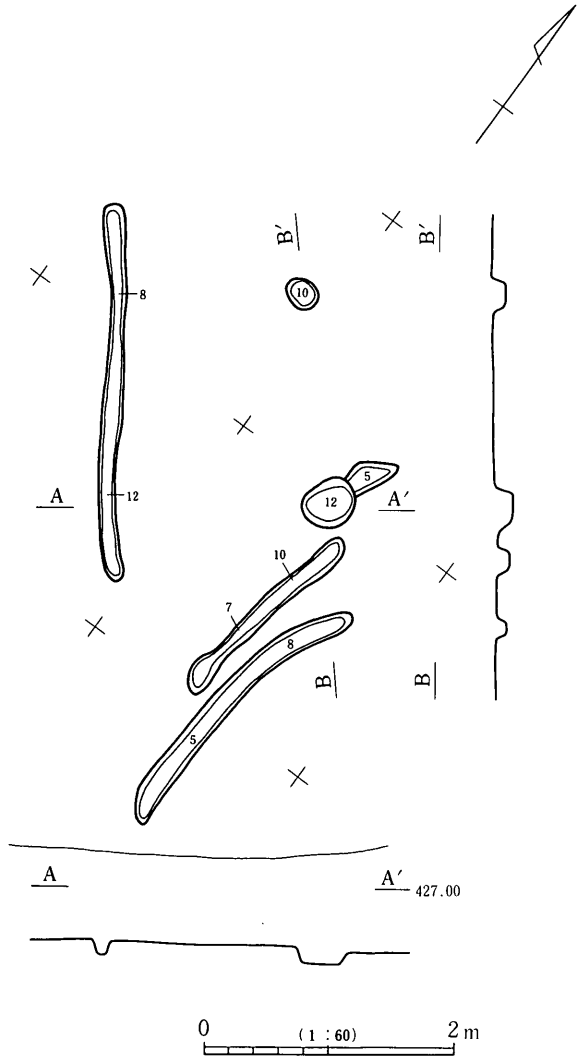
挿図75 囲溝址・ピット(10)



挿図76 圓溝址・ピット(11)



挿図77 囲溝址・ピット(12)



挿図78 囲溝址・ピット(13)

2. 第 II 地区

1) 竪穴住居址

(1) 縄文時代

① 144号住居址 (挿図79)

XIIU5w を中心にして検出した。弥生時代後期の135号住居址に切られているが、ほぼ全面を調査した。4.5×4.1m の円形の竪穴住居址で、主軸方向 N55°W を示す。壁高は大部分が135号住居址床下になるため4cm 以下であるが、東壁の一部は37cm を測る。周溝は壁下を全周し、幅24～11・深さ18～6cm を測る。床面はほんの一部でたたき状に堅い部分が認められたが、全体に柔らかく不良である。主柱穴は P1～P6の6本で、P7は入口部と考えられる。炉址は中央やや北西に位置する切りゴツツ状の石組炉で、116×106cm の不整長方形を呈する。北西側の石は残っていないが、残り三方に大きな石を組み合わせ、南東側は大小の石を敷いている。焼土が底で顕著に認められた。

遺物はほとんど出土しなかった。

住居址形態から縄文時代中期後半に位置づけられる。

(2) 弥生時代

① 106号住居址 (挿図80)

XIT8y を中心にして検出した。弥生時代後期の107号住居址に切られているが、ほぼ全体を調査した。短軸が2.9m を測る隅丸長方形の竪穴住居址で、長軸方向は N57°E を示す。壁高は11～2cm を測り、北東側では確認できない箇所が認められた。床面は全体に柔らかく不良である。主柱穴は不明であるが、P1・P8はその可能性がある。そのほかに、住居址関連施設は確認できなかった。

遺物は床面上からわずかに出土した。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

本址中央から南側に、2.8×1.8m の隅丸長方形を呈し、深さ25～19cm を測る竪穴状遺構が重複する。当初は本址に関連すると考えて掘り下げたが、覆土等が異なっており、本址を切る遺構と判断できた。

遺物が出土しなかったので詳細な位置づけは不可能であるが、切り合い関係からみれば、弥生時代中期以降に位置づけられ、中世の可能性が一番強いと推定している。

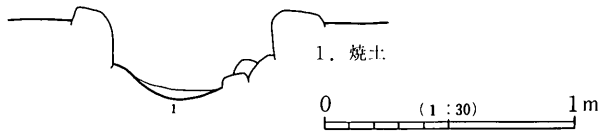
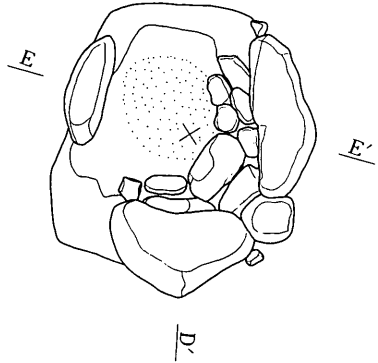
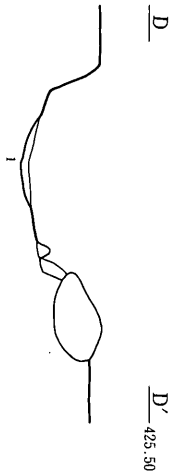
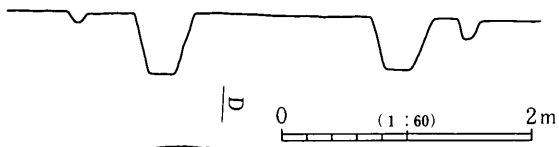
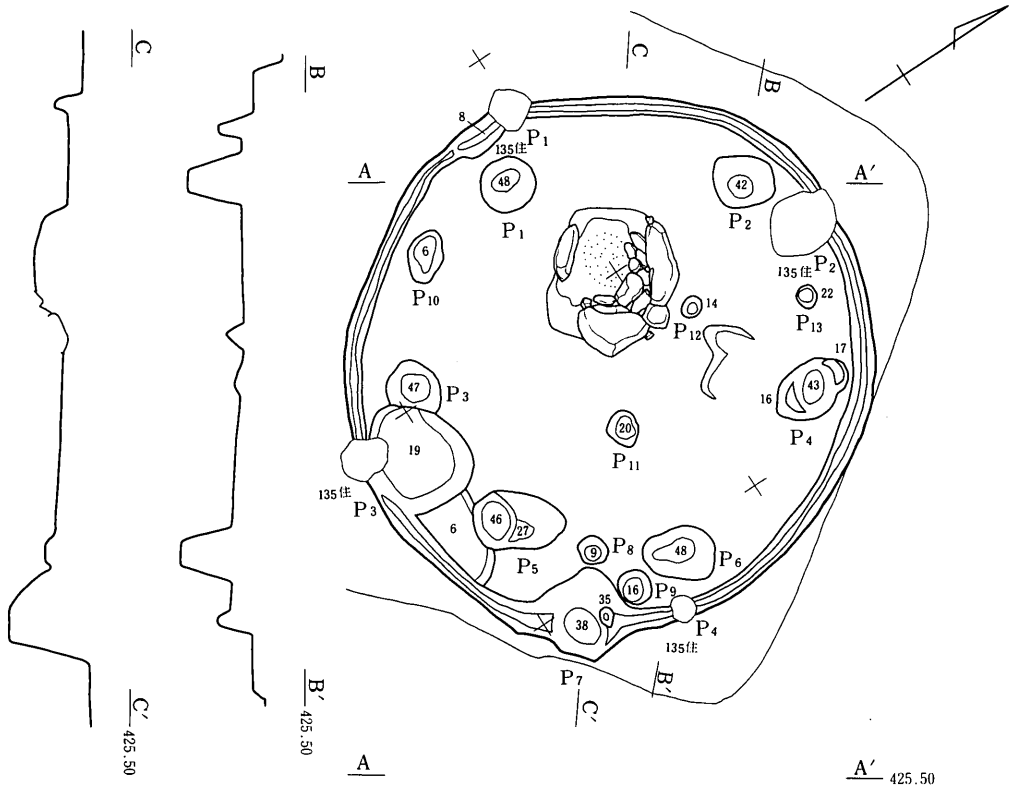
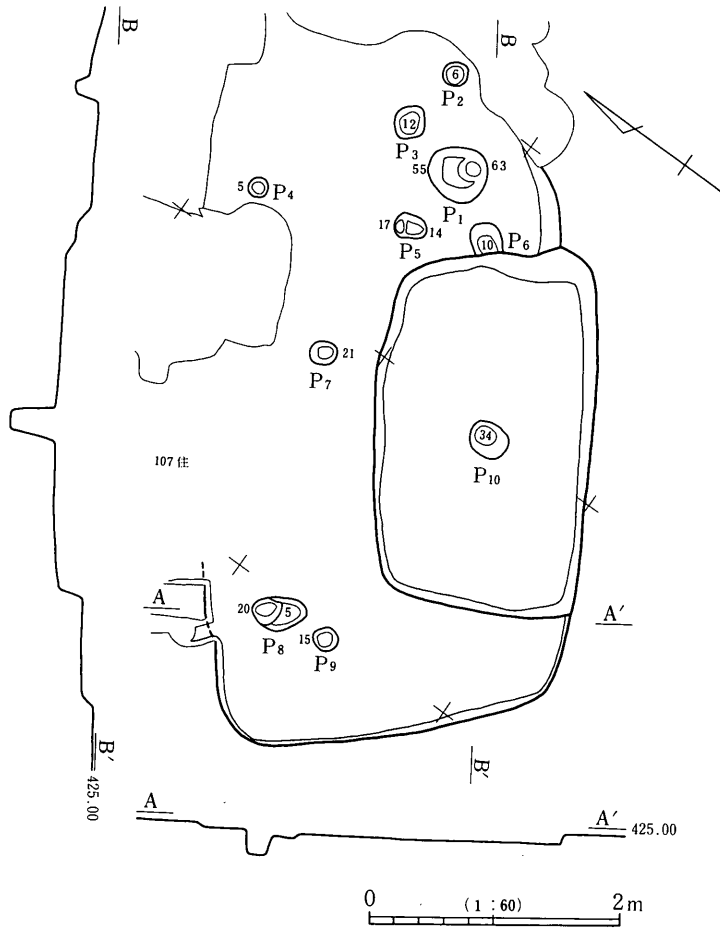


插图79 144号住居址



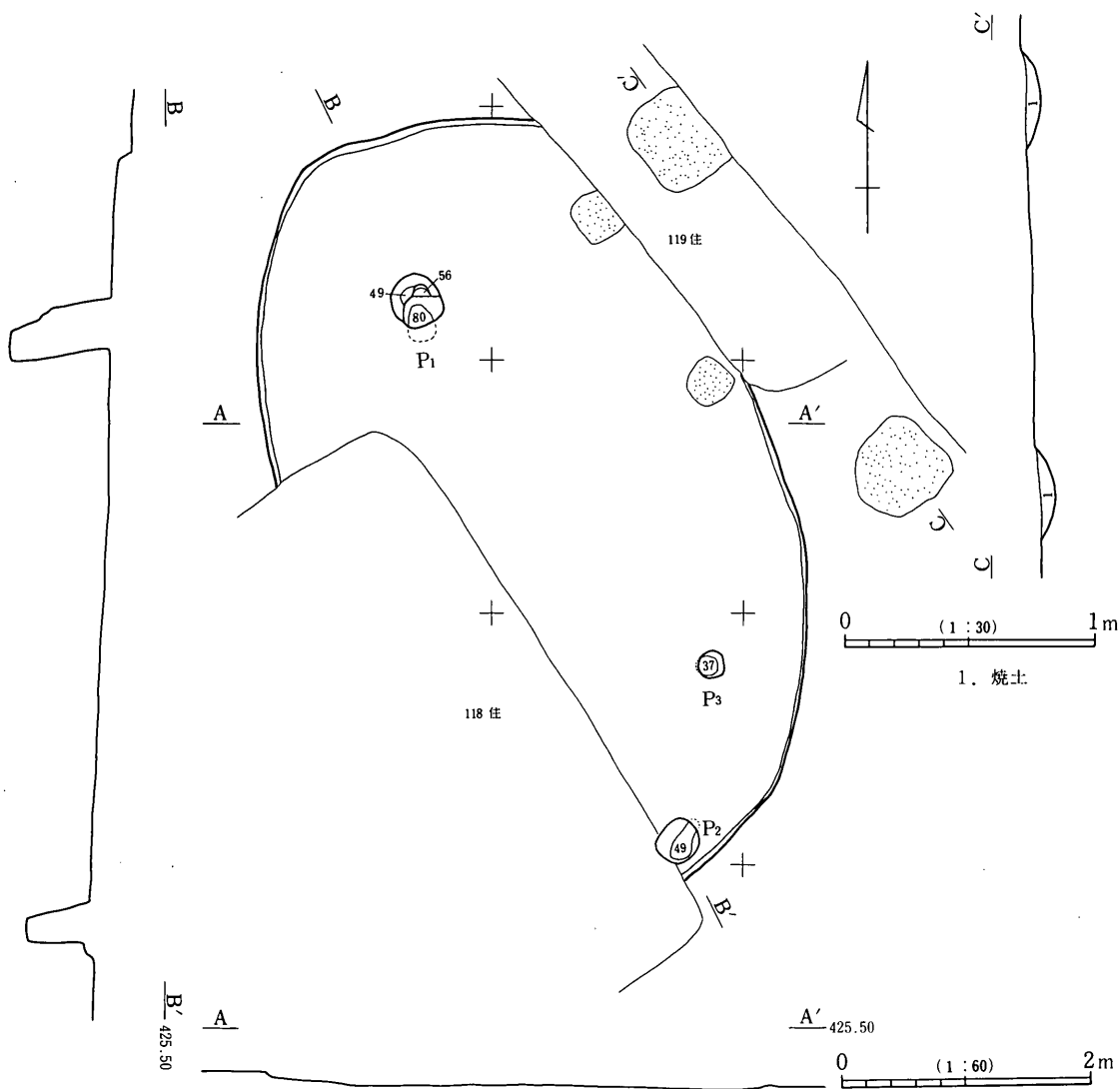
挿図80 106号住居址

② 137号住居址 (挿図81)

XIU211 を中心にして検出した。弥生時代後期の118号住居址・119号住居址に切られ、全体の1/4程を調査した。6.1×4.0mをの隅丸長方形の竪穴住居址で、長軸方向はN7°Eを示す。ただし、平面形の把握には問題を残し、特に北側の壁は極めて分かりにくかった。壁高は10~2cmを測り、水田の造成により壁面上層は削平されている。床面は柔らかく不良で、南側に傾斜する。主柱穴はP1・P3と考えられる。炉址は北東側に位置する地床炉で、2箇所並んで検出された。北側の炉址は38cmの丸みを帯びた長方形、南側の炉址は35×36cmの不整形円形を呈し、いずれも床面が凹んで全面に焼土が顕著に認められた。そのほかに、住居址関連施設は確認できなかった。

遺物は床面上から土器片等がわずかに出土した。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



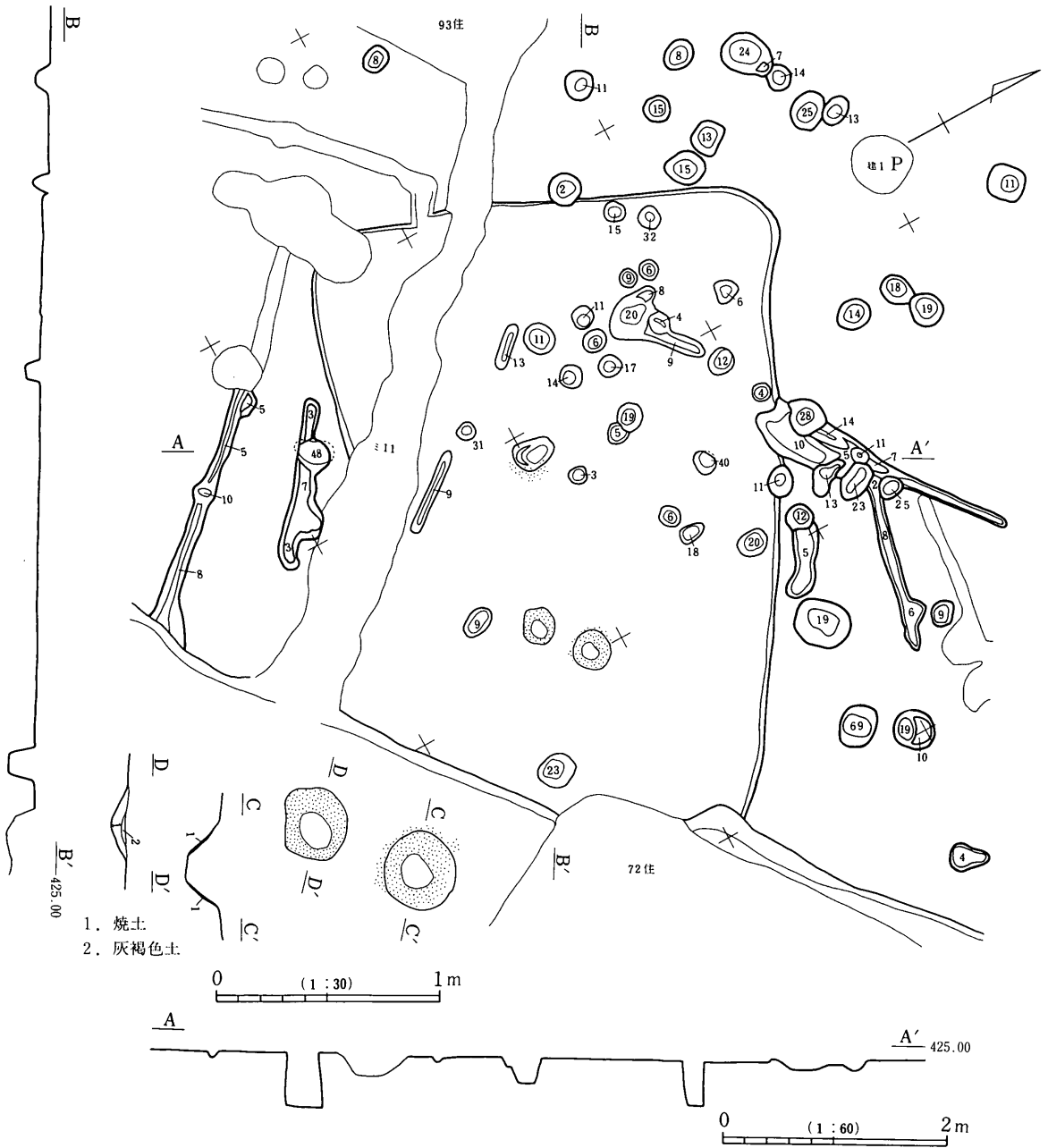
挿図81 137号住居址

③ 138号住居址 (挿図82)

XIU20b を中心にして検出した。弥生時代後期の72号住居址・93号住居址、古墳時代の溝址11に切られ、南側は水田の造成で削平されている。短軸が4.0mを測る隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN119°Eを示す。壁高は6~3cmを測り、水田の造成により壁面上層は削平されている。床面はたたき状に堅く良好である。炉址は中央東壁寄りに位置する地床炉で、2箇所並んで検出された。西側の炉址は31×28cmの不整円形を呈し、床面が凹んで全面に焼土が顕著に認められた。東側の炉址は35×32cmの円形を呈し、やや深い堀込みをなす。焼土が認められたが、調査時の不手際で断ち割り調査ができなかった。床面上の柱穴はほとんどが本址を切る。

遺物は床面上から出土し、完形に復元できる甕等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



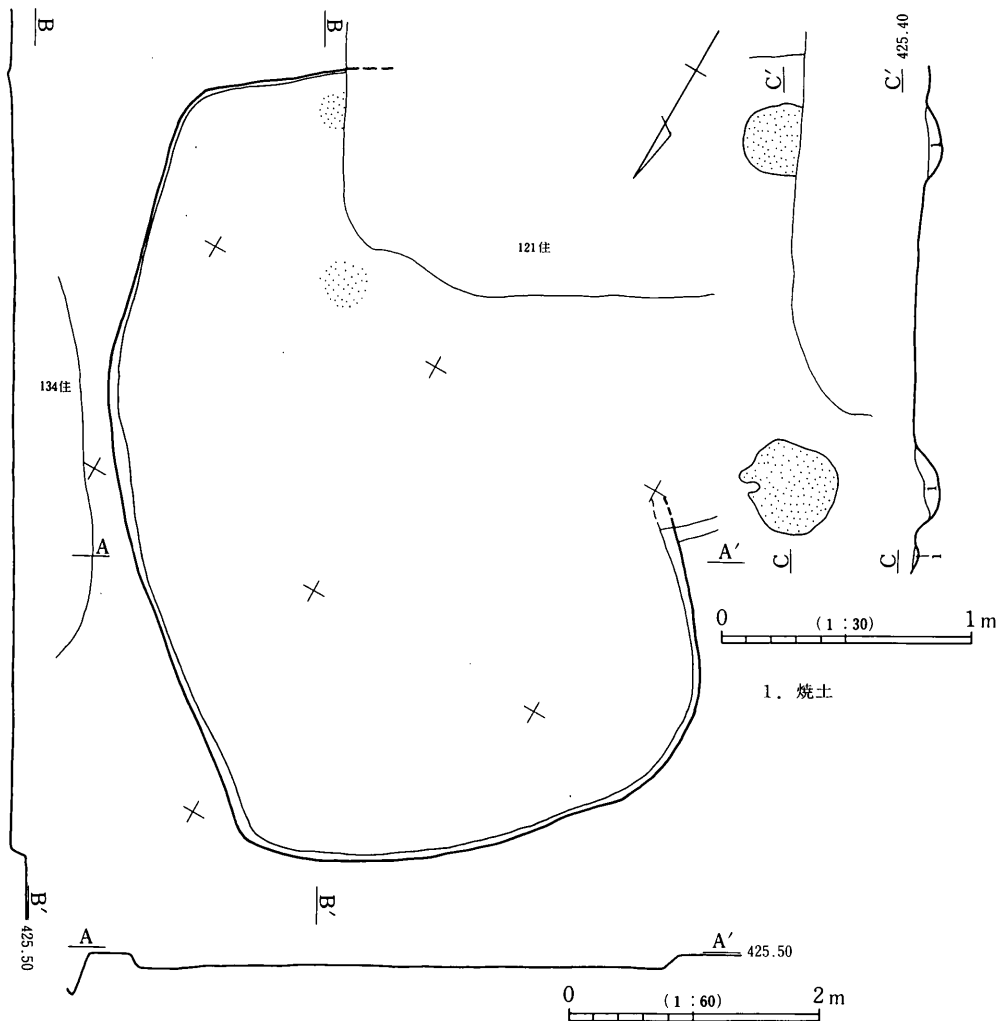
挿図82 138号住居址及び周辺囲溝址・ピット

④ 142号住居址 (挿図83)

XIU18r を中心にして検出した。弥生時代後期の121号住居址に切られ、全体の3/4程を調査した。6.3×4.4m の丸みを帯びた隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向は N152°E を示す。壁高は16~2cm を測り、水田の造成により壁面上層は削平されたのか全体に浅い。床面は柔らかく不良で、極めてわかり難かった。炉址は北東壁寄りに位置する地床炉で、1m 程の間隔で2箇所検出された。南東側の炉址は直径28cm 円形、北西側の炉址は35×38cm の不整形円形を呈し、いずれも床面がわずかに凹んで全面に焼土が顕著に認められた。そのほかに、住居址関連施設は確認できなかった。

遺物は床面上から出土し、完形に復元できる甕等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



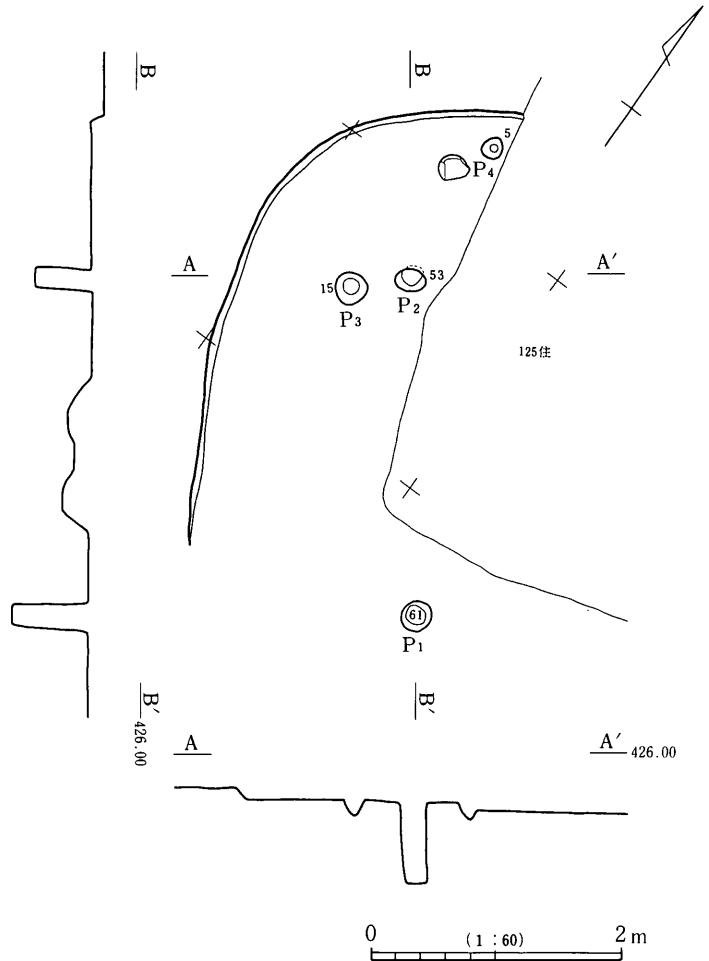
挿図83 142号住居址

⑤ 143号住居址 (挿図84)

XIU19y を中心にして検出した。古墳時代前期の125号住居址に切れ、全体の1/3程を調査した。南北方向が5.2mと推定される竪穴住居址で、平面形・主軸方向は不明である。壁高は10~1cmを測り、水田の造成により壁面上層は削平されている。床面はたたき状に堅く良好であるが、南側は削平されて残っていない。主柱穴はP1・P2で、そのほかに用途の特定できる施設は認められなかった。

遺物は床面上からわずかに甕の破片等が出土した。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



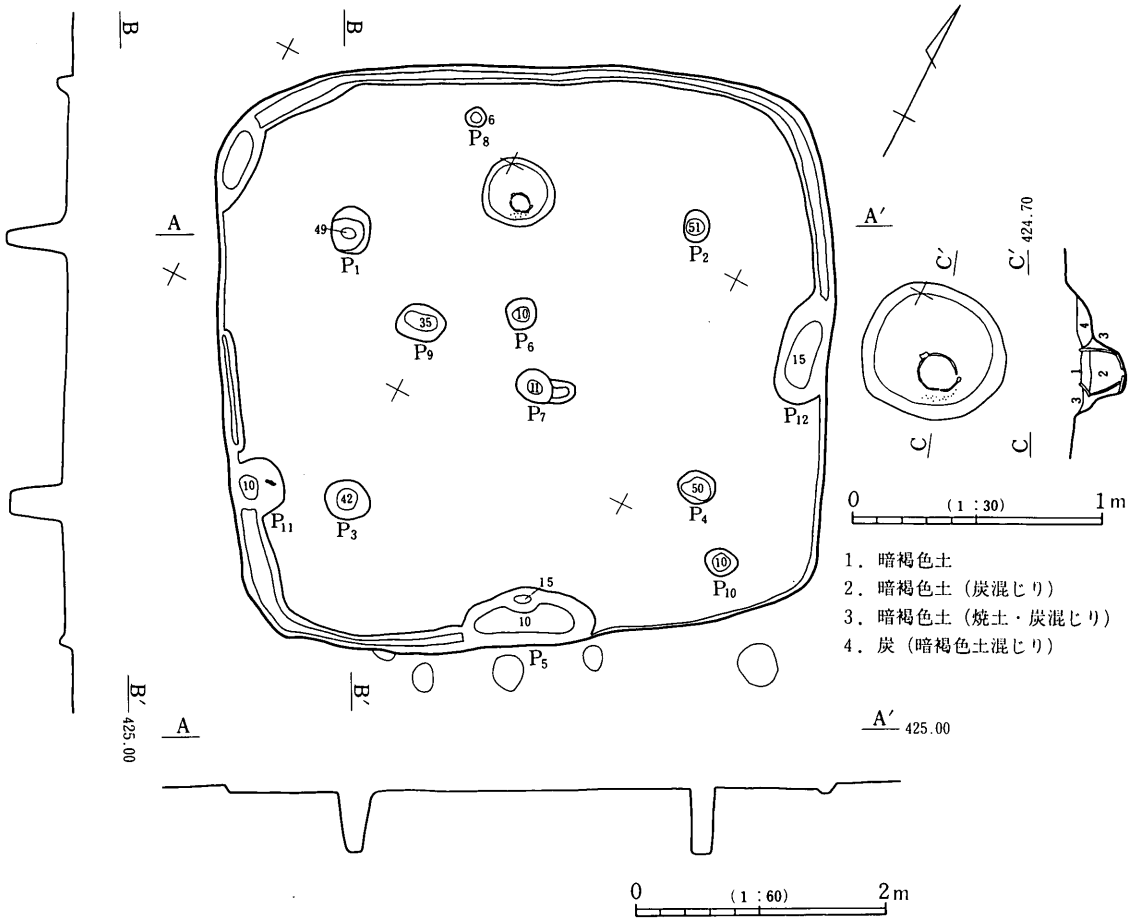
挿図84 143号住居址

⑥ 70号住居址 (挿図85)

XIT20x を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の145号住居址と重複するが、新旧関係は不明である。4.6×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN28°Wを示す。壁高は8~2cmを測り、上面を水田の造成で削平されている。周溝が西隅から北西壁中間までの壁下と南東壁中央やや西隅寄りから南東壁中央の壁下に認められ、幅24~10cm・深さ7~3cmを測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央に小穴を伴うP5は入口部、炉址と入口部の間に2個の浅い穴は間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間やや北西壁寄りに位置する土器埋設炉で、床面を54×57cmの円形に掘り凹め、口縁部と底部を欠く甕を埋め、底には土器片が敷いてあった。埋設土器の南西側に焼土が、炉址の堀り込み全体に薄く炭が認められた。

遺物は床面上から甕等が出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



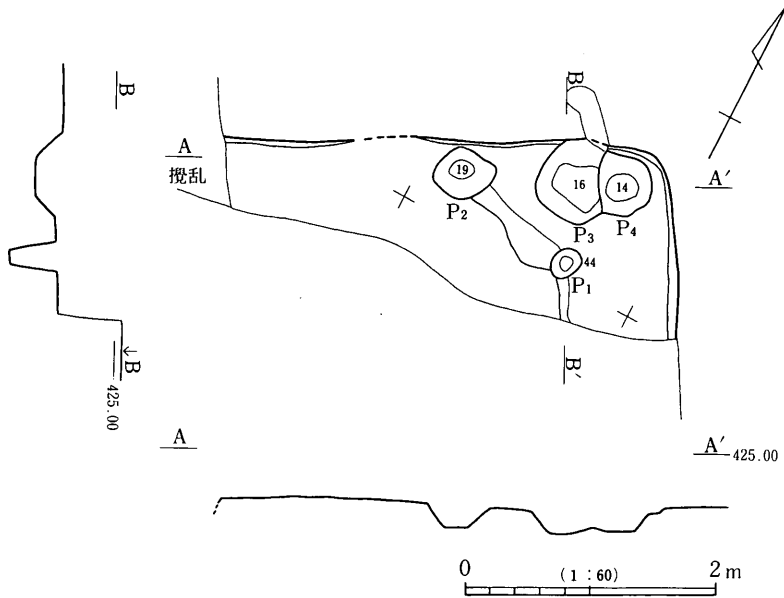
挿図85 70号住居址

⑦ 71号住居址 (挿図86)

XIT18v 付近で検出した。南側が用地外となり、わずかな調査にとどまった。近代の攪乱に切られる。規模・平面形とも不明の竪穴住居址で、主軸方向も分からない。壁高は8~2cmを測り、上面を水田の造成で削平されている。床面は全体に柔らかく、特に壁際は不良である。主柱穴はP1で、そのほかの柱穴の用途は特定できなかった。

遺物は床面上からわずかに出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



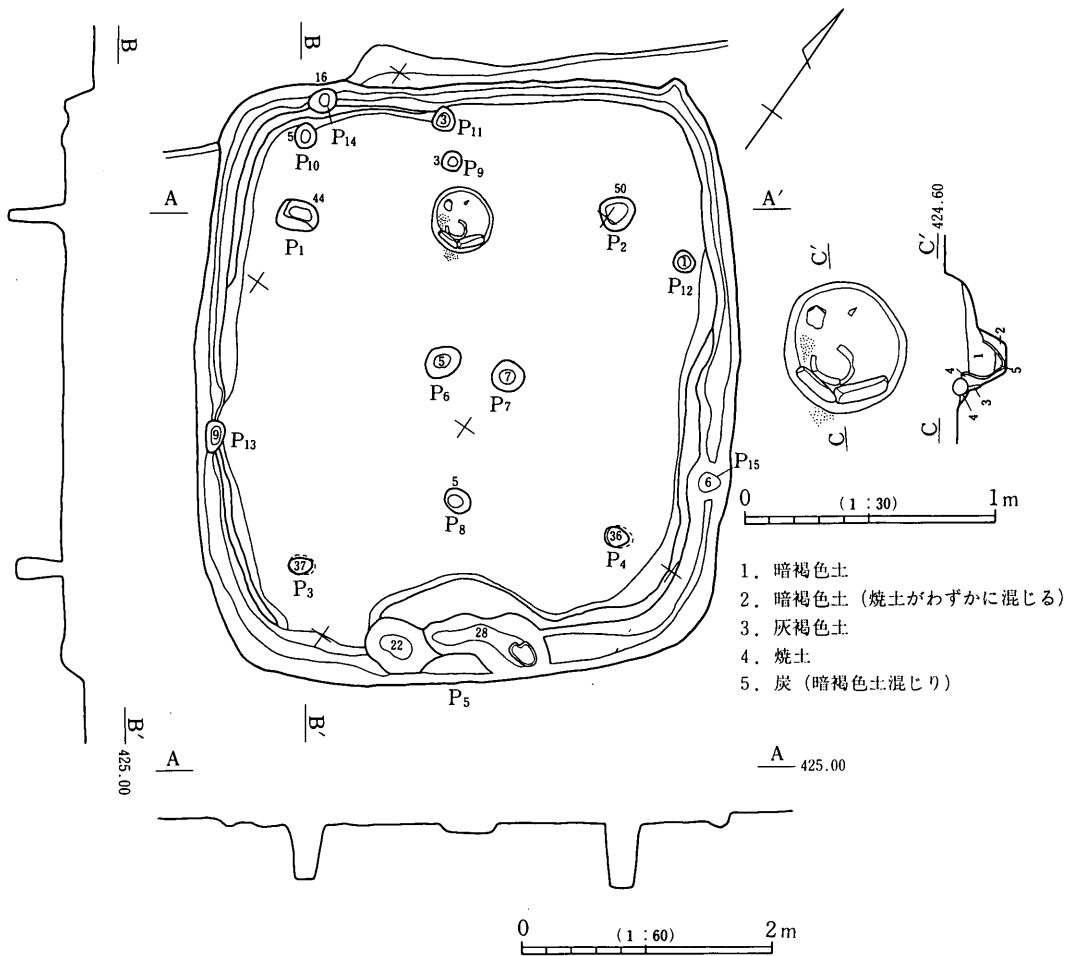
挿図86 71号住居址

④ 72号住居址 (挿図87)

XIU22b 付近で検出し、全体を調査した。4.7×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN35°Wを示す。壁高は23～9cmを測り、緩やかな壁面をなす。上面を水田の造成で削平されており、北東側にその段差が認められた。周溝が壁下ほぼ全面に認められ、北側を除いて土手状縁部がある。幅30～16cm・深さ5～1cmを測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。支柱穴はP1～P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央にある土手状縁部を伴うP5は入口部と考えられ、台石が中に落ち込んでいた。P6～P8は間仕切り、P13・P14は支柱を埋めたと考えられる。炉址は北西側支柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を51×49cmの円形に掘り凹め、口縁部の一部を欠く甕を埋め、2個の石をくの字状に組み合わせて炉縁石としている。埋設土器の周辺に焼土が、底には炭が認められた。

遺物は床面上から甕等が出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



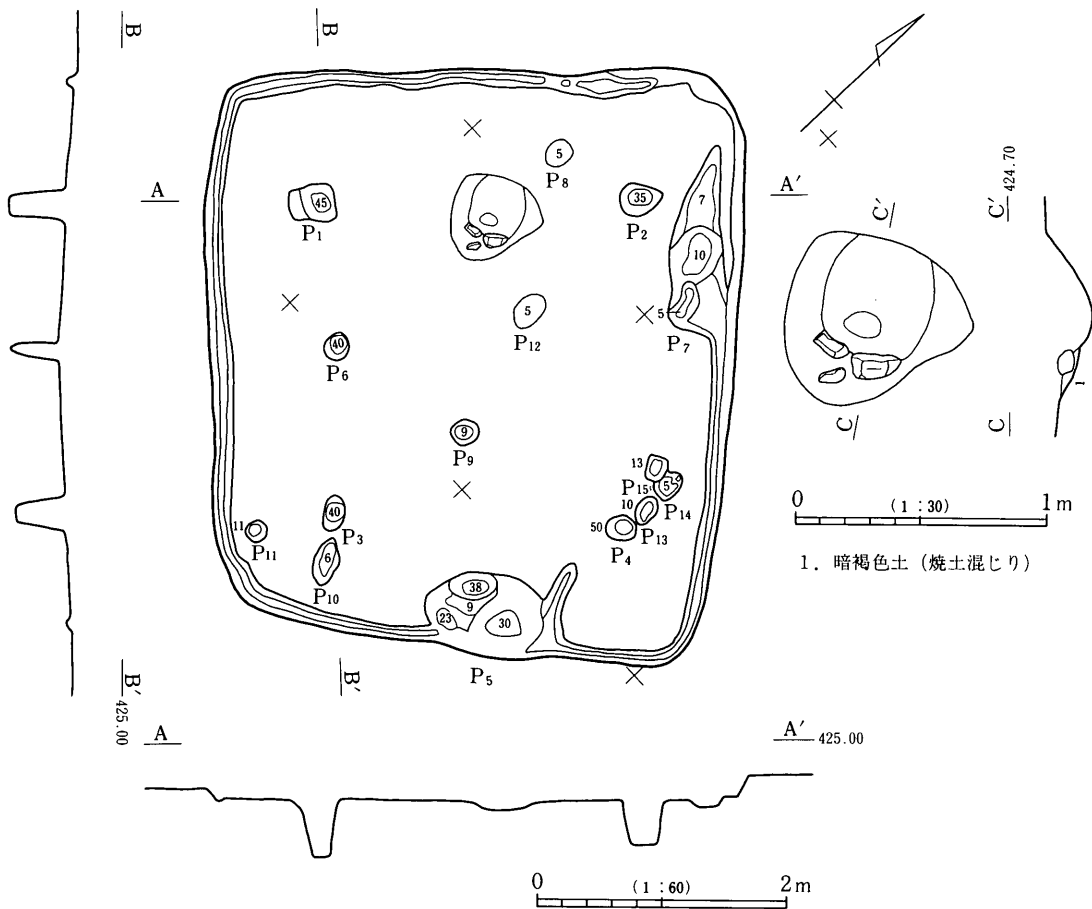
挿図87 72号住居址

⑨ 73号住居址 (挿図88)

XIU25b を中心にして検出し、全体を調査した。4.6×4.2m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N45°W を示す。壁高は14~1cm を測り、上面を水田の造成で削平されいる。周溝が北隅を除いた壁下ほぼ全面に認められ、幅32~7cm・深さ7~1cm を測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。支柱穴は P1~P4 で、P1・P3 は主軸方向、P2・P4 は主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下やや東隅寄りに位置する小穴を伴う P5 は入口部と考えられる。炉址は北西側支柱穴中間に位置し、床面が68×74cm の不整形に凹み、中央部が深く掘られていた。炉縁石を有する土器埋設炉であったのを、住居址廃棄時に土器を抜いたものと考えられる。

遺物は少なく、土器の破片が主体である。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



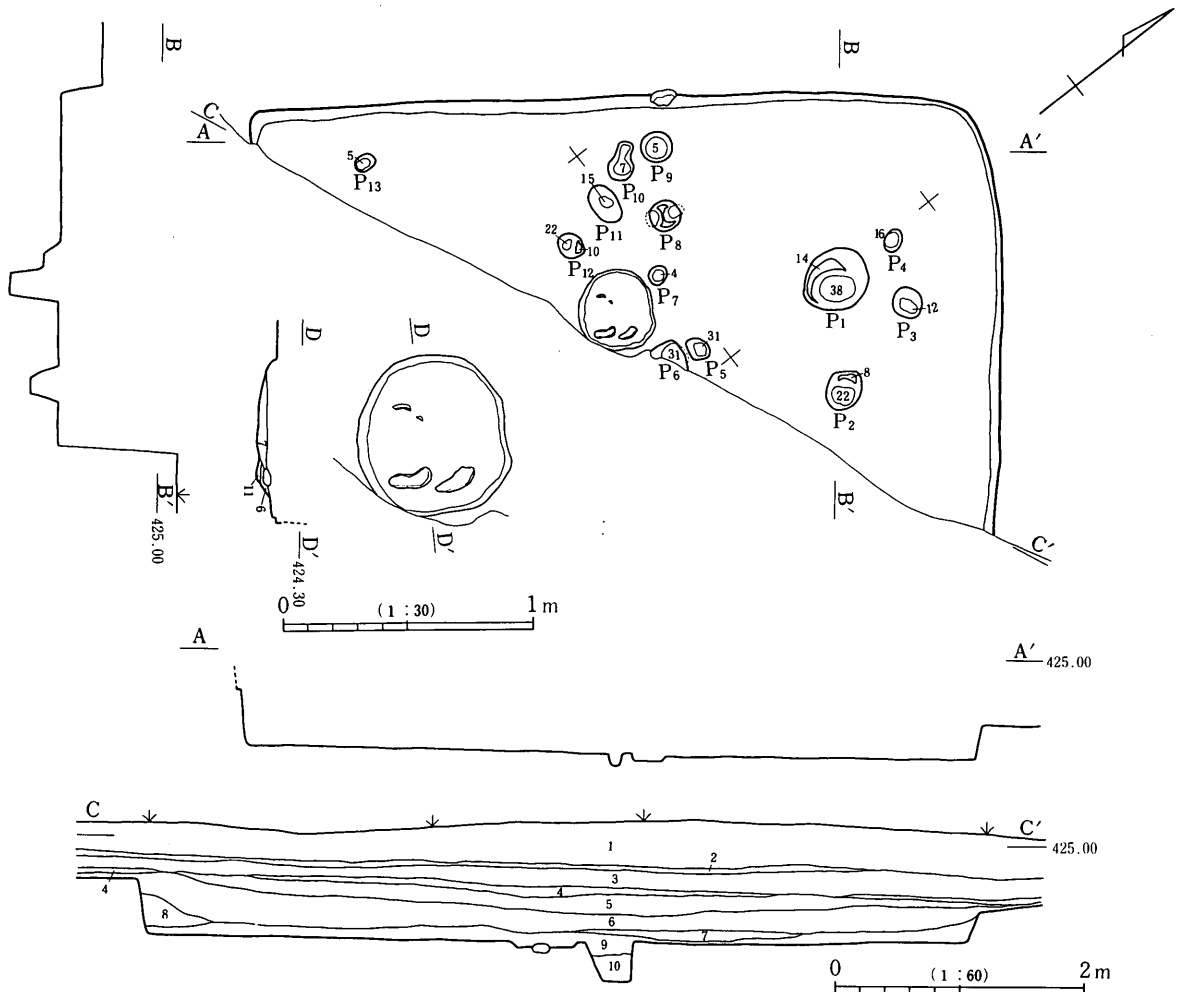
挿図88 73号住居址

⑩ 75号住居址 (挿図89)

XIIU3yを中心にして検出し、南側が用地外で全体の1/3程を調査した。主軸に直交する方向の長さが6.0mを測る竪穴住居址で、主軸方向は推定でN51°Wを示す。壁高は45~24cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴は北側のP1のみ検出した。炉址は北西側主柱穴中間に位置すると考えられる炉縁石を有する地床炉で、床面を62×59cmの円形に浅く掘り凹めていた。焼土・炭はほとんど認められなかった。覆土中に30~10cmの石が入っていた。

遺物は少なく、覆土中から石とともに出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 青灰色土 | 7. 暗褐色土 (炭混じり) |
| 2. 青灰色土 (鉄分沈殿、床土) | 8. 暗灰色土 |
| 3. 暗青灰色土 | 9. 暗褐色土 (茶褐色土混じり) |
| 4. 暗青灰色土 (鉄分沈殿、床土) | 10. 灰色砂質土 |
| 5. 暗灰褐色土 | 11. 焼土 |
| 6. 暗褐色土 | |

挿図89 75号住居址

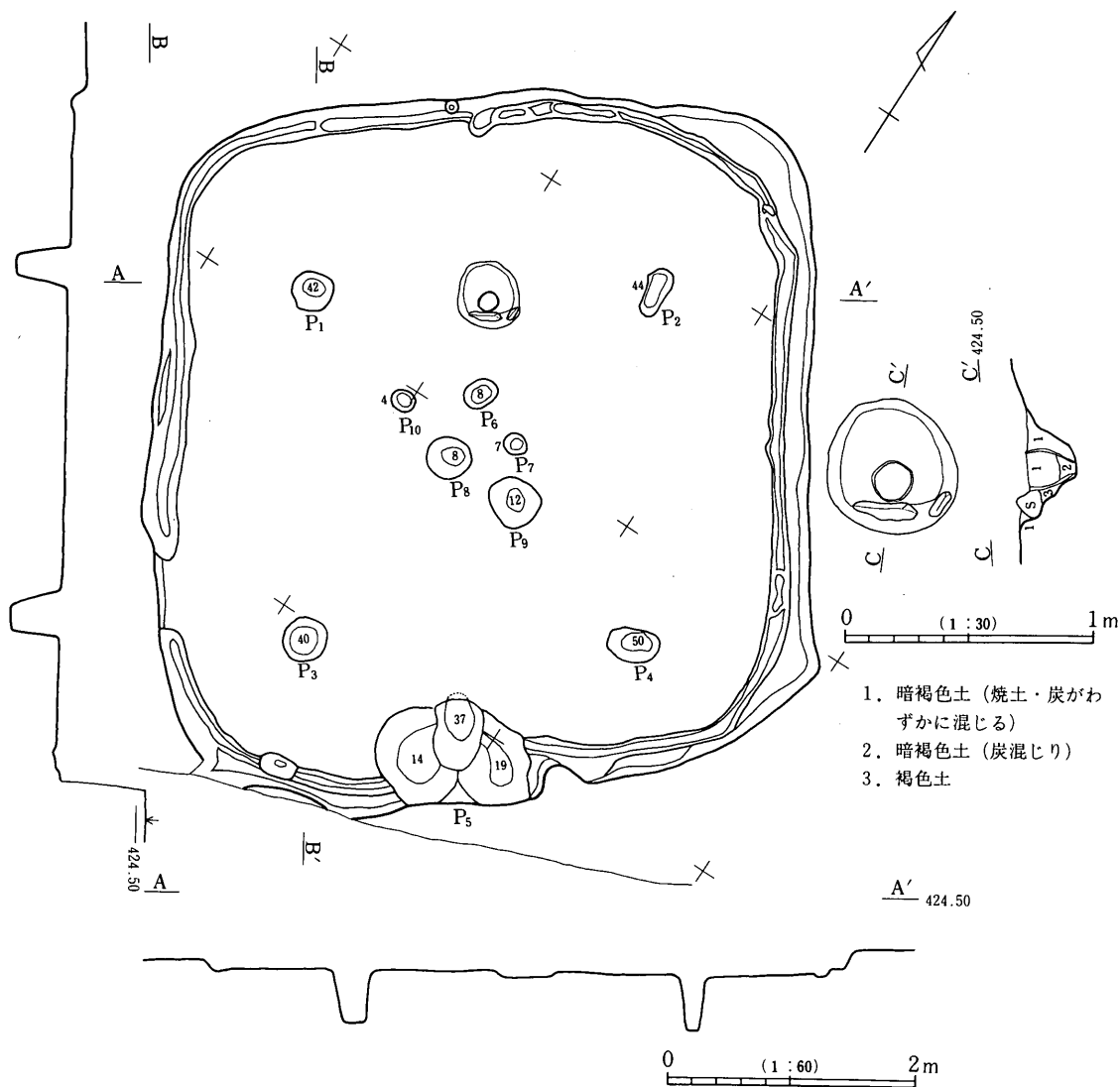
⑪ 76号住居址 (挿図90)

XIIU5c を中心にして検出し、全体を調査した。5.6×5.4m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N30°W を示す。壁高は16~1cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。上面を水田の造成で削平されている。周溝が南西側の一部を除いて壁下全面に認められ、北西側では壁よりやや内側で検出された。幅28~8cm・深さ14~2cm を測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴は P1~P4 で、P2 の床面上には17個の石と壺の破片がみられた。南東壁下中央に位置する

P5は、3個の穴があり入口部と考えられる。そのほかの穴は、住居址中央部に集中する。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を54×53cmの円形に掘り凹め、口縁部と底部を欠く甕を埋め、2個の石をくの字状に組み合わせて炉縁石としている。埋設土器の底に炭が認められた。北西側の周溝と壁に間隔がみられるのは、住居址の拡張を示す可能性がある。

遺物は住居址中央部の床面上から主体にして出土した。出土状況から、住居址廃棄後の投棄が考えられる。

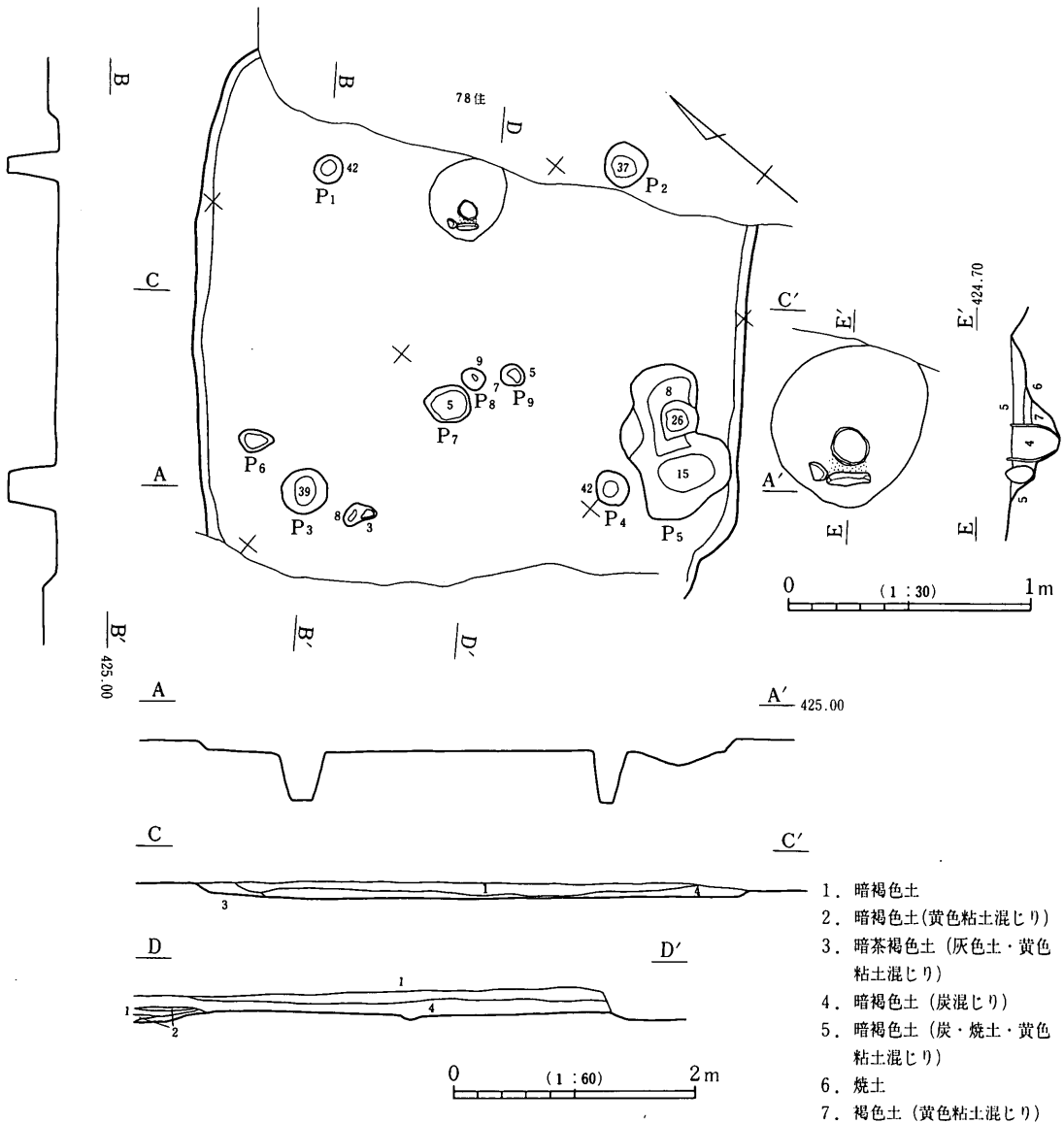
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



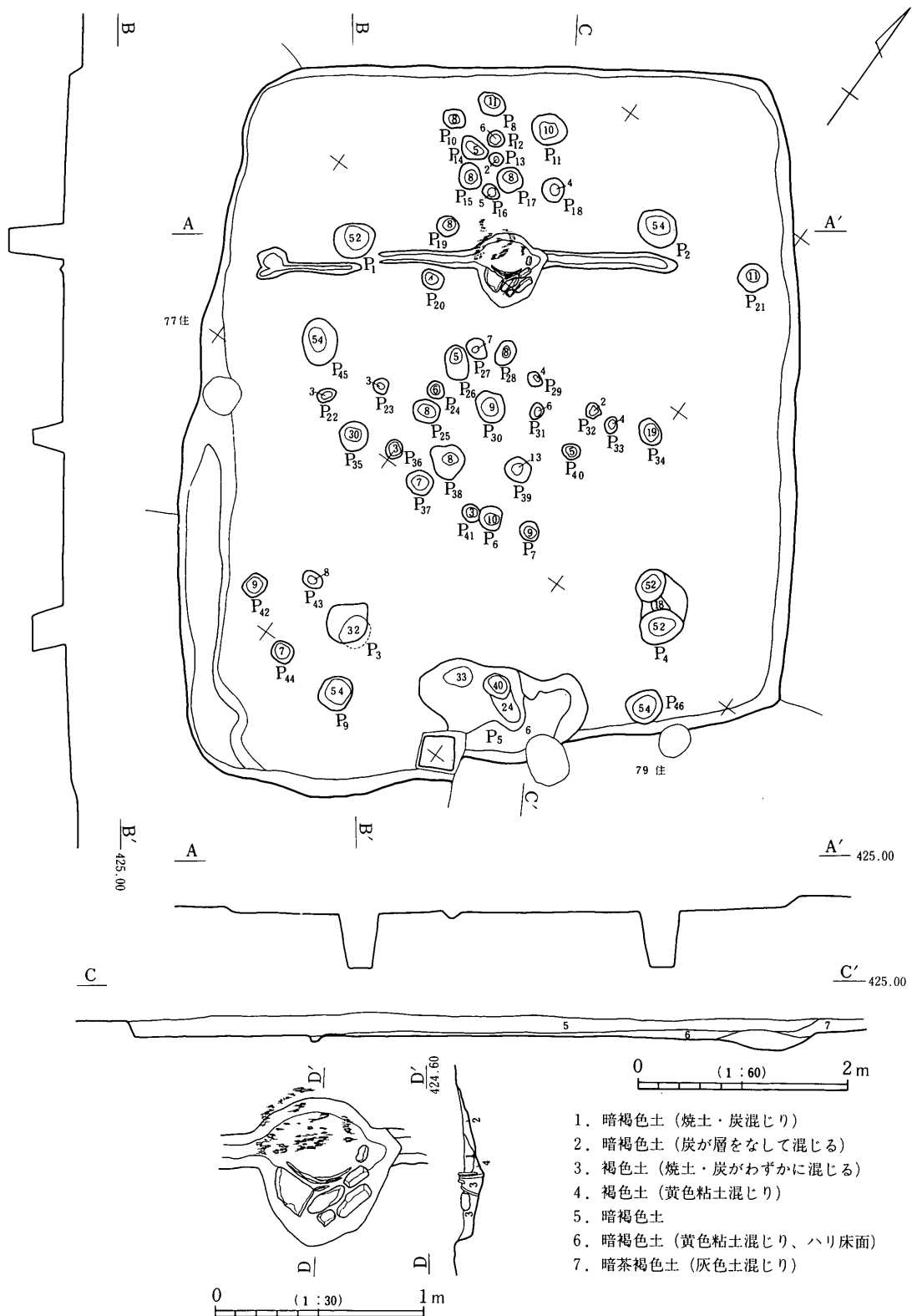
挿図90 76号住居址

⑫ 77号住居址 (挿図91)

XIIU8g を中心にして検出した。弥生時代後期の78号住居址に切られ、南西側はバックによる表土除去の際削ってしまい、全体の2/3程を調査した。主軸に直交する方向の長さが4.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN51°Eを示す。壁高は8~1cmを測り、上面を水田の造成で削平されている。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴はP1~P4で、主軸方向に細長い状態で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下南隅寄りに位置するP5は、3個の穴があり入口部と考えられ、中に甕の破片が入っていた。炉址は北東側主柱穴中間に位置する



挿図91 77号住居址



1. 暗褐色土 (焼土・炭混じり)
2. 暗褐色土 (炭が層をなして混じる)
3. 褐色土 (焼土・炭がわずかに混じる)
4. 褐色土 (黄色粘土混じり)
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土 (黄色粘土混じり、ハリ床面)
7. 暗茶褐色土 (灰色土混じり)

挿図92 78号住居址

炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を66×63cmの円形に掘り凹め、口縁部と底部を欠く甕を埋め、2個の石を組み合わせて炉縁石としている。埋設土器と炉縁石の間に焼土、埋設土器の中に炭が認められた。床面上には、石と炭が散布し、特に西側には18個の石が集中し、完形の壺が一緒に出土した。

遺物の出土量は多くないが、住居址床面上から炭・石とともに出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑫ 78号住居址（挿図92）

XIIU10hを中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の77号住居址・79号住居址を切る。6.5×5.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN36°Wを示す。壁高は24～2cmを測り、全体にやや緩やかな壁面をなすが、北西壁はほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状に堅く極めて良好である。北東側を主体に現床面より5cm程上に黄色粘土のハリ床面を認めた。主柱穴はP1～P4・P9で、P4は2個の穴がありP9と対応して建替の時に使われた可能性がある。南東壁下中央に位置するP5は、入口部と考えられる。そのほかの穴は、炉址北東側と住居址中央部に集中する。炉址から両側に北西壁と平行する方向で小溝が伸びており、間仕切りと考えられる。炉址は北東側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を70×62cmの円形に掘り凹め、壺の胴部片を炉縁石の北西側に3～4重に埋めている。炉縁石は6個の石を組み合わせている。周辺に焼土と炭が認められた。南東壁の南側が2段の落ち込みをなしており、前述した主柱穴・ハリ床の状況を加えると、建替が想定できる。

遺物の出土量は少なく、覆土中から土器の破片等が出土した。

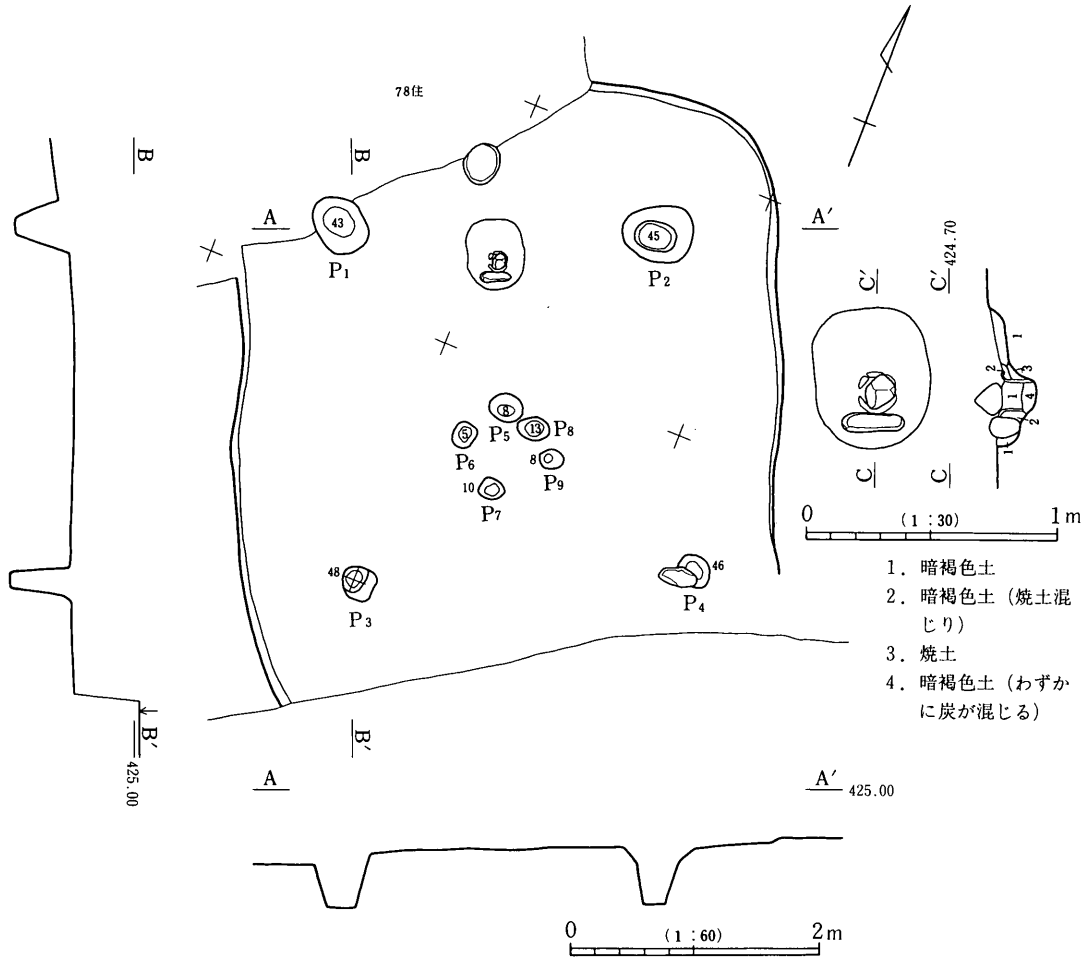
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑬ 79号住居址（挿図93）

XIIU12fを中心にして検出した。弥生時代後期の78号住居址に切られ、南側が水田の土手で調査できなくて、全体の3/4程を調査した。主軸方向の長さは推定で4.9×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN21°Wを示す。壁高は10～1cmを測り、南側是水田の造成で削平され、残ってない箇所もある。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴はP1～P4で、P1・P2・P4は主軸に直交する方向、P3は主軸方向に細長く検出され、割り材使用の柱が考えられる。そのほか浅い穴が住居址中央部に集中し、炉址北西側に台石がある。炉址は北西側柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を55×45cmの楕円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋める。埋設土器周辺に焼土、内部に炭がわずかに認められた。埋設土器の上に石が1個置かれていたが、意図的なものかどうかの判断はできなかった。

遺物の出土量は少なく、覆土中から土器の破片等が出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図93 79号住居址

⑭ 80号住居址 (挿図94)

XIIU7o を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の81号住居址・82号住居址・90号住居址を切る。4.5×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN35°Wを示す。壁高は16~3cmを測り、上層は水田の造成で削平されている。周溝が南西壁した北側に認められ、幅13~16cm・深さ5~2cmを測る。床面はたたき状に堅く極めて良好で、81号住居址覆土中にハリ床が認められ、両者の切り合い関係を把握する上での決め手となった。主柱穴はP1~P4で、P2以外は主軸に直交する方向に細長く検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央に位置するP5は、その西側にある斜めに掘られるP6とともに入り口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を60×62cmの円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋める。炉縁石は3個の石を並べ、埋設土器内部底に炭が認められた。

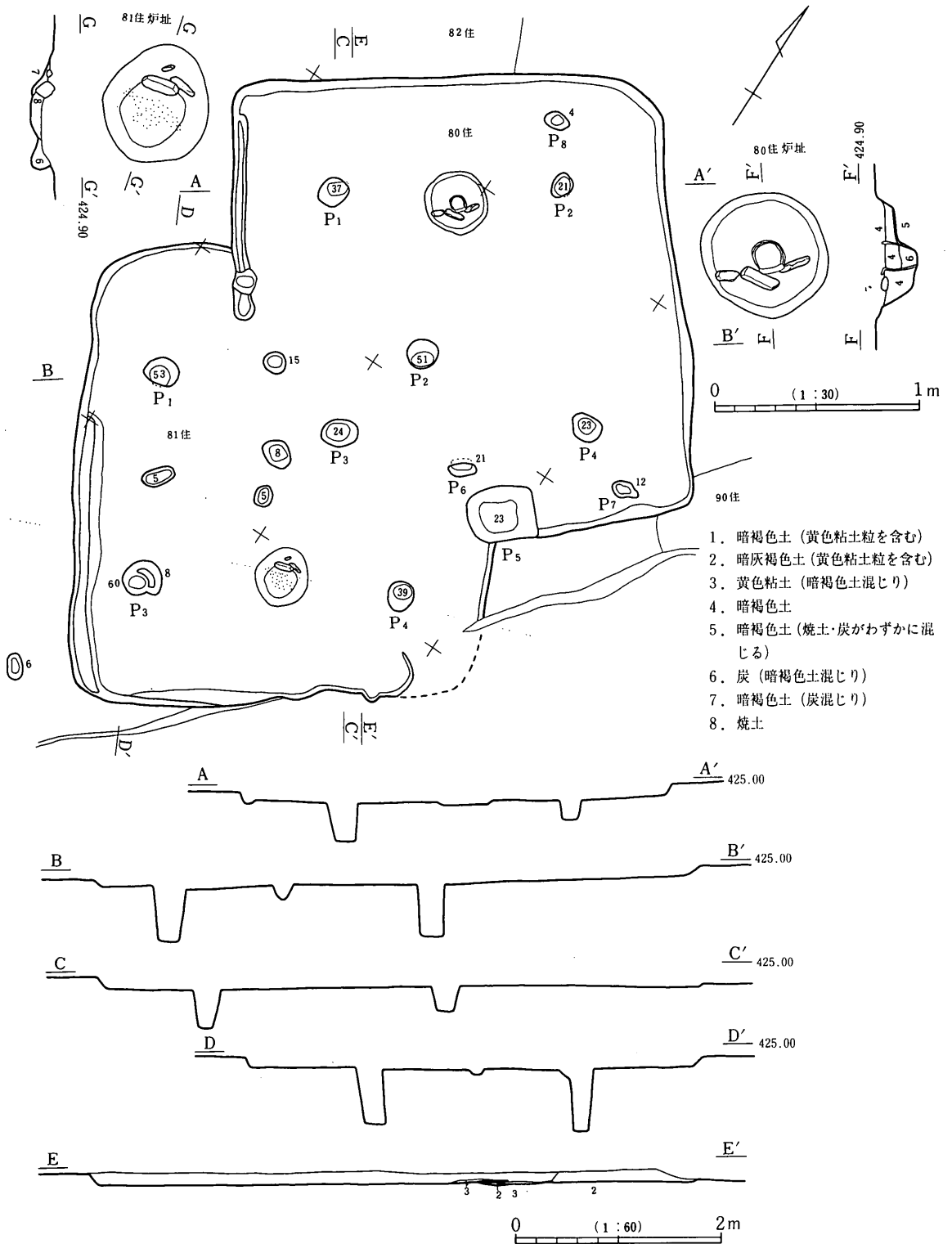


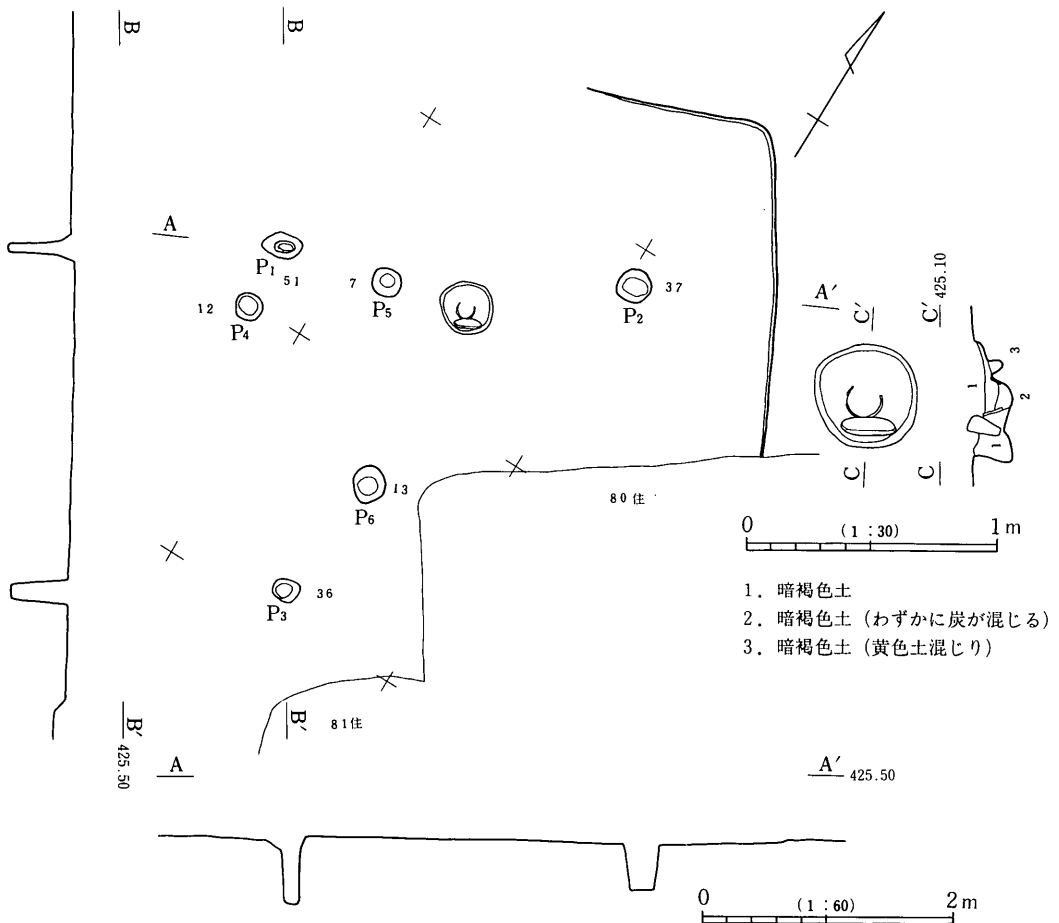
插图94 80号住居址・81号住居址

遺物の出土量は少なく、覆土中から土器の破片等が出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑮ 81号住居址 (挿図94)

XIIU7n を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の82号住居址を切り、弥生時代後期の80号住居址に切られる。4.5×4.1mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN150°Eを示す。壁高は12~2cmを測り、上層と東隅は水田の造成で削平されている。西隅寄りを除いた南西壁に、段が認められる。床面から4~1cmの高さで、幅14~8cmを測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向に細長く検出され、割り材使用の柱が考えられる。炉址は南東側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面が56×



挿図95 82号住居址

51cmの円形に浅く凹んで、底に焼土が顕著に認められた。

遺物の出土量は少なく、覆土中から土器の破片等が出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑩ 82号住居址 (挿図95)

XIIU5pを中心にして検出した。弥生時代後期の80号住居址・81号住居址に切られ、全体の2/3程を調査した。規模不明の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN32°Wと推定される。壁高は4cm以下で、水田の造成で削平されていて確認できない部分が多い。床面はたたき状に堅く良好であるが、南側は分かりにくく、削平されている可能性がある。支柱穴はP1～P3で、東側の支柱穴は80号住居址に切られる箇所にあったと考えられる。炉址は北西側支柱穴中間やや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を41×41cmの円形に掘り凹め、甕の胴部を埋める。埋設土器内側の底にわずかに炭が混じっていた。

遺物の出土量は極めて少ない。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑪ 83号住居址 (挿図96)

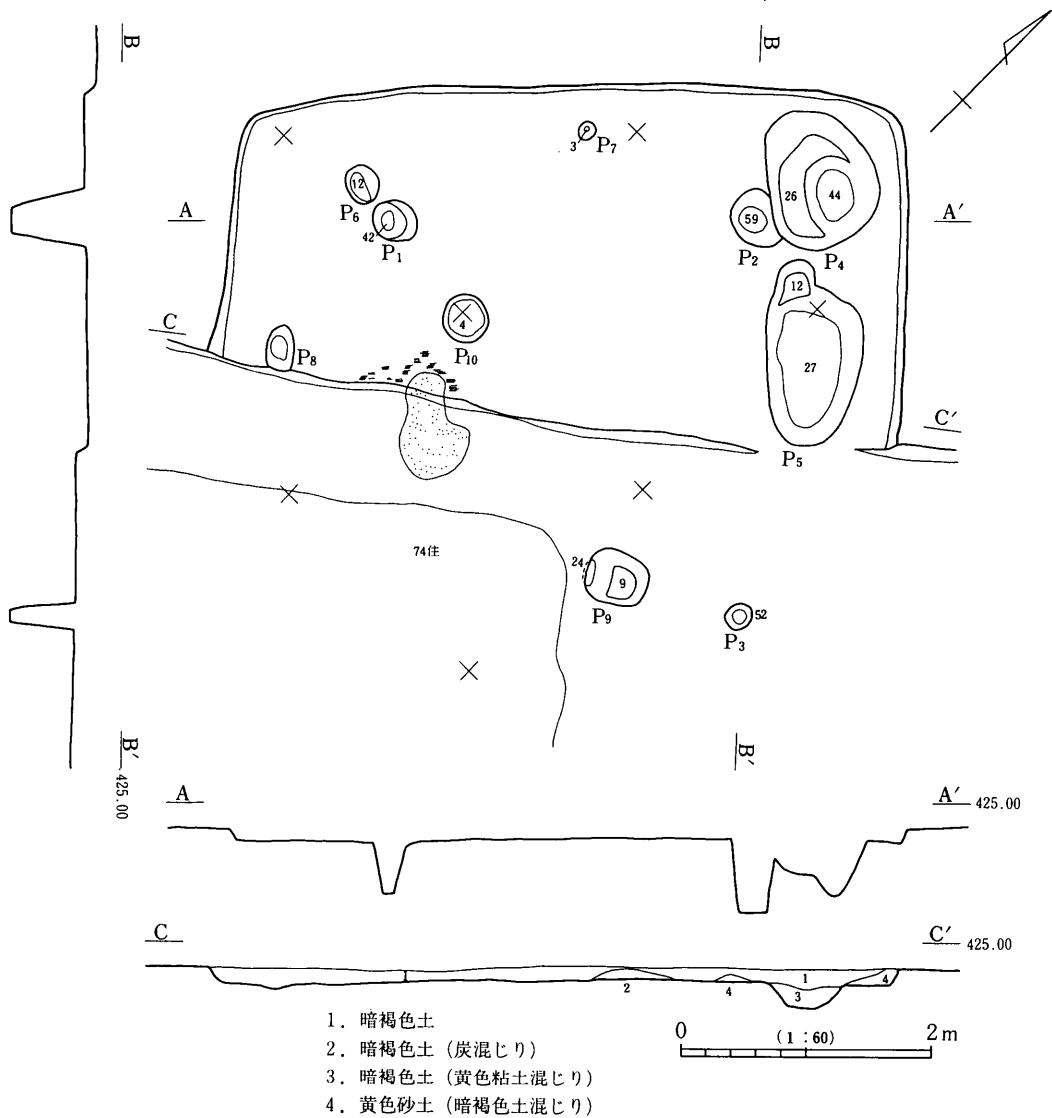
XIIU3hを中心にして検出した。古墳時代後期の74号住居址に切られ、弥生時代後期の86号住居址を切り、全体の2/3程を調査した。北西南東方向の長さは推定で5.2×5.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は13～6cmで、水田の造成で削平されており、南東側は壁は残っていない。床面はたたき状に堅く良好であるが、南東側は削平されている。支柱穴はP1～P3で、南側の支柱穴は74号住居址に切られる箇所にあったと考えられる。北東側に位置するP4・P5の役割は特定できなかった。炉址は不明であるが、南西側の床面上に焼土が広がる箇所があり、周囲には炭も認められた。ここが炉址である可能性がある。

遺物の出土量は極めて少ない。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑫ 85号住居址 (挿図97)

XIU25gを中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。古墳時代後期の85号住居址に切られる。4.5×3.9mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN39°Wを示す。壁高は16～6cmで、やや緩やかな壁面をなし、上面は水田の造成で削平される。床面はたたき状に堅く極めて良好である。支柱穴はP1～P4で、主軸方向に細長い状態で検出され、割り材使用の柱が考えられる。P4の床面上には石が置かれていた。支柱を抜いた後に置いたと考えられる。南東側支柱穴中間から南東壁際に位置するP5・P6・P7は入口部、炉址から入口部の中間に直線的に並ぶP8・P9・P10は間仕切りと考えられる。炉址は北西側支柱穴中間やや南東寄り位置する土器埋設炉で、甕の胴部と

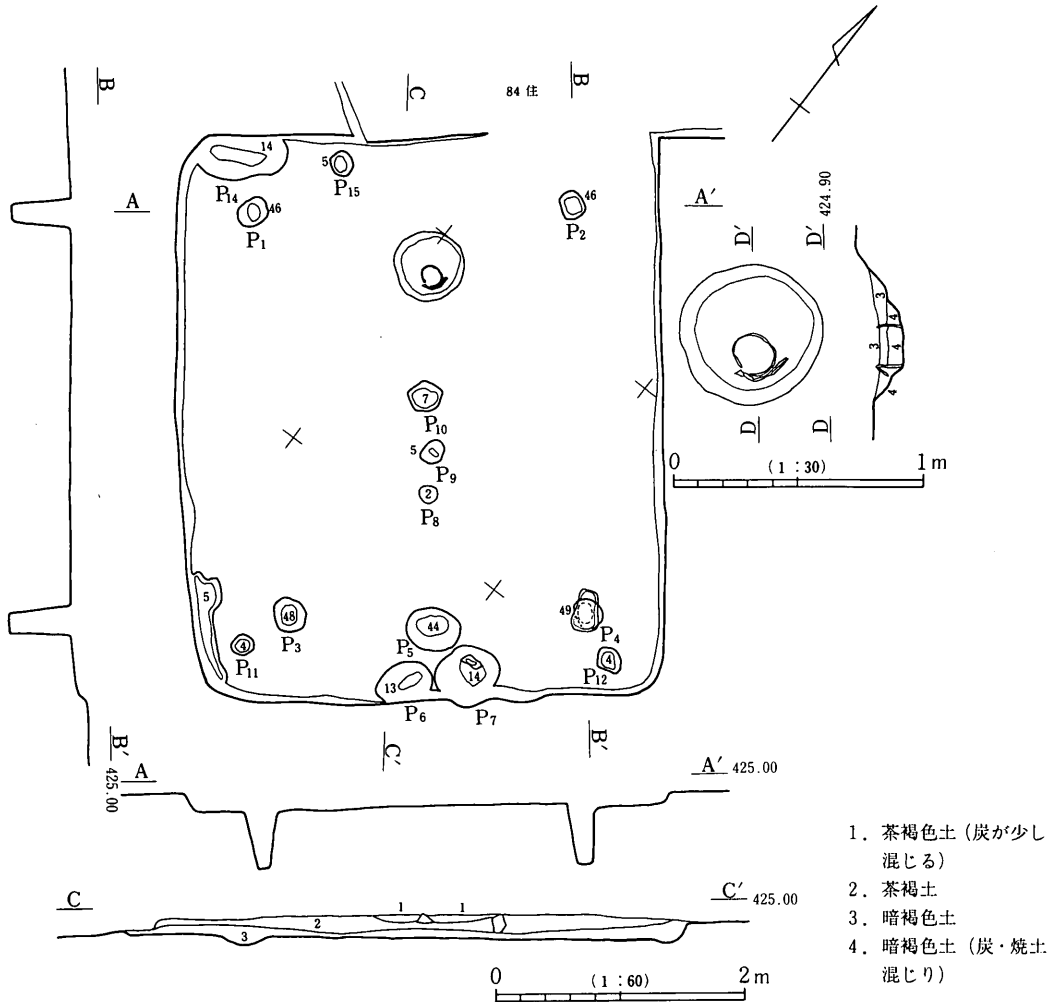


挿図96 83号住居址

その南西側には甕の破片を埋めて一部を二重としている。埋設土器内部に炭が認められた。

遺物の出土量は少なく、主に床面上から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



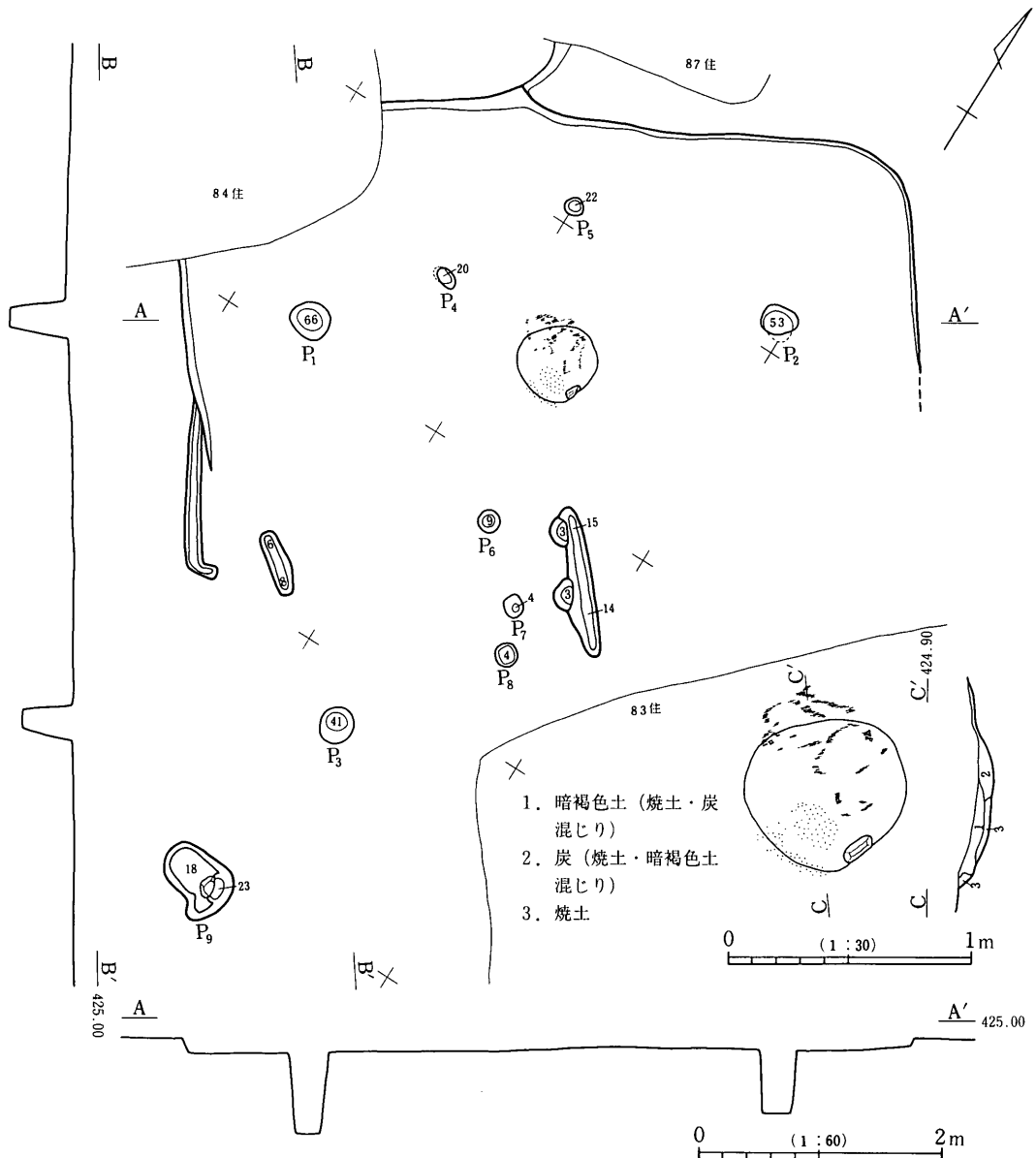
挿図97 85号住居址

⑬ 86号住居址 (挿図98)

XIIU1i を中心にして検出した。弥生時代後期の83号住居址に切られ、全体の3/4程を調査した。主軸方向が推定で6.7×6.0mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN32°Wを示す。壁高は北西壁の一部が27cmを測るが大部分は6cm以下で、水田の造成で削平されていて確認できない部分が多い。床面は全体に柔らかく不良である。主柱穴はP1～P3で、東側の主柱穴は83号住居址に切られる箇所にあったと考えられる。P9と床面上にみられる小溝は、本址と直接関連しないと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間やや内側に位置する炉緑石を有する地床炉で、床面が61×67cmの円形に浅く凹み、底に焼土が顕著に認められた。周辺には炭が広がっていた。

遺物の出土は少なく、土器の破片等がある。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図98 86号住居址

⑳ 87号住居址（挿図99）

XIU24k を中心にして検出し、全体の3/4程を調査した。古墳時代後期の84号住居址に切られ、弥生時代後期の88号住居址を切る。5.7×5.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN 3°Eを示す。壁高は15~1cmを測り、上面を水田の造成で削平されている。周溝が南壁の西寄りを除いて全面で確認され、幅30~5cm・深さ11~2cmを測る。周溝部分には焼土・炭が認められた。床面はたたき状に堅く良好で、東側はハリ床となる。主柱穴はP1~P4である。南壁南東隅付近に位置するP5・P6は、測量用の杭が設置された箇所のため全面調査できなかったが、入

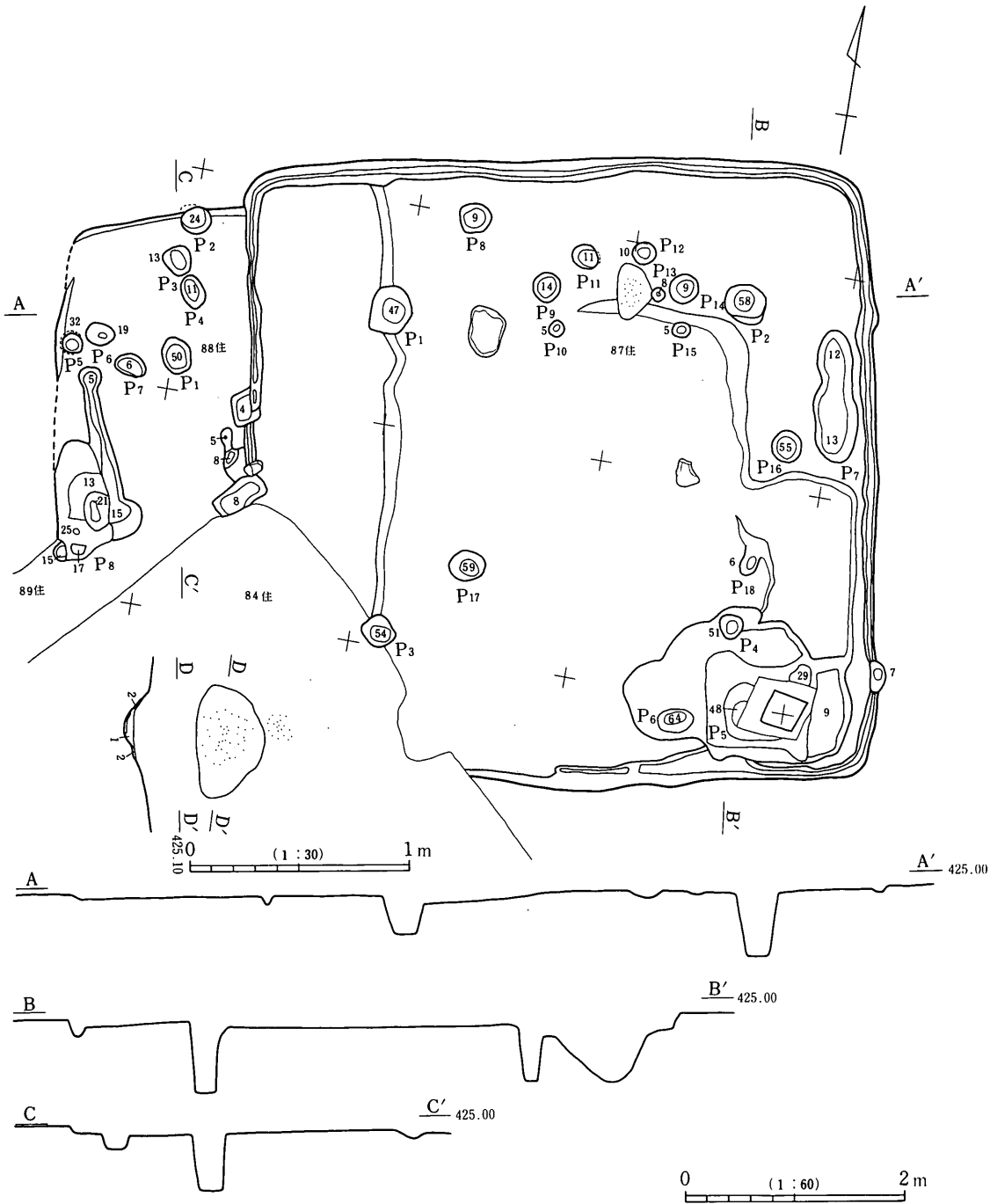


插图99 87号住居址·88号住居址

口部と考えられ、P6周辺のやや凹んだ範囲には砂利が敷いてあった。西側主柱穴から西側の壁までの間床面が5~2cm高くなっており、ベット状遺構と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間やや内側に位置する地床炉で、床面が51×31cmの不整楕円形に浅く凹み、焼土が顕著に認められ底に土器片が敷いてあった。ただし、土器敷炉といえるものではない。

遺物の出土は多くはないが、炉址周辺の床面上からまとまって出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

㉑ 88号住居址 (挿図99)

XIU23k 付近で検出し、全体の1/5程を調査した。弥生時代後期の87号住居址・古墳時代後期の84号住居址に切られ、弥生時代後期の89号住居址との重複関係は不明である。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は9~1cmを測り、ほとんど水田の造成で削平されて残存部分が少ない。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1のみ把握した。

遺物の出土は少ないが、床面上から磨製石斧が出土した。

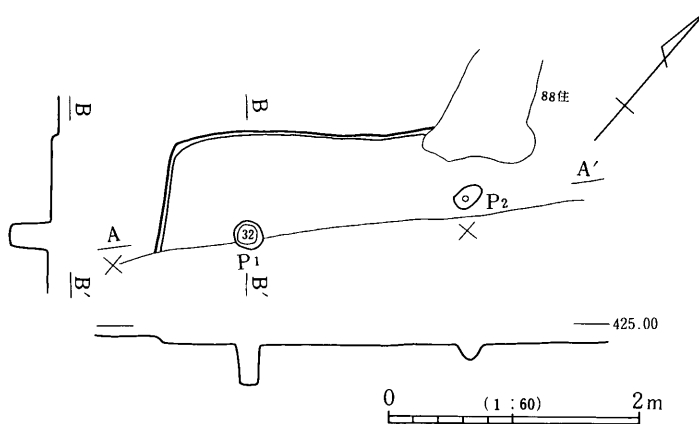
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

㉒ 89号住居址 (挿図100)

XIU22j 付近で検出した。古墳時代後期の84号住居址に切られ、弥生時代後期の88号住居址と重複し、ほんの一部を調査した。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は6~3cmを測り、上層を水田の造成で削平されている。床面は柔らかく不良である。主柱穴はP1のみ把握した。

遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



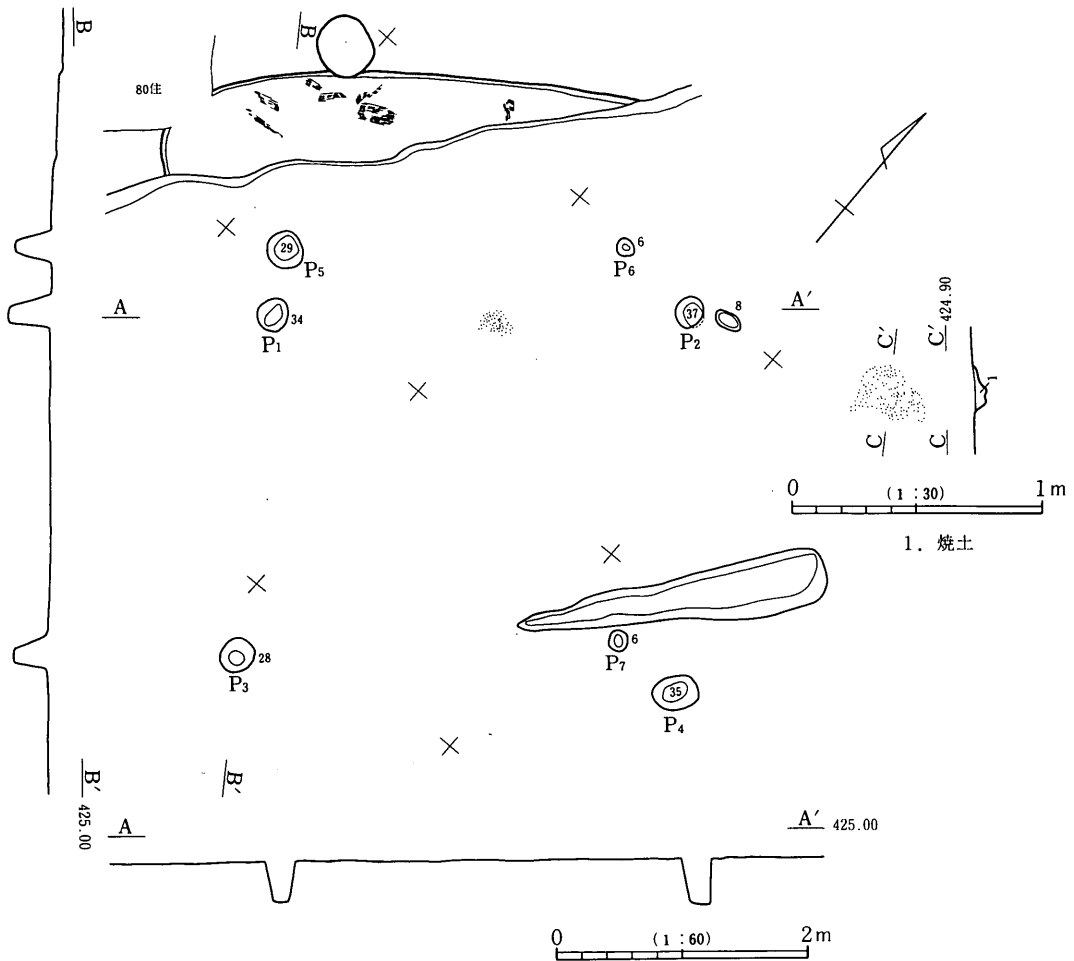
挿図100 89号住居址

㉓ 90号住居址 (挿図101)

XIIU10o を中心にして検出した。弥生時代後期の80号住居址に切られ、大部分が水田の造成で削平されており、北西側の一部を調査した。規模不明の隅丸方形と考えられる竪穴住居址で、主軸方向は N34°W を示す。壁高は 6~2cm を測り、上層を水田の造成で削平されている。床面は全体に柔らかく、ほとんどは削平されて残っていない。残存する床面上には炭が認められた。主柱穴は P1~P4で、数字は床面下の削平部分からの深さとなる。P7の北側にある溝址は、覆土の状況から近代以降の新しい時期と判断できた。炉址は北西側主柱穴中間に位置し、底の焼土のみを確認し、地床炉と考えられる。

遺物の出土は極めて少ない。

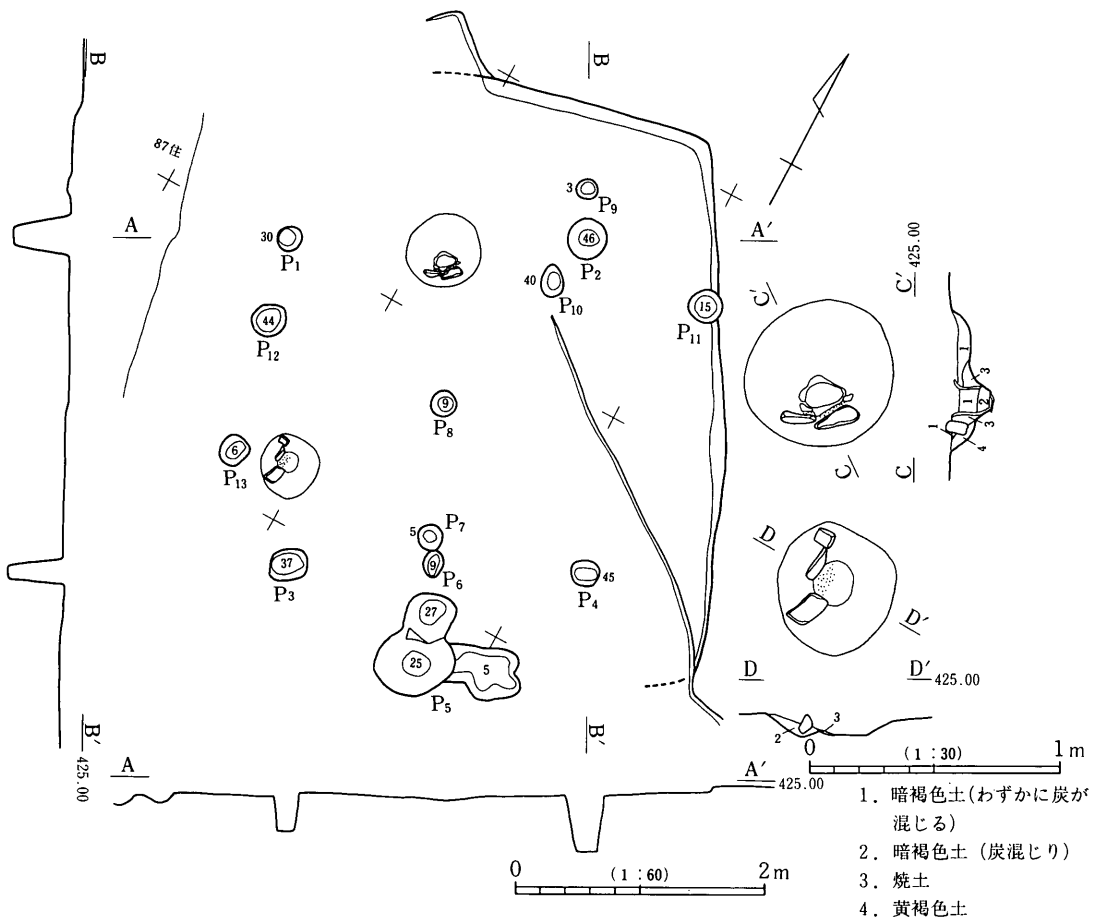
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図101 90号住居址

㊤ 91号住居址 (挿図102)

XIIU21 を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の80号住居址に切られ、弥生時代後期の92号住居址を切る。大部分が水田の造成で削平され、一部バックによる表土除去の際にも掘り過ぎてしまった。4.9×4.4m と推定される隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN26°Wを示す。壁高は13~3cmを測り、北東壁と北西壁の一部が残るのみである。床面はたたき状に堅く良好であるが、P10からP4の間床面はバックによる表土除去の際に削ってしまった。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向に細長い状態を検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東側に位置するP5は3個の穴がみられ、入り口部と考えられる。炉址と入口部の間に3個の穴が直線的に並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を58×59cmの円形に掘り凹め、底部を欠く甕を、底にも別個体の土器片を埋めてある。埋設土器周辺に焼土、内部の底には炭が認められた。炉縁石は2個の石を直線的に並べてある。南西側主柱穴中間のP3寄りに位置し炉縁石を有する地床炉がある。床面が49×47cmの楕円形に浅く掘り凹み、底に焼土が認められた。炉址の方向からみてもう1軒の竪



穴住居址が重複した可能性があるが、そのほかの住居址施設が認められなかったので、確証は得られなかった。

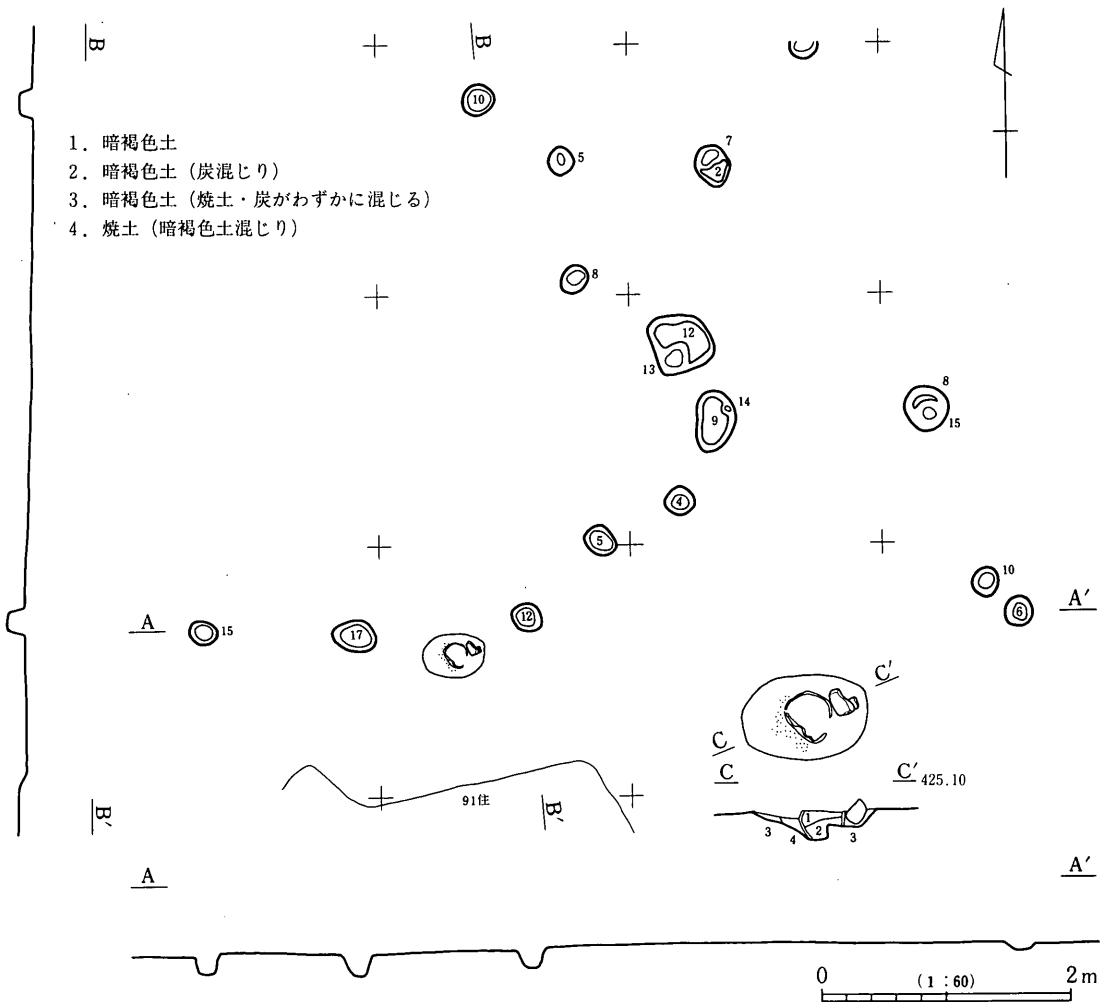
遺物の出土は少ない。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

㊸ 92号住居址 (挿図103)

XIIU2n で炉址を検出して竪穴住居址があることが判明した。弥生時代後期の91号住居址に切られる。規模・平面形・主軸方向とも不明で、床面も水田の造成で削平されて残っていない。周辺にはピットがあるが、直接本址に関連すると断定できるものはない。炉址は炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を50×34cmの楕円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋めている。上層は削平されて壊されていた。埋設土器西側に焼土、内部に炭が認められた。

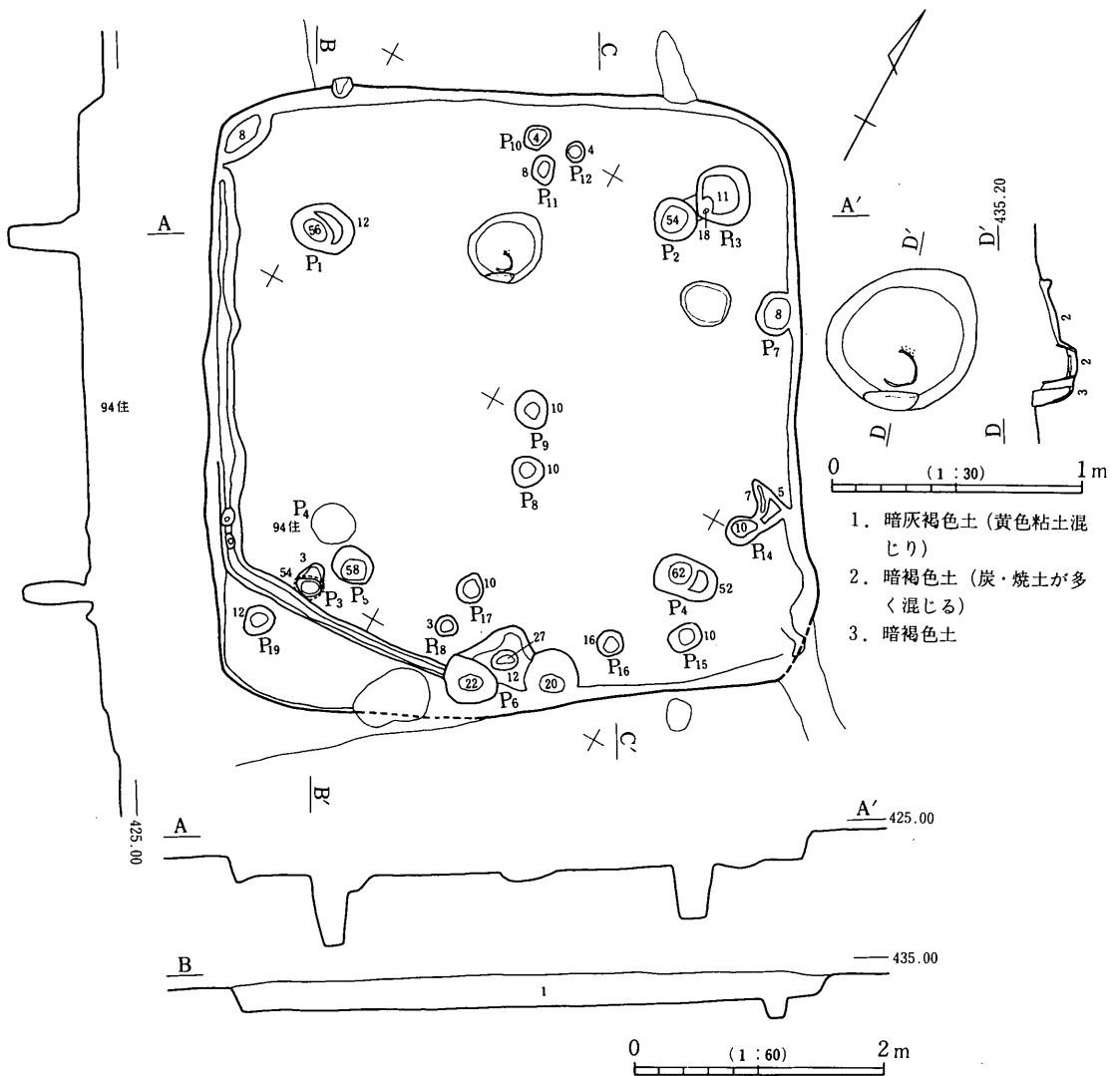
出土遺物は埋設土器の甕のみであり、それから弥生時代後期に位置づけられる。



挿図103 92号住居址及び周辺ピット

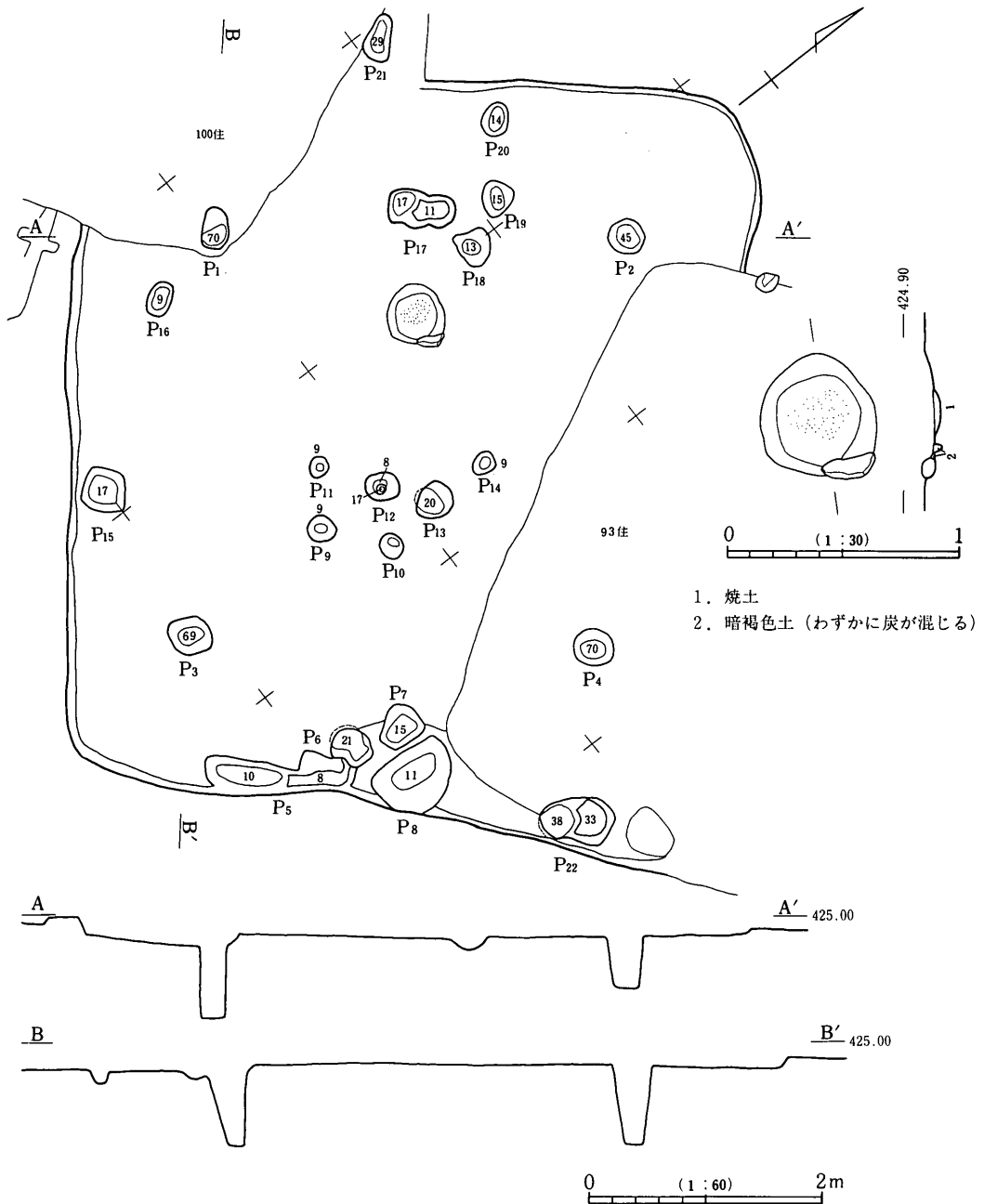
㊦ 93号住居址 (挿図104)

XIU16d を中心にして検出し、全体を調査した。古墳時代の溝址11に切られ、弥生時代後期の93号住居址を切る。4.9×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN28°Wを示す。壁高は25~11cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が南西壁下と南隅付近では壁下より内側に寄った位置に認められる。幅22~10cm・深さ9~5cmを測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。支柱穴はP1~P5で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東側の支柱穴は2個並ぶP3・P5と2段の掘り込みをなすP4で、住居址の建て替えが考えられる。南東壁下中央に位置するP6は、入口部と考えられる。炉址と入口部には間仕切



挿図104 93号住居址

りのP9・P10がある。P2の東側に台石がある。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を55×60cmの円形に掘り凹め、甕の胴部を埋めている。埋設土器周辺に



挿図105 94号住居址

焼土、底に炭が認められた。

遺物は炉址周辺の床面上から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

㊦ 94号住居址 (挿図105)

XIU15c を中心にして検出した。弥生時代後期の93号住居址・100号住居址に切られ、全体の $\frac{1}{4}$ 程を調査した。6.2×5.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN48°Wを示す。壁高は16～3cmを測り、緩やかな壁面をなし、上層を水田の造成で削平されている。南西壁は焼土・炭が認められ、壁面が焼けて堅くなっていた。床面はたたき状に堅く、焼けて固まっている部分があり、床面上ほぼ全面に細かな炭が薄く広がっていた。主柱穴はP1～P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央部に位置するP5～P8は入口部と考えられる。ほかに、住居址中央部に穴が集中する。P21・P22は本址に直接関係ないと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間やや内側に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を53×50cmの不整形に浅く掘り凹め、底には焼土が認められた。床面や壁面の状況から火事の住居址と考えられる。

遺物は床面上を主体にして、P15・P18の中からも土器が出土している。出土量は多くないが、比較的検出例の少ない時期だけに好資料である。

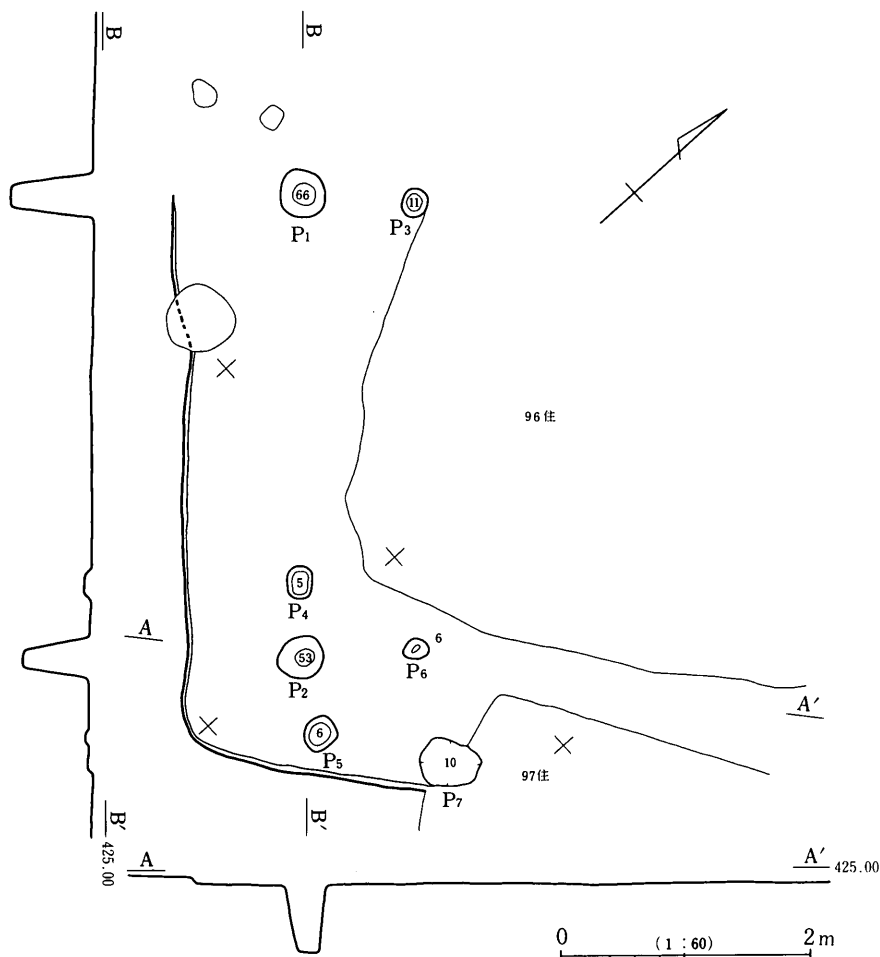
出土遺物から弥生時代後期づけられる。土器の様相や切り合い関係からみれば、後期初頭から前半と考えられる。

㊧ 95号住居址 (挿図106)

XIU19f を中心にして検出した。弥生時代後期の96号住居址・97号住居址、古墳時代後期の掘立柱建物址1に切られ、全体の $\frac{1}{4}$ 程を調査した。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は5～3cmを測り、上層を水田の造成で削平されている。北西壁・北東壁は残っていない。床面はたたき状に堅く良好だが、P1から北西側は削平されていて残っていない。主柱穴は南東側のP1・P2のみを把握し、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。そのほかの住居址諸施設は検出されず、切られる箇所にあったと考えられる。

遺物の出土は少ない。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



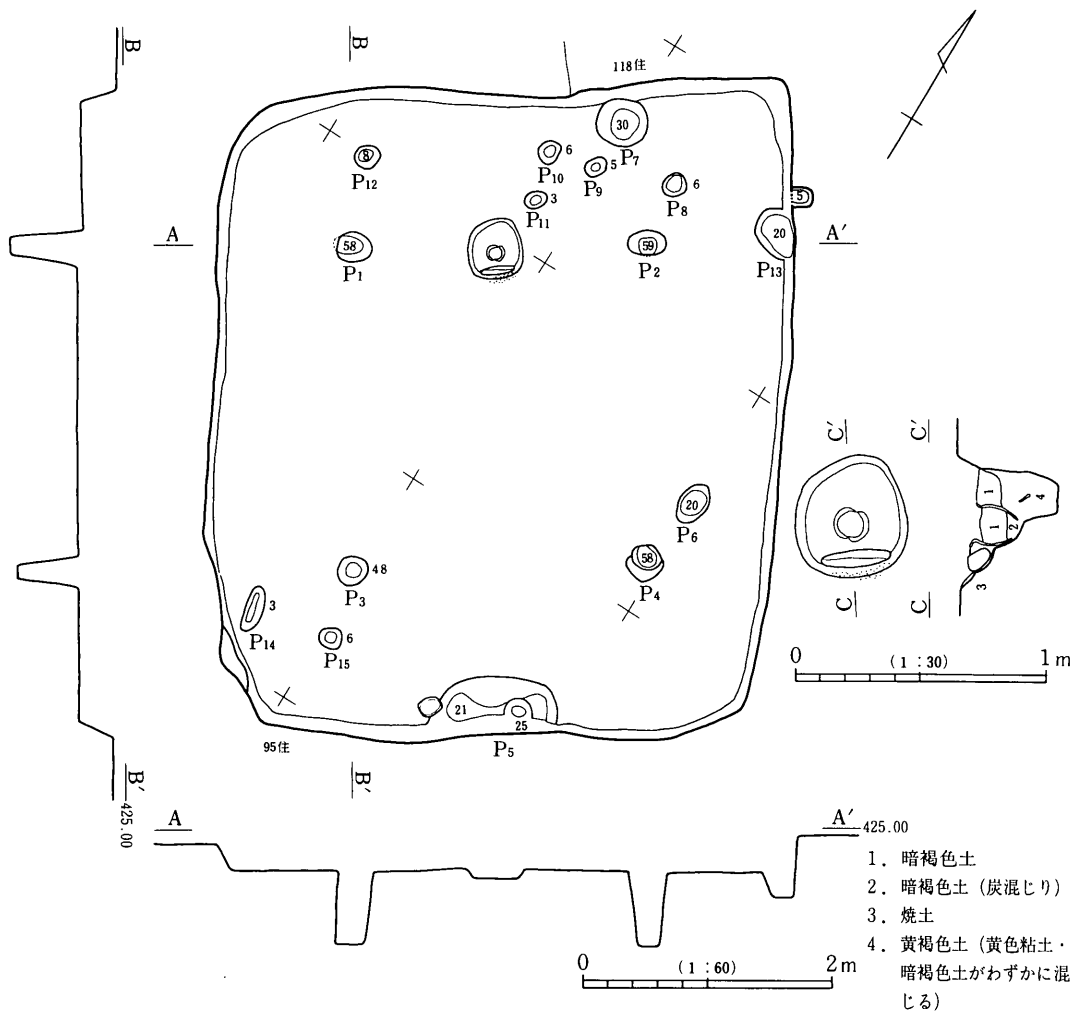
挿図106 95号住居址

㊸ 96号住居址 (挿図107)

XIU20i を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の95号住居址を切り、弥生時代後期の118号住居址に覆土上層を切られる。5.1×4.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN32°Wを示す。壁高は31~17cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状に堅く極めて良好である。支柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央部に位置するP5は入口部と考えられ、南西脇には台石が認められた。ほかに、炉址北西側に穴が集中する。炉址は北西側支柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を48×45cm円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋めている。炉縁石南東側に焼土、埋設土器内部の底に炭が認められた。炉址断ち割り調査で、埋設土器の北西側が深く掘られ、埋め戻されていることが確認できた。旧炉址が埋められていた痕跡と考えられる。

遺物は床面上を主体に出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



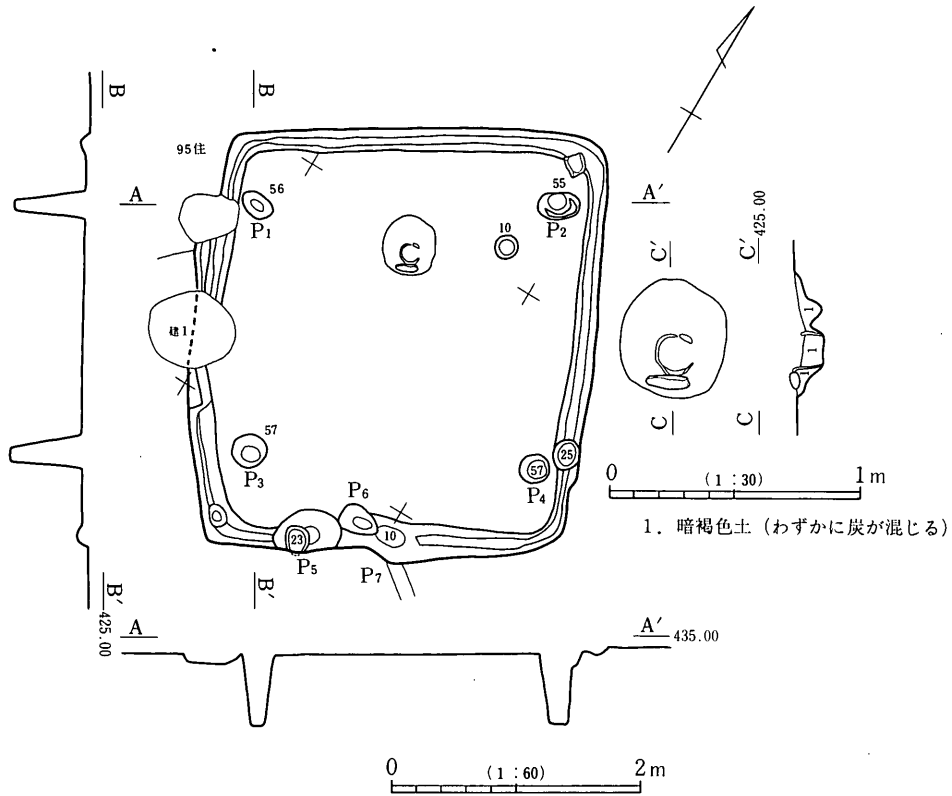
挿図107 96号住居址

⑩ 97号住居址 (挿図108)

XIU22g を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の95号住居址を切り、古墳時代後期の掘立柱建物址1に切られる。3.4×3.2mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN27°Wを示す。壁高は10~1cmを測り、上層を水田の造成で削平されている。周溝が壁下ほぼ全面に認められ、幅22~10cm・深さ9~5cmを測る。床面は全体に柔らかく不良である。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央部南隅寄りに位置するP5・P6は入口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間やや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を46×42cm円形に掘り凹め、甕の胴部を埋めている。周辺や埋設土器内部にわずかに炭が認められた。

遺物の出土量は少ないが、西隅の周溝内から甕が出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



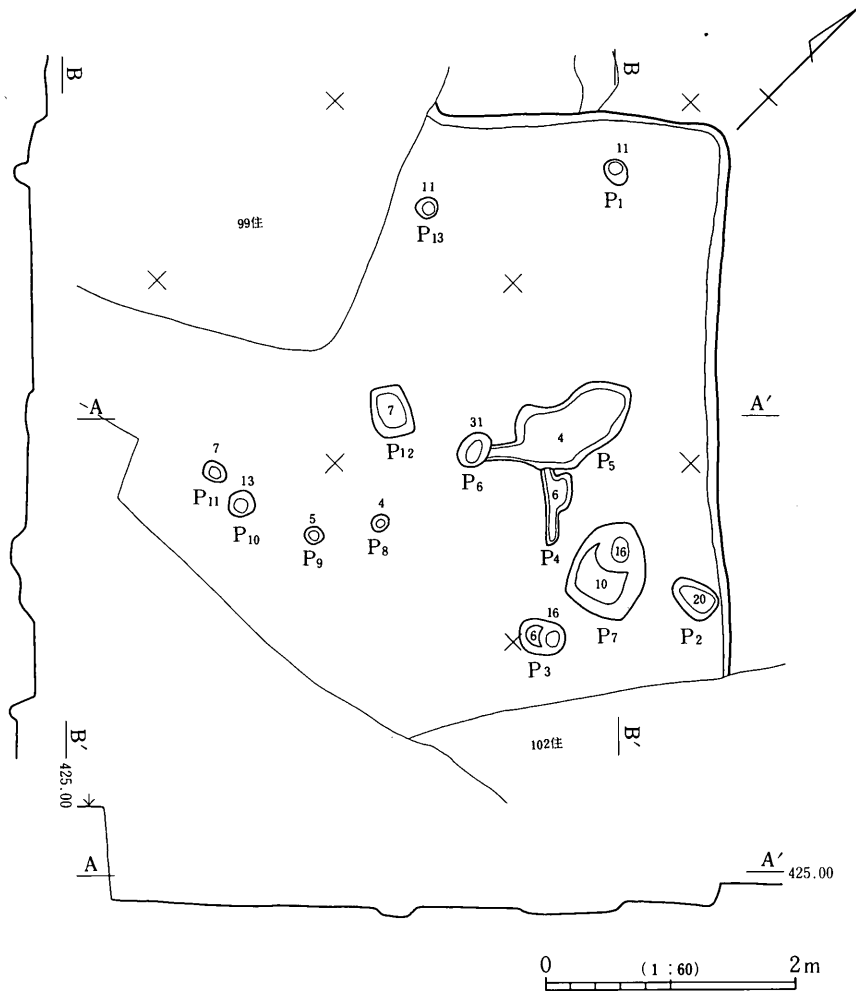
挿図108 97号住居址

③ 98号住居址 (挿図109)

XIT12v を中心にして検出した。弥生時代後期の98号住居址・102号住居址に切られ、南側は用地外となり、全体の半分程を調査した。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は16~6cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に柔らかく不良である。主柱穴・そのほか用途の特定できる穴は検出できず、P2は本址より古い時期の穴と考えられる。炉址も検出できなかった。

遺物は床面上から多量に出土した。比較的住居址中央部に集中する傾向が認められた。住居廃棄後の投棄と考えられる。

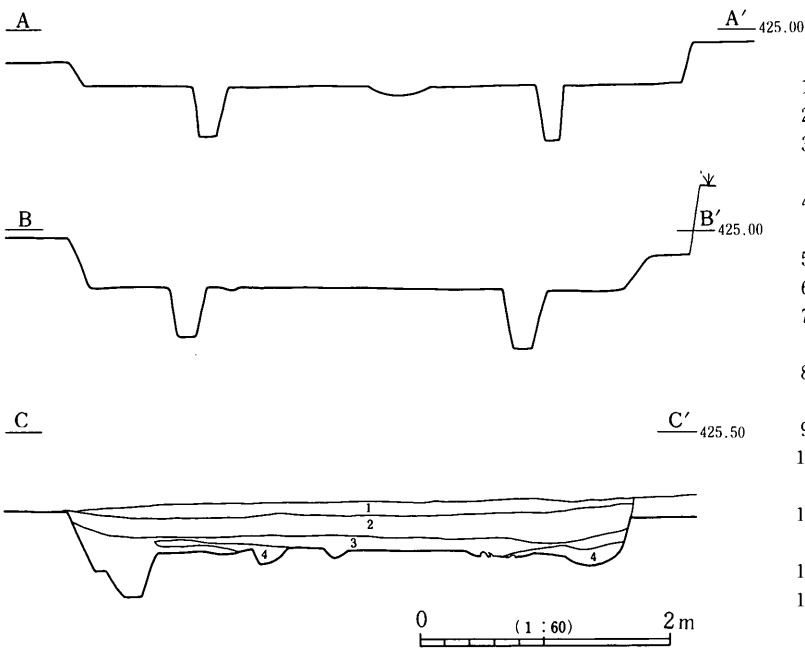
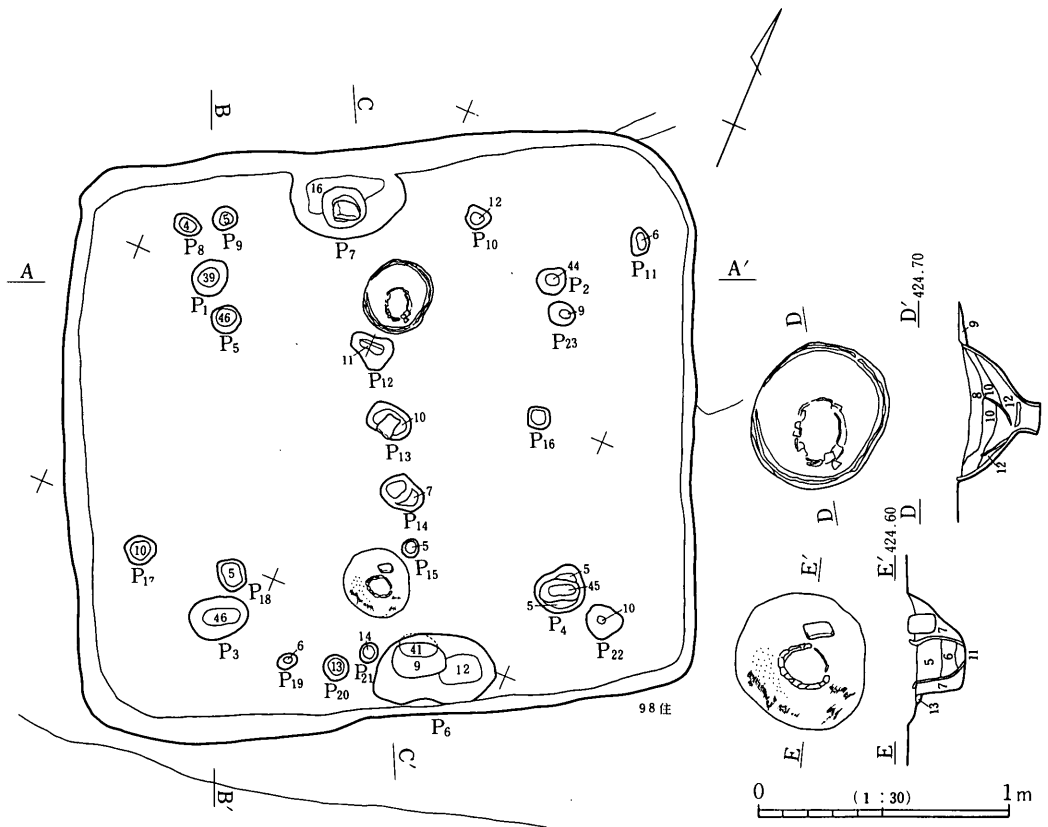
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図109 98号住居址

③ 99号住居址 (挿図110)

XIT10w を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の98号住居址を切る。4.6×5.1mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN23°WとN158°Eを示す。壁高は39~18cmを測り、緩やかな壁面をなし、北西壁の一部は焼けて焼土が認められた。床面はたたき状に堅く良好で、床面上に焼土・炭が広がっていた。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。また、P5も主柱穴の可能性がある。入口部は2箇所認められ、南東壁下中央部東隅寄りに位置するP6と北西壁下中央部に位置するP7である。P12~P14は間仕切りと考えられる。炉址も2箇所あり、北西側主柱穴中間に位置する二重土器埋設炉と南東主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉である。前者は、床面を58×54cm円形に掘り凹め、壺の頸部から胴部を逆位に埋め、その内側に甕の胴部を入れて二重にして



1. 暗灰褐色土
2. 暗褐色土(黄色粘土混じり)
3. 暗灰褐色粘質土(黄色粘土混じり)
4. 暗灰褐色粘質土(黄色粘土・焼土・炭混じり)
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土(炭混じり)
7. 暗灰褐色土(黄色粘土・焼土・炭混じり)
8. 暗褐色土(黄色粘土・炭混じり)
9. 灰褐色土(黄色粘土混じり)
10. 黄色粘土(炭・暗褐色土がわずかに混じる)
11. 黄色粘土(炭・暗褐色土混じり)
12. 炭(暗褐色土混じり)
13. 焼土

挿図110 99号住居址

いる。壺の頸部には土器片を用いてふさいでいた。内部の底付近に炭が顕著に認められた。後者は、床面を54×52cm 円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋めている。埋設土器南側に焼土・炭、内部には炭が混じっていた。焼土や炭の状況から火事の住居址と考えられ、廃棄後に燃やされた可能性が高い。炉址・入口部ともに2箇所あり、同時存在したと考えるより、方向をまったく正反対にして建替えられたと想定できる。しかし、両者の新旧関係は把握できなかった。また、ほかの穴の関連もつかめなかった。

遺物は覆土中を主体として、土器片や石器が出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑬ 100号住居址 (挿図111)

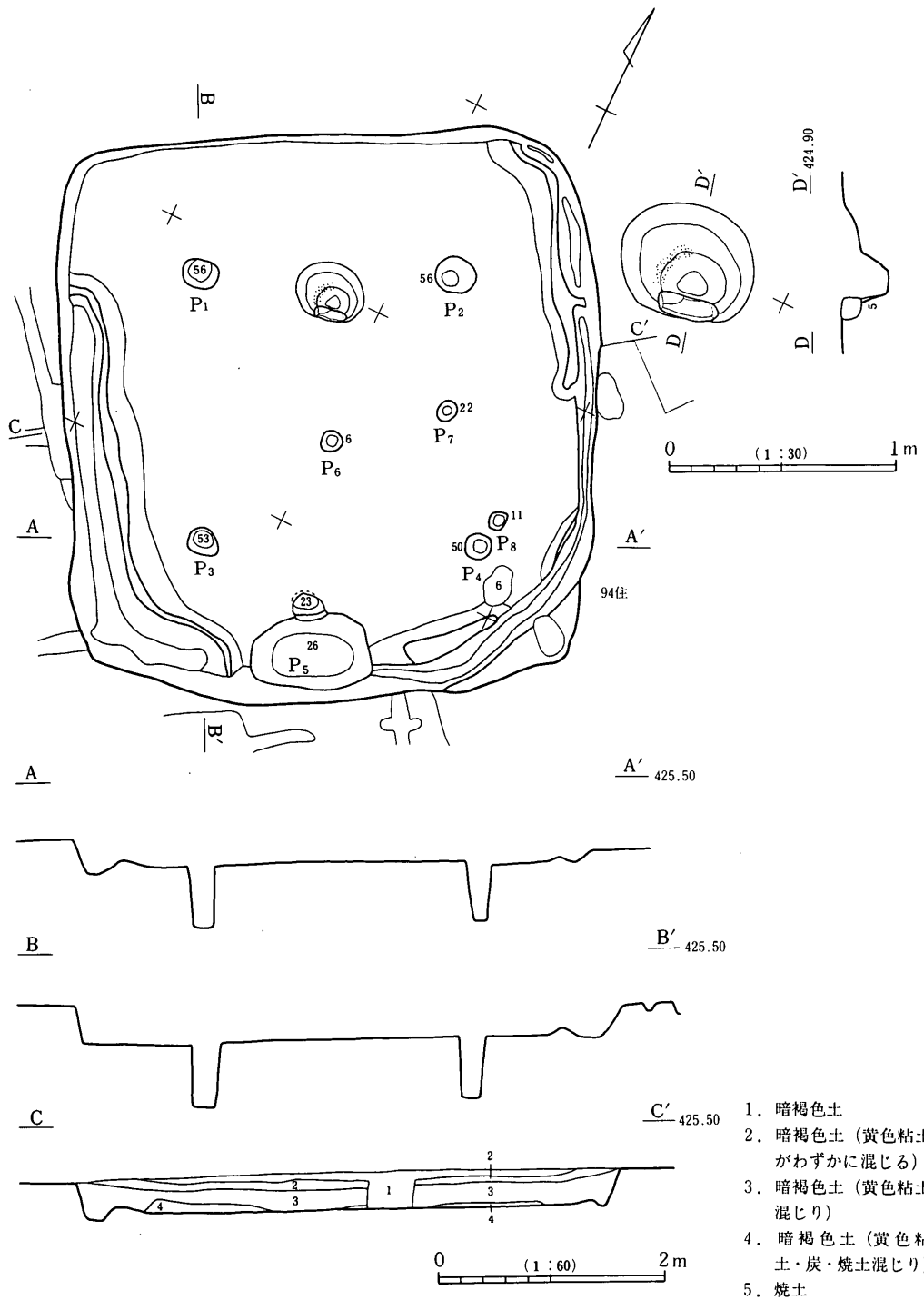
XIU13c を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の94号住居址を切る。5.0×4.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN27°Wを示す。壁高は36~10cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が北西壁と西隅を除いた壁下に認められ、北東側の一部を除いて土手状縁部が確認できた。幅44~10cm・深さ6~2cmを測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。P2の中に土器が入れられていた。東壁下中央部南隅寄りに位置するP5は入口部と考えられ、斜めに掘られる階段用の穴も認められる。炉址は北西側主柱穴中間やや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を50×58cm 楕円形に掘り凹めている。埋設土器は抜いてあり、それを埋めた穴と焼土が確認できた。炉址やP2の状況から、住居址廃棄の際に住居址の建築用材や道具類を持ち去ったものと判断できた。

遺物は住居址中央部の覆土中から出土し、住居址廃棄後住居址が少し埋まった段階での投棄が考えられる。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑭ 101号住居址 (挿図112)

XIT14x を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の102号住居址に切られる。主軸方向が4.5mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN68°Eを示す。壁高は32~23cmを測り、途中で段を持つ部分があり、緩やかな壁面をなす。南壁は水田の造成で削平され、残っていない。周溝が北西壁北から南西壁中央あたりまで壁下に断絶しながら認められ、北側の一部は二重になる。幅20~6cm・深さ12~3cmを測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。西壁下中央部に位置するP5・P6・P7は入り口部で、土手状縁部を伴い斜めに掘られる階段用の穴が認められる。炉址から入口部に直線的に並ぶP9・P10・P11は間仕切りと考えられる。炉址は東側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を40×37cmの楕円形に掘り凹め、



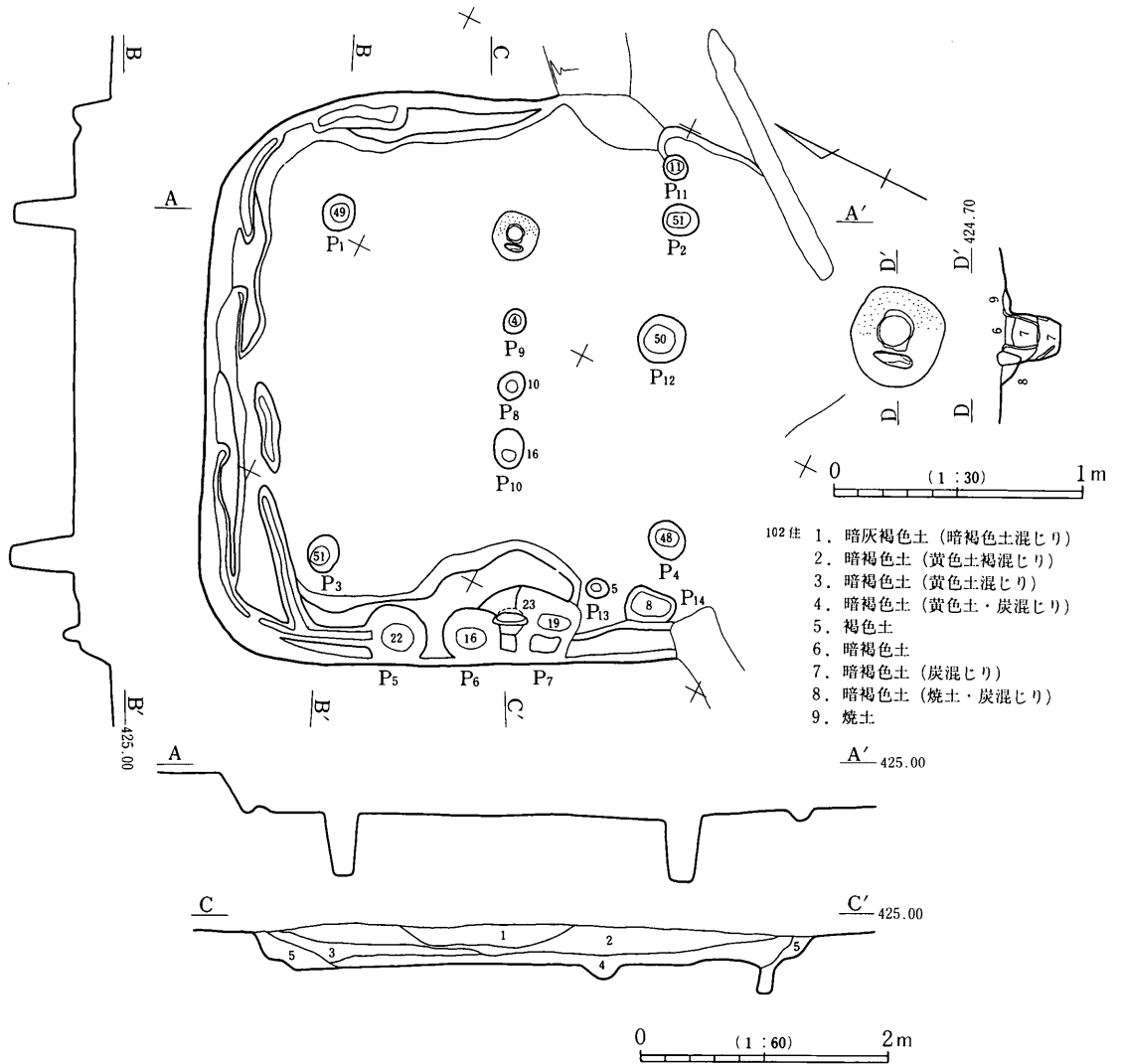
1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 (黄色粘土がわずかに混じる)
3. 暗褐色土 (黄色粘土混じり)
4. 暗褐色土 (黄色粘土・炭・焼土混じり)
5. 焼土

挿図111 100号住居址

底部を欠く甕を埋めている。埋設土器東側に焼土、内部に炭が混じっていた。炉址の断ち割り調査で、旧炉址の残骸が埋設土器の下に認められ、甕の胴部が残っていた。壁・周溝・炉址の状況から建て替えられた住居址と考えられる。

遺物は住居址の床面上から主に出土し、P7からは鉄器が得られた。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

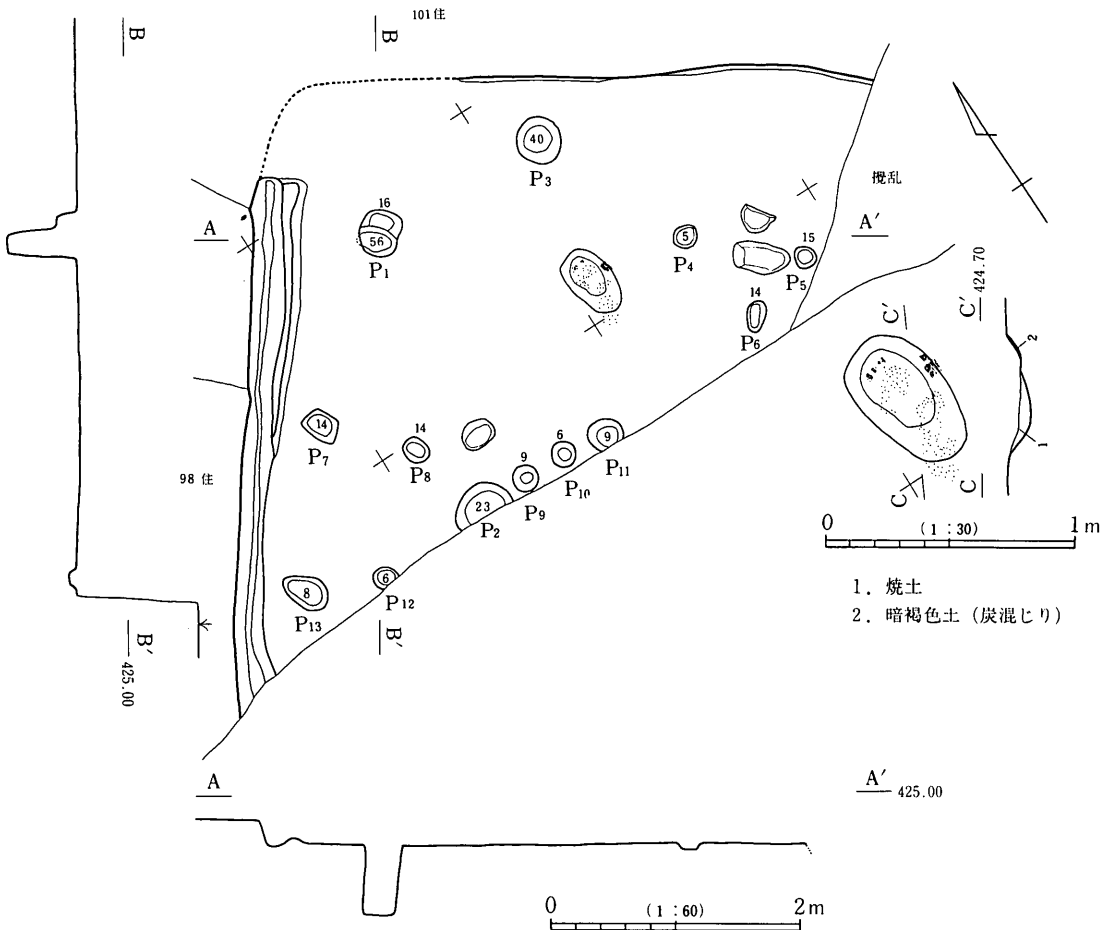


挿図112 101号住居址

㊥ 102号住居址 (挿図113)

XIT14v を中心にして検出した。弥生時代後期の98号住居址・101号住居址を切り、南西側が用地外で、全体の半分程を調査した。平面形・規模とも不明の竪穴住居址で、主軸方向は N35°E と推定される。壁高は22~1cm を測り、緩やかな壁面をなす。北東壁は水田の造成で削平され残存部分は少ない。周溝が北西壁下に認められ、北東側で土手状縁部を持つ。幅26~19cm・深さ7~3cm を測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴は P1のみ把握し、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。炉址は北東側主柱穴中間に位置すると考えられる地床炉で、床面が57×34cm の楕円形に浅く掘り込み、焼土が顕著に認められた。

北隅付近の覆土中にたたき状のハリ床が認められ、平安時代の遺物が出土した。広範囲で把握できなかったので特別に名称は付さなかったが、該期の竪穴住居址があった可能性が高い。遺物



挿図113 102号住居址

は102号住居址上層として取り上げてある。

遺物は主に覆土中から出土した。

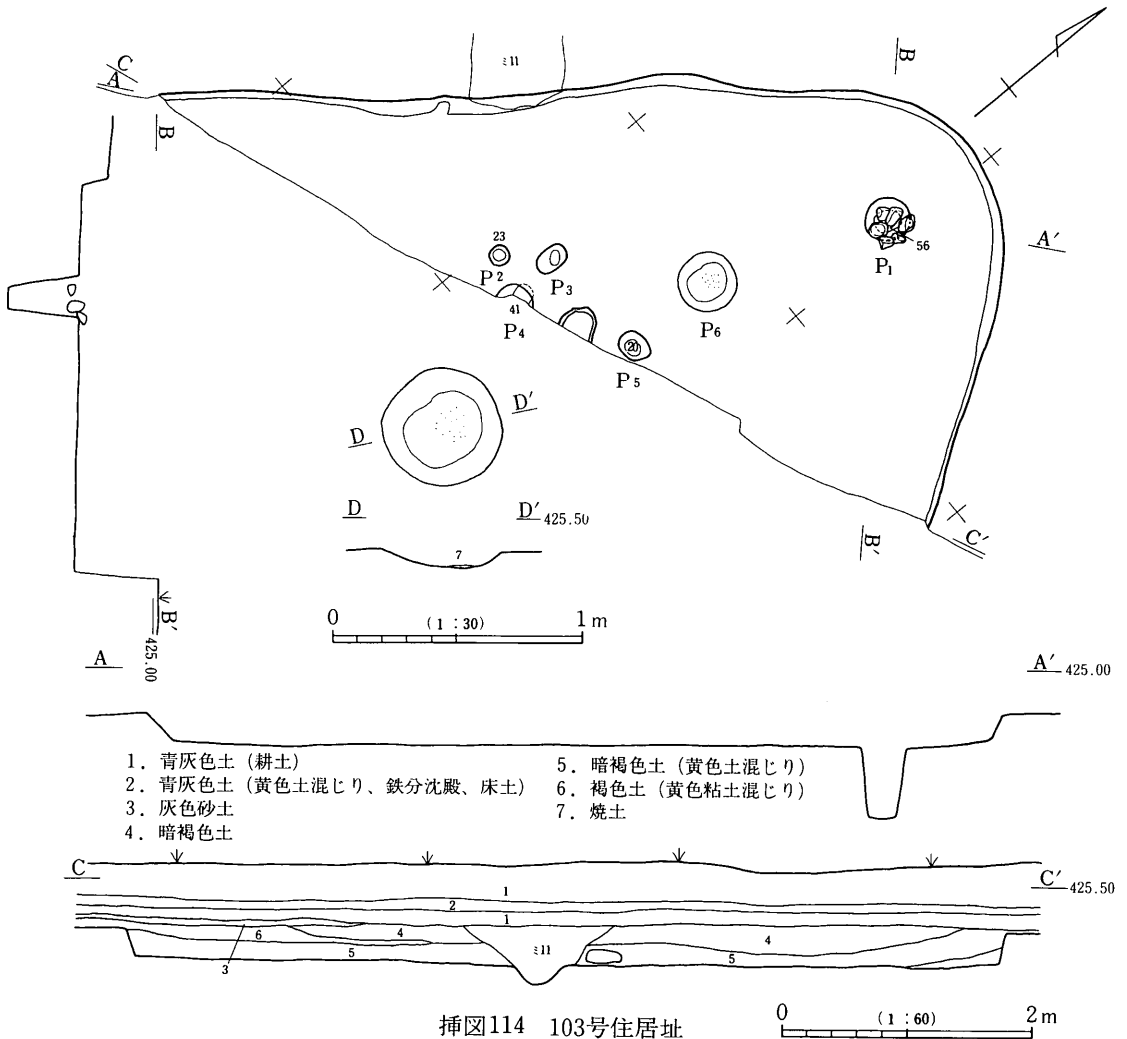
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

㊫ 103号住居址 (挿図114)

XIT24w を中心にして検出した。古墳時代の溝址11に切られ、南側が用地外で、全体の1/5程を調査した。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は30~17cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴はP1のみ把握し、床面上に石6個が認められた。P6の底にわずかに焼土が認められ、炉址とも考えて断ち割り調査を実施したが、位置や状況からみて炉址の可能性は少ない。

遺物は主に床面上から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



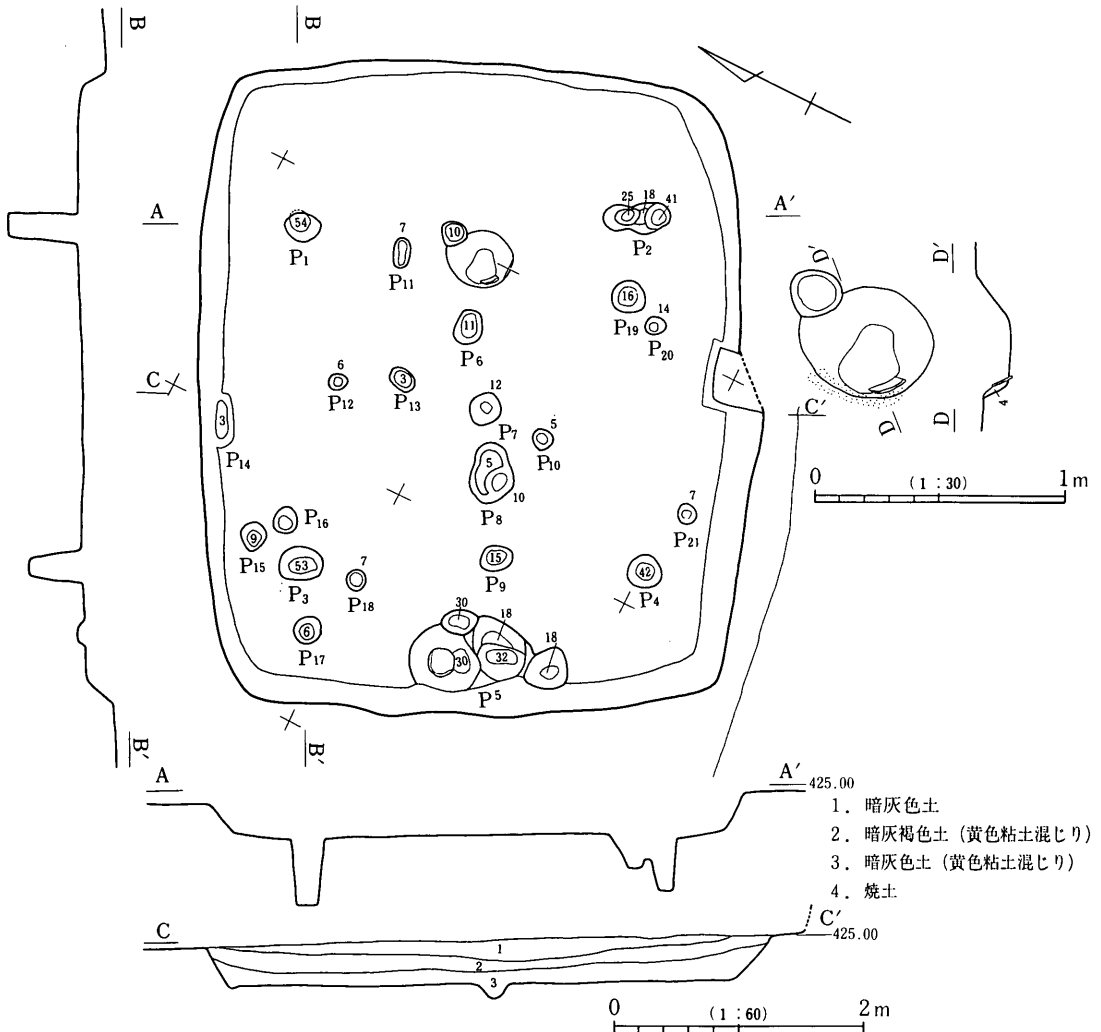
挿図114 103号住居址

③7 104号住居址 (挿図115)

XIT5u を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の105号住居址を切る。5.2×4.3 m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N69°E を示す。壁高は38~19cm を測り、緩やかな壁面をなす。床面は柔らかく極めて不良である。主柱穴は P1~P4 で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。P2は2個の穴が重複する。西壁下中央に位置する P5は、4個の穴が認められ、入口部と考えられる。北側の穴には台石が落ち込んでいた。炉址から入口部に4個の穴が並び、間仕切りと考えられる。炉址は東側主柱穴中間やや内側に位置する土器埋設炉で、床面が44×53cm の円形に掘り凹められ、東側に土器片と焼土が認められた。埋設土器の大半が抜かれ、残骸が残ったものと考えられる。

遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



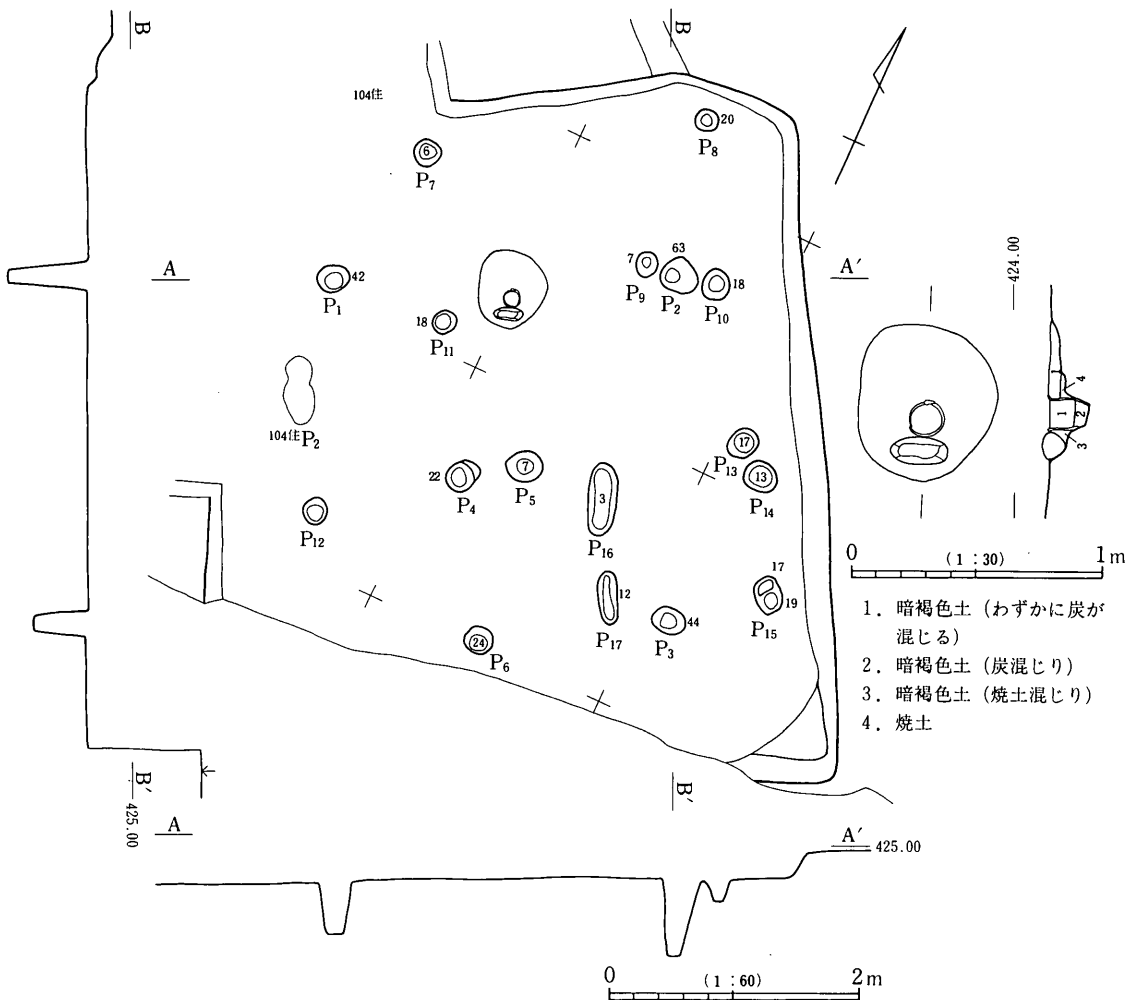
挿図115 104号住居址

③ 105号住居址 (挿図116)

XIT7u を中心にして検出した。弥生時代後期の104号住居址に切れ、南側が用地外で全体の4/5程を調査した。5.5×5.0mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN25°Wを示す。壁高は37~22cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1~P3で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南側の主柱穴は用地外のため把握できなかった。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面が62×56cmの円形に掘り凹められ、底部を欠く甕を埋めている。

遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図116 105号住居址

③⑨ 107号住居址 (挿図117)

XIU8b を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代中期の106号住居址を切る。4.8×5.1 m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N25°W を示す。壁高は18~2cm を測り、上面が水田の造成で削平されている。周溝が南西壁下と北西・北東壁下からやや内側に断絶を持って認められ、幅 22~8cm・深さ 6~2cm を測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴は P1~P4 で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東側に位置する P5 は入口部と考えられ、その南東側に接する P33 も関連する可能性がある。炉址から入口部に 7 個の穴が連続的に並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間やや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を 62×55cm の円形に掘り凹め、口縁部・底部を欠く甕を埋める。埋設土器の西側に焼土、内部に炭が認められている。P5 の北東側と P26 の北側と P21 の北西側に、台石状の石が認められる。

遺物は床面上から出土し、比較的まとまった好資料である。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

④⑩ 108号住居址 (挿図118)

XIT5y を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の109号住居址と重複する。4.6×4.3m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N43°W を示す。壁高は27~10cm を測り、緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴は P1~P4 で、P2の床面上に石が 3 個認められた。南東壁下中央に位置する P5・P6・P7 は入口部と考えられ、P5の中には石が 2 個落ち込んでいた。住居址中央部に 4 個の穴がみられ、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間やや内側に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を 54×52cm の円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋める。埋設土器の周辺と炉縁石の南東側に焼土が認められ、埋設土器の内部に炭がわずかに混じる。P3の北東側に台石が置かれる。

遺物は床面上から出土し、比較的まとまった好資料である。

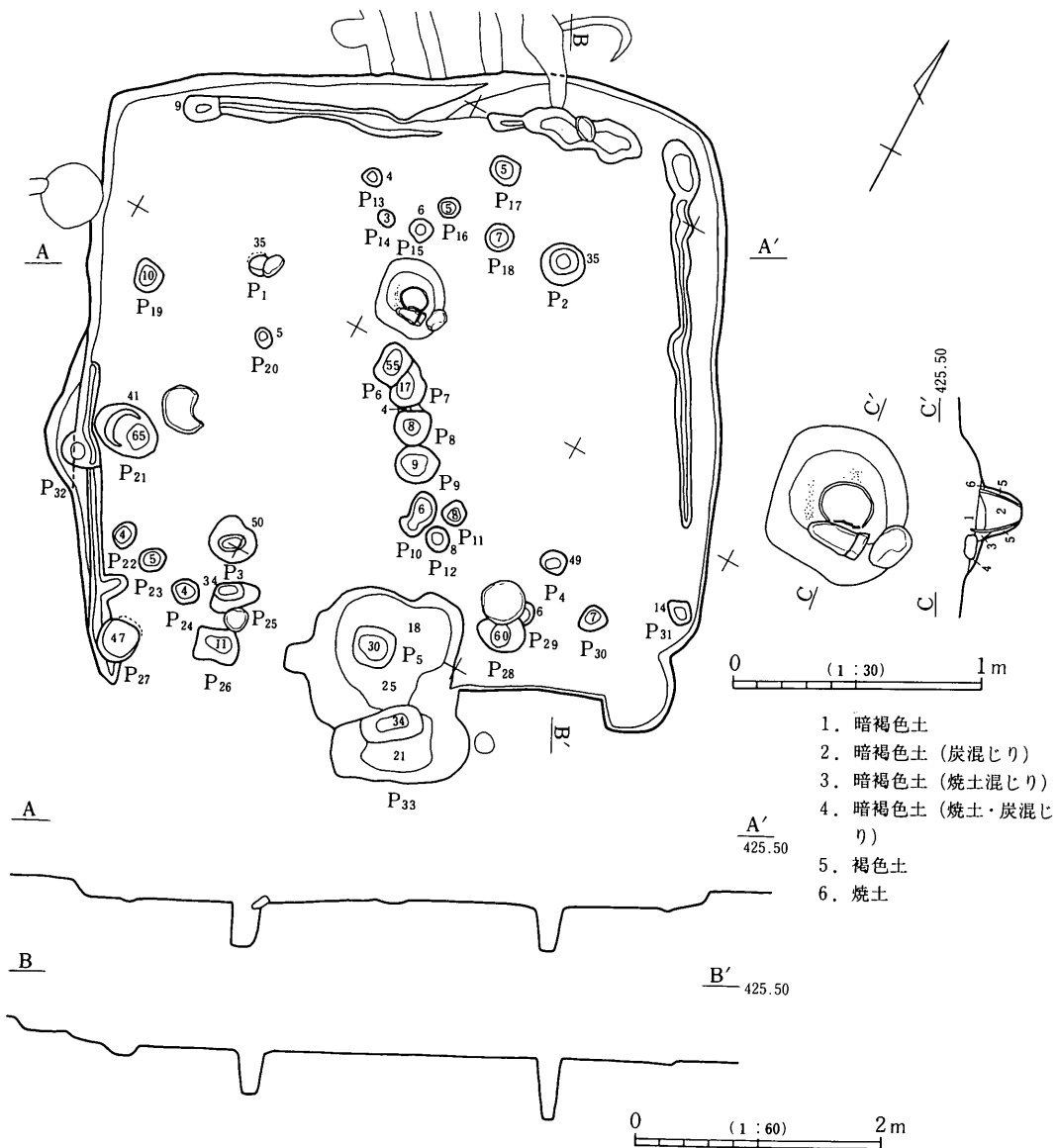
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

④⑪ 109号住居址 (挿図119)

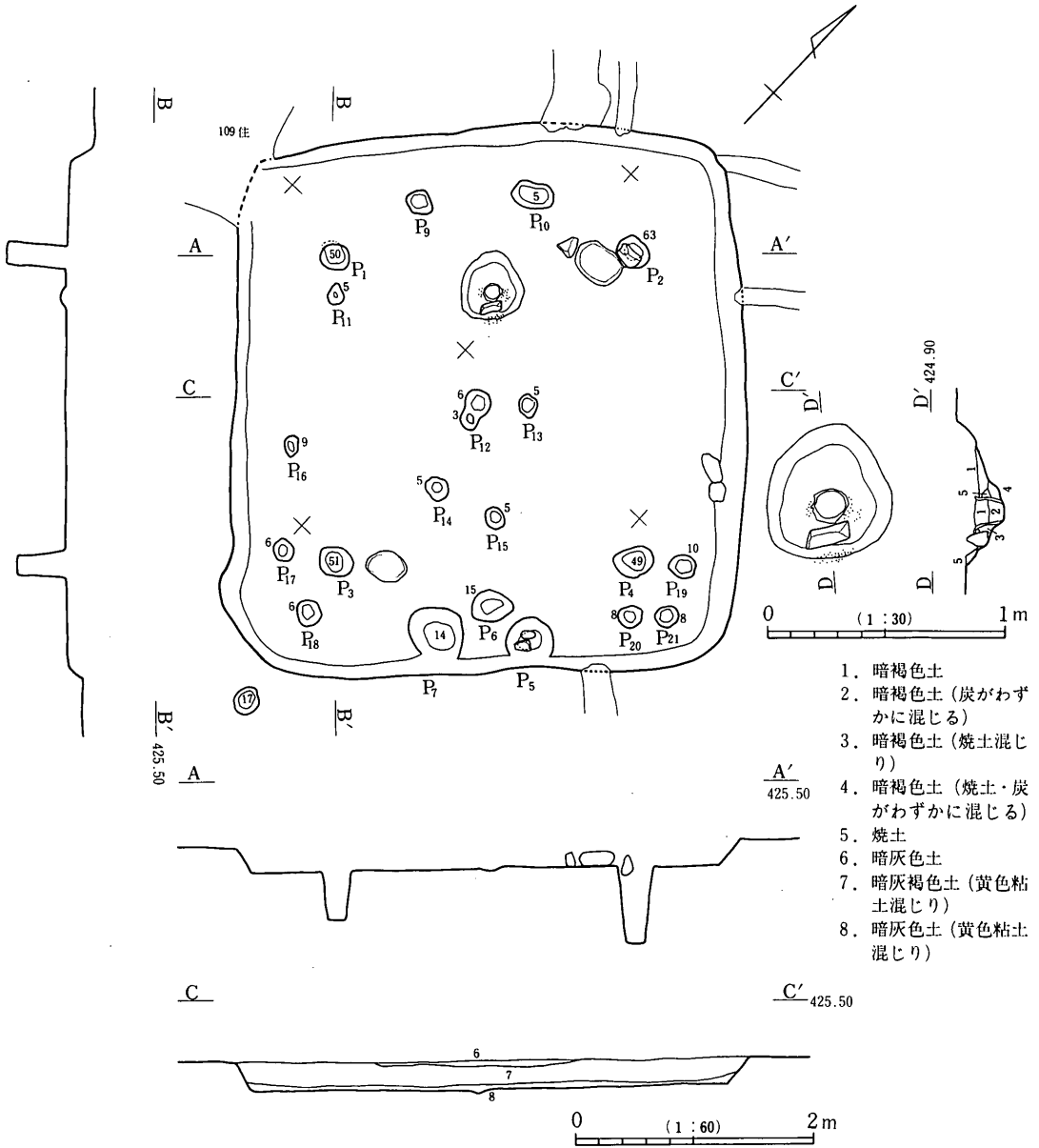
XIT3y を中心にして検出した。弥生時代後期の108号住居址と重複し、北側が用地外で、全体の1/5程を調査した。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は19~10cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴は P1のみ把握した。P2は 3 個の穴が認められ、入口部と考えられる。

遺物は覆土中からわずかに出土した。

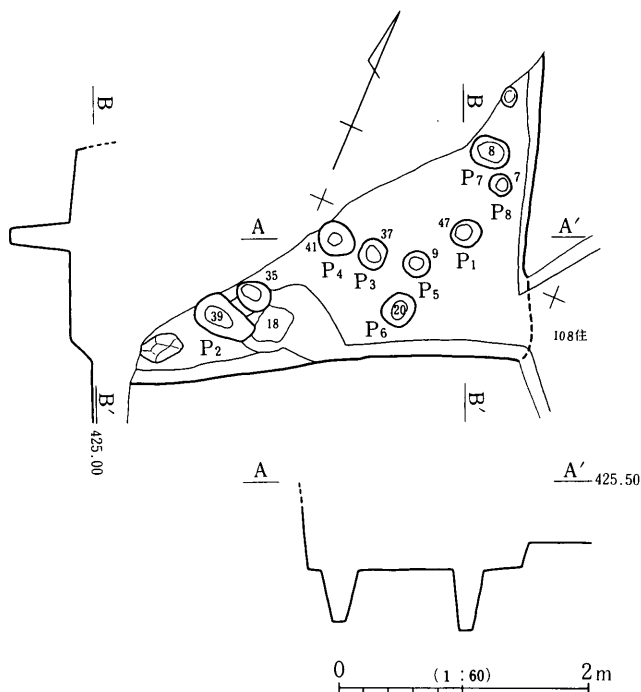
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図117 107号住居址



挿図118 108号住居址



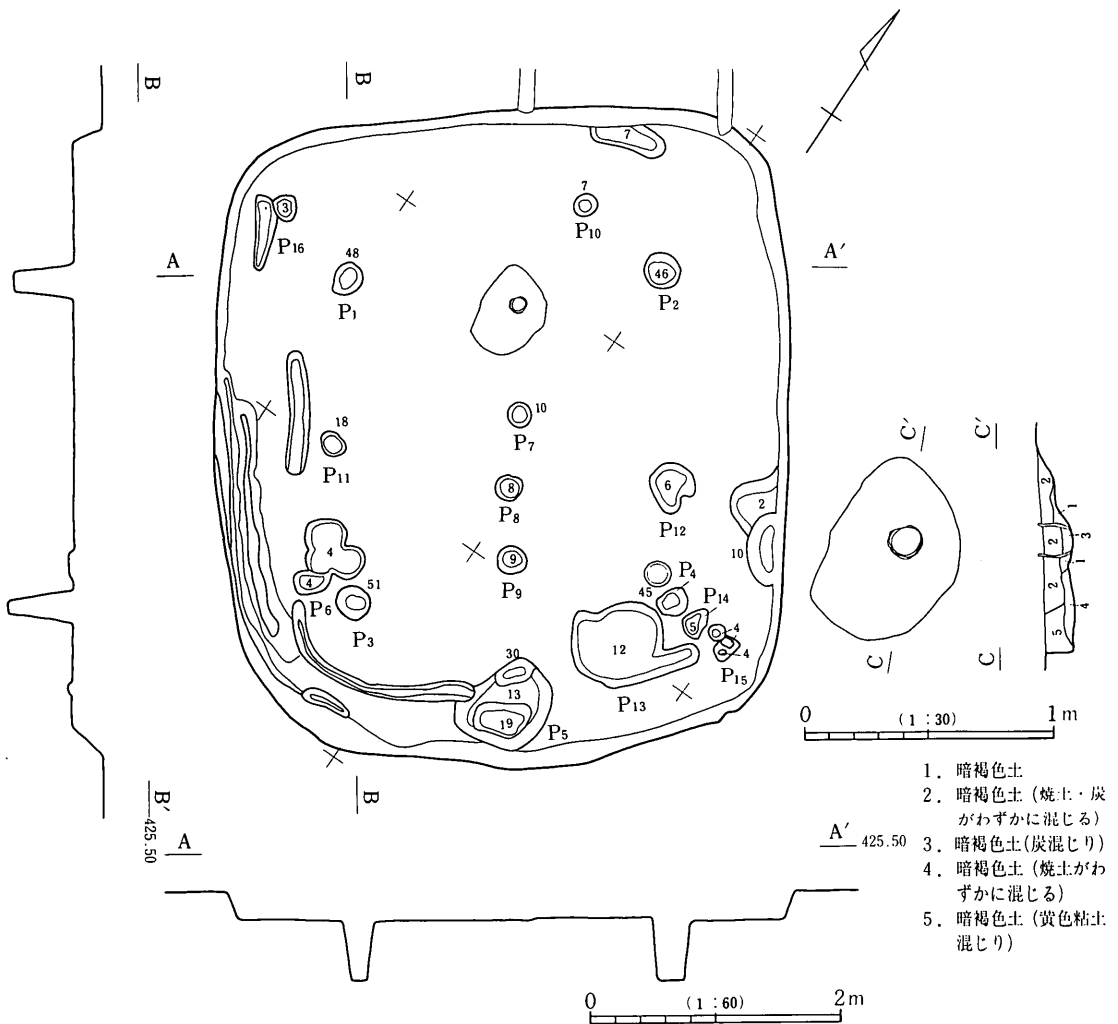
挿図119 109号住居址

④ 110号住居址 (挿図120)

XIU12g を中心にして検出し、全体を調査した。5.3×4.5m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N35°W を示す。壁高は30～16cm を測り、緩やかな壁面をなす。土手状縁部を持つ周溝が南西壁中央から南隅の壁下に認められ、幅14～11cm・深さ5～1cm を測る。また、南西壁から南東壁の壁下よりやや内側に、断絶を持つ周溝状の小溝が認められ、幅15～11cm・深さ5～2cm を測る。床面はたたき状に堅く良好である。支柱穴は P1～P4 で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央に位置する P5 は入口部と考えられる。炉址と入口部の間に3個の穴が直線的に並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側支柱穴中間やや内側に位置する土器埋設炉で、床面を122×60cm の不整形に掘り凹め、口縁部・底部を欠く甕を埋める。埋設土器内部の底に炭が認められた。P4 の北側に台石が置かれる。周溝と小溝の状況から建替えられた住居址の可能性はあるが、そのほかに判断する材料はみられず、断定はできない。

遺物は北西壁ぎわの床面上から主に出土し、比較的まとまった好資料である。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



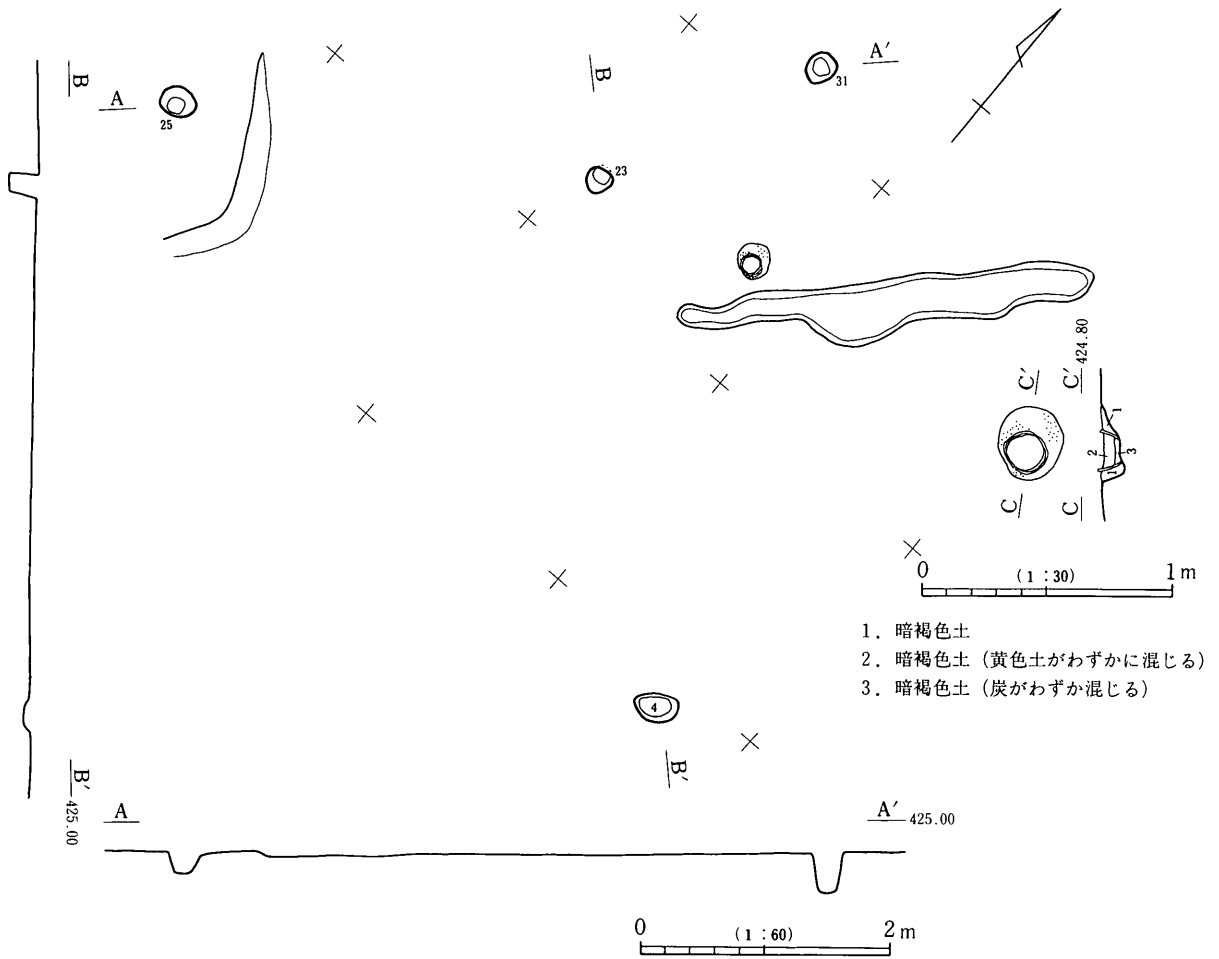
挿図120 110号住居址

④3 111号住居址 (挿図121)

XIIU81に炉址の埋設土器を検出し、竪穴住居址があることが把握できた。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址で、炉址のみを調査した。壁面・床面とも水田の造成により削平され、まったく残っていなかった。主柱穴等の把握にもつとめたが、分らなかった。よって、炉址周辺にある柱穴も本址と直接関連するか不明である。炉址東側の溝は、近代以降と考えられる。炉址は土器埋設炉で、床面を円形に掘り凹め、甕の胴部を埋めている。上面が削平されていて、全体は残っていない。

出土遺物は炉址の甕のみである。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



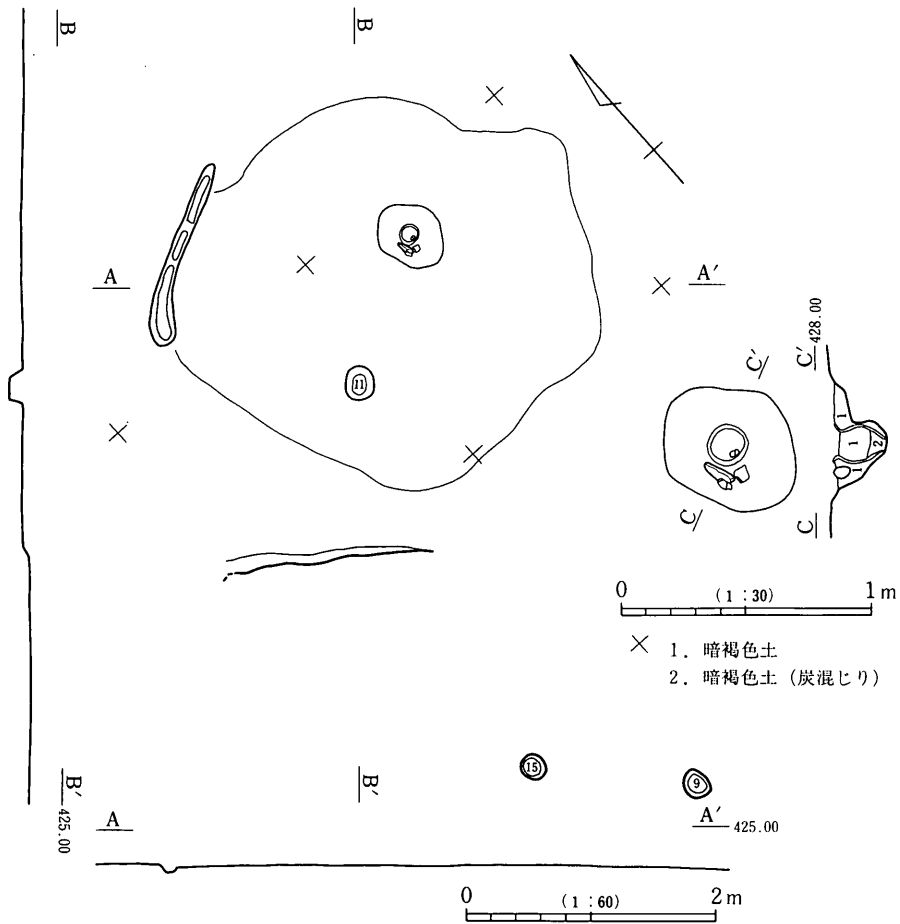
挿図121 111号住居址

④ 112号住居址 (挿図122)

XIIU12jで炉址の埋設土器と床面を検出し、竪穴住居址があることが把握できた。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址で、炉址と細線で示した範囲のたたき状に堅い極めて良好な床面を調査した。壁面は水田の造成により削平され、ほとんど残っていなかった。支柱穴等の把握につとめたが分からなかった。炉址北西側にある小溝も本址と関連するか不明である。炉址は炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を46×59cmの楕円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋める。埋設土器内部の底に炭が認められた。

出土遺物は炉址の甕以外はほとんど出土しなかった。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



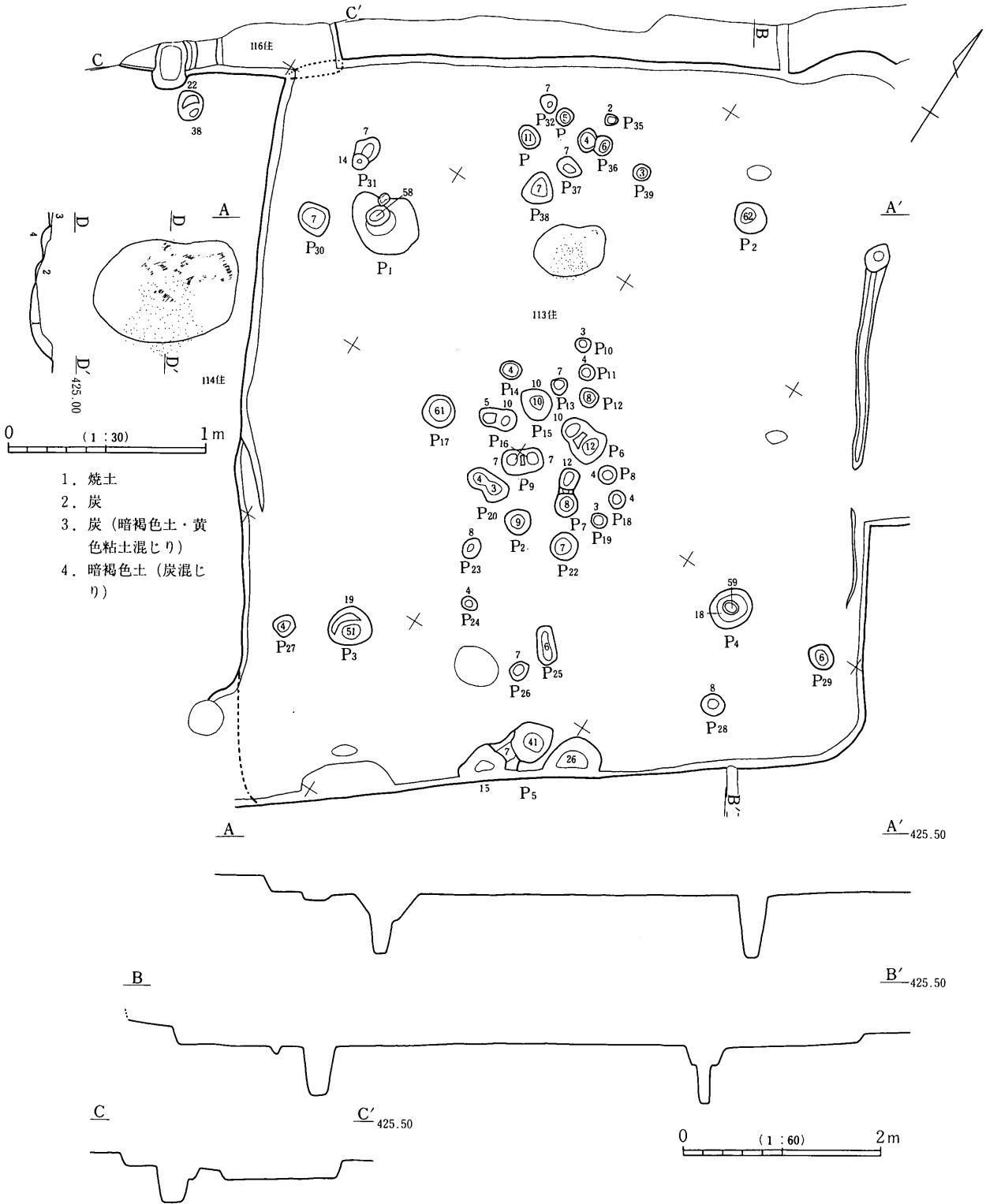
挿図122 112号住居址

④5 113号住居址 (挿図123)

XIU15j を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の114号住居址・117号住居址を切り、弥生時代後期の115号住居址に切られ、弥生時代後期の116号住居址と重複する。7.2×6.3 mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN28°Wを示す。壁高は20~4cmを測り、緩やかな壁面をなす。周溝が北東壁下の一部に認められ、幅18~10cm・深さ3cmを測る。床面は全体に柔らかく不良である。支柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央に位置するP5は、3個の穴があり入口部と考えられる。浅い掘り込みの柱穴が、住居址中央部と炉址北西側に集中する。炉址は北西側支柱穴中間やや内側に位置する地床炉で、床面が51×72cmの楕円形に浅く凹み、底に焼土が厚く焼け固まっていた。周辺に炭が認められた。

遺物は北西壁ぎわの床面上から主に出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



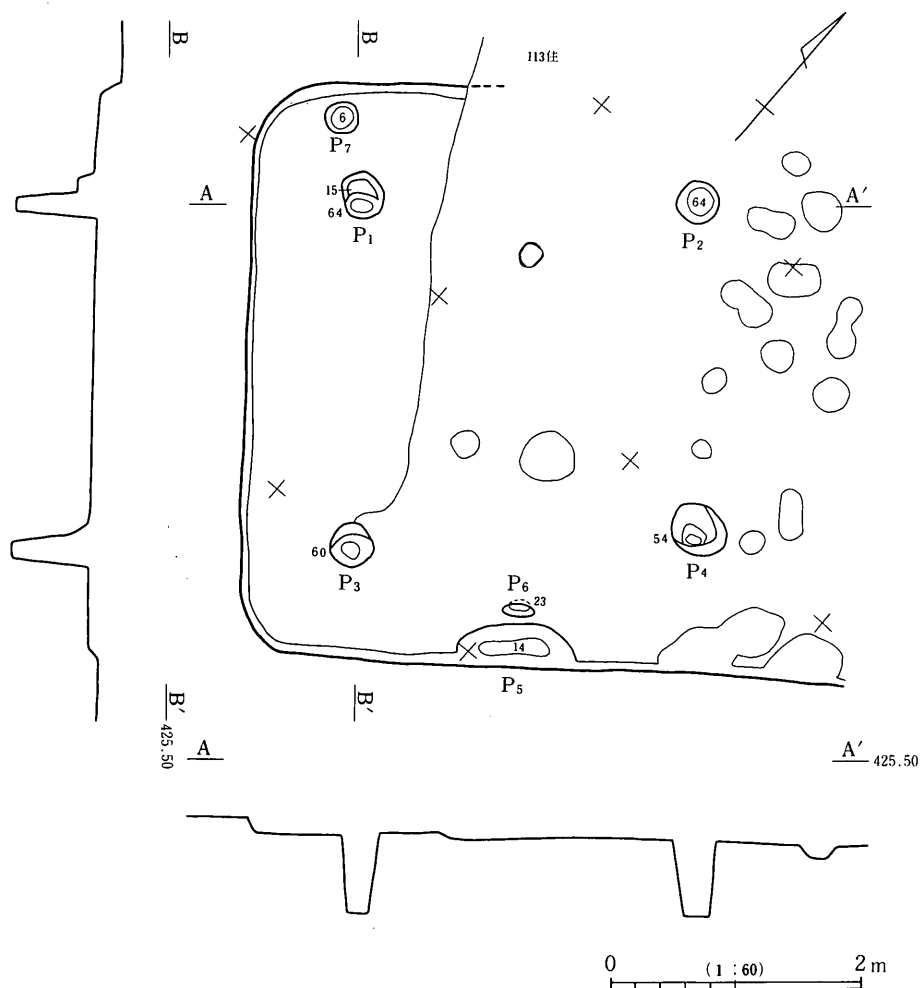
挿図123 113号住居址・116号住居址

④ 114号住居址 (挿図124)

XIU14h を中心にして検出した。弥生時代後期の113号住居址に切られ、全体の1/4程を調査した。4.6×4.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN39°Wを示す。壁高は16~8cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に柔らかく不良で、大半が削平されて残っていない。支柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央に位置するP5は、斜めに掘られる階段用のP6とともに入口部と考えられる。炉址は北西側支柱穴中間の内側に位置する土器埋設炉で、上層を113号住居址に削平されて、埋設土器の甕の胴部が残るのみである。

遺物の出土は少ない。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図124 114号住居址

④⑦ 115号住居址 (挿図125)

XIU16k を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の113号住居址・117号住居址を切る。4.7×4.4m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N35°W を示す。壁高は20～9cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。南西壁・北西壁は切り合う住居址と同時に掘り下げたため把握できなかった。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴は P1～P4で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央に位置する P5は、斜めに掘られる階段用の穴を伴い、入口部と考えられる。炉址から入口部に直線的に3個の穴が並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を伴う土器埋設炉で、床面を63×49cm の不整楕円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋める。炉址の断ち割り調査で、黄色粘土に炭が混じった土で埋められた穴を埋設土器北西側で検出した。底には土器片があり、旧の炉址の掘り方と考えられる。炉址の状況から建替えの住居址である。ただし、主柱穴や平面形では把握できなかったため、炉址のみ作り替えられている可能性も認められる。

遺物は覆土中から主に出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

④⑧ 116号住居址 (挿図123)

XIU12j 付近で検出した。弥生時代後期の113号住居址と重複し、北西側が用地外で、一部を調査した。ハリ床下には縄文時代の土坑23が重複する。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は23～13cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好で、黄色土のハリ床となる。南東壁にある穴は本址とは関係しない。そのほかの住居址諸施設は不明である。

遺物は覆土中からわずかに出土した。

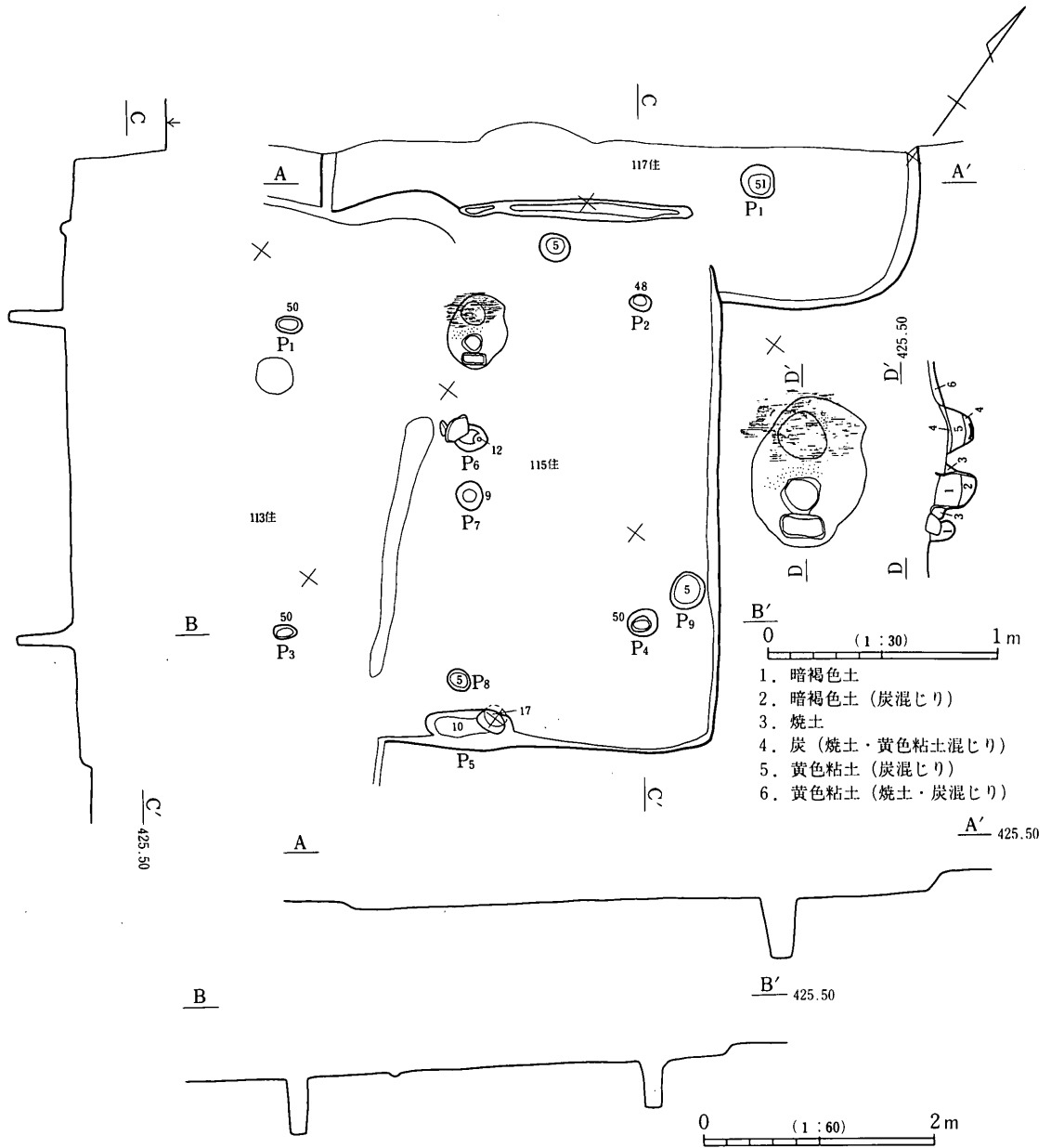
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

④⑨ 117号住居址 (挿図125)

XIU16m 付近で検出した。弥生時代後期の115号住居址に切られ、北西側が用地外で、南東側の一部を調査した。北東・南西方向の長さが5.2m の竪穴住居址である。平面形・主軸方向は不明である。壁高は16～7cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴は P1のみを把握した。

遺物は覆土中から主に出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



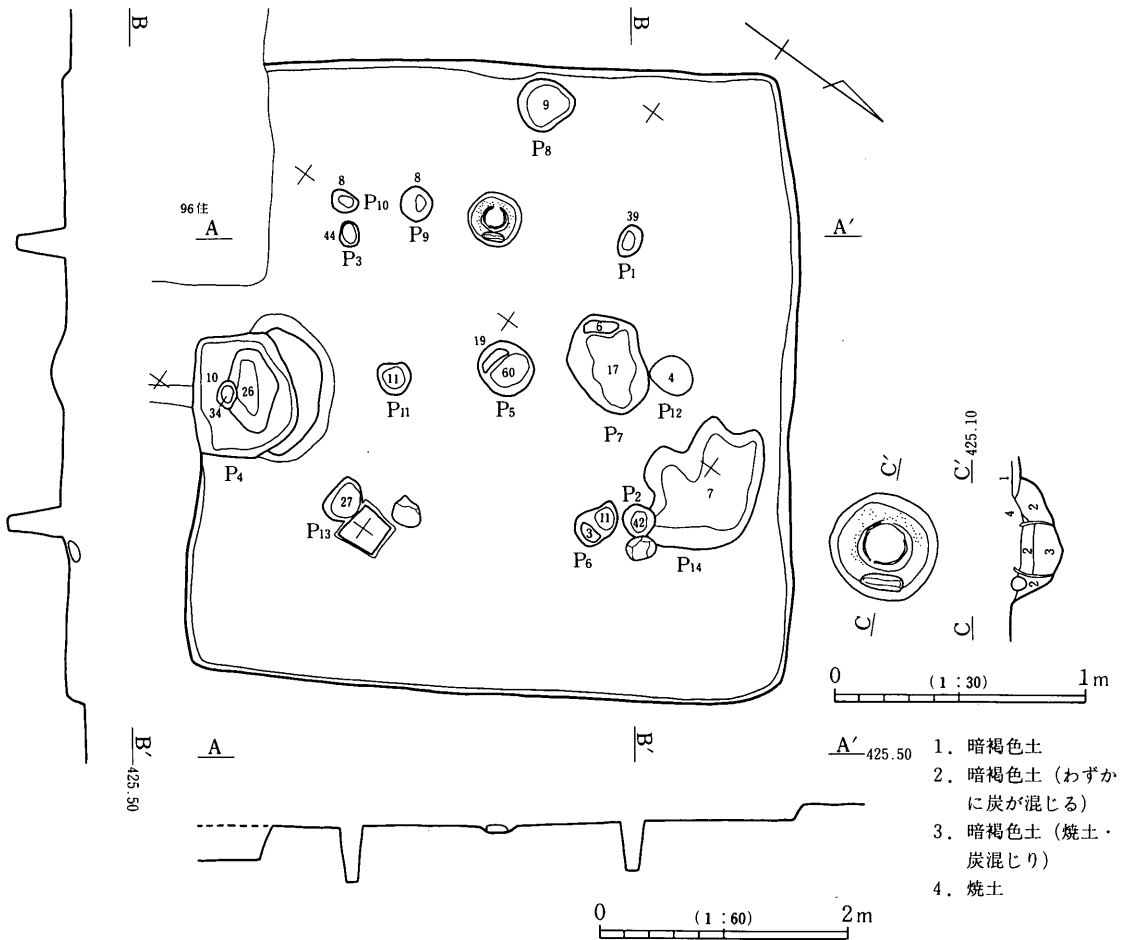
挿図125 115号住居址・117号住居址

⑤ 118号住居址 (挿図126)

XIU20k を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代中期の137号住居址・弥生時代後期の137号住居址を切る。5.0×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN126°Wを示す。壁高は18～3cmを測り、上層は水田の造成で削平されている。床面は全体に柔らかく不良である。支柱穴はP1～P3で、東側支柱穴は測量用の杭のため未調査となった。南東壁下中央に位置するP4は、土手状縁部と小穴を伴い、入口部と考えられる。炉址は南西側支柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を42×43cmの円形に掘り凹め、甕の胴部を埋めている。埋設土器周辺に焼土、内部に炭・焼土が認められた。

遺物は床面上から主に出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



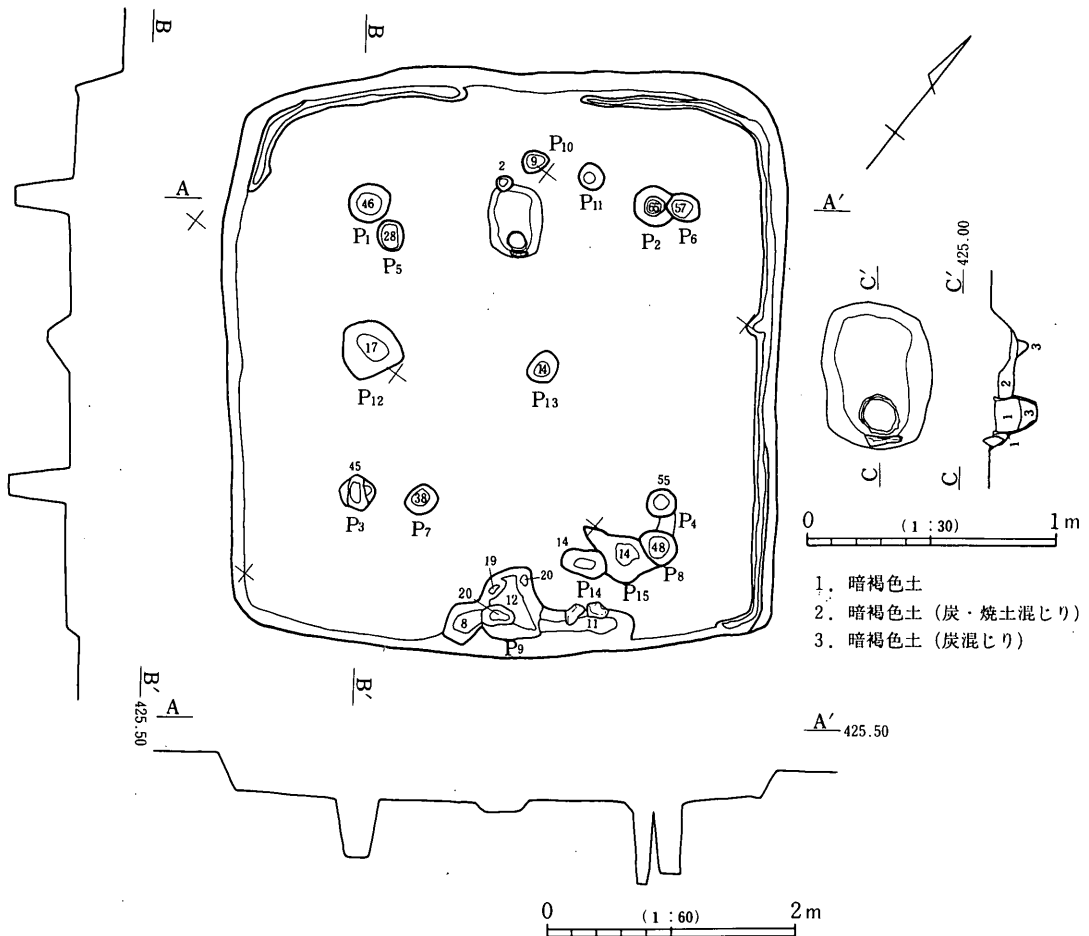
挿図126 118号住居址

⑤ 119号住居址 (挿図127)

XIU22n を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代中期の137号住居址を切る。4.6×4.4m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N36°W を示す。壁高は32~9cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が北西壁と北東壁下に認められ、北西壁下中央部に断絶を持っている。幅16~6cm・深さ7~1cm を測る。床面は全体に柔らかく不良である。主柱穴はP1~P8で、P1~P4が新しく、P5~P8が旧と考えられる。南東壁下中央部に位置するP9は、入口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を57×44cm の楕円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋めている。埋設土器内部に炭が認められた。主柱穴の状況から、建替えの住居址である。

遺物は床面上から主に出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図127 119号住居址

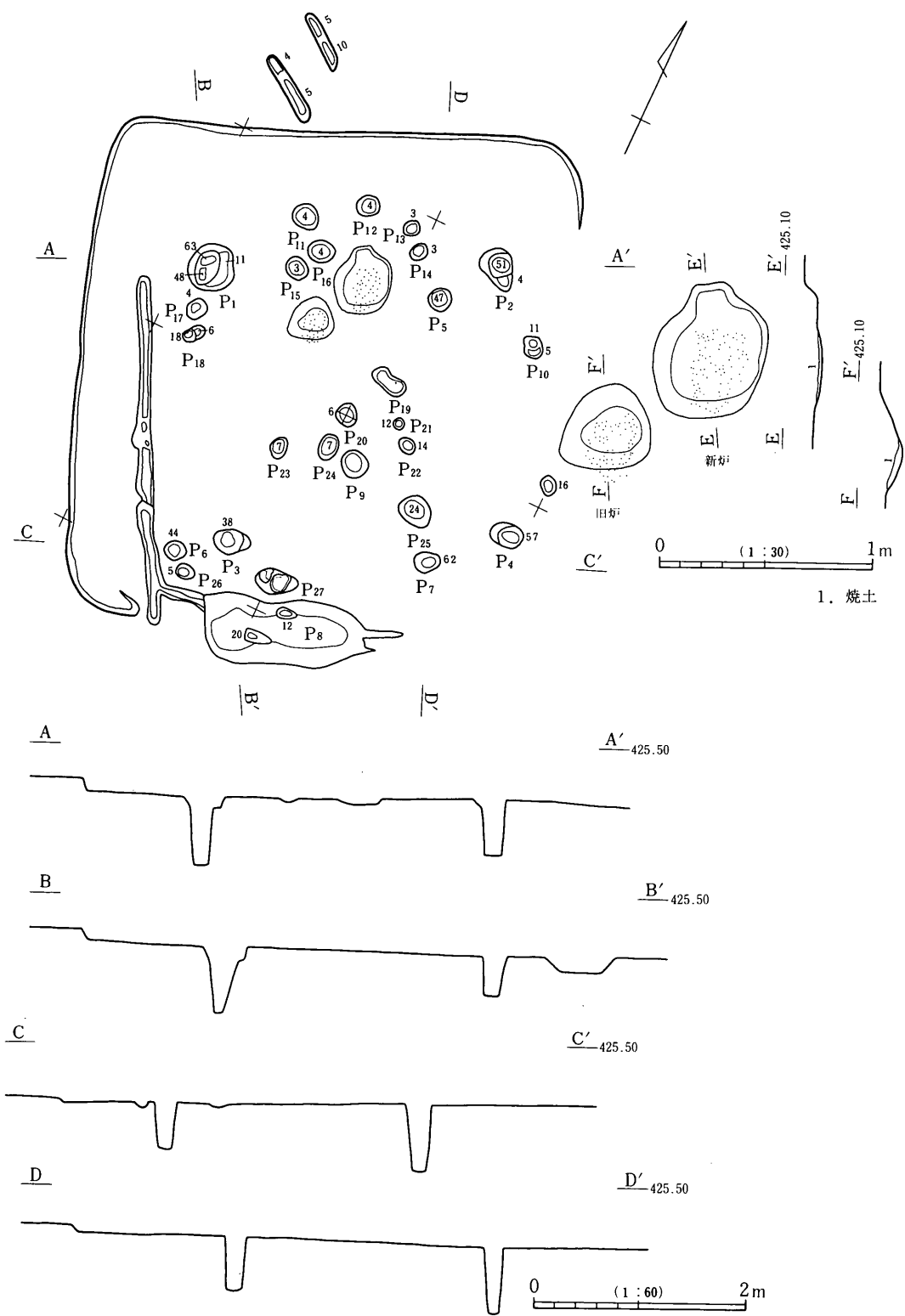


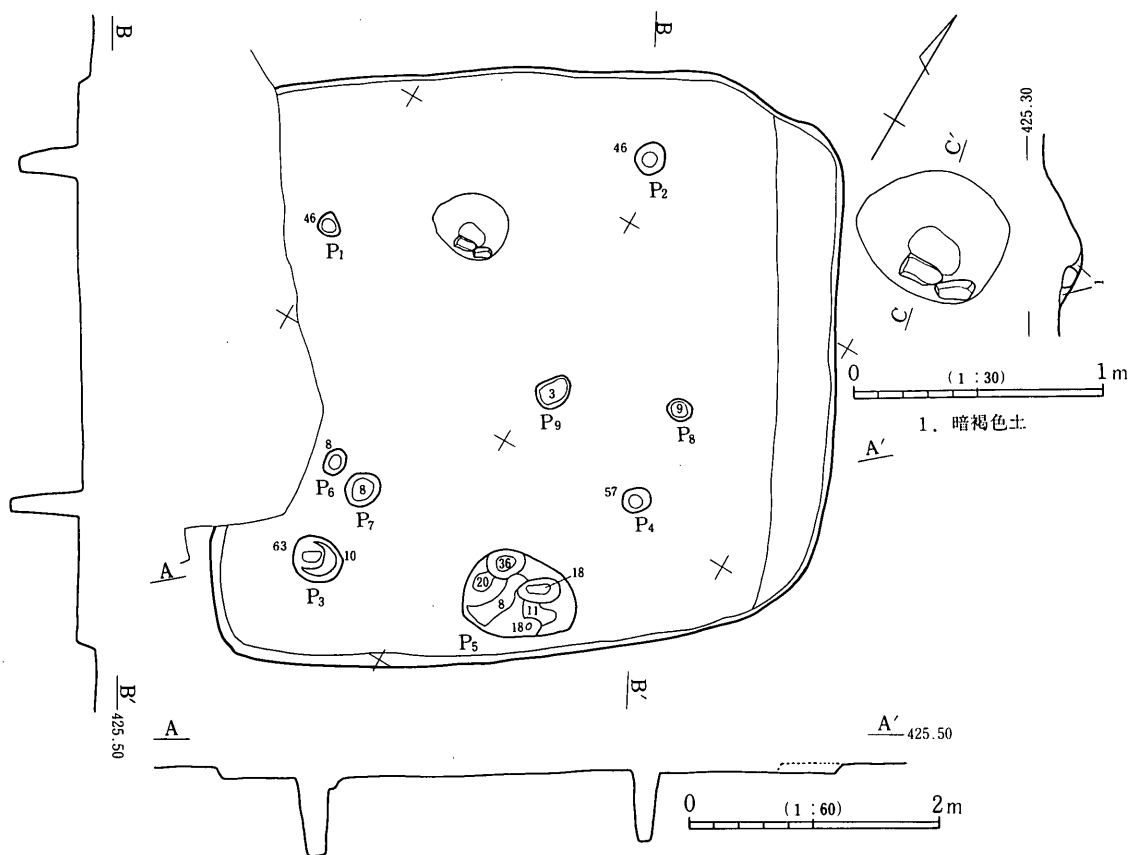
插图128 120号住居址

⑤2 120号住居址 (挿図128)

XIU24o を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。4.8×4.2m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N26°W を示す。壁高は17~4cm を測り、上面は水田の造成で削平され、北東壁から南東壁の一部は残っていない。周溝が南隅付近から南西壁からやや離れた位置に3.2m 程認められる。幅16~10・深さ11~3cm を測る。床面はたたき状に堅く良好である。支柱穴は P1~P7 で、P1~P4 が新しく、P5~P7 が旧と考えられる。南東側に位置する P8 は、入口部と考えられる。炉址は北西側支柱穴中間に位置する地床炉で、新旧の2箇所が認められた。新の炉址は床面を 62×53cm、旧の炉址は床面を 39×43cm にいずれも不整楕円形に掘り込み、いずれも底に焼土が顕著に認められた。炉址・周溝・支柱穴の状況から、建替えの住居址である。新しい住居址は北側に位置を替えて建てられている。ただし、旧の支柱穴の1本は検出できずなかった。周溝は新しい住居址に伴い、南西壁は旧の住居址のものと考えられる。旧の住居址は、主軸に直交する方向の長さが4.3m で、主軸方向は N22°W を示す。

遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

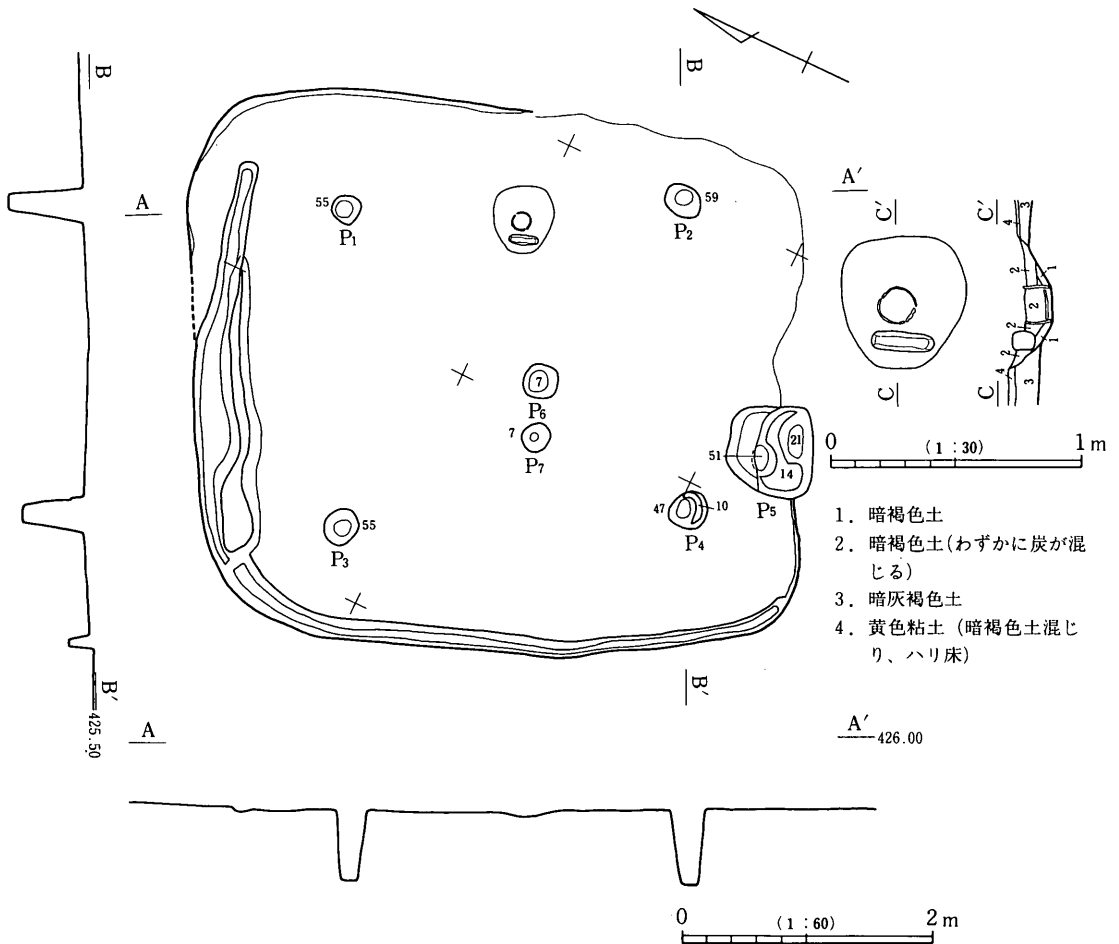


挿図129 121号住居址

⑤⑨ 121号住居址 (挿図129)

XIU18p を中心にして検出した。弥生時代中期の142号住居址を切り、西側が用地外で、全体の4/5程を調査した。4.7×4.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN30°Wを示す。壁高は14~6cmを測り、上面は水田の造成で削平されている。床面は全体に柔らかく不良である。主柱穴はP1~P4で、ややゆがんだ配置となる。南東壁下に位置するP5は、入口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面が52×61cmの楕円形に浅く掘り込み、焼土・炭はほとんど認められなかった。北西壁は土層のみきわめが難しかったので、掘り過ぎてしまう。床面の状況から判断して、細線で示したのが住居址の範囲と考えられる。遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



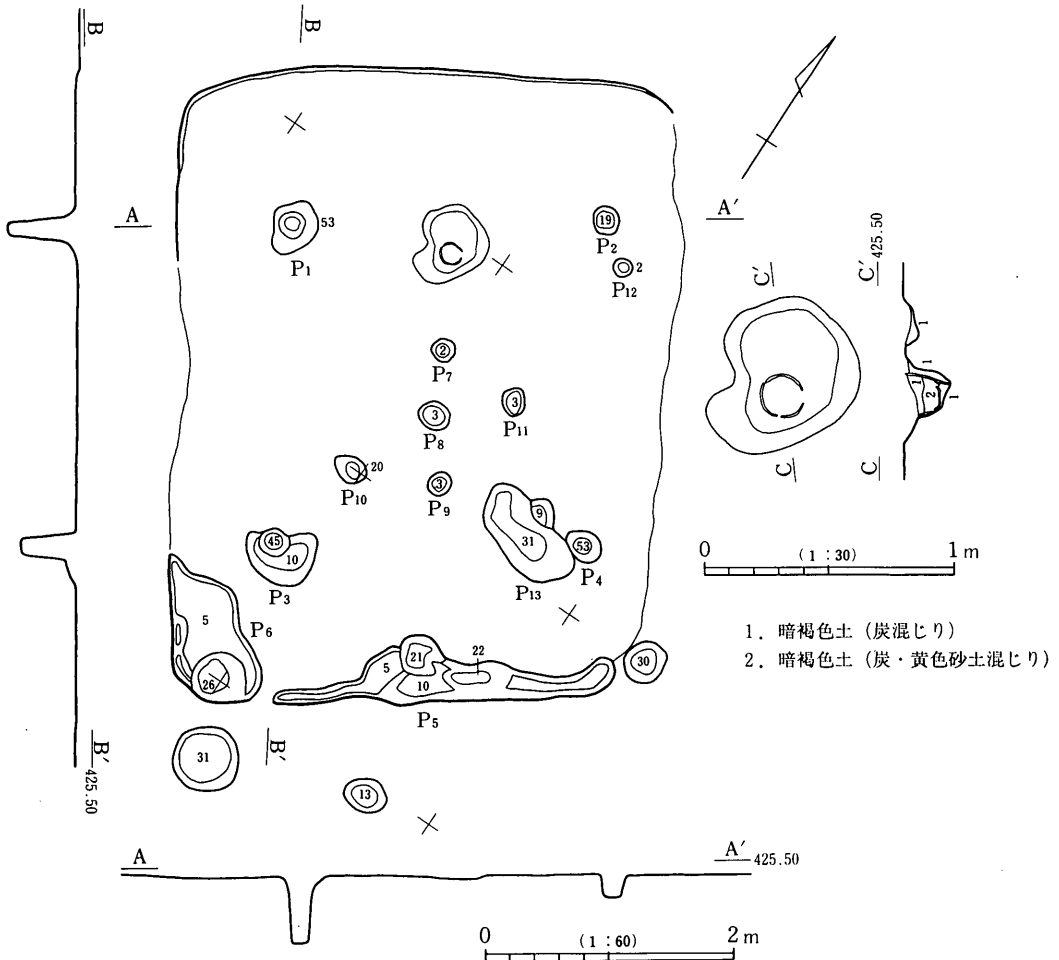
挿図130 122号住居址

⑤4 122号住居址 (挿図130)

XIU21w を中心にして検出し、全体を調査した。4.3×4.9m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N67°E を示す。壁高は13~1cm を測り、上面は水田の造成で削平されており、東隅付近は残っていない。周溝が南西壁から北西壁下に認められ、北隅付近でやや内側に曲がる。幅 36~11cm・深さ17~3cm を測り、北西側では幅24~6cm・高さ 3cm 前後の土手状縁部が認められた。床面は黄色土のハリ床となり、たたき状に堅く極めて良好である。壁のない部分も、細線で示した内側は良好であった。支柱穴は P1~P4 である。南東壁下に位置する P5 は、入口部と考えられる。住居址中央部に 2 個の穴があり、間仕切りと考えられる。炉址は北東側支柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を 52×50cm の円形に掘り凹め、甕の胴部を埋めて底に土器片を置いている。埋設土器内部に炭がわずかに認められた。

遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図131 123号住居址

⑤⑤ 123号住居址 (挿図131)

XIU25y を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。5.1×4.1m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N30°W を示す。壁高は 2cm 以下で、北西壁以外は水田の造成で削平されていて残っていない。周溝が南東側に認められ、住居址範囲を確定する決め手となった。床面はたたき状に堅く極めて良好で、壁のない部分も細線で示した内側は良好であった。主柱穴は P1～P4 で、し主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東側に位置する P5 は、入口部と考えられる。炉址から入り口部にかけて 3 個の穴が直線的に並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する土器埋設炉で、床面を 60×50cm のゆがんだ楕円形に掘り凹め、甕の胴部を埋めている。埋設土器内部に炭が認められた。

遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑤⑥ 124号住居址 (挿図132)

XIV22c を中心にして検出した。古墳時代前期の125号住居址に切られ、全体の3/4程を調査した。4.8×4.9m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N32°W を示す。壁高は 21～3cm を測り、上層を水田の造成で削平されている。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴は P1～P4・P7・P9 で、主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。P7・P9 は旧の主柱穴と考えられる。南東壁下中央に位置する P5 は、土手状縁部と小穴を伴い、入口部と考えられる。炉址から入り口部にかけて 2 個の穴が直線的に並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を 57×57cm の円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋めている。埋設土器内部に炭が認められた。

遺物は覆土中から出土した。

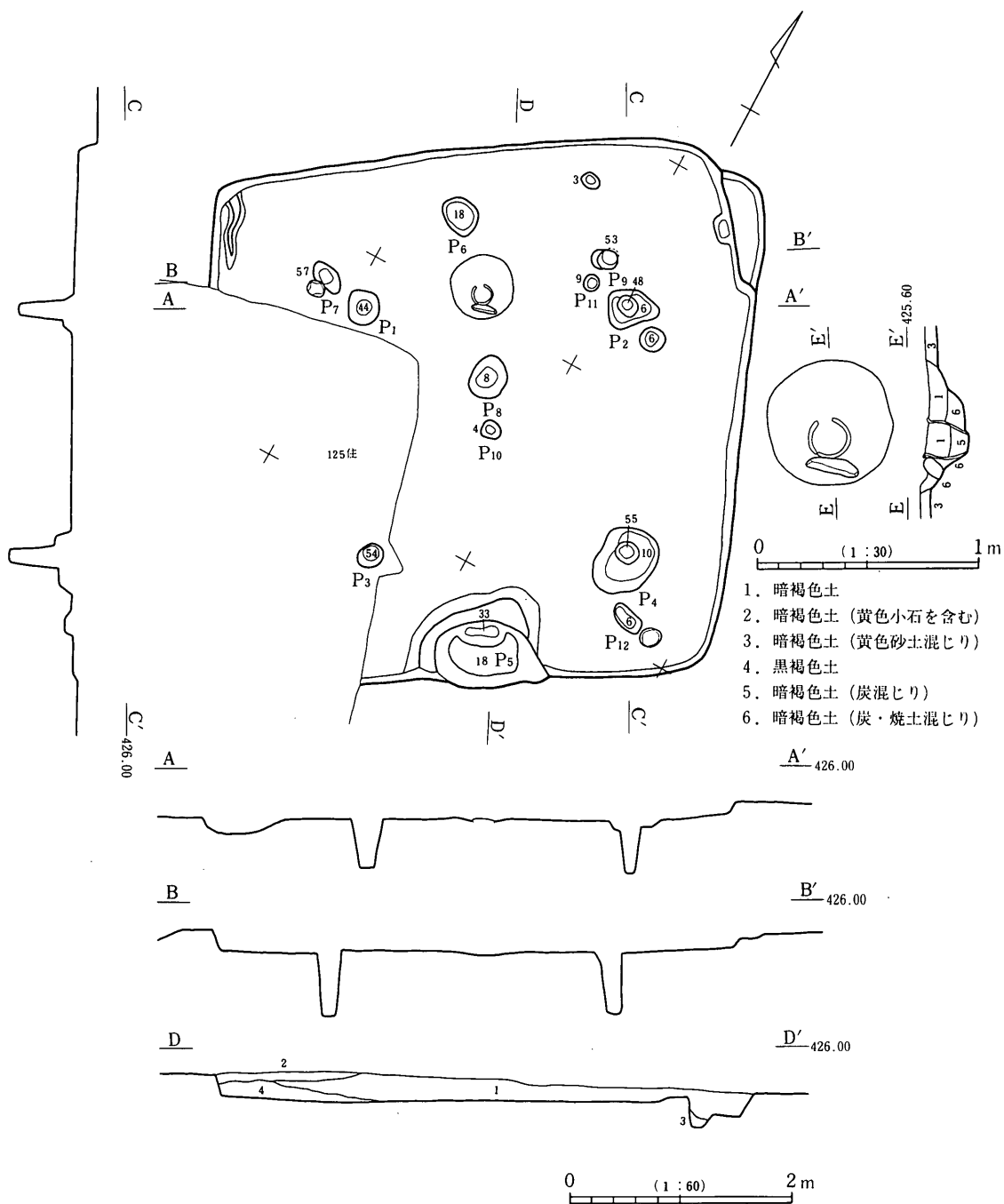
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑤⑦ 126号住居址 (挿図133)

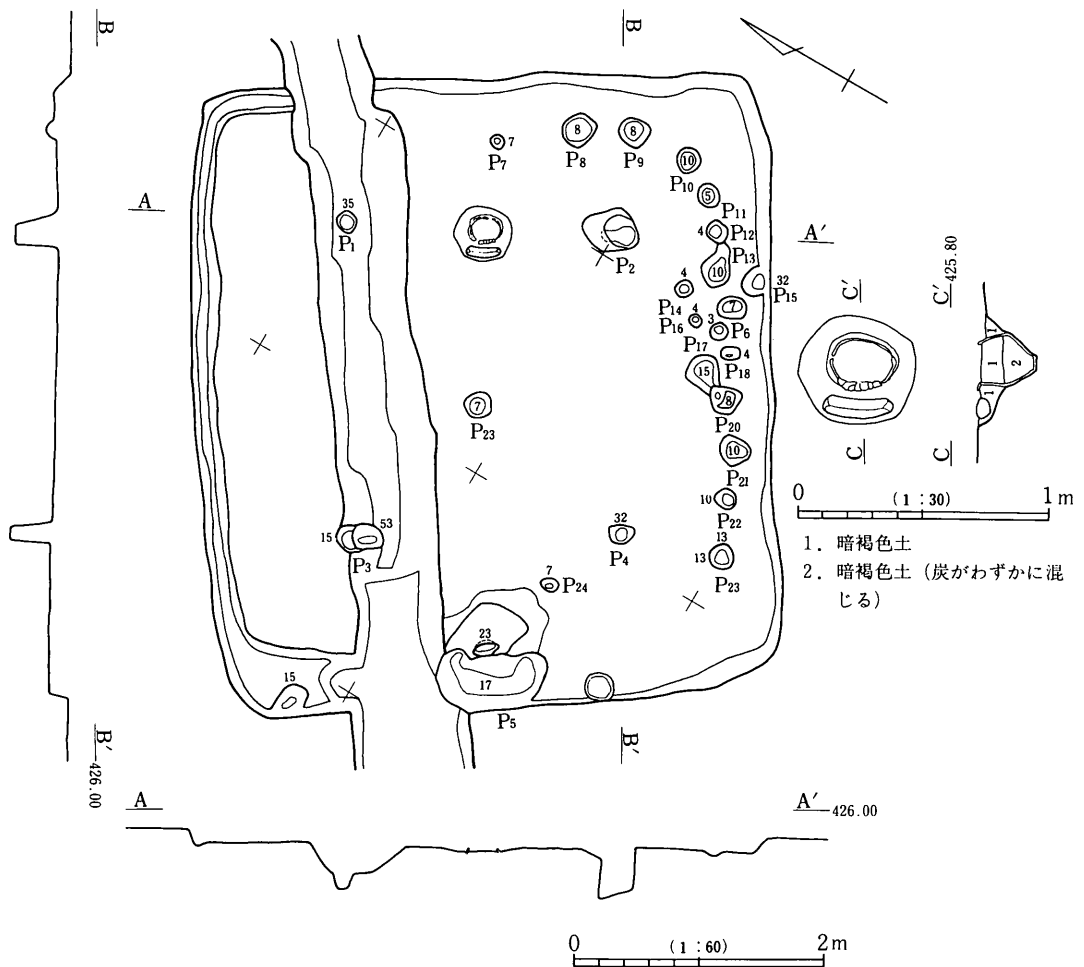
XIV19f を中心にして検出した。表土除去のバックで中央部を溝状に掘り過ぎ、全体の4/5程を調査した。5.0×4.6m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N58°W を示す。壁高は 20～6cm を測り、上層を水田の造成で削平されている。周溝が北西壁下に認められ、幅 48～17cm・深さ 11～2cm を測る。また、南東壁下やや内側には 14 個の小穴がほぼ直線的に並び、周溝的な役割と考えられる。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴は P1～P4 で、P2・P3 は主軸に直交する方向で細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南西壁下中央に位置する P5 は、土手状縁部と小穴を伴い、入口部と考えられる。その南側に台石が壁に立てかけてあった。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を 43×47cm の円形に掘り凹め、口縁部の一部を欠く甕を埋めている。埋設土器内部に炭が認められた。

遺物は床面上から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図132 124号住居址



挿図133 126号住居址

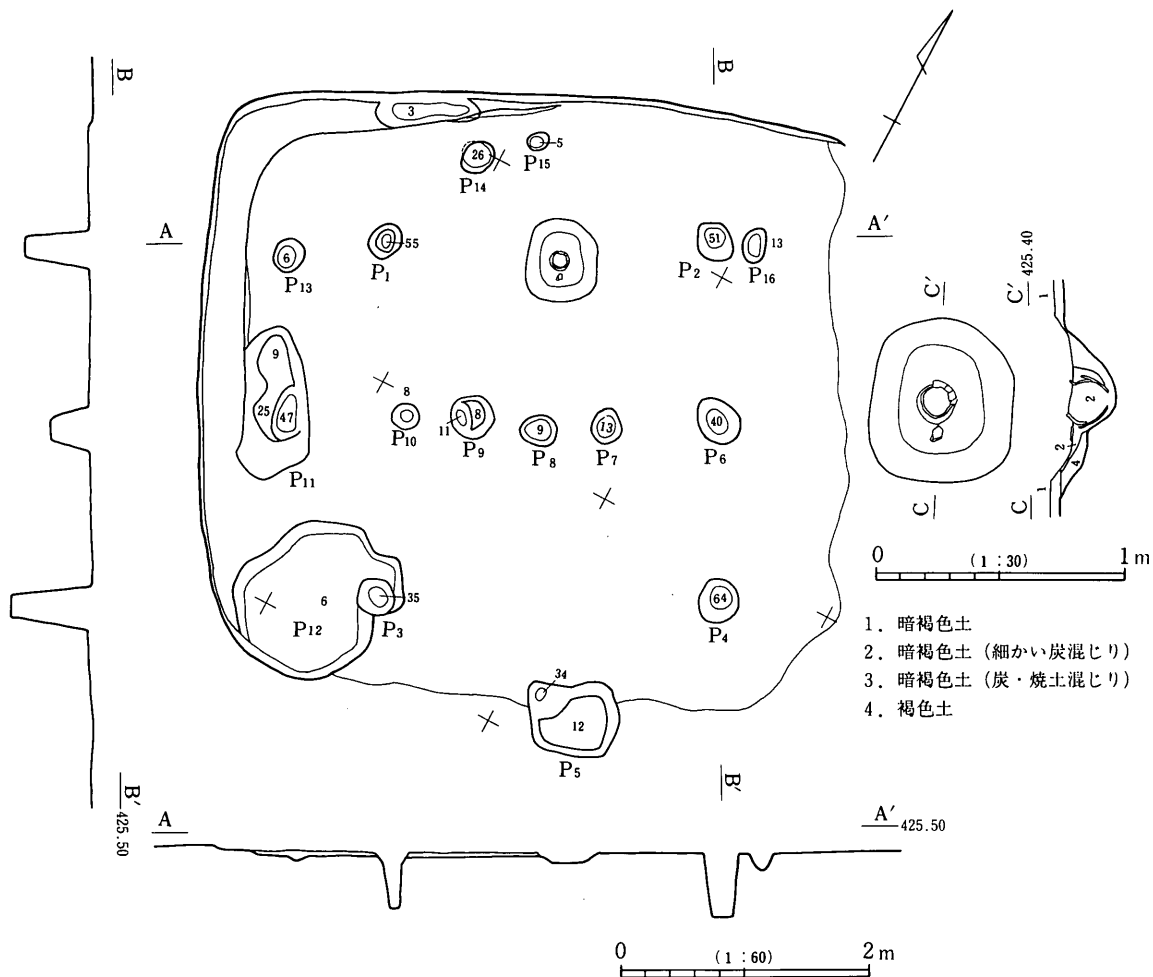
⑤8 127号住居址 (挿図134)

XIIV2a を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。5.1×5.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN22°Wを示す。壁高は8~1cmを測り、上層を水田の造成で削平されていて、南・東壁は削平されて残っていない。床面は黄色土のハリ床となり、たたき状に堅く極めて良好である。細線で示した内側に良好な床面を認めた。主柱穴はP1~P4で、主軸方向に細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南側に位置するP5は、入口部と考えられる。住居址中央部に主軸と直交する方向で5個の小穴が直線的に並び、間仕切りと考えられる。通常とはまったく逆で興味深い。炉址は北側主柱穴中間に位置する土器埋設炉で、床面を66×57cmの円形に掘り凹め、東海系台付甕を埋めている。胴中央部で壊れた個体の下半分を下に埋め、上半分をその上に埋めて一部が二重になっている。埋設土器内部に炭がわずかに認められた。ハリ床下に北西

北・西壁の一部を確認し、壁高は6~4cmを測る。P11・P13・P16はハリ床下で確認した。壁面の状況から建替えの住居址と考えられる。しかし、旧の支柱穴・炉址は確認できず、規模・主軸方向は分からなかった。

遺物は床面上から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



1. 暗褐色土
2. 暗褐色土（細かい炭混じり）
3. 暗褐色土（炭・焼土混じり）
4. 褐色土

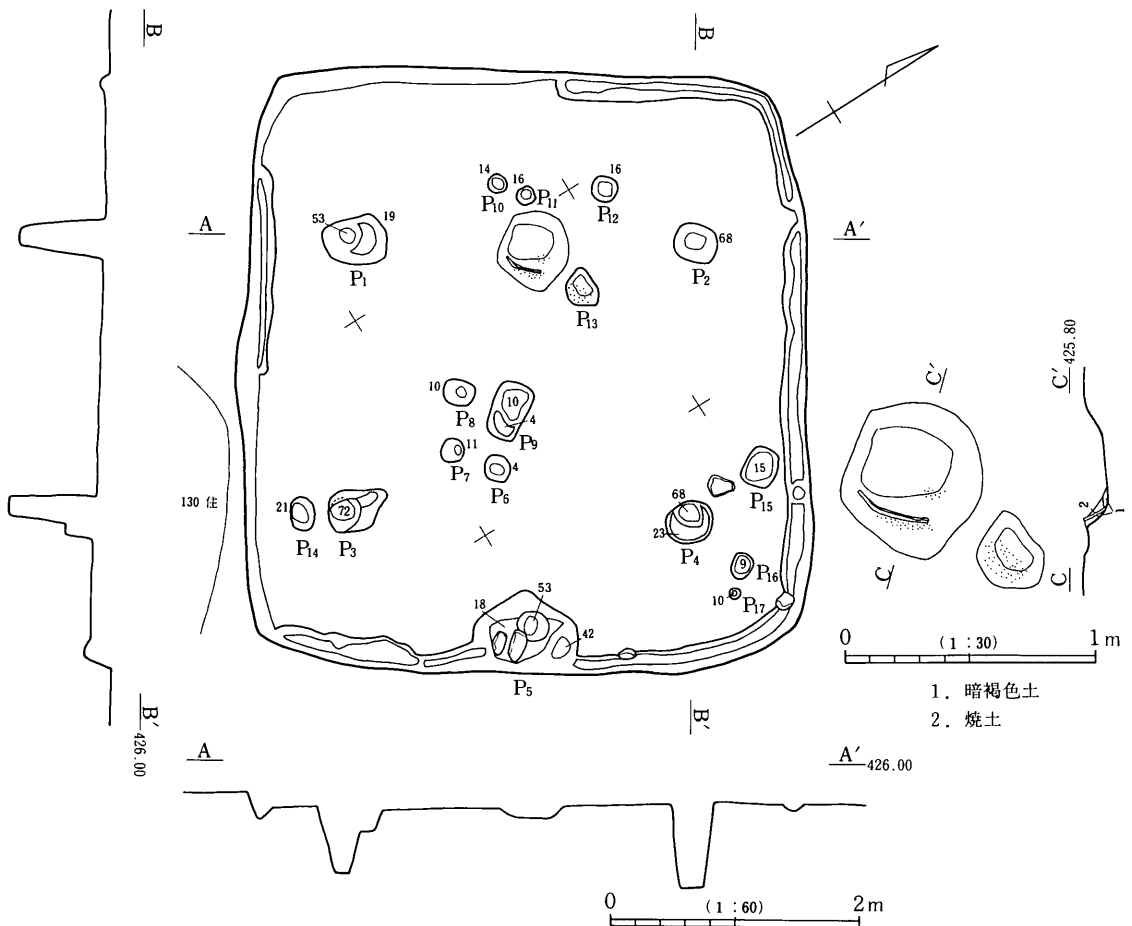
挿図134 127号住居址

⑤ 128号住居址 (挿図135)

XIU14y を中心にして検出し、全体を調査した。4.8×4.5m の隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向は N56°W を示す。壁高は18~1cm を測り、上層を水田の造成で削平され、かつ北西側は表土除去の際にやや掘り過ぎてしまう。周溝が北西壁中央から西隅、南西壁中央から南隅の部分を除いて壁下に認められた。幅24~10・深さ9~2cm を測る。床面はたたき状に堅く極めて良好である。支柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向に細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南東壁下中央に位置するP5は入口部と考えられ、2個の石が落ち込んでいた。住居址中央部に4個の小穴が集中する。炉址は北西側支柱穴中間に位置する地床炉で、床面が63×57cm の円形に浅く掘り込み、壺の胴部片を炉縁石的に埋めている。壺の周辺に焼土が認められたが、底には炭・焼土はほとんど確認できなかった。炉址の東側には焼土を伴う小穴があり、炉址に関連すると推定できる。

遺物は床面上から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



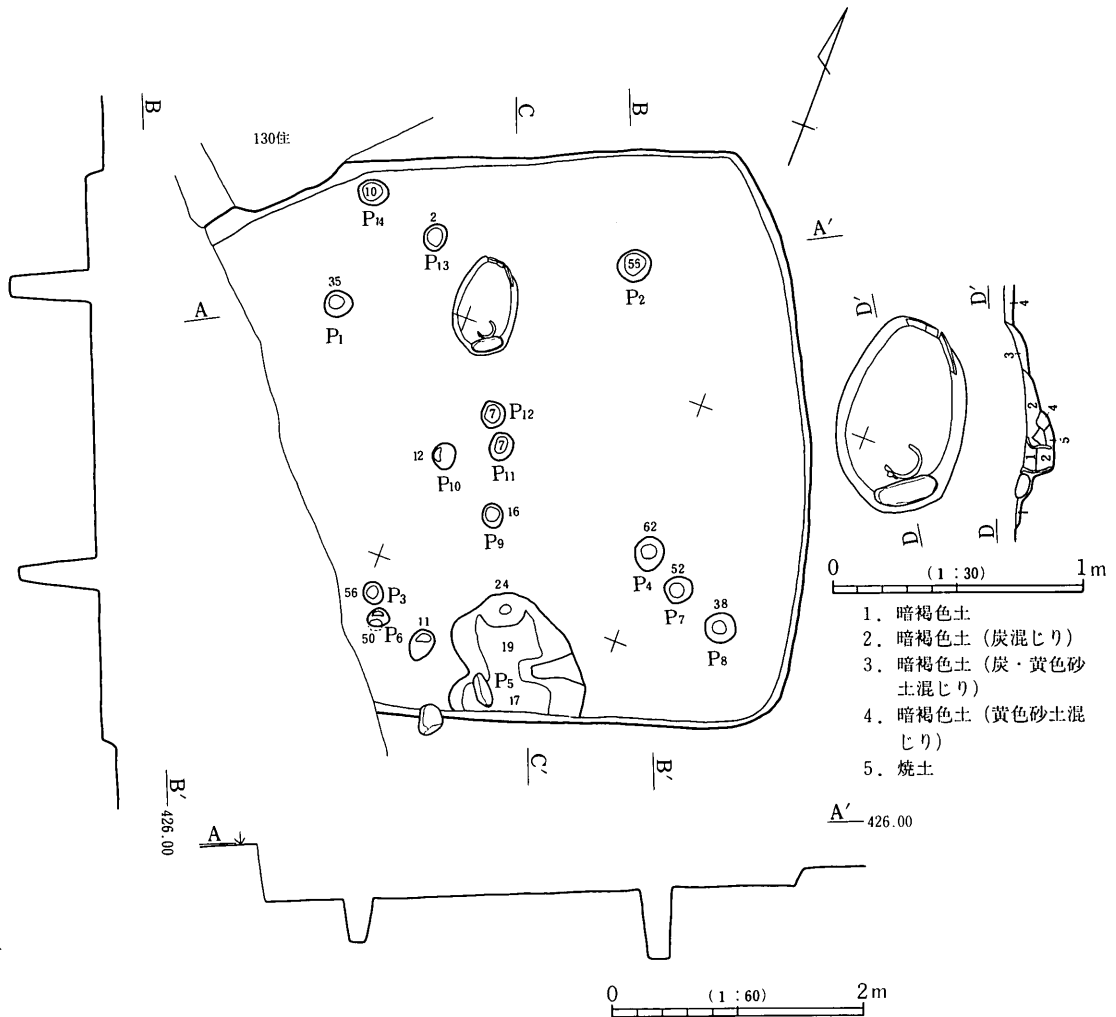
挿図135 128号住居址

㊦ 129号住居址 (挿図136)

XIU15t を中心にして検出した。弥生時代後期の130号住居址を切り、南東側が用地外で、全体の4/5程を調査した。主軸方向の長さが4.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN26°Wを示す。壁高は26~8cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状に堅く極めて良好である。支柱穴はP1~P4・P6・P7で、南東側の支柱穴の新旧は確認できなかった。南東壁下中央に位置するP5は、新旧の入口部が重複している可能性がある。炉址から入口部にかけて3個の穴が並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側支柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面が77×50cmの楕円形に掘り込み、底部を欠く甕を埋めている。北側には土器片が埋められており、旧の炉址の残骸と考えられる。底には炭・焼土が認められた。

遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



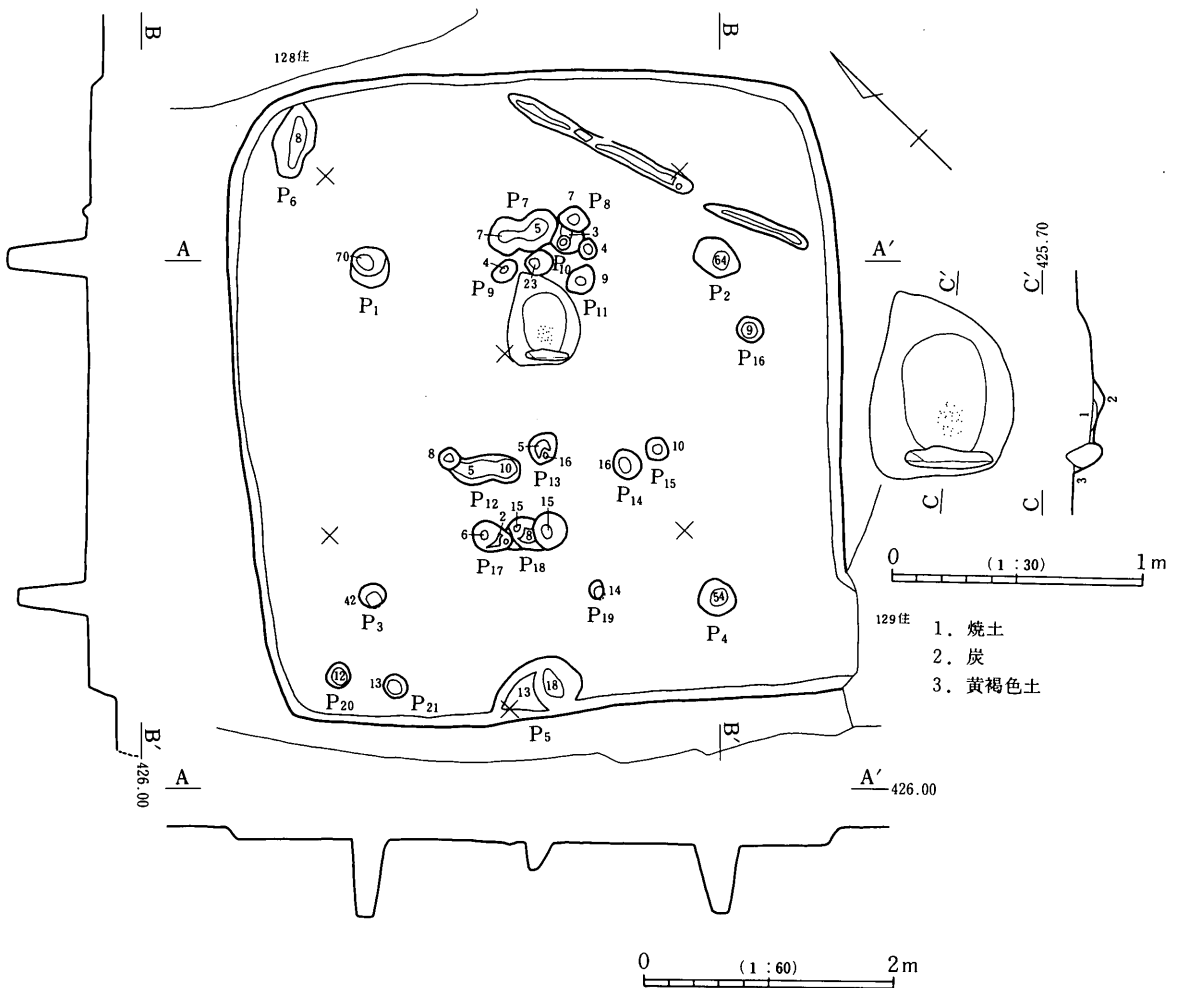
挿図136 129号住居址

⑥ 130号住居址 (挿図137)

XIV13v を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の129号住居址に切られる。5.1×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN45°Eを示す。壁高は24~8cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く極めて良好である。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向に細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南西壁下中央に位置するP5は、入口部と考えられる。住居址中央部に炉址の北東側に浅い掘り込みの小穴が集中する。北東壁下中央から南東壁下へ直線的に小溝が認められる。途中で1箇所の断絶がみられ、幅17~10cm・深さ10~2cmを測る。炉址は北西側主柱穴中間やや内側に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を66×57cmの楕円形の皿状に浅く掘り凹め、底に焼土・炭が認められた。

遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



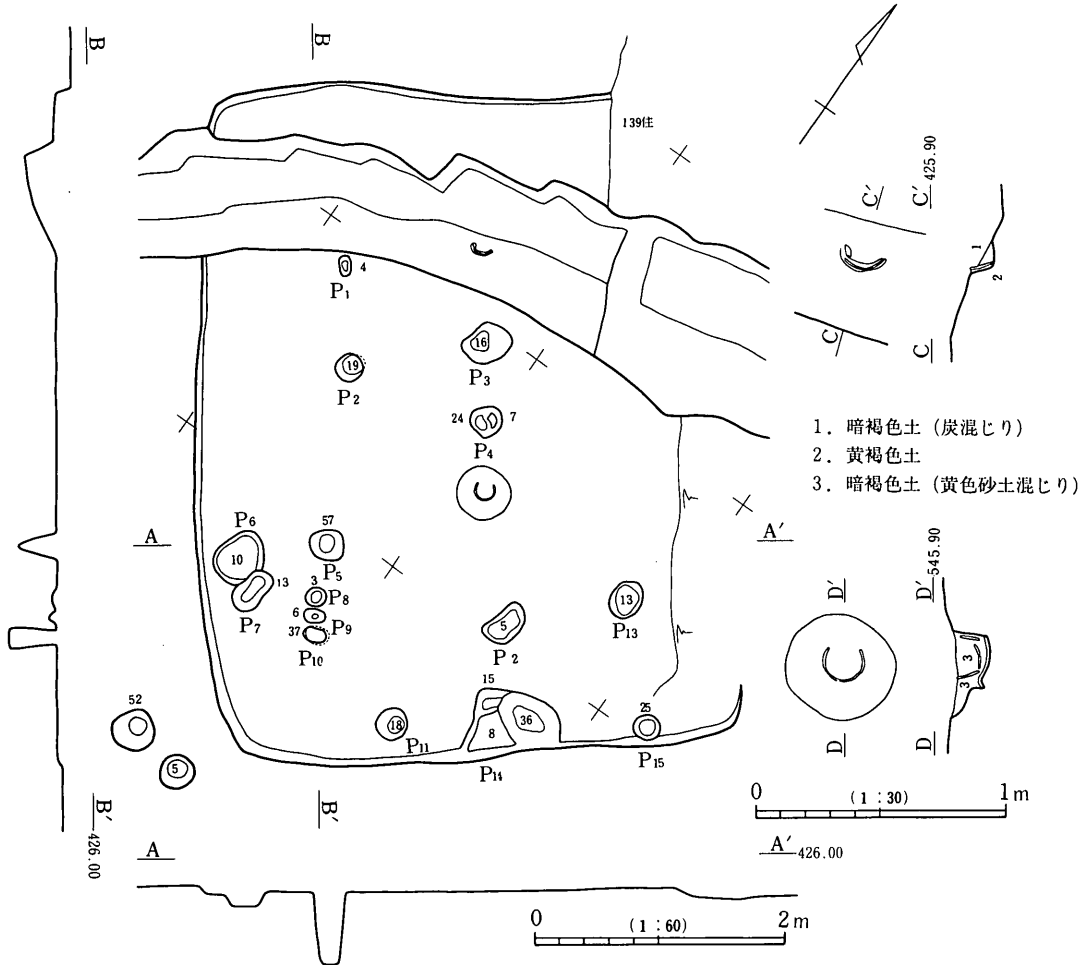
挿図137 130号住居址

⑥2 131号住居址 (挿図138)

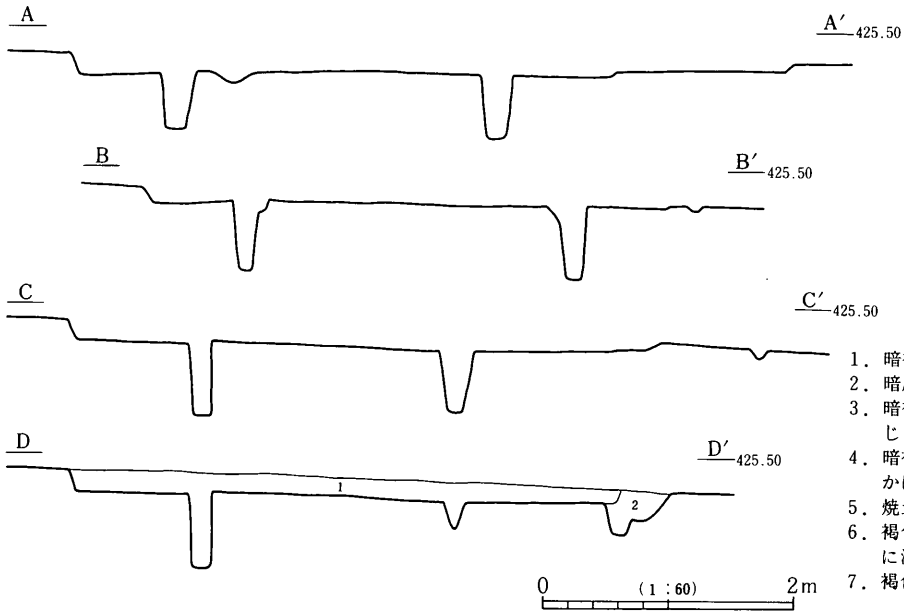
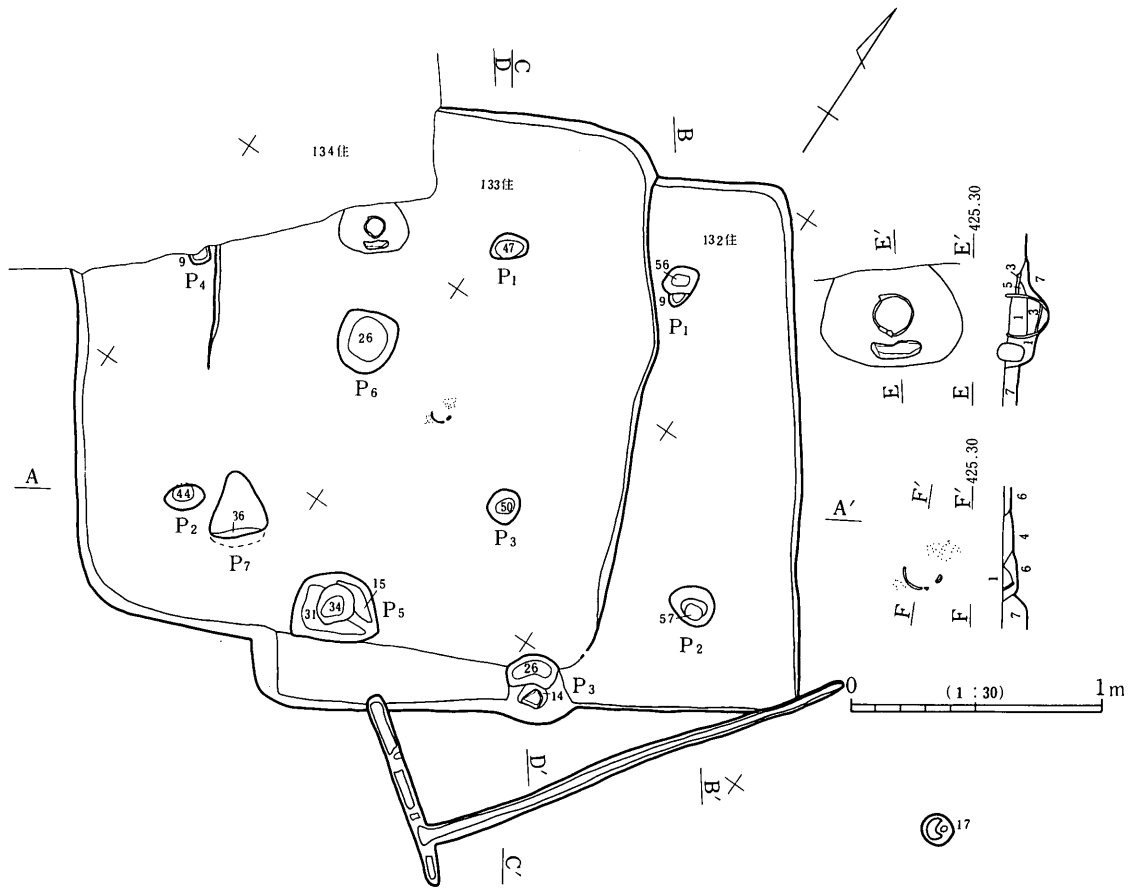
XIV22e を中心にして検出した。弥生時代後期の139号住居址に切られ、表土除去の際にバックで溝状に掘り下げてしまい、全体の3/4を調査した。主軸方向が5.3mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN36°Wを示す。壁高は15~3cmを測り、北西側は水田の造成で削平されて残っていない。床面はたたき状に堅く良好であるが、北西側の壁際は不良である。支柱穴は確認できなかった。その中で、P5・P10が該当するかもしれない。南西壁下中央に位置するP14は、入口部と考えられる。炉址は北西側と中央部の2箇所のみられた。前者はバックによる攪乱でほとんど壊され、土器埋設炉の底の一部が残る。後者は土器埋設炉で、床面に42×45cmの円形に掘り凹め、甕の胴部を埋め、底に土器片を敷きその上にも土器片を入れてある。炭・焼土はほとんど認められなかった。炉址の位置が特異であり、建替え・重複等も考えられるが、それを判断する材料は得られなかった。

遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図138 131号住居址



1. 暗褐色土
2. 暗灰褐色土
3. 暗褐色土 (焼土・炭混じり)
4. 暗褐色土 (焼土がわずかに混じる)
5. 焼土
6. 褐色土 (焼土がわずかに混じる)
7. 褐色土

挿図139 132号住居址・133号住居址

⑥③ 132号住居址 (挿図139)

XIV23r を中心にして検出した。弥生時代後期の133号住居址に切られ、全体の1/4程を調査した。4.3×4.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN114°Wを示す。壁高は12~1cmを測り、上層は水田の造成で削平されて残っていない。床面は全体に柔らかく不良である。主柱穴はP1・P2で、南西側主柱穴は確認できなかった。南東壁下中央に位置するP3は、入口部と考えられる。炉址は住居址中央部南西寄りに位置する土器埋設炉で、上面は133号住居址に壊されて、甕の胴部の一部が残る。周辺に焼土が認められた。

遺物は覆土中からわずかに出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑥④ 133号住居址 (挿図139)

XIU22r を中心にして検出した。弥生時代後期の132号住居址を切り、弥生時代後期の134号住居址に切られ、全体の4/5程を調査した。4.6×4.2mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN30°Wを示す。壁高は16~1cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に柔らかくやや不良である。主柱穴はP1~P3で、主軸に直交する方向に細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。西側主柱穴は134号住居址に切られる部分で分からなかった。南西壁下中央に位置するP5は、入口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置すると考えられる炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を56cm程の楕円形に掘り凹め、口縁・底部を欠く甕を埋め、底に土器片を入れている。埋設土器北西側に焼土、内部に炭が認められた。

遺物は覆土中から出土した。

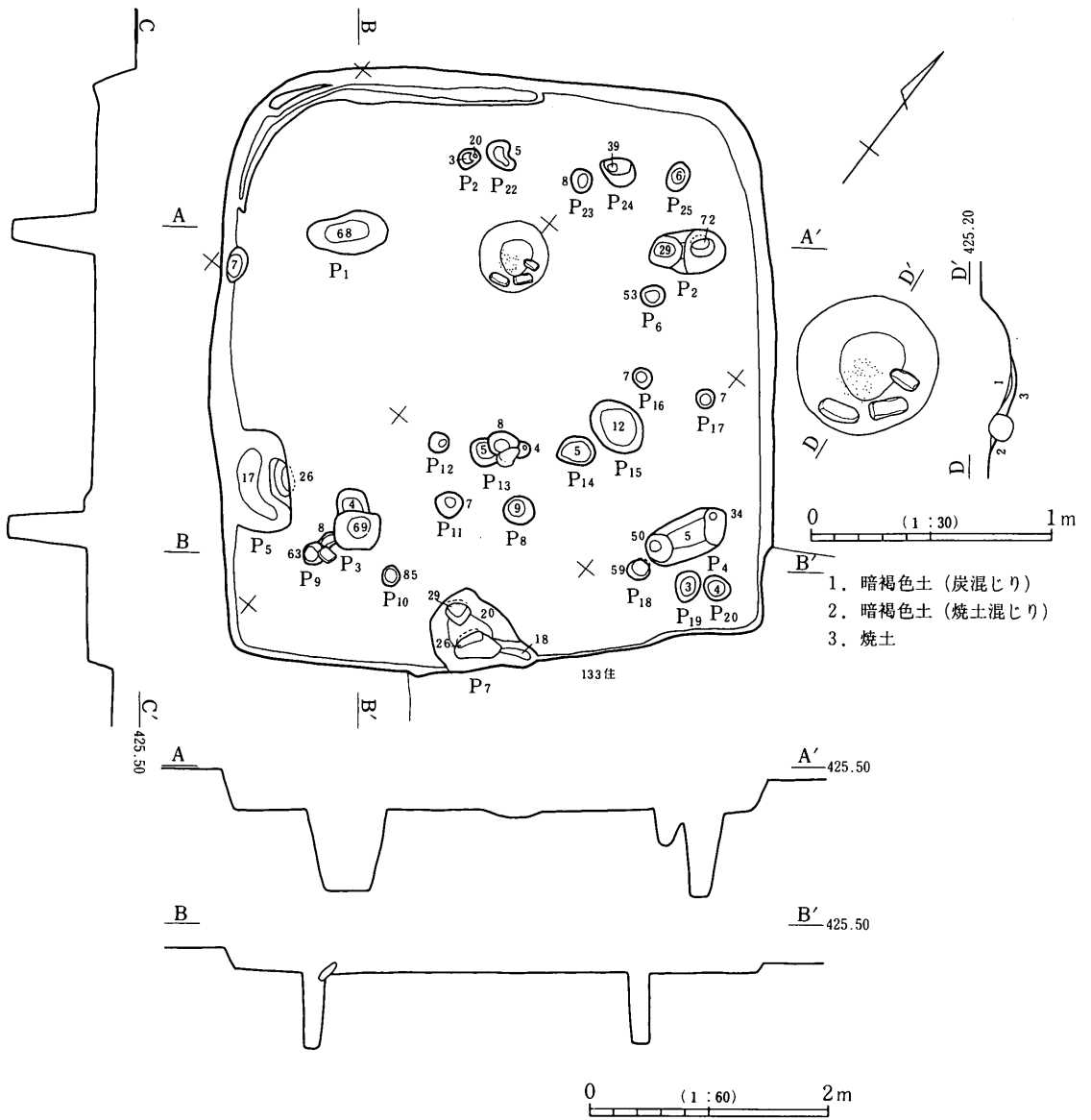
出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

⑥⑤ 134号住居址 (挿図140)

XIU21s を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の133号住居址を切る。4.9×4.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN37°Wを示す。壁高は31~4cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が西隅下から北西壁下中央部まで認められ、幅16~10cm・深さ8~3cmを測る。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1~P4・P6・P9・P10・P18で、P1・P2・P4は2本の柱が立てられと考えられる。南西壁下南隅寄りに位置するP5と南東壁下に位置するP7は、入口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面が56×59cmの円形に掘り凹み、底部に焼土が認められた。主柱穴・入口部の状況から2度建替えた住居址と考えられる。

遺物は住居址中央部から南隅の床面上に、30~10cmの石とともに出土した。住居廃棄直後に投棄されたと考えられる。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



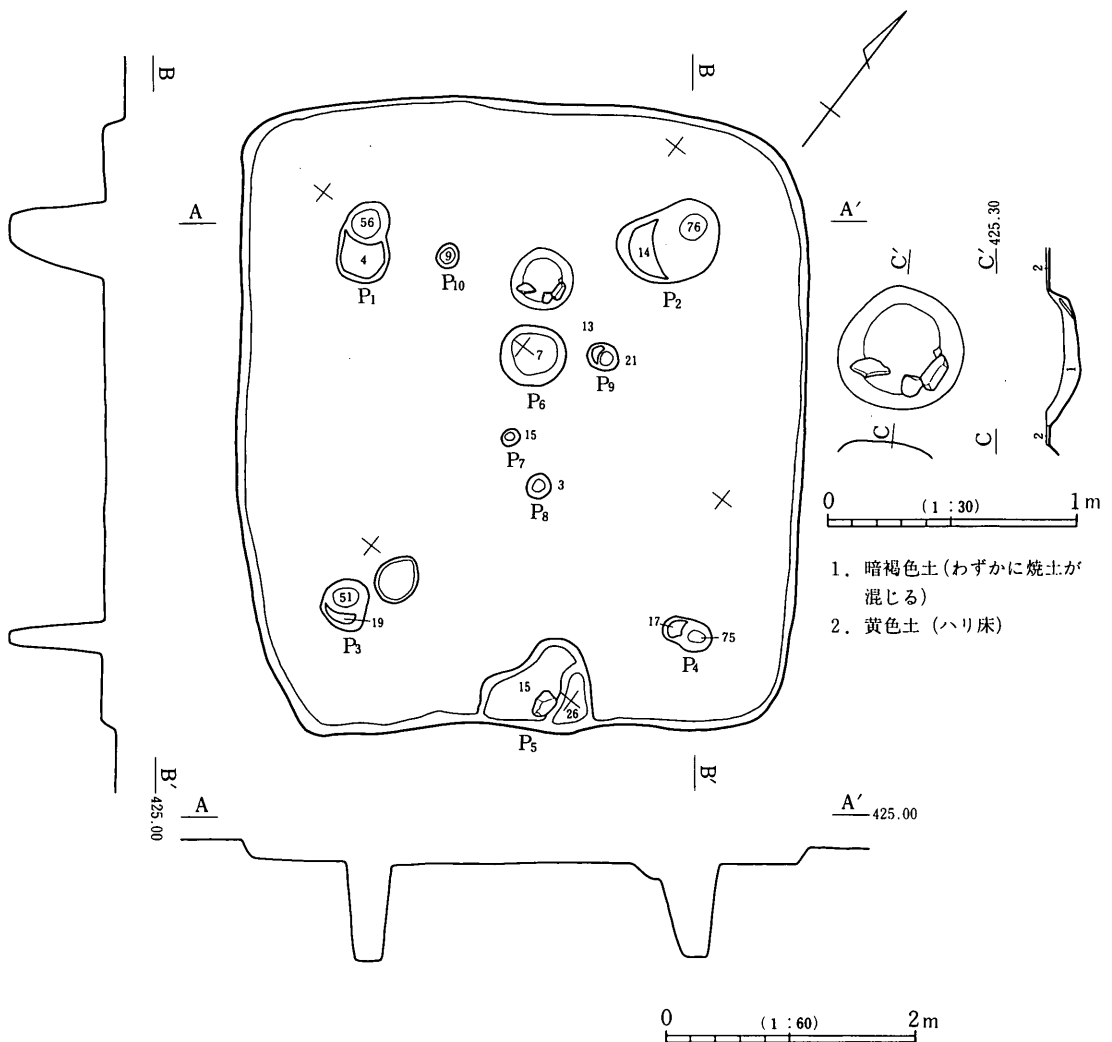
挿図140 134号住居址

⑥ 135号住居址 (挿図141)

XIIU4vを中心にして検出し、全体を調査した。縄文時代中期の144号住居址を切る。5.0×4.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN33°Wを示す。壁高は21~4cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は黄色土のハリ床となり、たたき状に堅く良好である。主柱穴はP1~P4で、いずれも2段の掘り込みをなす。南東壁下中央部に位置するP5は、入口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間やや内側に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面が48×50cmの円形に掘り込み、わずかに焼土が認められた。P3の北側に台石が認められる。

遺物は覆土中からわずかに出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



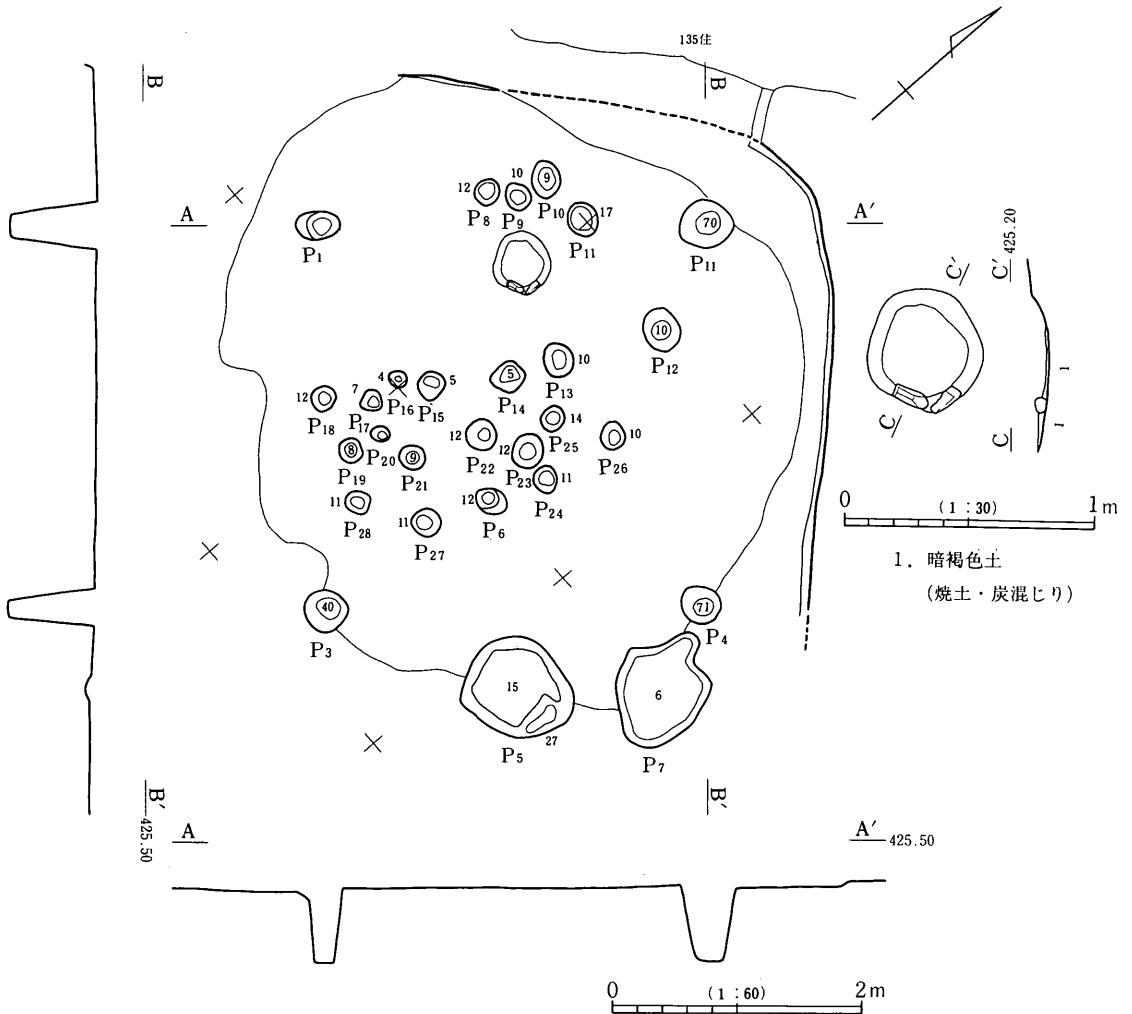
挿図141 135号住居址

⑥7 136号住居址 (挿図142)

XIIU5t を中心にして検出し、全体の4/5程を調査した。5.2×5.0m と推定される隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N47°W を示す。壁高は 9cm 以下で、水田の造成で削平されており、残存部分は少ない。床面は細線より内側でたたき状に堅く良好で、床面上に炭が分布していた。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向で細長い状態で検出され、割り材使用の柱が考えられる。南西側に位置する P5は、入口部と考えられる。住居址中央部から南西側に浅い掘り込みの小穴が集中する。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面が49×46cm の円形に掘り込み、わずかに炭・焼土が認められた。

遺物は住居址全体の床面上から炭ともに出土した。土器の破片が主体で、住居廃棄直後に投棄されたと考えられる。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



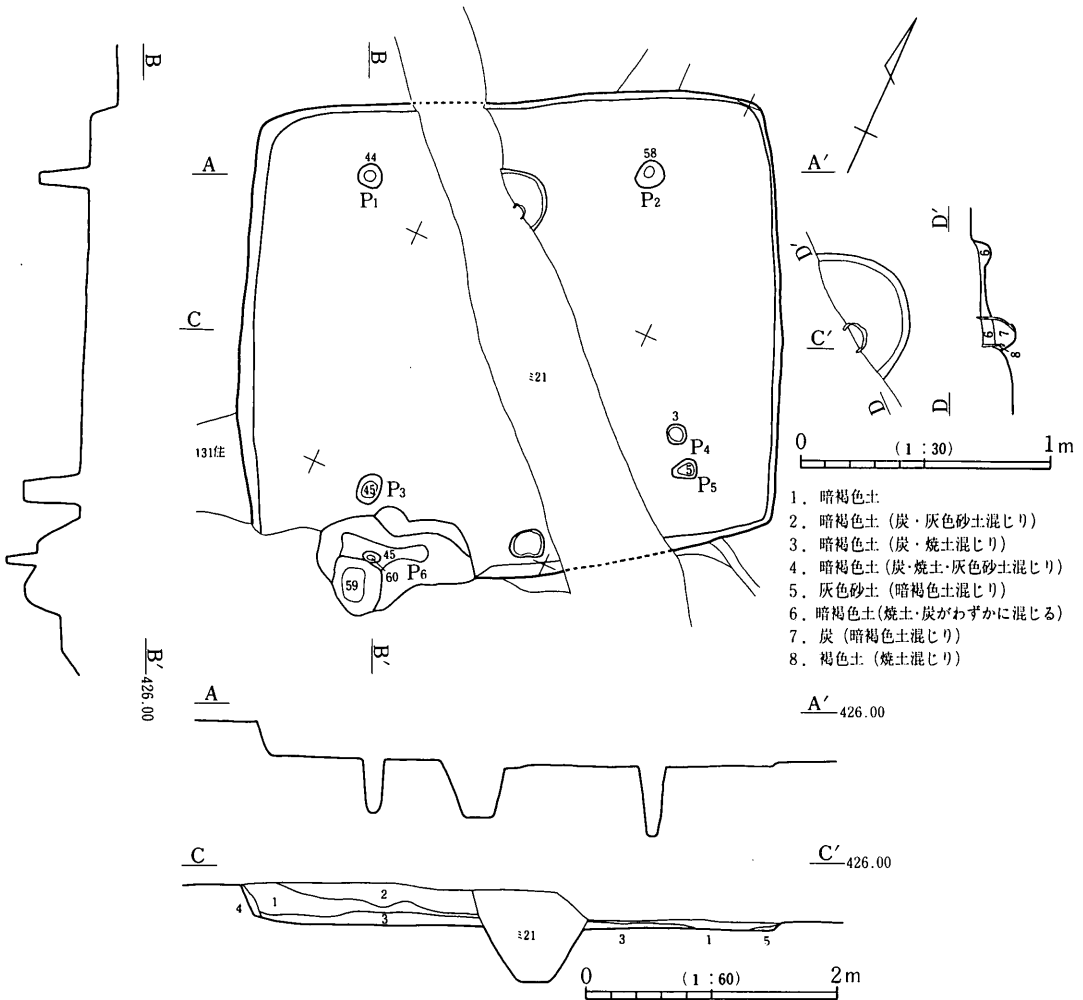
挿図142 136号住居址

㊦ 139号住居址 (挿図143)

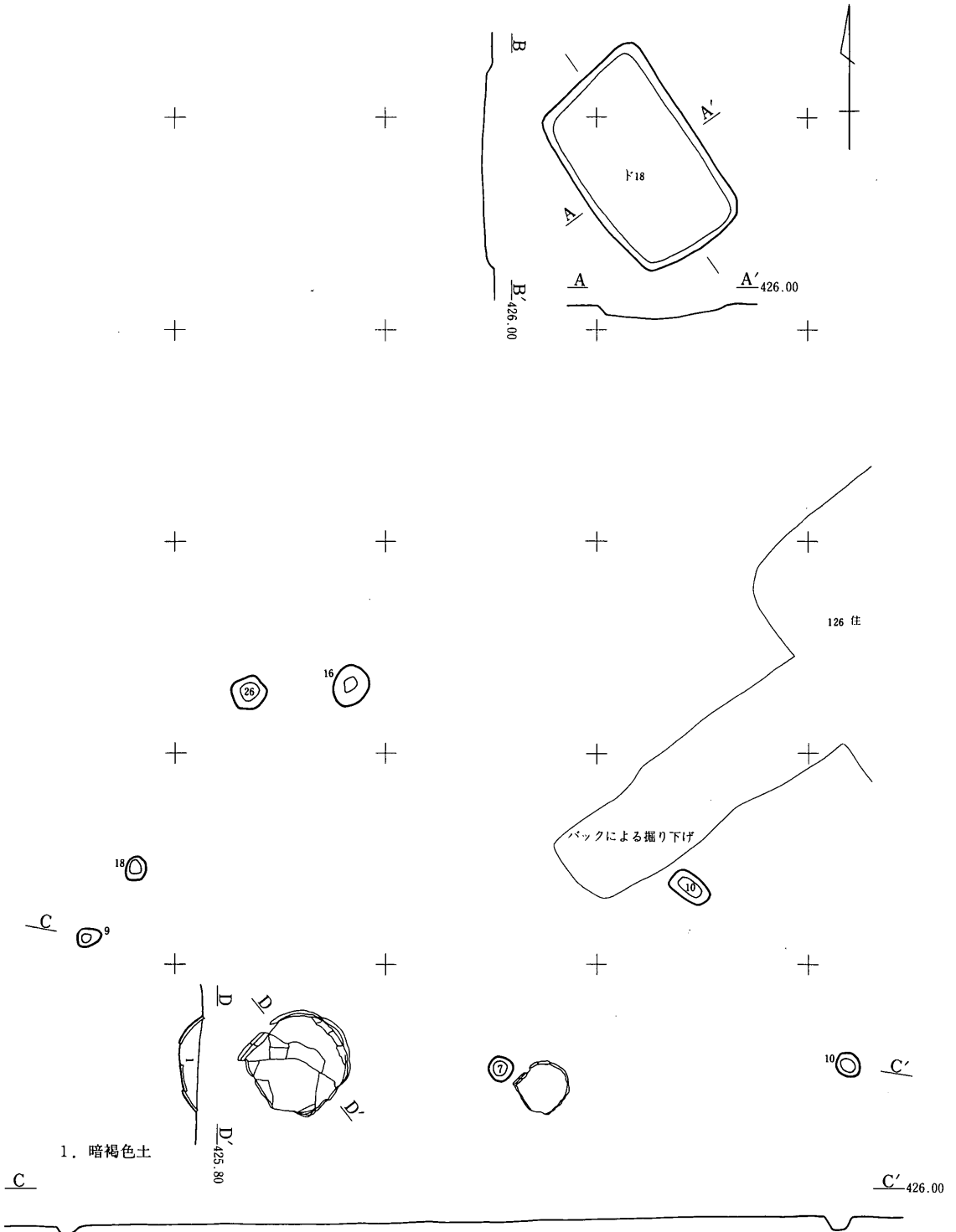
XIV22h を中心にして検出した。弥生時代後期の131号住居址を切り、近世の溝址21に切れ、南壁が表土除去の際バックで溝状に深く掘り過ぎて、全体4/5程を調査した。3.8×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN23°Wを示す。壁高は31~5cmで、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は全体に柔らかく不良である。主柱穴はP1~P3で、東側主柱穴は精査したが、検出できなかった。南東側南隅寄りに位置するP6は、入口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する土器埋設炉で、大半が溝址21に切られて残存部分は少ない。埋設土器の甕が半分程残り、内部に炭が認められた。床面上と覆土の上層に炭層があり、壁面も一部焼けている。

遺物は上層の炭とともに多量に出土した。土器の破片が主体で、住居址廃棄後に投棄されたと考えられる。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



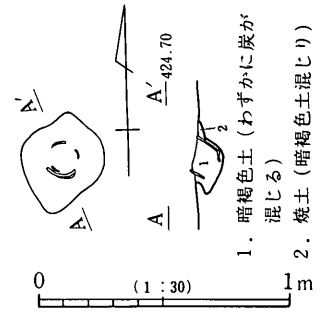
挿図143 139号住居址



挿図144 140号住居址、土坑18

㊦ 145号住居址 (挿図145)

XIT19y に炉址の埋設土器を検出し、竪穴住居址があることが確認できた。弥生時代後期の70号住居址と重複する。水田の造成による削平を受けて、床面・壁面とも確認できず、平面形・規模・主軸方向とも不明で、炉址の残骸のみを調査した。炉址も上層は削平されていて、甕の胴部が残るのみである。埋設土器内部に炭、周辺に焼土が認められた。



挿図145 145号住居址

㊧ 140号住居址 (挿図144)

XIV16b に埋設土器を検出し、炉址の残骸と考えて調査を進めた。上層は水田の造成で削平されており、底が残ったのみで、詳細は不明である。埋設土器は壺の胴部を用いており、断ち割りを実施したが炭は認められなかった。

当初竪穴住居址の炉址と考えて名称を付したが、断定できる材料は得られなかった。壺棺墓の可能性も否定できない。

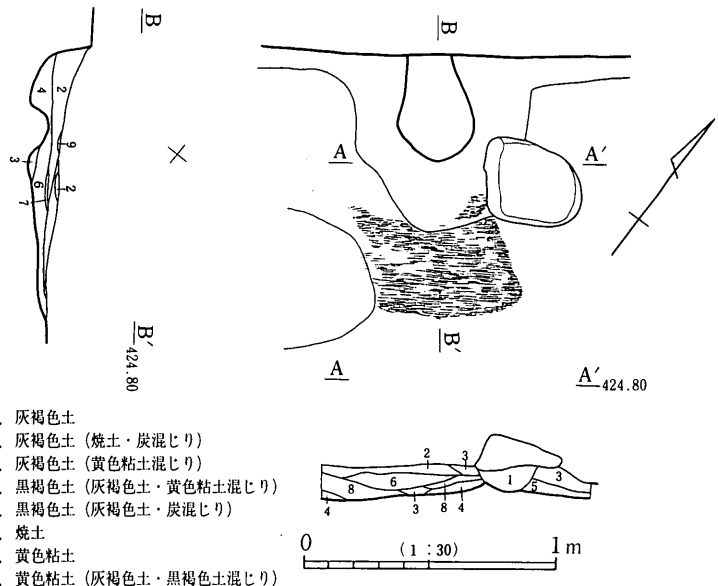
埋設土器の壺のみが出土した。

出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

(3) 古墳時代

① 74号住居址 (挿図146・147)

XIIT3y を中心にして検出し、全面を調査した。弥生代後期の83号住居址・時期不明の土坑24を切る。7.4×7.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN40°Wを示す。壁高は23~1cmで、やや緩やかな壁面をなす。上層は水田の造成により削平を受けている。床面は全体に柔らかく不良であるが、中央部からカマドにかけての部分はタタキ状に堅く良好であった。カマドは北西



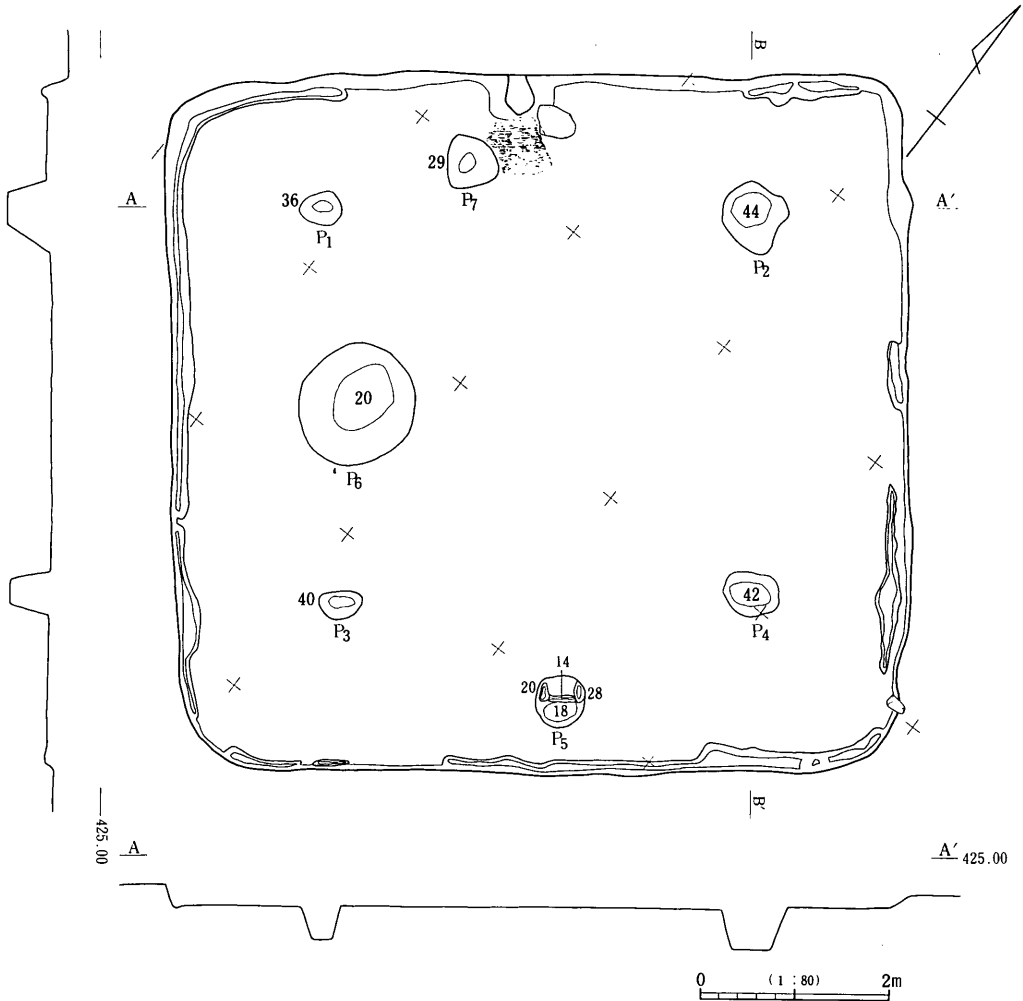
1. 灰褐色土
2. 灰褐色土 (焼土・炭混じり)
3. 灰褐色土 (黄色粘土混じり)
4. 黒褐色土 (灰褐色土・黄色粘土混じり)
5. 黒褐色土 (灰褐色土・炭混じり)
6. 焼土
7. 黄色粘土
8. 黄色粘土 (灰褐色土・黒褐色土混じり)
9. 炭

挿図146 74号住居址カマド

壁中央に位置する粘土カマドと考えられ、残存状況が悪く、袖の構造等は把握できなかった。焚口部には炭と焼土が顕著に認められた。

遺物は床面上を主体にして出土した。

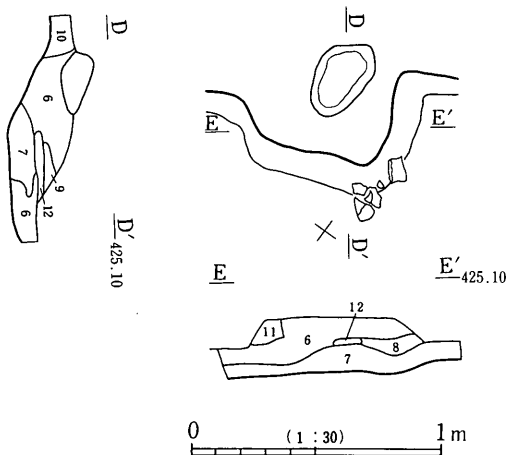
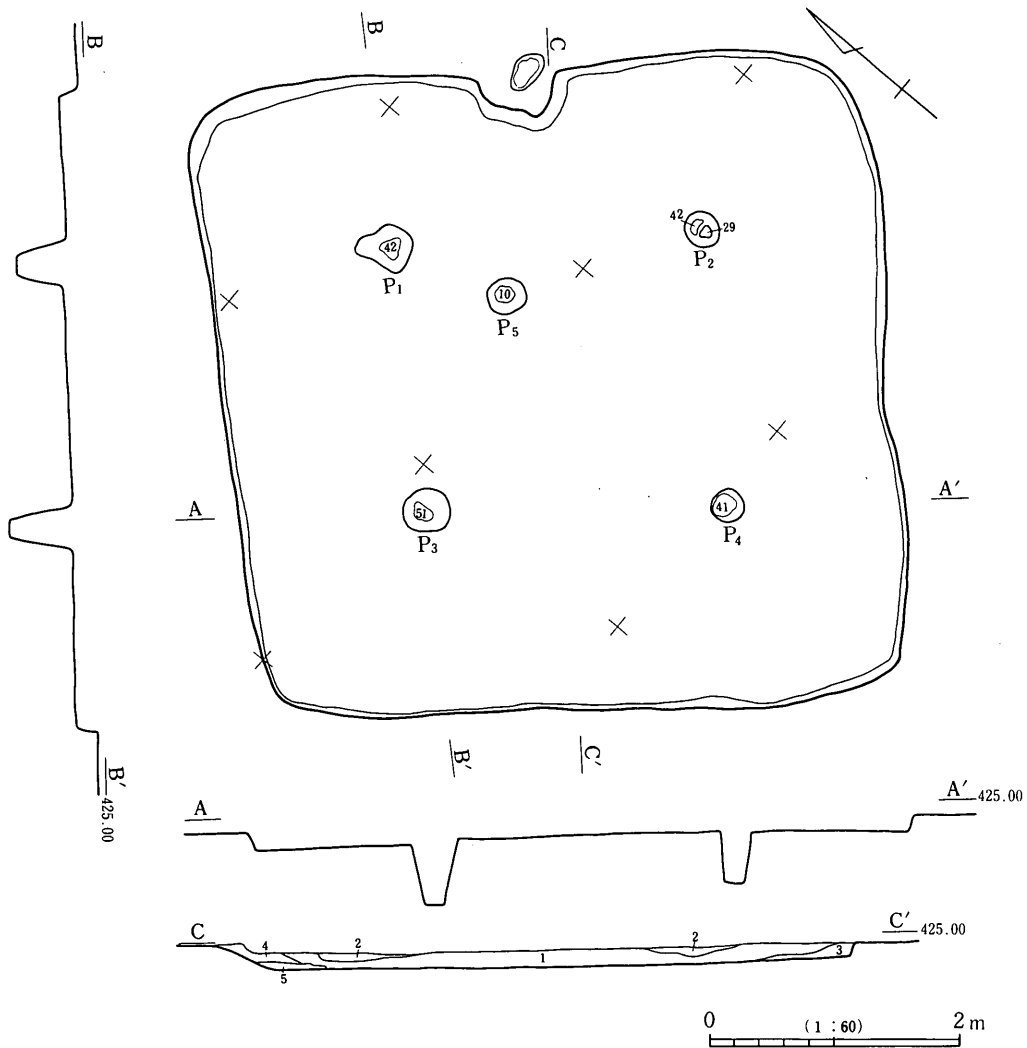
出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。



挿図147 74号住居址

② 84号住居址 (挿図148)

XIU23j を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の85号住居址・86号住居址・87号住居址・88号住居址・89号住居址を切る。5.3×5.0mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN45°Eを示す。壁高は18~10cmで、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は全体に柔らかく不良であるが、中央部の一部はタタキ状に堅い部分を認めた。主柱穴はP1~P4で、主軸に直交する方向に細長い状況で検出され、割り材使用の柱が考えられる。カマドは北東壁中央に位置する粘土カマドと



1. 暗灰色砂質土（暗褐色土がわずかに混じる）
2. 暗灰色砂質土（黄色粘土混じり）
3. 暗灰色砂質土（黄色粘土・暗褐色土混じり）
4. 黄色粘土（焼土・暗灰色砂質土混じり）
5. 炭（焼土・暗灰色砂質土混じり）
6. 暗灰褐色土（わずかに炭・黄色粘土が混じる）
7. 暗灰色褐色土（灰色砂質土・黄色粘土混じり）
8. 暗灰褐色土（焼土・炭混じり）
9. 暗灰褐色土（焼土混じり）
10. 暗褐色土（黄色粘土混じり、87号裂土）
11. 黄色粘土（暗褐色土混じり）
12. 炭（焼土・暗灰褐色土混じり）

挿図148 84号住居址

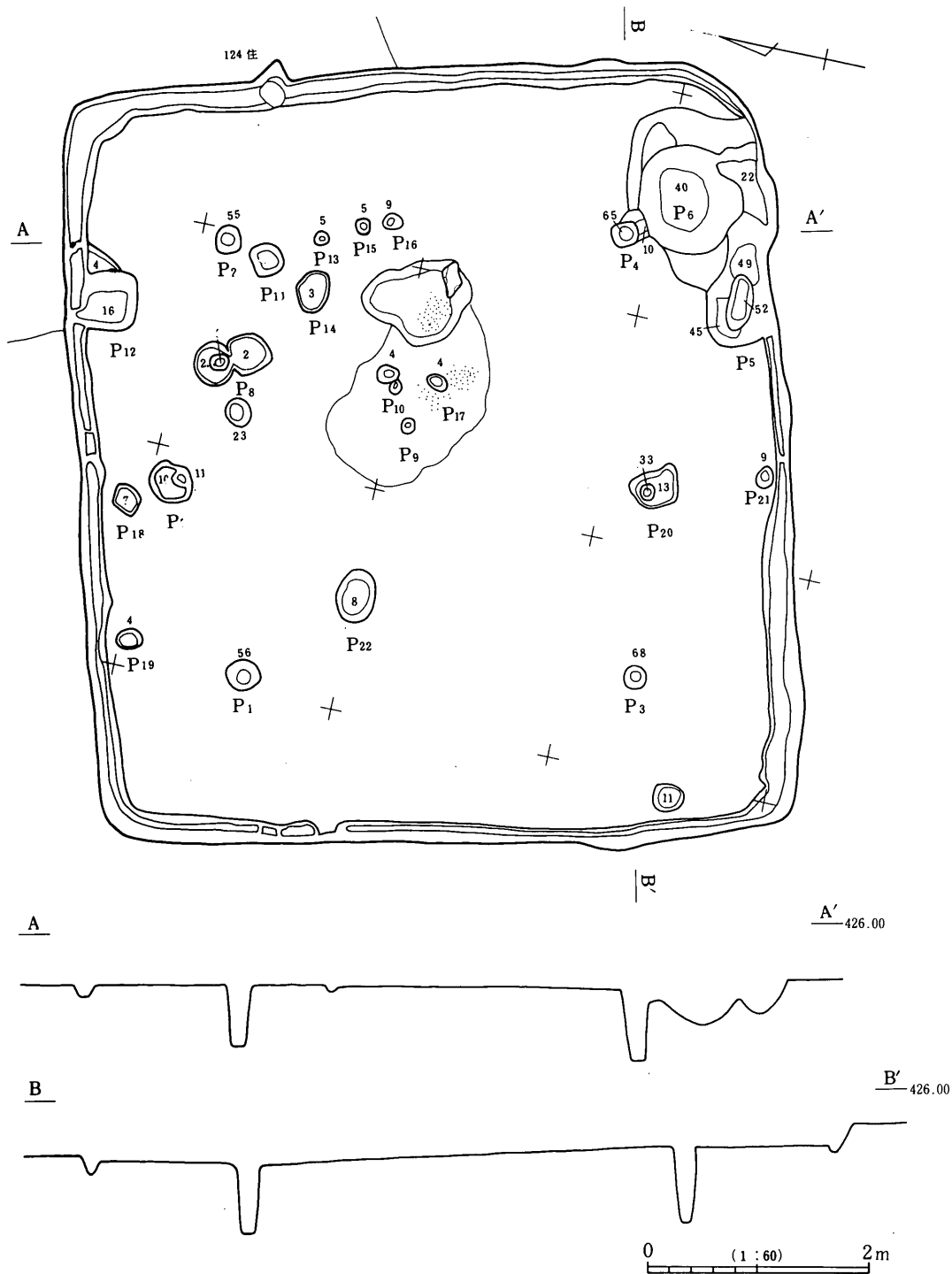


插图149 125号住居址

考えられ、残存状況は悪く、構造を把握するには至らなかった。周辺に甕・坏が落ち込んでいた。

遺物は覆土中からわずかに出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

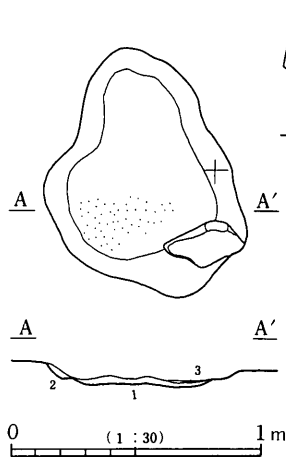
③ 125号住居址 (挿図149・150)

XIV21a を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代中期の143号住居址・弥生時代後期の124号住居址を切る。

6.9×6.4m の隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N77°E を示す。壁高は20～8cmで、ほぼ垂直の壁面をなす。周溝が壁下をほぼ全周し、幅41～22cm・深さ15～3cmを測る。床面は黄色土のハリ床で、全体に軟弱で不良である。主柱穴は P1～P4である。南壁した南東隅付近に位置する P5は、入口部と考えられる。P6は住居址覆土との違いがあり、関連しないかもしれない。炉址は東側主柱穴中間やや内側に位置する地床炉で、床面が100×76cmの不整形に浅く凹み、底に焼土が顕著に認められた。炉址周辺の特に関西側に薄く炭化物が広がり、底の北側も同様であった。

遺物は覆土中から出土した。

出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。



1. 焼土
2. 炭
3. 炭 (暗褐色土混じり)

挿図150 125号住居址 炉址

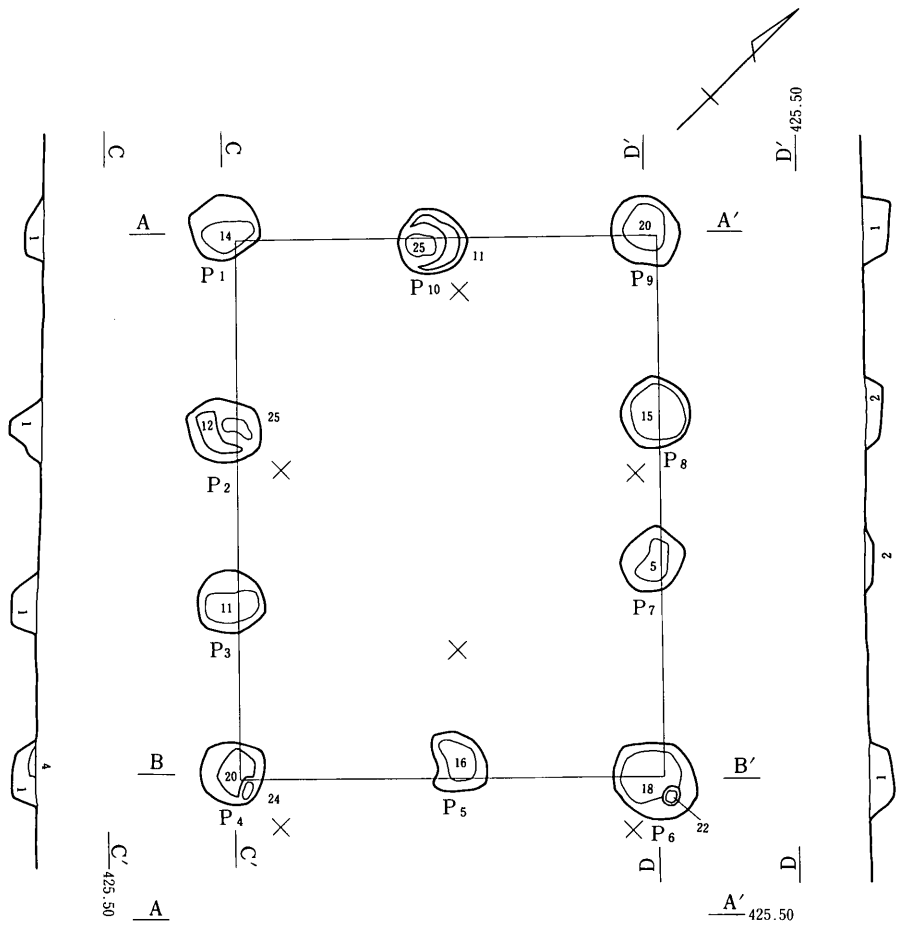
2) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址 1 (挿図151)

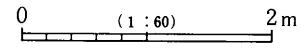
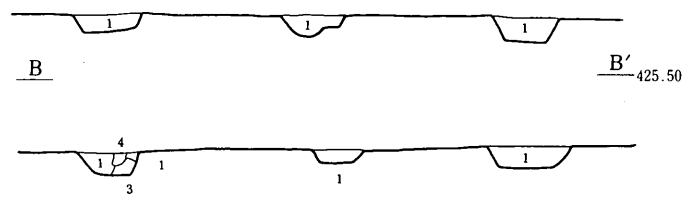
XIU19f を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期の95号住居址・96号住居址・97号住居址を切る。2×3間の掘立柱建物址で、桁行4.2m・梁行3.4mを測る。柱間は桁行が1.6mと1.3m、梁行は1.7mを測り、桁行方向は N46°W を示す。柱堀方は円形もしくは楕円形で、径68～50cm・深さ25～5cmを測る。P2・P4・P6・P10は2段の掘り込みをなす。覆土は砂質土が主体であった。

時期を決定できる遺物の出土はない。

切り合い関係からすれば、弥生時代後期以降と考えられる。古墳時代後期の竪穴住居址と共通する覆土であったので、古墳時代後期の可能性が一番高いと考えている。



- 1. 暗灰色砂質土
- 2. 暗褐色砂質土 (暗褐色土混じり)
- 3. 暗褐色土 (暗灰色砂質土混じり)
- 4. 黄色粘土



挿図151 堀立柱建物址1

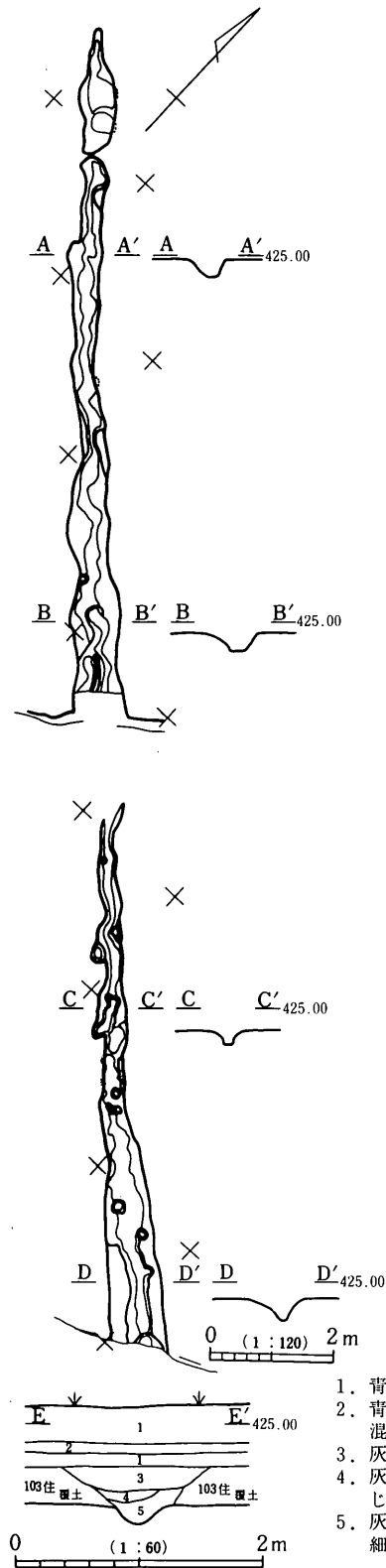
3) 溝 址

① 溝址11 (挿図152)

XIT24w から XIU18e にかけて検出した。弥生時代中期の138号住居址、弥生時代後期の93号住居址・103号住居址を切る。調査延長は21mで、南東側の用地外に続いている。水田の造成による削平を受けて、部分的に残っていない箇所がある。方向はほぼ直線的で、N45°Wを示す。幅85~16cm・深さ35~6cmを測り、断面形は様々で深くえぐられた箇所や2段の落ち込みをなす部分が認められた。覆土は灰色砂土を主体で、容易に検出できた。遺構の状況から小沢川の痕跡と考えられ、北西から南東に流れたといえる。集落内に引かれた生活用水路的な役割を果たしていた可能性がある。

覆土中から流れ込みによる遺物が出土した。古墳時代を主体として、縄文時代・弥生時代の遺物も認められた。

複数の時期の遺物が認められるが、主体となる遺物から古墳時代に位置づけられる。



挿図152 溝址11

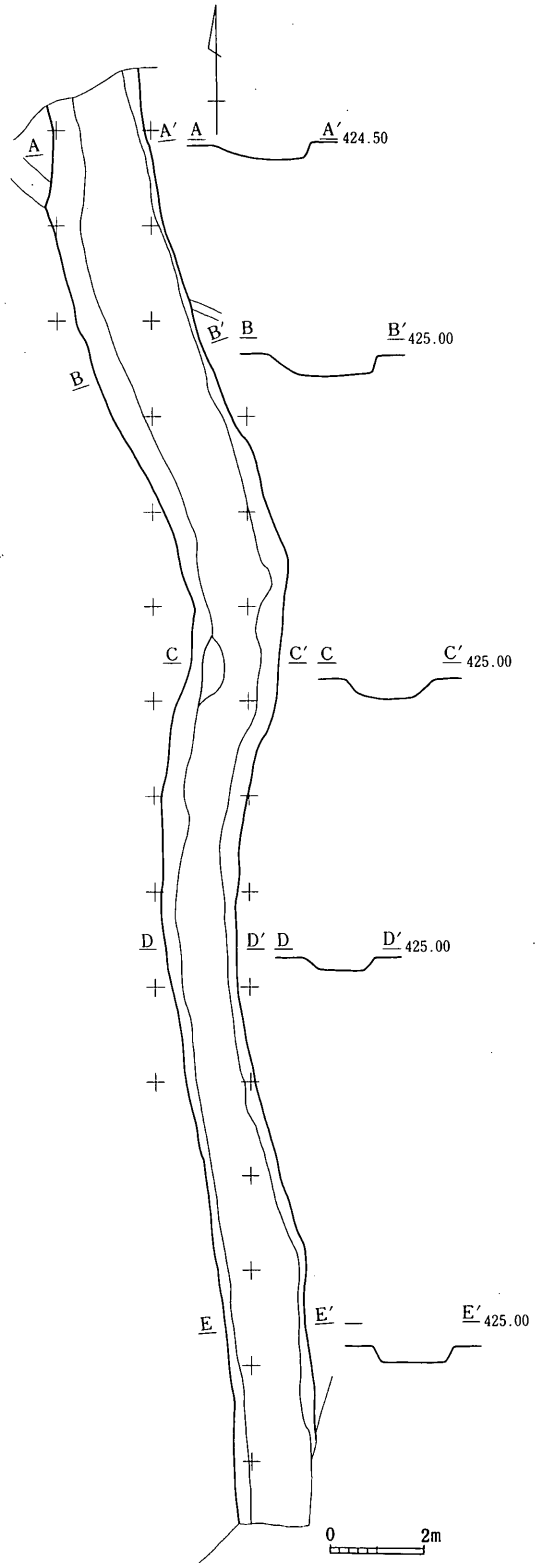
② 溝址20 (挿図153)

XIIU17f からXIIU15u にかけて検出した。調査延長は31mで、両側に延長するが、南側は用地外、北側は調査排土の置場となり、調査できなかつた。方向はほぼ直線的で、N6°Wを示す。幅233~133cm・深さ44~25cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は暗褐色土のほぼ一層であった。

検出位置が弥生時代の遺構がない箇所であり、地形的に考えても溝から東側に遺構があることは想定しにくい。規格性のある遺構の状況から考えて、何等かの意図を持って掘削されたと考えられる。遺構の検出場所を考えれば集落を区切る環壕的な溝が想定され、第III地区の溝址・第IV地区の溝址と関連すると考える。

覆土中から弥生土器・石器等が出土した。まとめて出土した箇所があり、一括投棄されたと考えられる。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられ、比較的長期間存続したと考えられる。



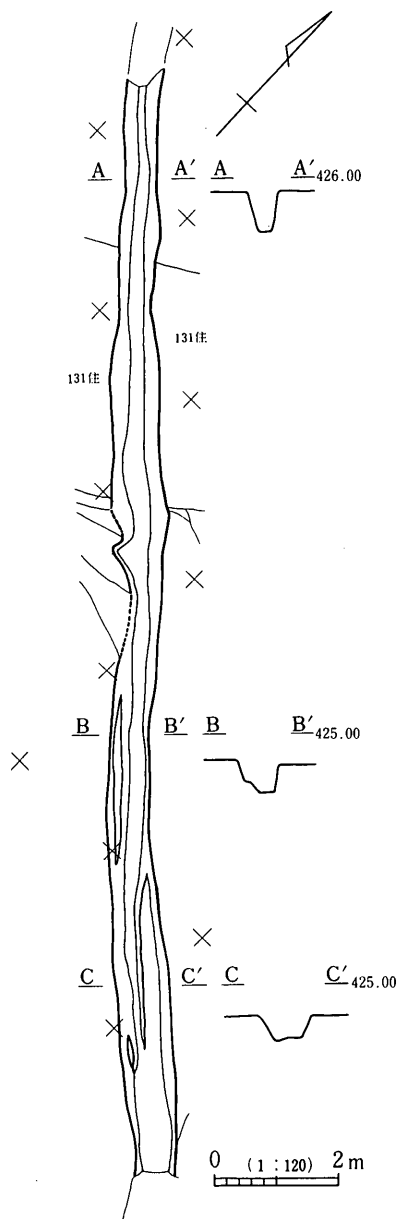
挿図153 溝址20

③ 溝址21 (挿図154)

XIIV1d から XIV21j にかけて検出した。弥生時代後期の131号住居址を切る。調査延長は21.6mで、両側に延長する。方向は直線的で、N44°Wを示す。幅90~50cm・深さ65~41cmを測り、断面形は逆台形をなし、段がみられる箇所がある。淡黄褐色砂土・灰色砂土が主体で、埋められていると考えられた。

覆土中から近世陶器がわずかに出土した。

出土遺物から近世に位置づけられ、その用途は分からなかった。



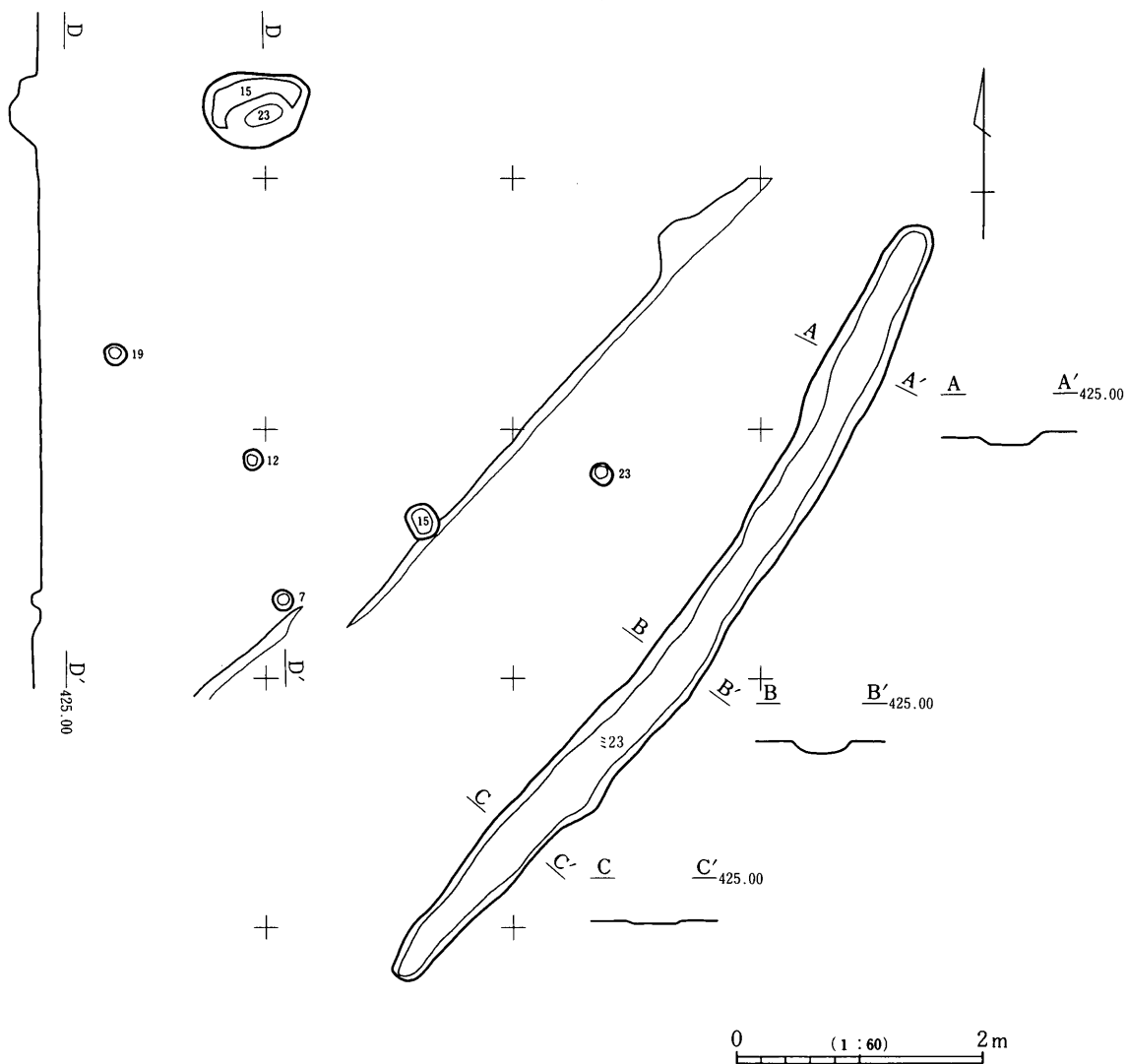
挿図154 溝址21

④ 溝址23 (挿図155)

XIIU6g から XIIU7j にかけて検出した。上層は水田の造成で削平されている。調査延長は7.4mで、方向は直線的でN36°Eを示す。幅48~20cm・深さ10~2cmを測り、断面形は浅い逆台形をなす。

遺物の出土はなかった。

出土遺物がないので詳細な位置づけはできないが、覆土の状況から近代以降と考えられる。



挿図155 溝址23

⑤ 溝址24・25 (挿図156)

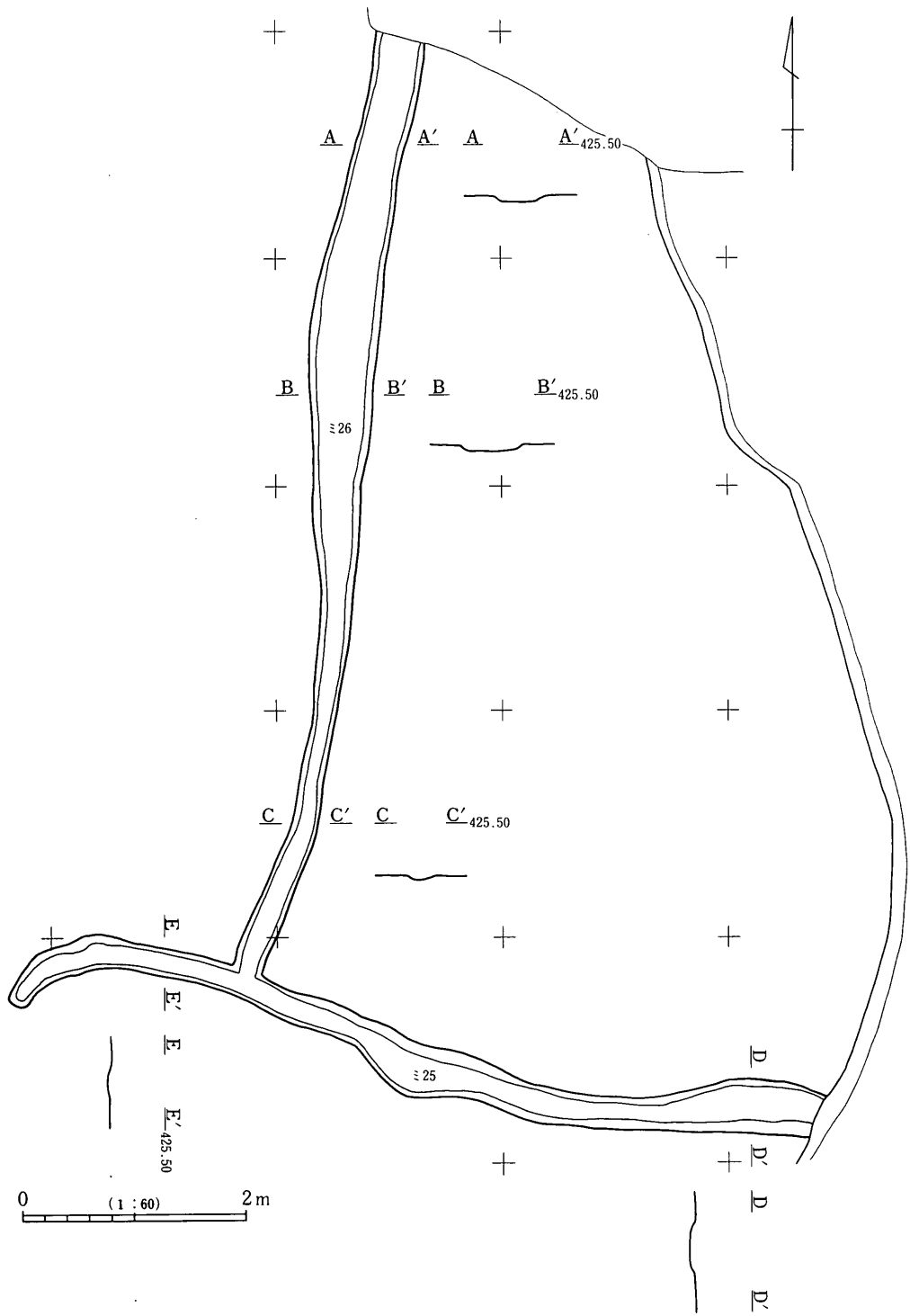
溝址25は、XIIU7q から XIIU8u にかけて検出した。上層は水田の造成で削平されている。調査延長は8.4m で、方向は直線的で N8°E を示す。幅60～20cm・深さ 6～2cm を測り、断面形は浅い逆台形をなす。

溝址26は、XIIU10q から XIIU6u にかけて検出した。上層は水田の造成で削平されている。調査延長は7.3m で、方向は直線的で N77°W を示す。幅48～20cm・深さ 8～2cm を測り、断面形は浅い逆台形をなす。

両者は検出状況からみて同じ時期と考えられる。

弥生土器片がわずかに出土した。

所属時期・用途は不明である。



挿図156 溝址25・26

4) 土 坑

① 土坑18 (挿図144)

XIV17g で検出し、上層は水田の造成で削平されていた。190×120cm の方形を呈し、深さは10cm を測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物はない。

弥生時代の土壌墓の可能性はある。

② 土坑19 (挿図166)

XIU18e で検出した。72×60cm の楕円形を呈し、深さは44cm を測る。断面形は逆台形を呈する。

壁際から縄文土器が出土した。

出土遺物から縄文時代中期に位置づけられる。

③ 土坑20 (挿図160)

XIT18y で検出し、弥生時代中期の106号住居址に切られる。107×16cm の不定形を呈し、深さは13cm を測る。断面形は逆台形を呈する。

底から縄文土器 2 個体が出土し、それとともに石が 2 個入れられていた。

出土遺物から縄文時代中期に位置づけられる。

④ 土坑21 (挿図157)

XIV13c で検出した。166×97cm の丸みを帯びた長方形を呈し、深さは38cm を測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物はない。

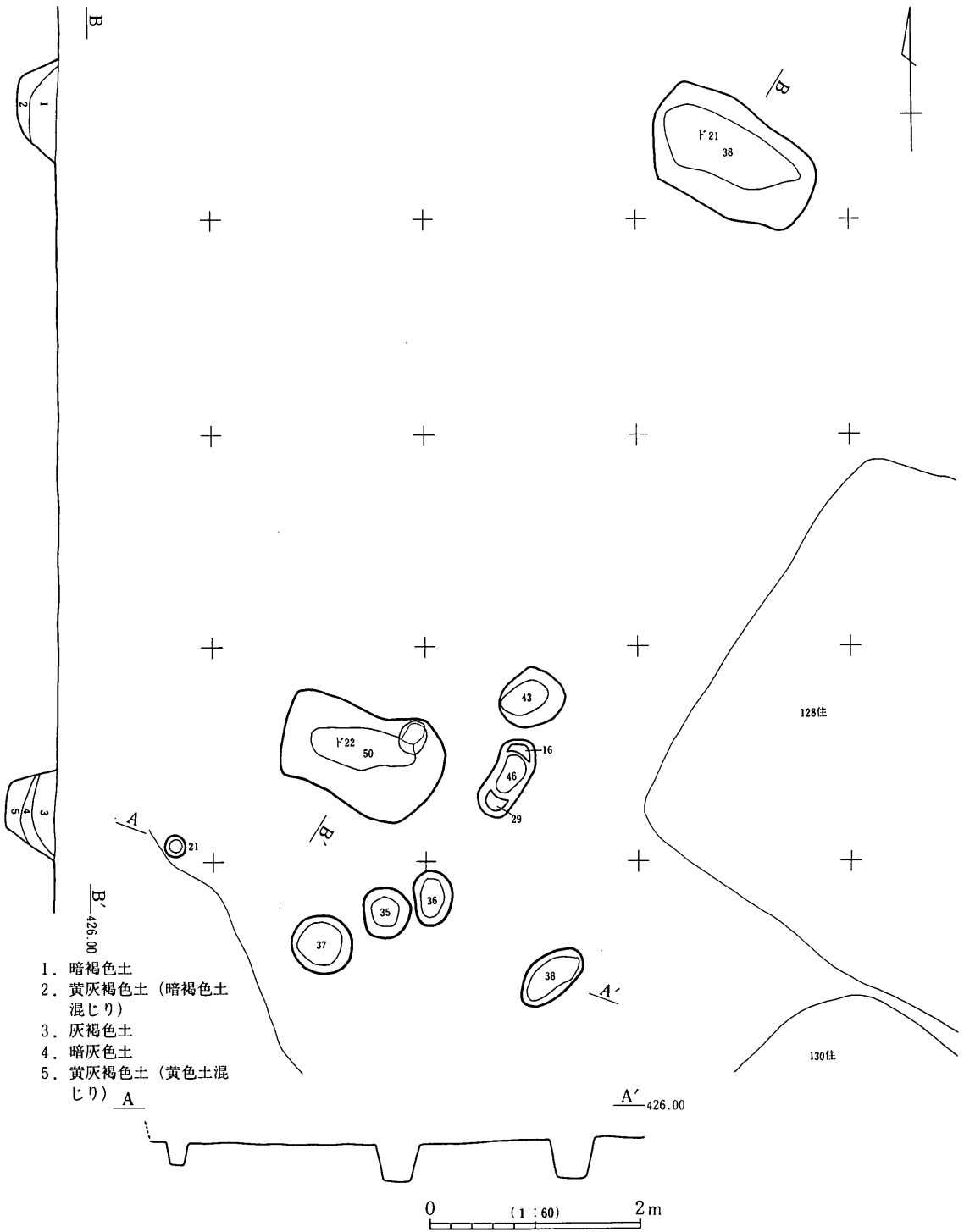
時期を決定する決め手にかける。

⑤ 土坑22 (挿図157)

XIU11y で検出した。154×80cm のゆがんだ楕円形を呈し、深さは64cm を測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物はない。

時期を決定する決め手にかける。



挿図157 土坑21・土坑22、ピット

⑥ 土坑23

XIU13j で検出し、弥生時代後期の113号住居址・116号住居址に切られる。140×92cmの楕円形を呈し、深さは64cmを測る。断面形は逆台形を呈し、途中で段を持つ。

縄文土器片が出土した。

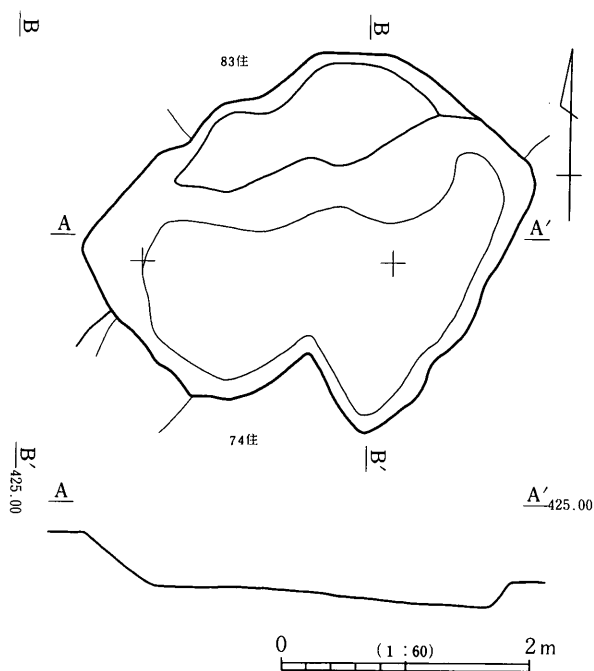
出土遺物から縄文時代中期に位置づけられる。

⑦ 土坑24 (挿図158)

XIIU2f で検出し、弥生時代後期の83号住居址・古墳時代後期の74号住居址に切られる。320×260cmの不定形を呈し、深さは58cmを測り、19cmの深さで段を持っている。断面形は不定形を呈する。

出土遺物はない。

時期を決定する決め手につけ、あまり人為的な様相がみられない。

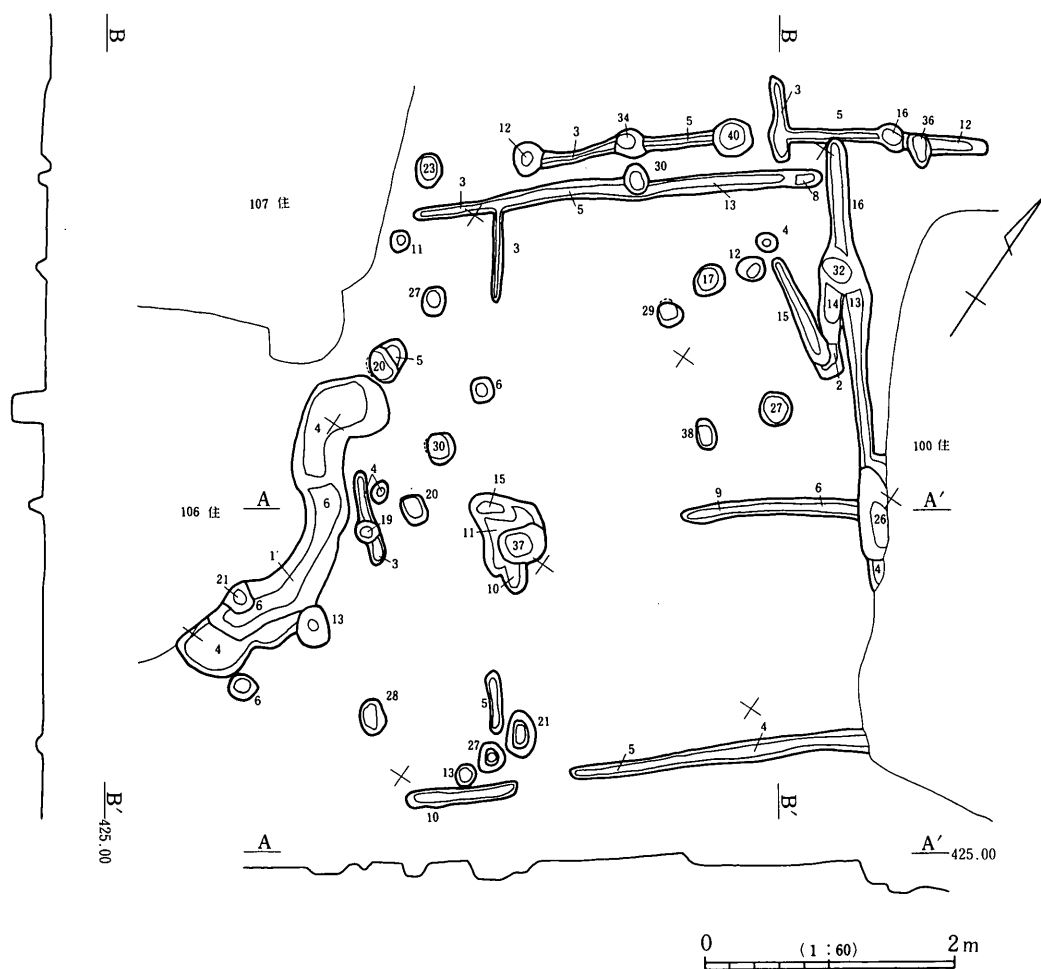


挿図158 土坑24

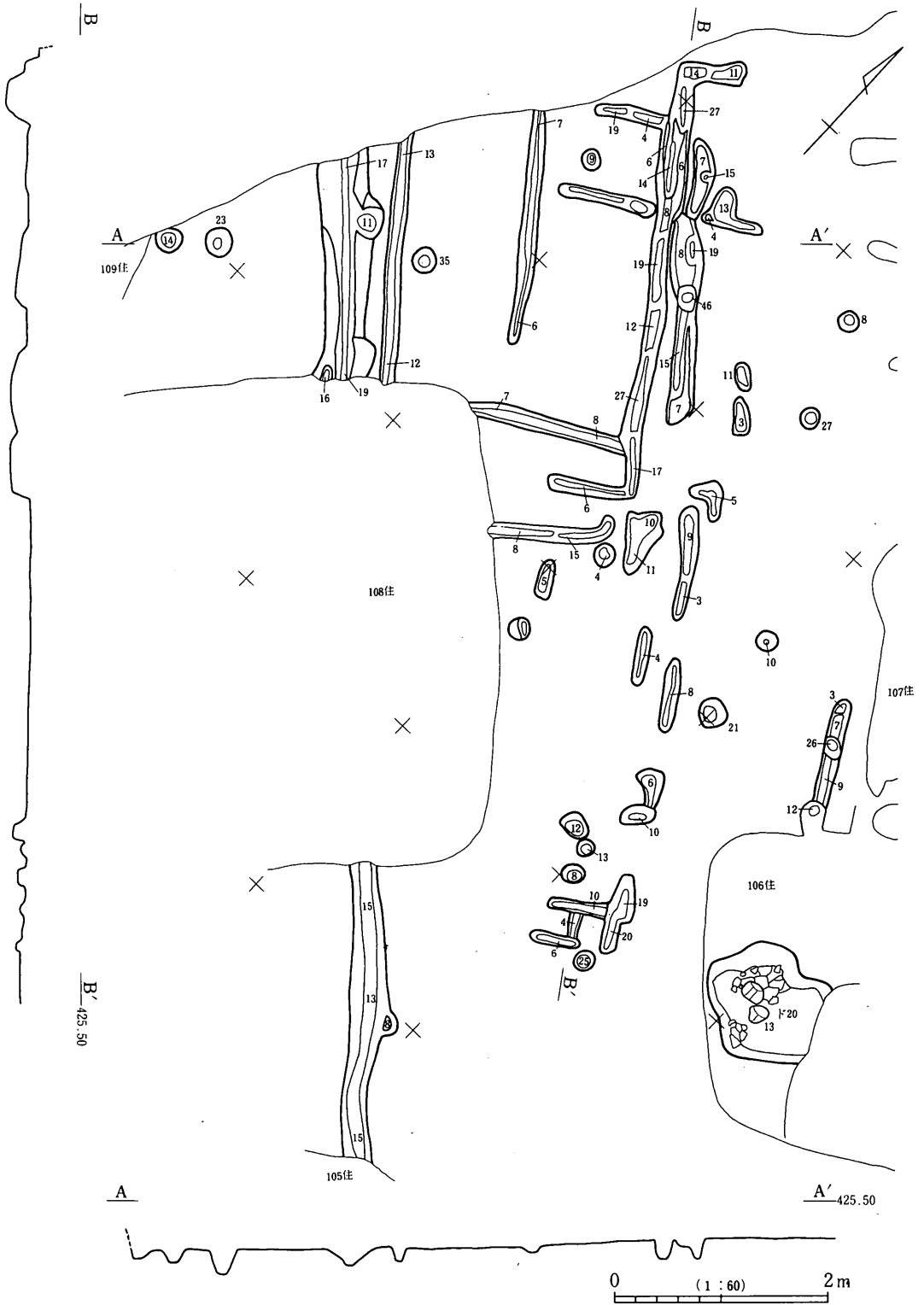
5) 囲溝址・ピット

従来囲溝址と呼称されてきた幅の狭い溝が方形に巡る遺構が認められた。囲溝址でも重複が著しく、かつ竪穴住居址とも重なっていてその部分では覆土の見極めができなかったため、把握できていない部分も多い。よって、個々のつながりの把握に留意したが、十分果たせなかった。よってここでは全体の傾向を指摘するにとどめたい。

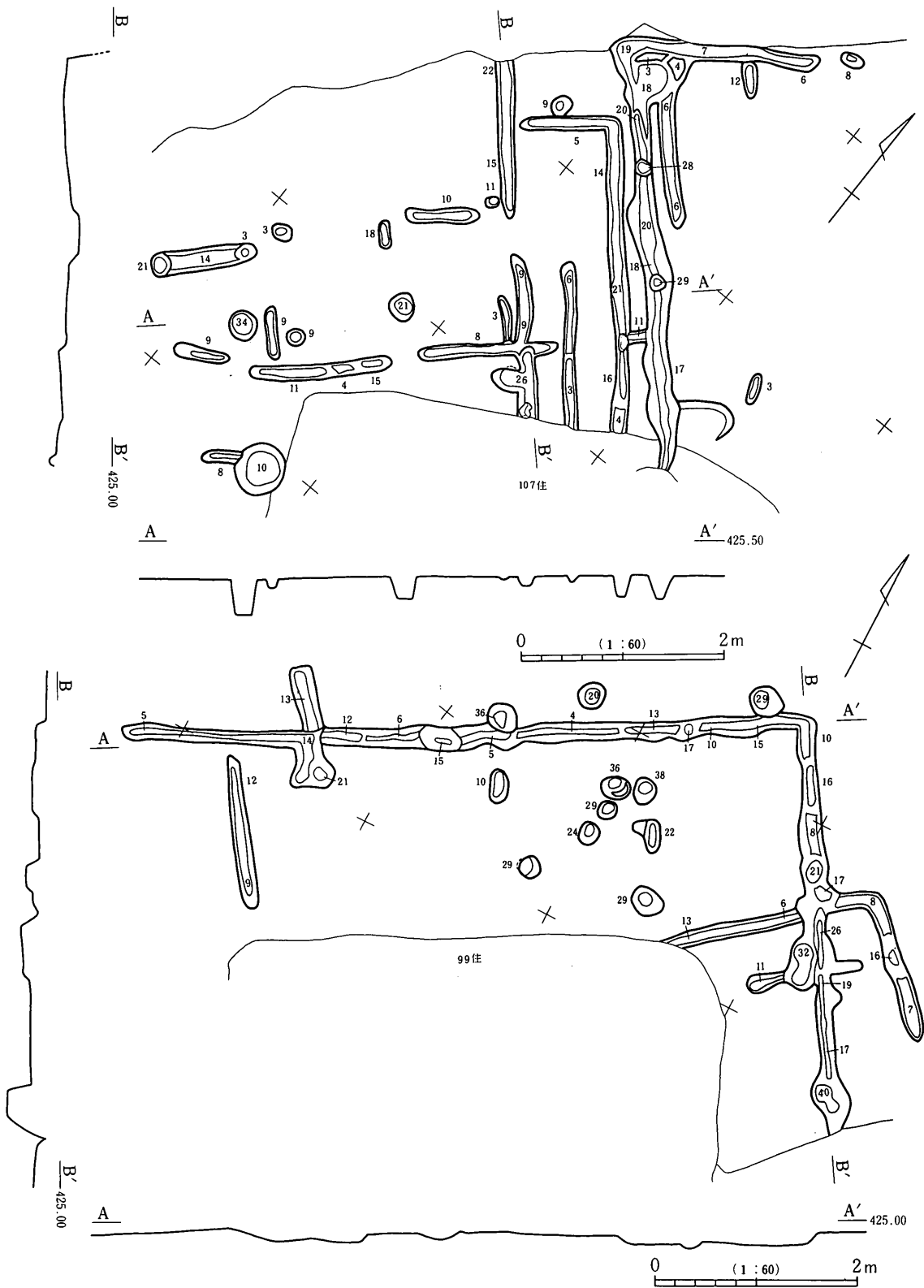
囲溝址が集中するのは集落の中心域と考えられる南西側であるが、北側は削平されている部分が多いので、必ずしもなかったとは断定できない。竪穴住居址との切り合い関係は、切っているものと切られているものがあり、いわば同時存在していたと考えられる。溝の中にピットを伴うのもみられるが、全体にはピットはないものが多い。方向は竪穴住居址と同じ北西側を示すものがほとんどである。



挿図159 囲溝址・ピット(1)



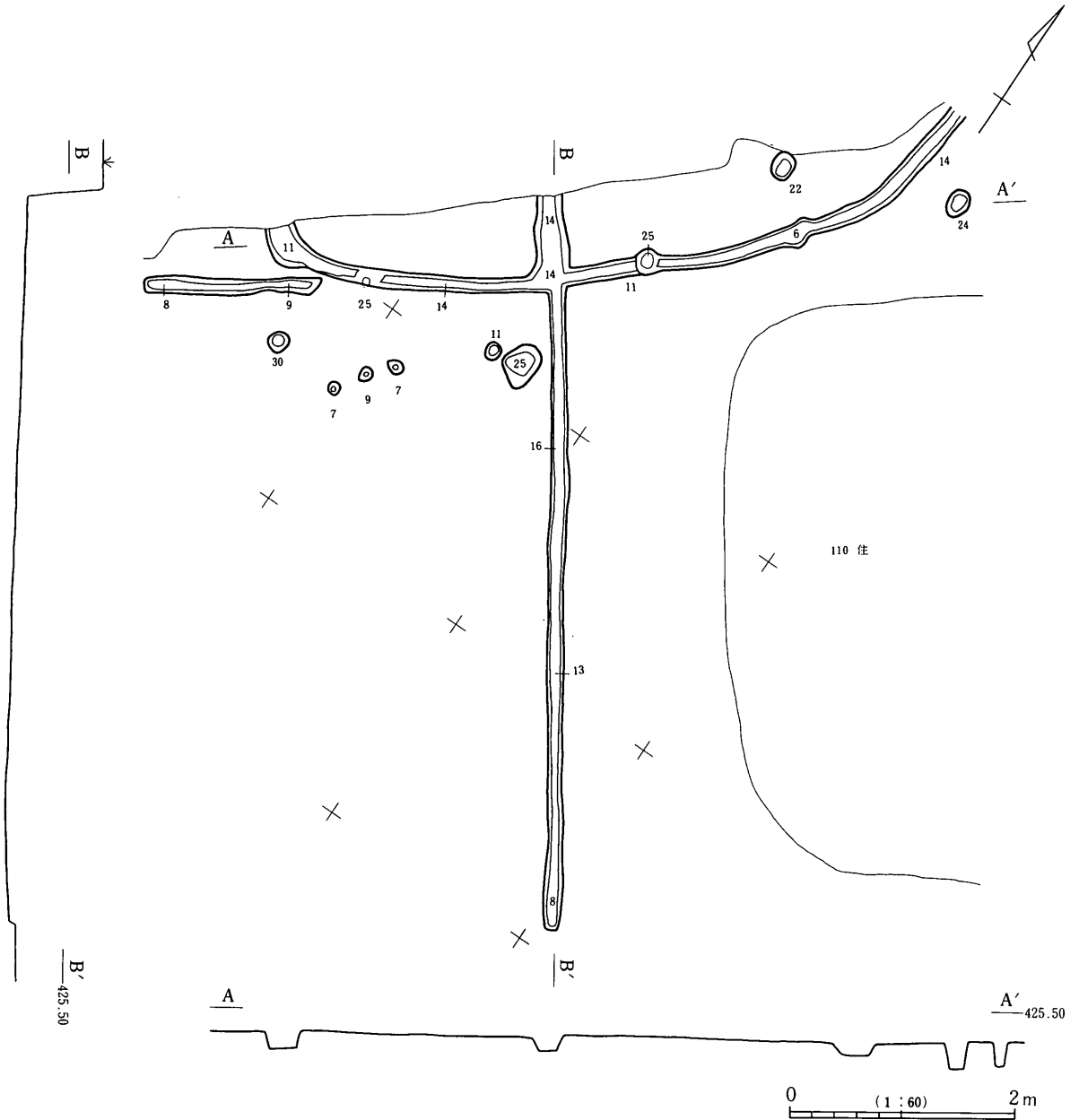
挿図160 囲溝址・ピット(2) 土坑20



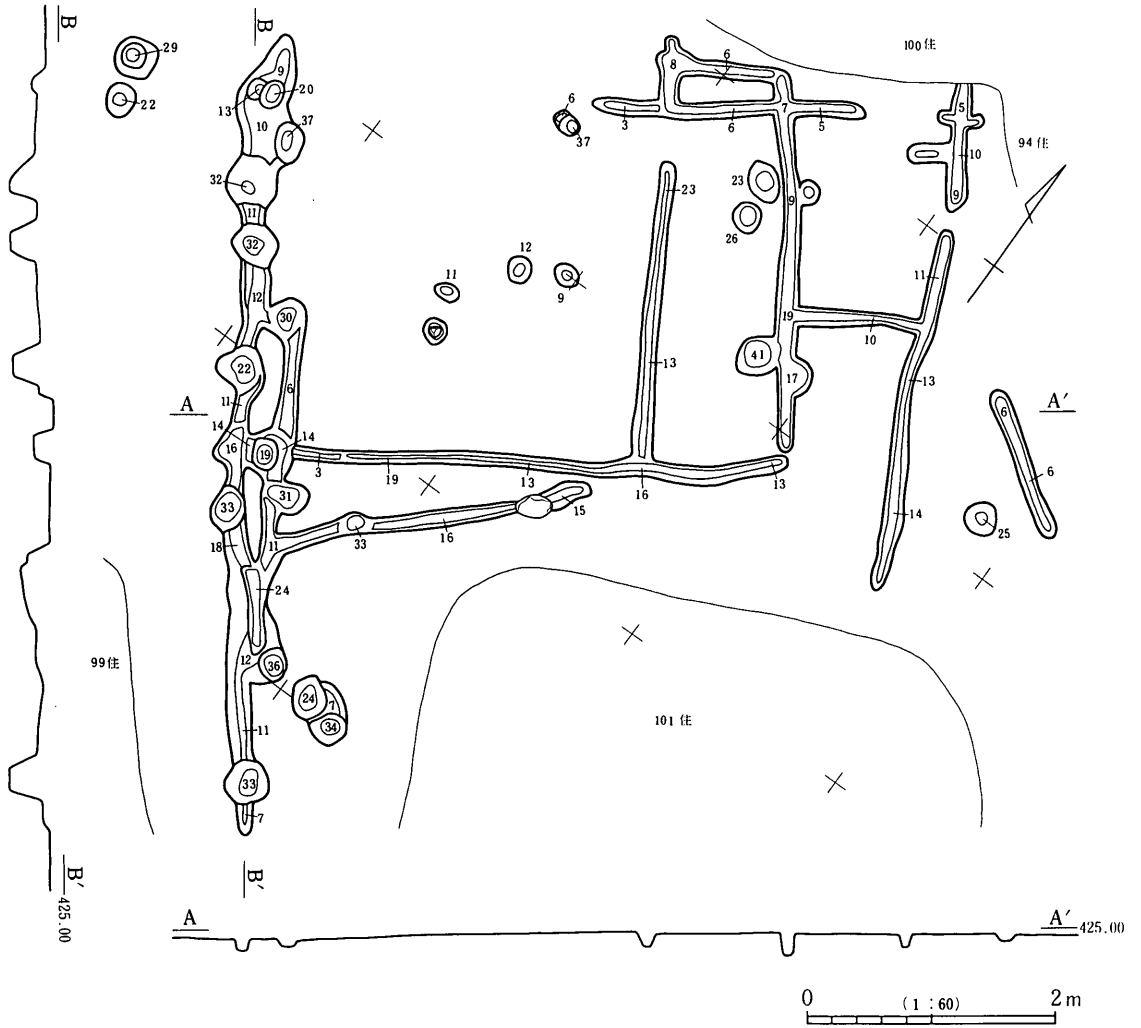
挿図161 囲溝址・ピット(3)

ピットはほぼ全体にみられるが、やや囲溝址が少ない箇所集中する傾向が認められる。個々のつながりは数が多いため把握できていない。

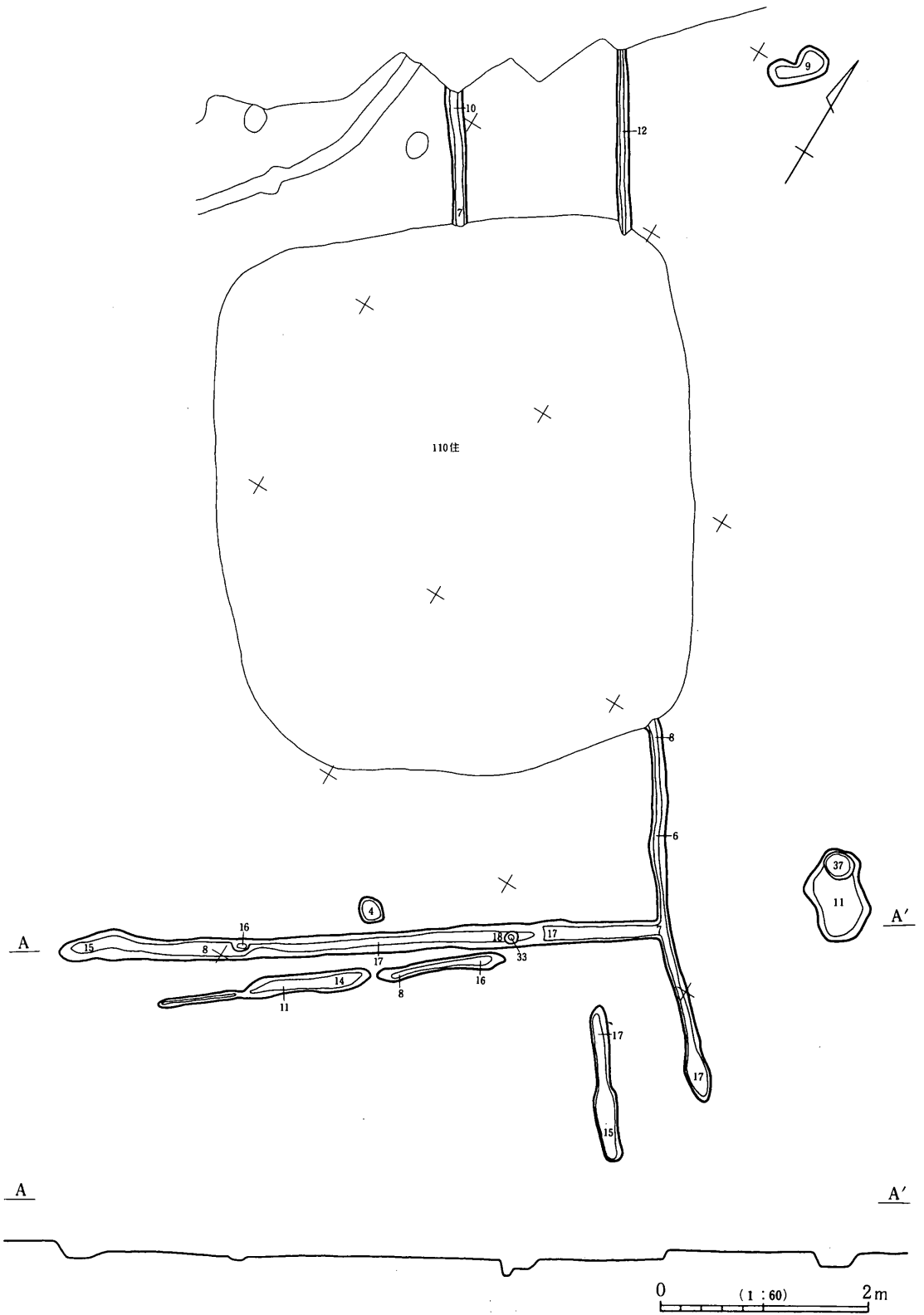
個々の説明は省略し、遺構図は挿図159～172ですべて掲載した。



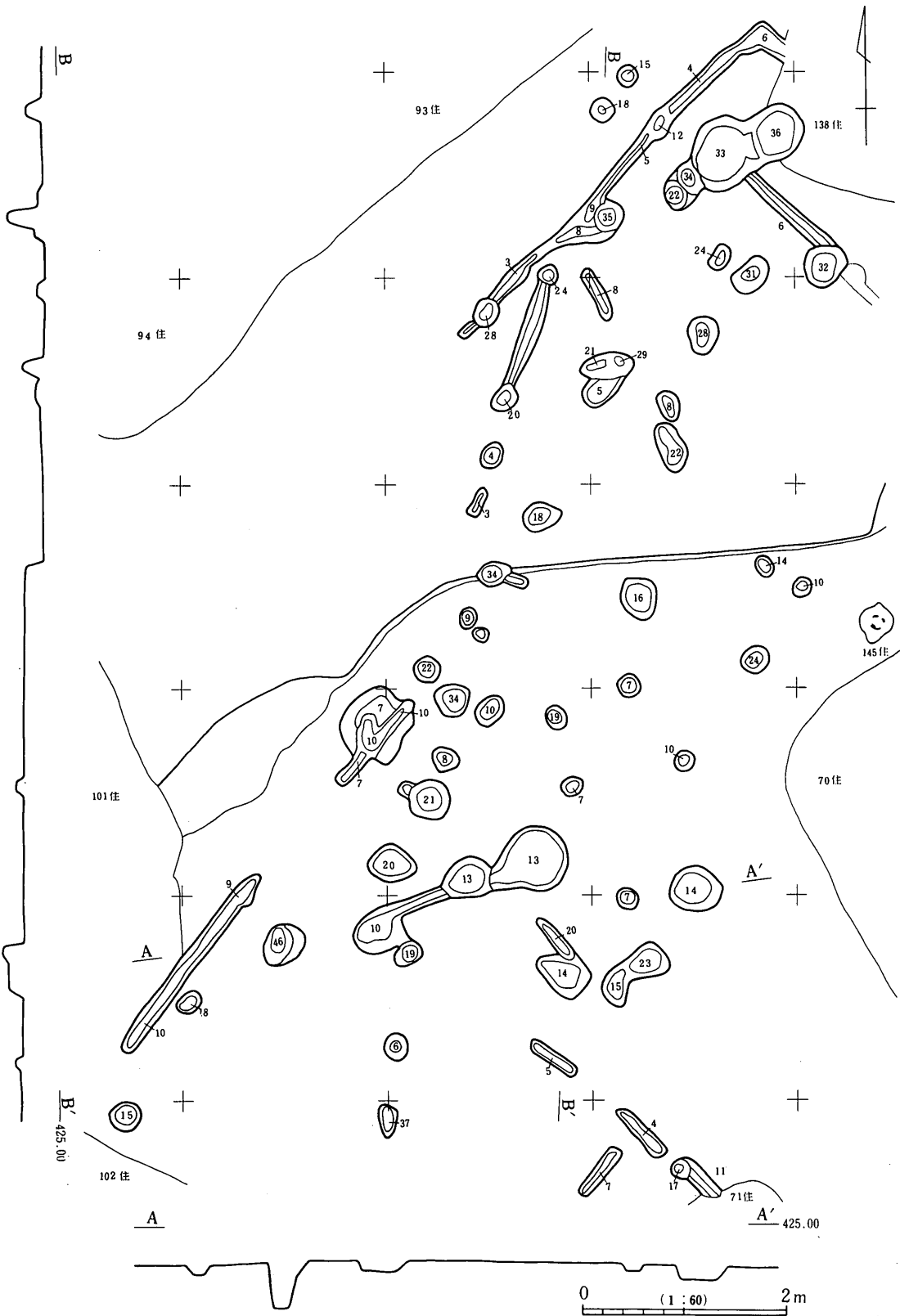
挿図162 囲溝址・ピット(4)



挿図163 囲溝址・ピット(5)



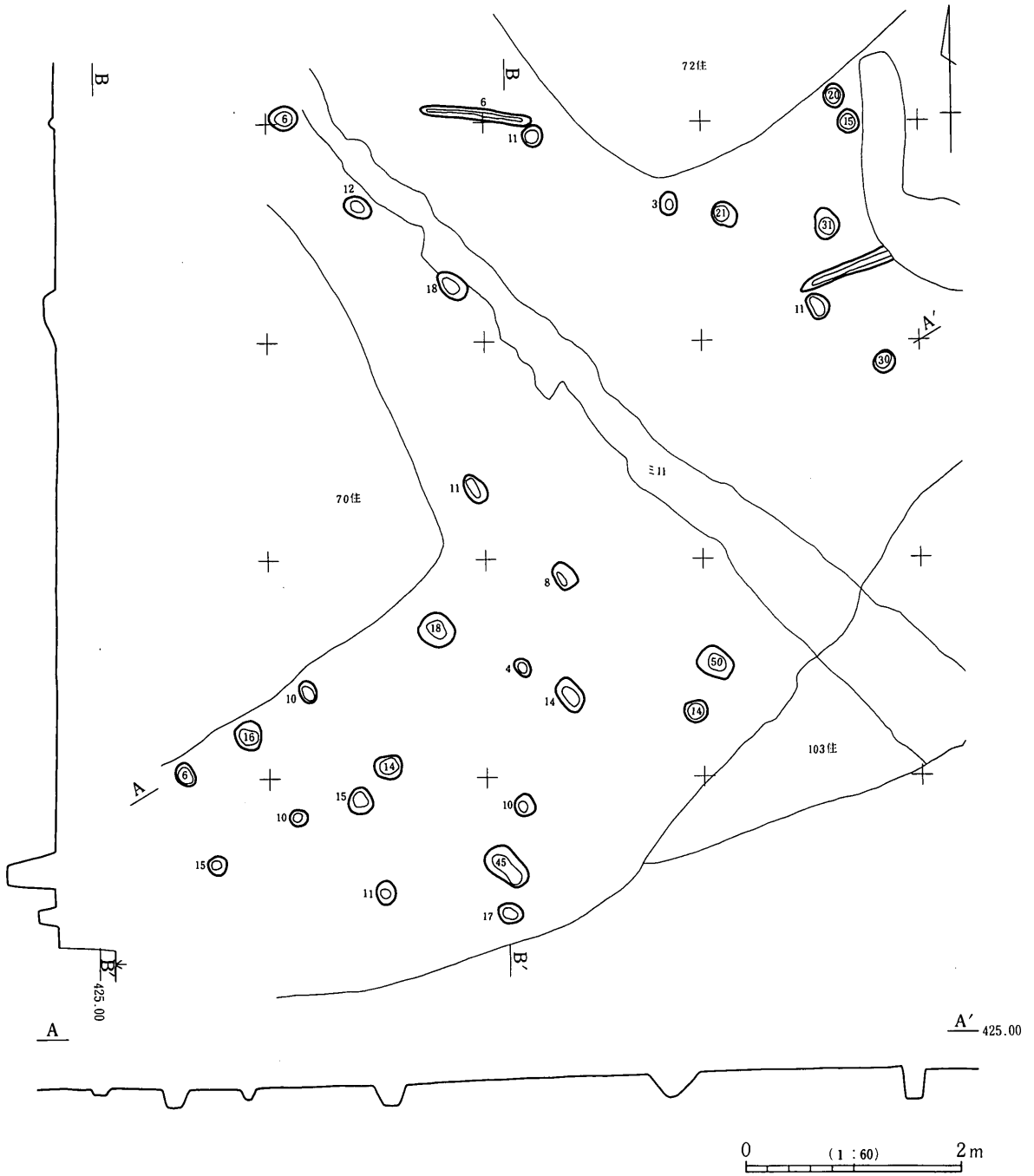
挿図164 囲溝址・ピット(6)



挿図165 囲溝址・ピット(7)



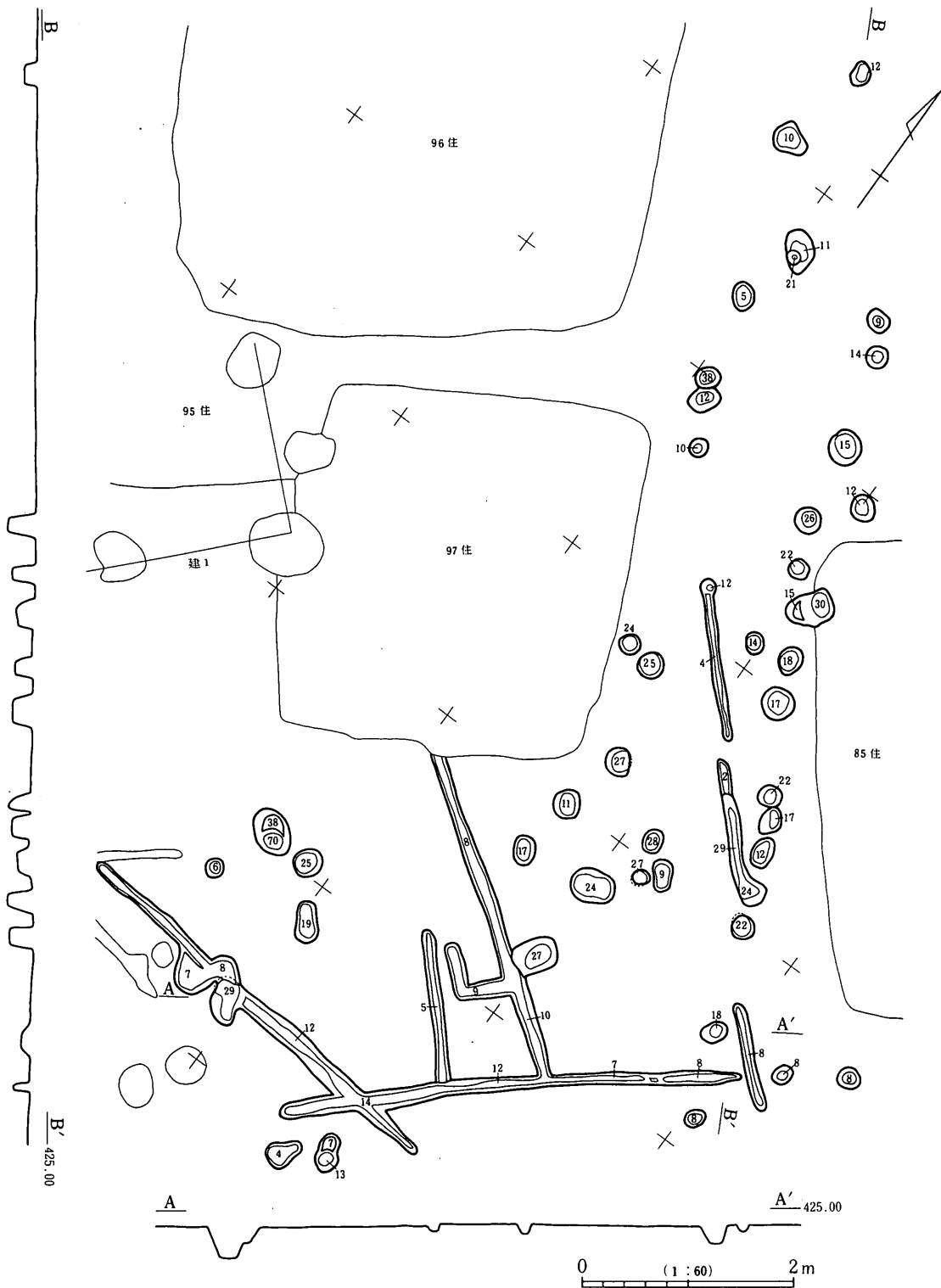
挿図166 囲溝址・ピット(8)・土坑(19)



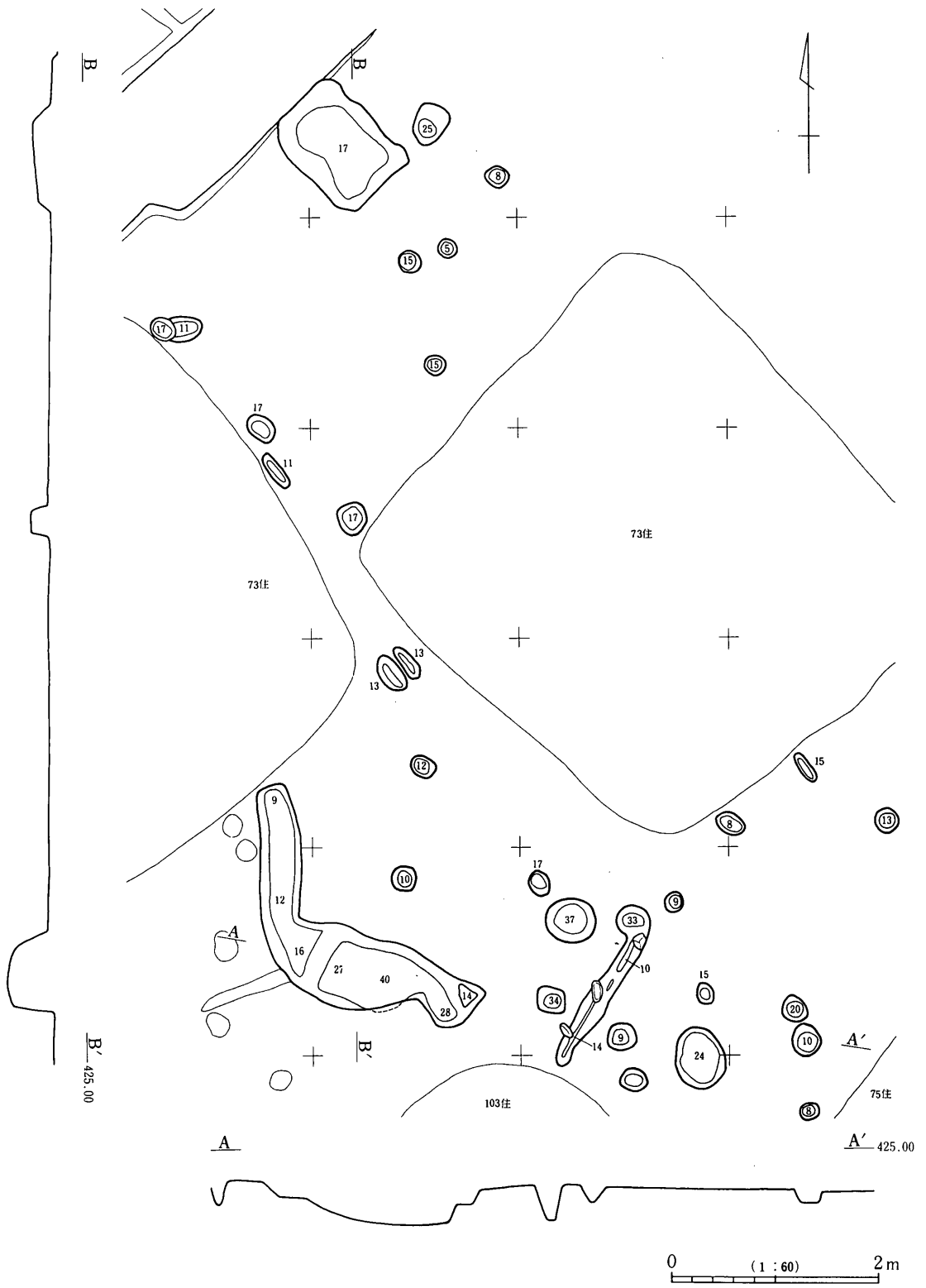
挿図167 囲溝址・ピット(9)



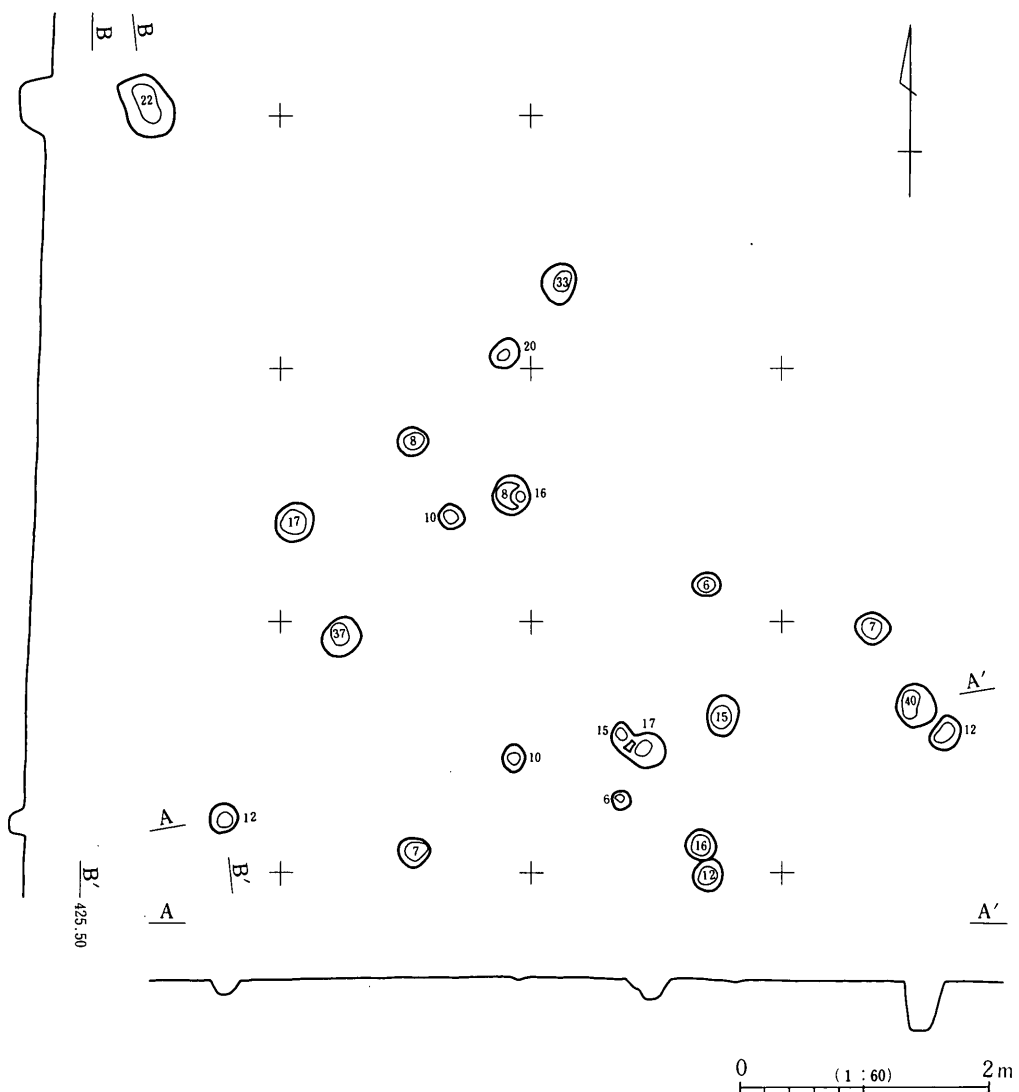
挿図168 囲溝址・ピット(10)



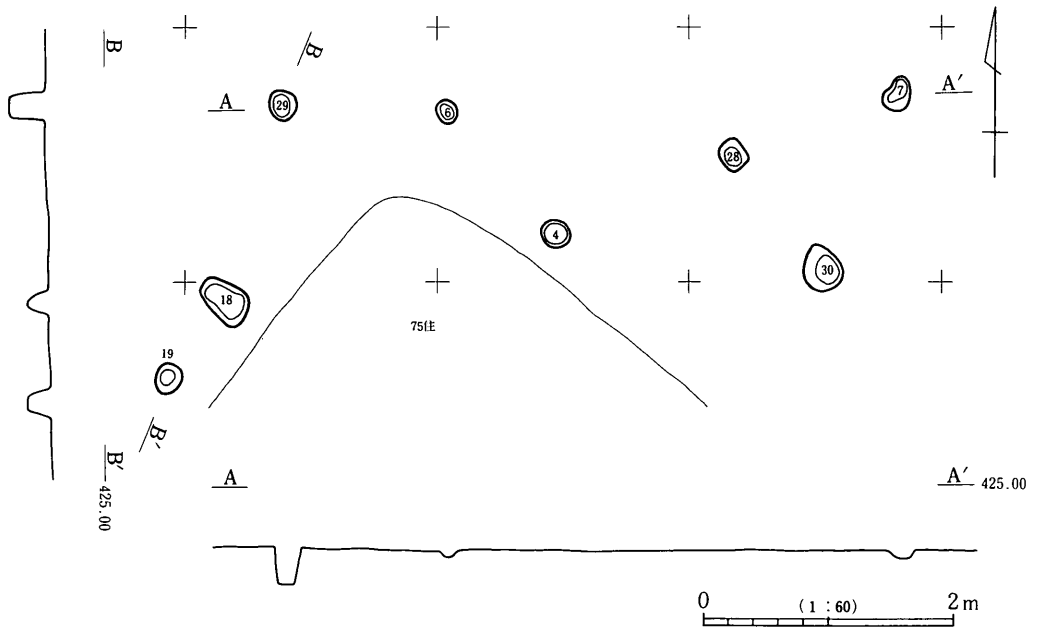
挿図169 囲溝址・ピット(1)



挿図170 囲溝址・ピット(12)



挿図171 ピット(1)



挿図172 ピット(2)

3. 第Ⅲ地区

1) 竪穴住居址

(1) 弥生時代

① 146号住居址 (挿図173)

XT6b を中心として検出し、東側は未調査であり半分程調査した。土坑25に切られる。主軸方向に対して3.5m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N27°W を示す。壁高は25~11cm を測りやや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1・P2である。炉址は主柱穴 P1の北東側に位置する地床炉で、床面を57×52cm に掘り凹めている。覆土上層及び中層に炭が残存していた。

遺物は覆土から出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

② 147号住居址 (挿図174)

XT4f を中心として検出し、2 / 3 程度を調査した。弥生時代後期の溝址13、近・現代の暗渠排水に切られる。148号住居址と切り合い関係があるが、新旧は不明である。主軸方向に対して直行する方向が4.2m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N96°W を示す。壁高は13~7cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1~P3で、P4~P5は間仕切りピットと考えられる。炉址は西側主柱穴の中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を60×48cm の楕円形に掘り凹め、口縁部及び底部を欠く甕を埋設する。埋設土器覆土及び掘り方覆土に炭が多量に炭が残存していた。

遺物は覆土から出土した。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

③ 148号住居址 (挿図174)

XT6f を中心として検出し、1 / 4 程度を調査した。近・現代の暗渠排水に切られる。147号住居址と切り合い関係があるが、新旧は不明である。1 辺が5.3m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は18~9cm を測り、緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1~P3で、P4~P5は間仕切りピットと考えられる。炉址は検出できなかった。

遺物は覆土から出土した。

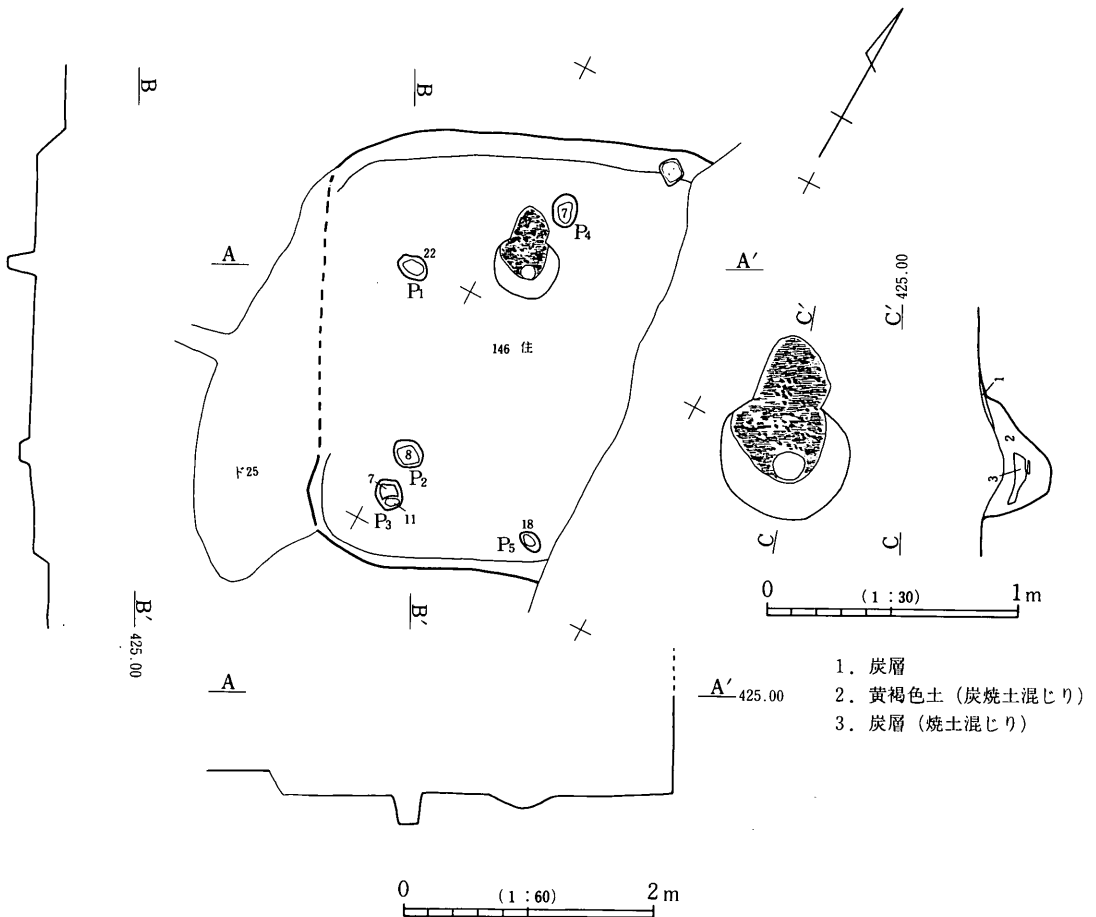
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

④ 149号住居址 (挿図175)

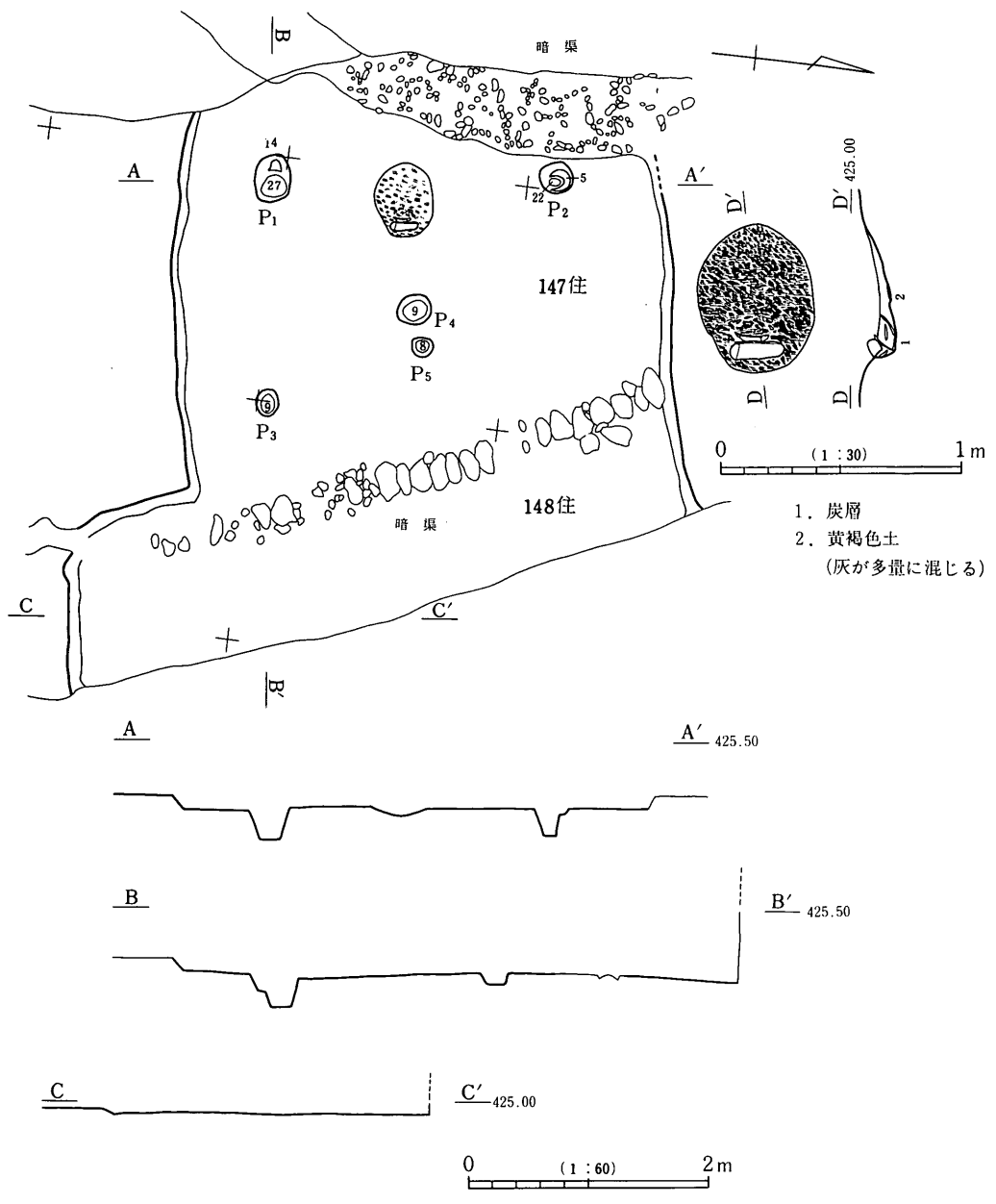
XT8p を中心として検出し、南東側は未調査であり、1/3 程度を調査した。主軸に直行する方向が5.4m を測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は N33°W を示す。壁高は30~10cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状で良好である。主柱穴は P1・P2 である。主柱穴 P2 の東側に長さ1m・幅16~11cm・深さ6cm を測る溝状の遺構がある。炉址は北西側主柱穴の中間よりやや内側に位置する土器埋設炉で、床面を60×53cm の楕円形に掘り凹め、底部を欠く甕を埋設する。埋設土器覆土及び掘り方覆土に炭・焼土が多量に炭が残存していた。

遺物は覆土から出土した。

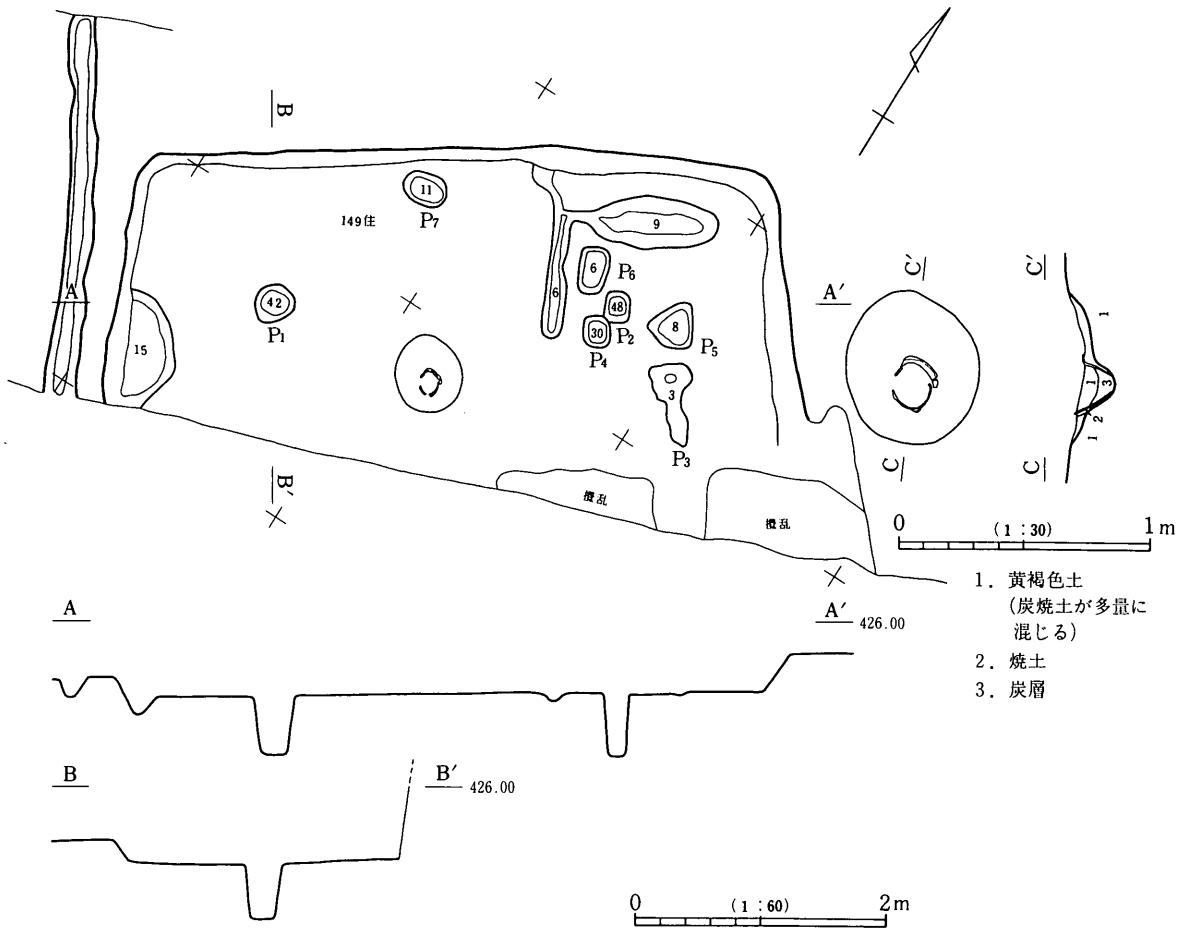
出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



挿図173 146号住居址



挿図174 147・148号住居址



挿図175 149住居址

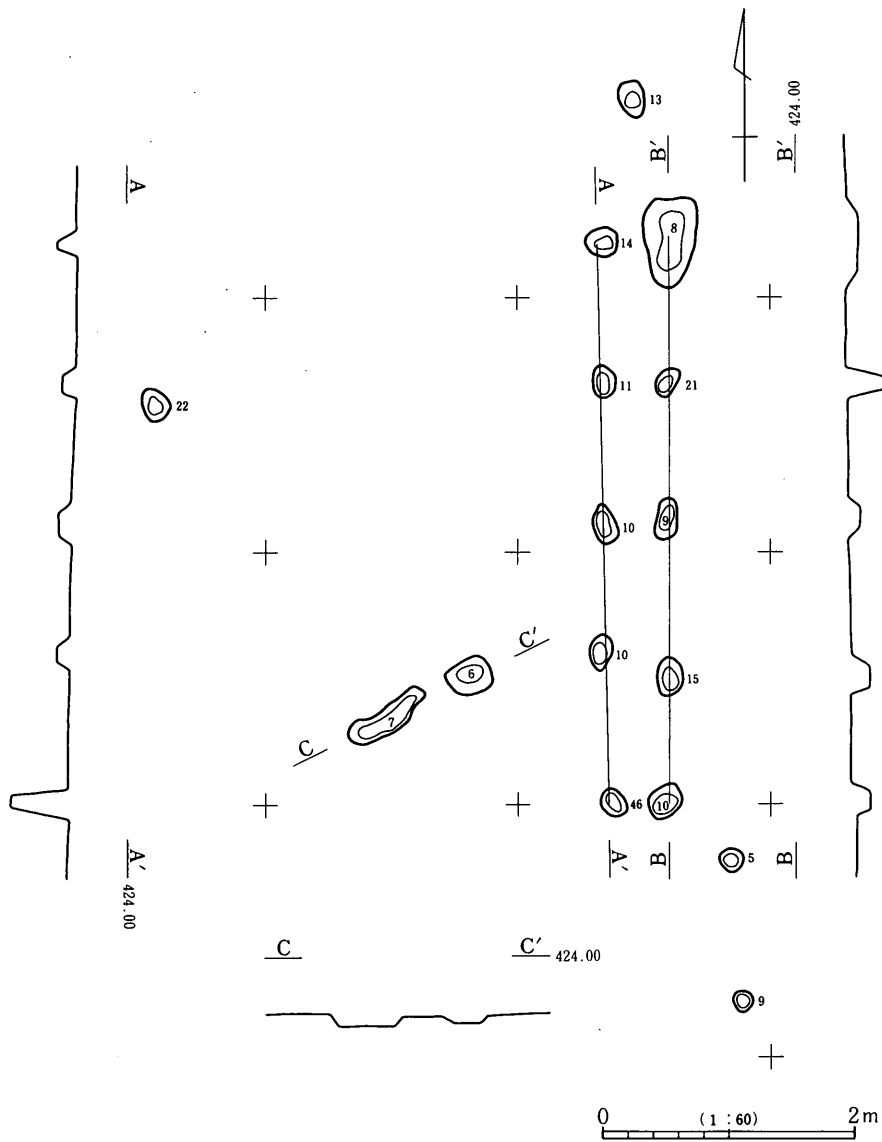
2) 杭 列

① 杭列1 (挿図176)

IXT21bからIXS21xにかけて検出された。2列の杭列で、方向は真北を示す。杭は検出されず、掘り方を確認した。杭間は1.26~1mを測り、ほぼ等間隔に並んでいる。2列の間隔は48~46cmで、杭間と同様にほぼ等間隔である。掘り方の深さは46~8cmで幅がある。

遺物は出土していない。

時期決定の根拠に欠け、不明である。

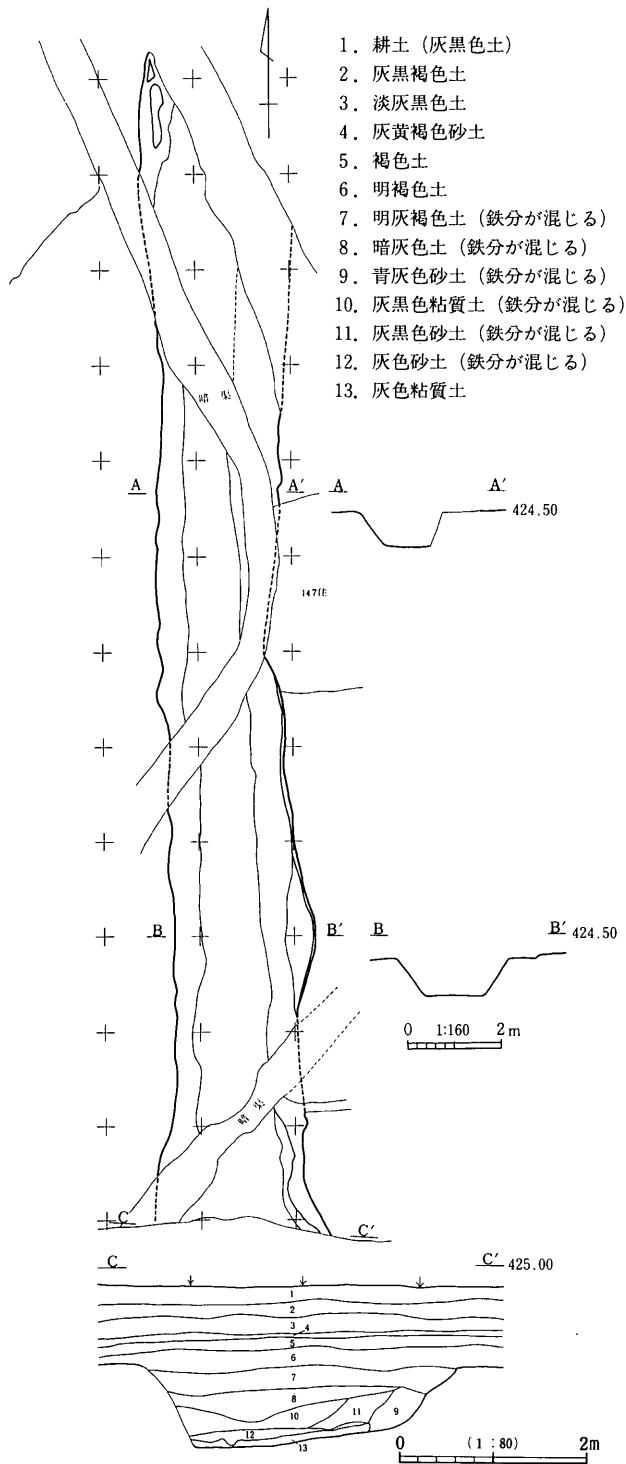


挿図176 杭列1

3) 溝 址

① 溝址13 (挿図177)

XT21からXS3xにかけて検出した。弥生時代後期の147号住居址を切り、近・現代の暗渠排水に切られる。調査延長は24mで、北西側・南側の用地外に続いている。方向はN1°Wでほぼ真北を示す。幅2.98~2.58m・深さ82~67cmを測り、断面形は逆台形である。遺構の状況から環濠



挿図177 溝址13

もしくは区画溝と考えられる。遺物は弥生時代後期の遺物が主体で覆土中層～下層にかけて出土した。出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

② 溝址14 (挿図178)

IXT25f から XT1b にかけて検出した。調査延長は7mで、方向はN16°Wを示す。幅64～27cm・深さ9～2cmを測り、断面形は逆台形である。遺構の性格を知る手がかりとなるものがなく、不明であるが、自然流路の可能性はある。

遺物は出土しなかった。

時期決定の根拠がなく、不明である。

③ 溝址15 (挿図178)

IXT24f から IXT24f にかけて検出した。調査延長は4.1mで、方向はN25°Wを示す。幅46～25cm・深さ29～7cmを測り、断面形は逆台形である。本址は一応溝址としたが、囲溝址の可能性もある。

遺物は覆土中から弥生時代後期の遺物が出土した。

出土遺物から弥生時代後期と一応考えておく。

④ 溝址16 (挿図178)

IXT21f から IXT23g にかけて検出した。調査延長は5.2mで、方向はN40°Eで方向を変えてN65°Eを

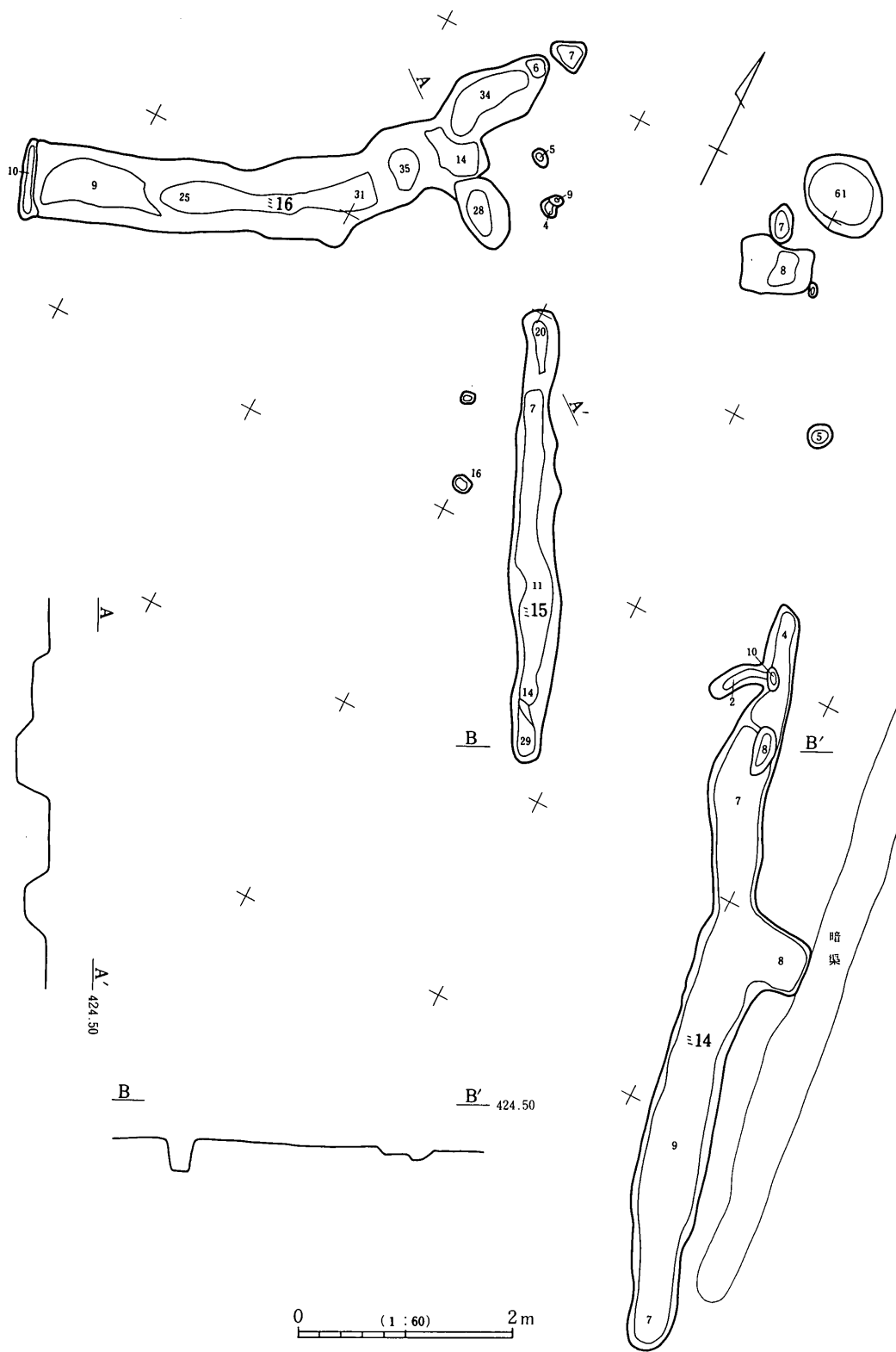
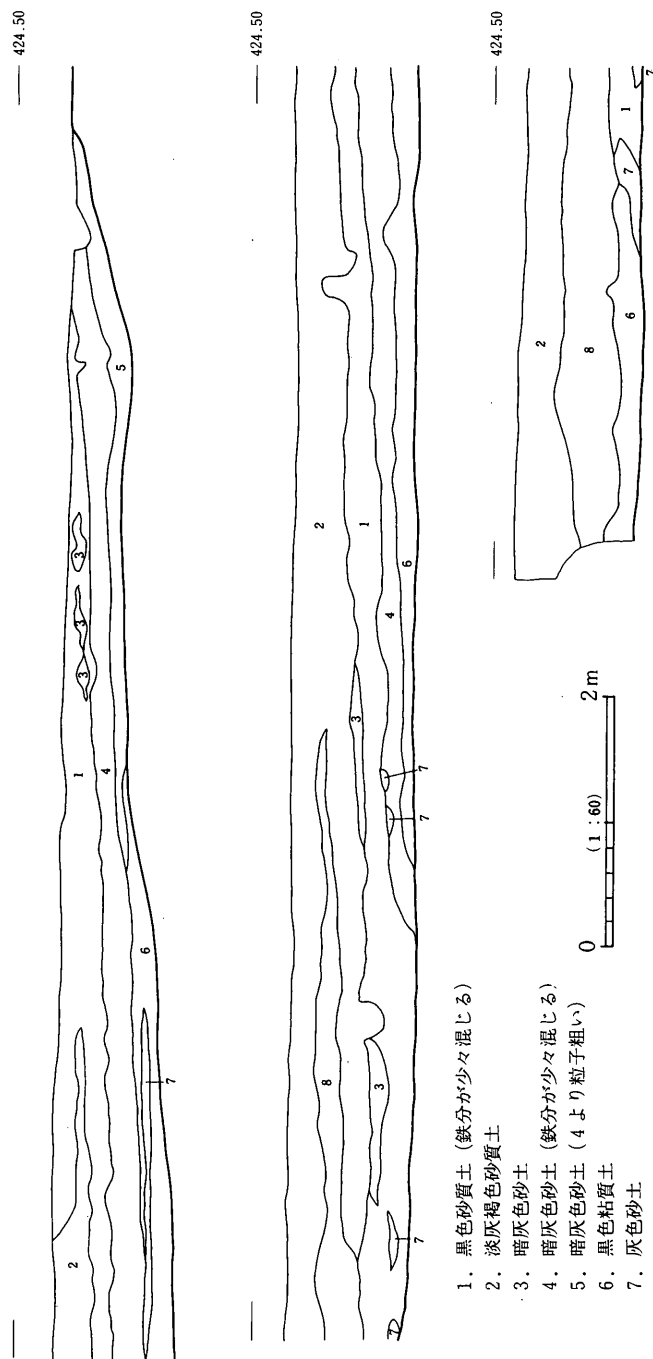


插图178 沟址14、15、16

示す。幅83~49cm・深さ34~6cmを測り、断面形は様々である。遺構の状況から小沢川の痕跡と考えられる。

遺物は覆土中から流れ込みの弥生時代後期の遺物が出土した。

時期決定の根拠に欠け、不明である。



挿図179 溝17Iトレンチ 土層図

⑤ 溝址17 (挿図179・全体図)

IXT20g から XT2l にかけて検出した。全面の調査は時間的に不可能であったため、トレンチを設定し溝址17I トレンチとして調査した。確認できたのは前述した範囲であるが、IXT20g の西側にも延びそうである。トレンチは落ち込みに直行するように幅 1 m で設定した。緩やかに落ち込み、深さは100~84cm を測る。遺構の状況から、溝址としたが湿地帯と思われる。なお、水田址と思われる遺構は確認できなかった。

遺物は古墳時代の土器を主体として弥生時代の遺物も出土した。

湿地帯の形成された時期については根拠がなく不明であるが、他地区の湿地帯の状況を見ると、古墳時代より以前から存在していたと思われる。

4) 溝状遺構

① 溝状遺構 1 (挿図180)

XT12q から XT12r にかけて検出した。調査した面積が狭く、状況が不明である。緩やかな落ち込みを検出したので溝状遺構とした。湿地帯の可能性もある。

遺物は出土しなかった。

時期決定の根拠に欠け、不明である。

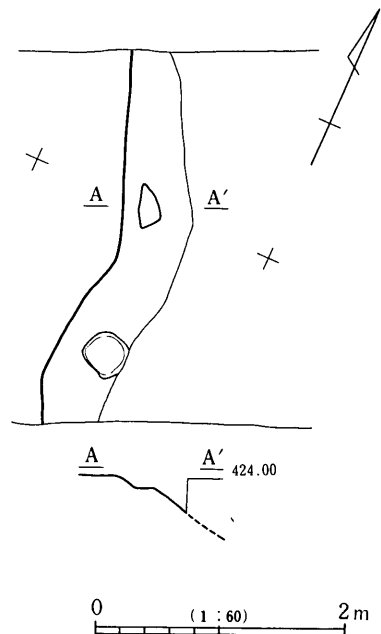
5) 土 坑

① 土坑25 (挿図181)

XU5x から XT5a にかけて検出した。146号住居址を切る。1.49×1m の歪んだ楕円形を呈すると推定され、深さは25~5cm を測る。断面形は皿状を呈する。

覆土から流れ込みと思われる縄文・弥生時代の遺物が出土している。

時期決定の根拠に欠けるが、切り合い関係から弥生時代後期以降に位置づけられる。

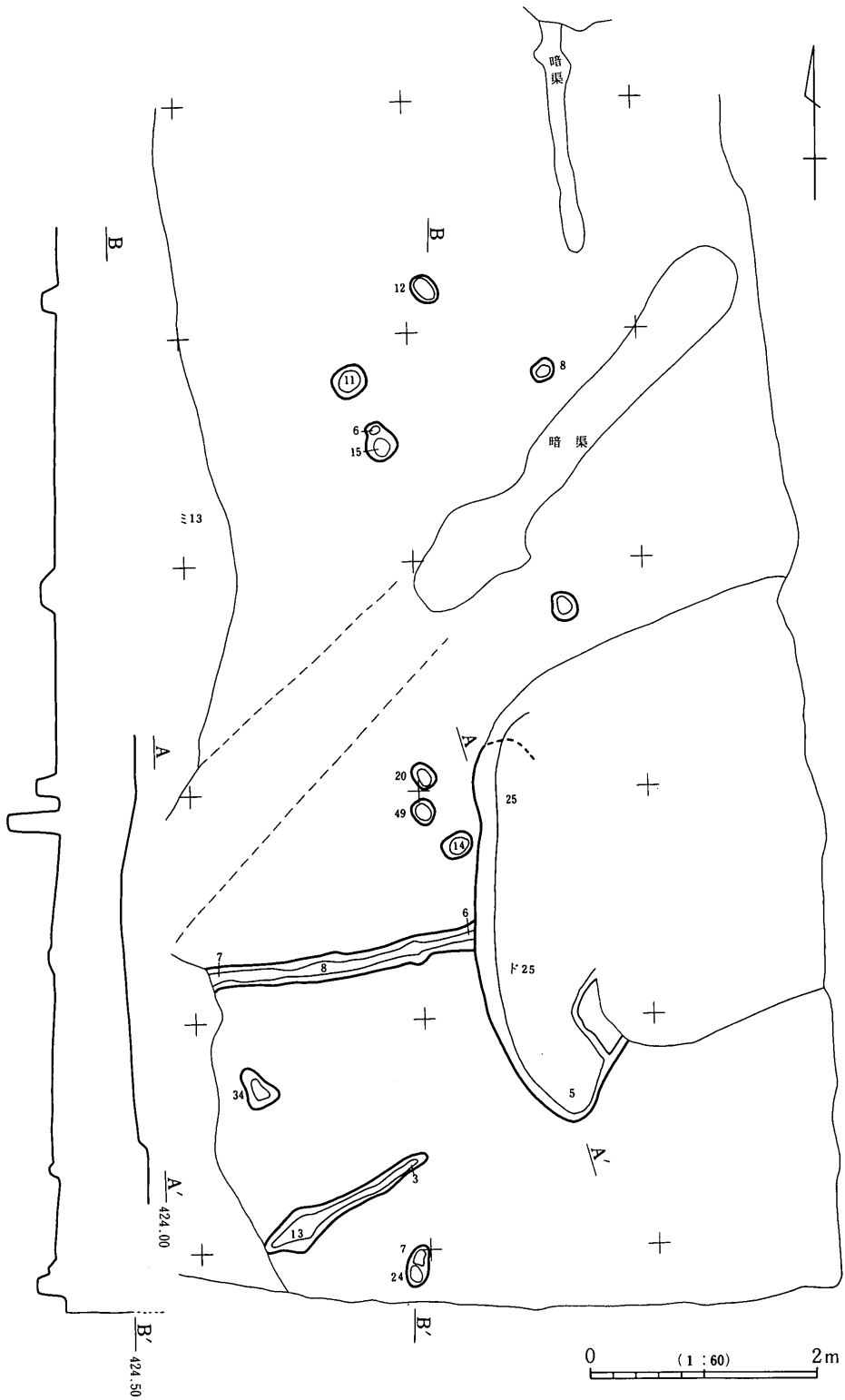


挿図180 溝状遺構 1

6) 囲溝址・ピット

従来囲溝址と呼称されてきた幅の狭い溝が認められた。本地区は、集落域をやや外れた地区であるので、I・II地区程は検出されなかった。また、個々の関係も検討できていない。

ピットは集落域と考えられる場所に集中する。囲溝址と同様、個々の関係は検討できていない。個々の説明は省略し、遺構図はすべて掲載した。



挿図181 土坑25・囲溝址ピット(1)

4. 第Ⅳ地区

1) 竪穴住居址

(1) 弥生時代

① 150号住居址 (挿図182)

IXV17a を中心として検出し、東側は用地外になり未調査である。ほぼ半分を調査した。弥生時代後期の溝址18・19を切る。6×4.8m と推定される隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN41°Wを示す。壁高は24～2cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はしまっているがたたき状ではない。主柱穴はP1で、他のピット等は確認できなかった。炉址は主柱穴P1の西側に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を36×30cmに掘り凹め2個の炉縁石を配置する。覆土には炭・焼土が残存していた。

遺物は覆土中より出土した。

出土遺物から弥生時代最終末に位置づけられる。

② 153号住居址 (挿図183)

IXU14v を中心として検出し、東側は用地外になり未調査である。ほぼ半分を調査した。溝址22(湿地帯)を切る。3.9×3.4m と推定される隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN41°Wを示す。壁高は最大5cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は砂土上に構築されておりしまりはなく、不良である。主柱穴はP1～P3で、P4は入口施設と考えられる。炉址は主柱穴P1の北西側に位置する炉縁石を有する二重土器埋設炉で、掘り方は平面では確認できなかった。外側は大型の壺を、内側に甕を設置する。埋設土器の両側とも、原因は不明であるが、かなり破損していた。外側埋設土器覆土には焼土が残存していた。

遺物は覆土中より出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

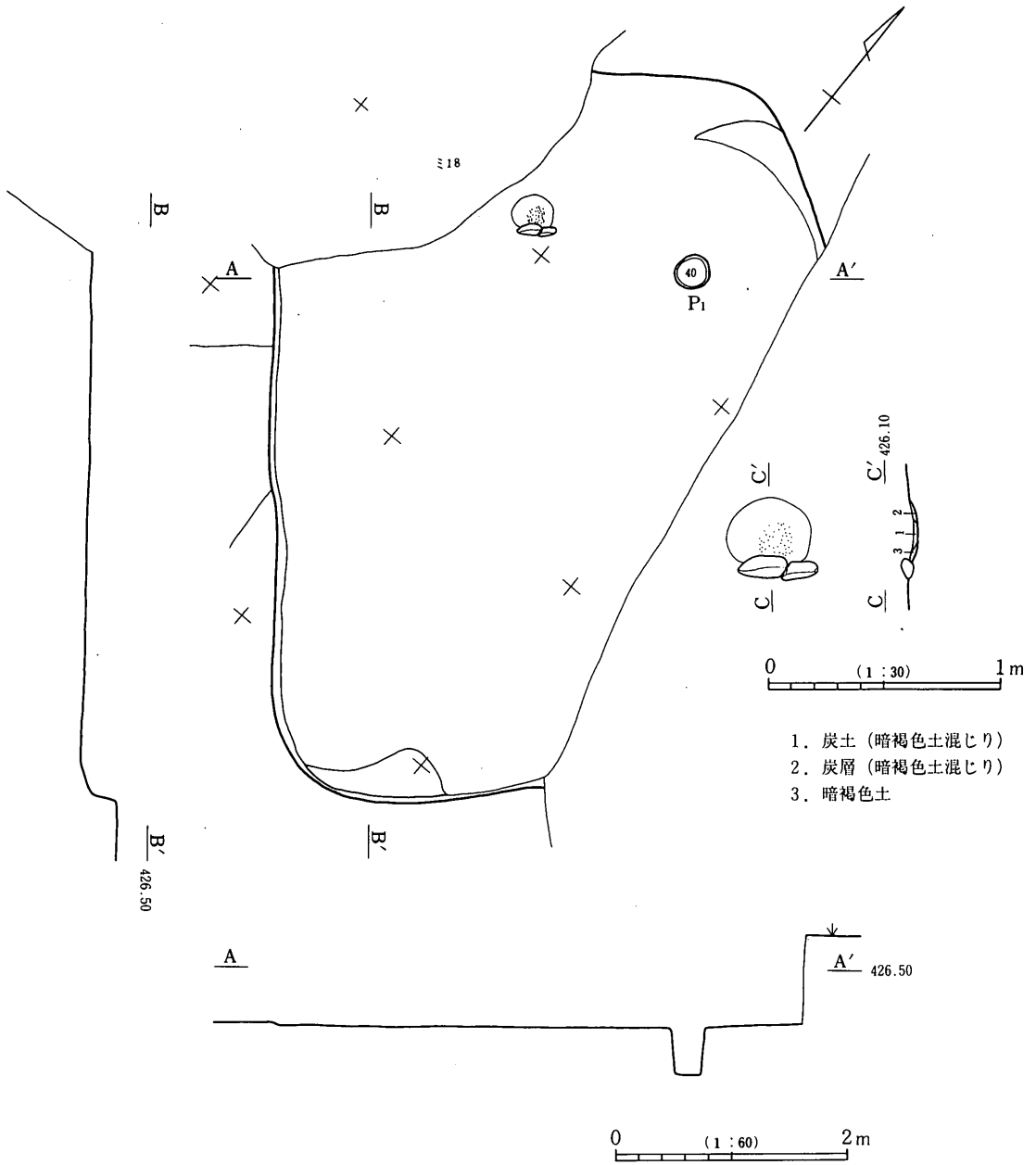
(2) 古墳時代

① 151号住居址 (挿図184)

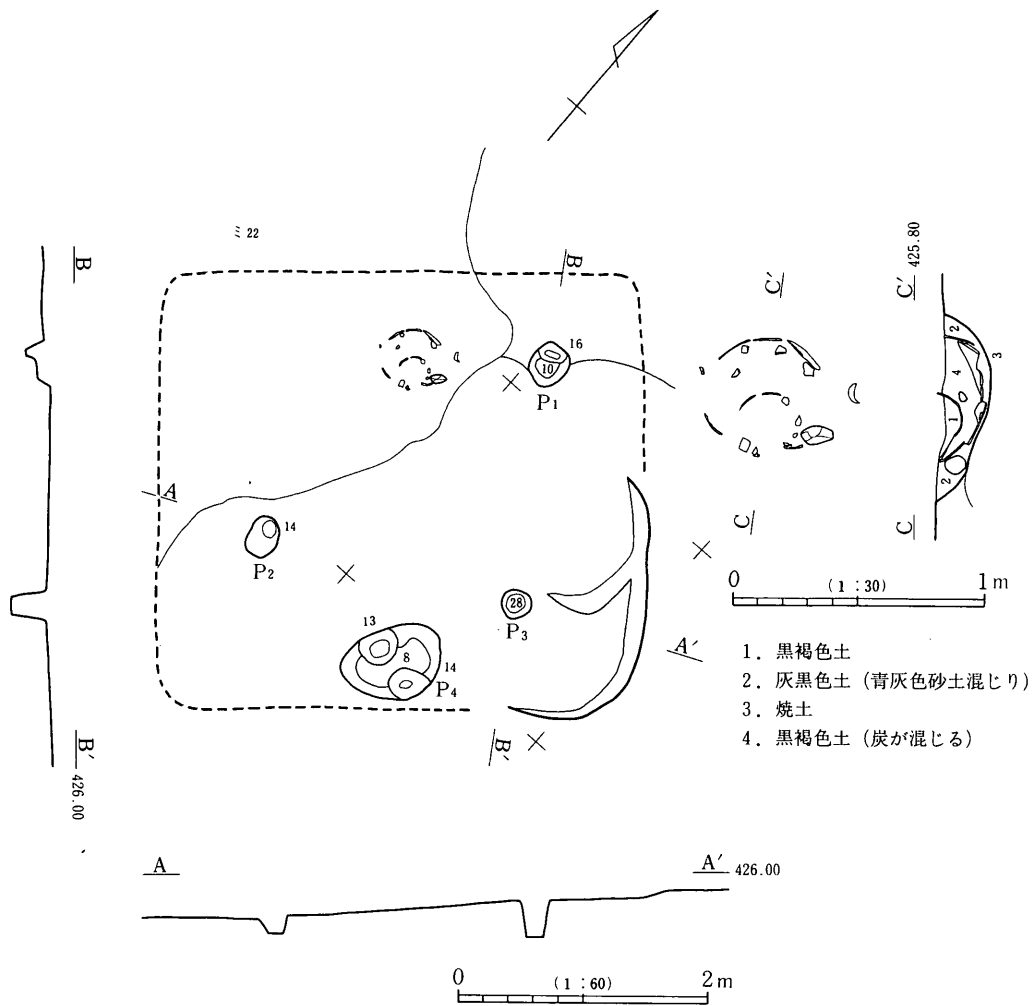
IXV14d を中心として検出し、ほぼ全体を調査した。古墳時代前期以前の竪穴状遺構1・溝址22(湿地帯)を切る。3.6×4.2mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は最大10cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は砂土上に構築されておりしまりはなく、不良である。主柱穴はP1の可能性が有る。炉址は確認できなかった。

遺物は覆土中より出土した。

出土遺物より古墳時代前期に位置づけられる。



挿図182 150号住居址



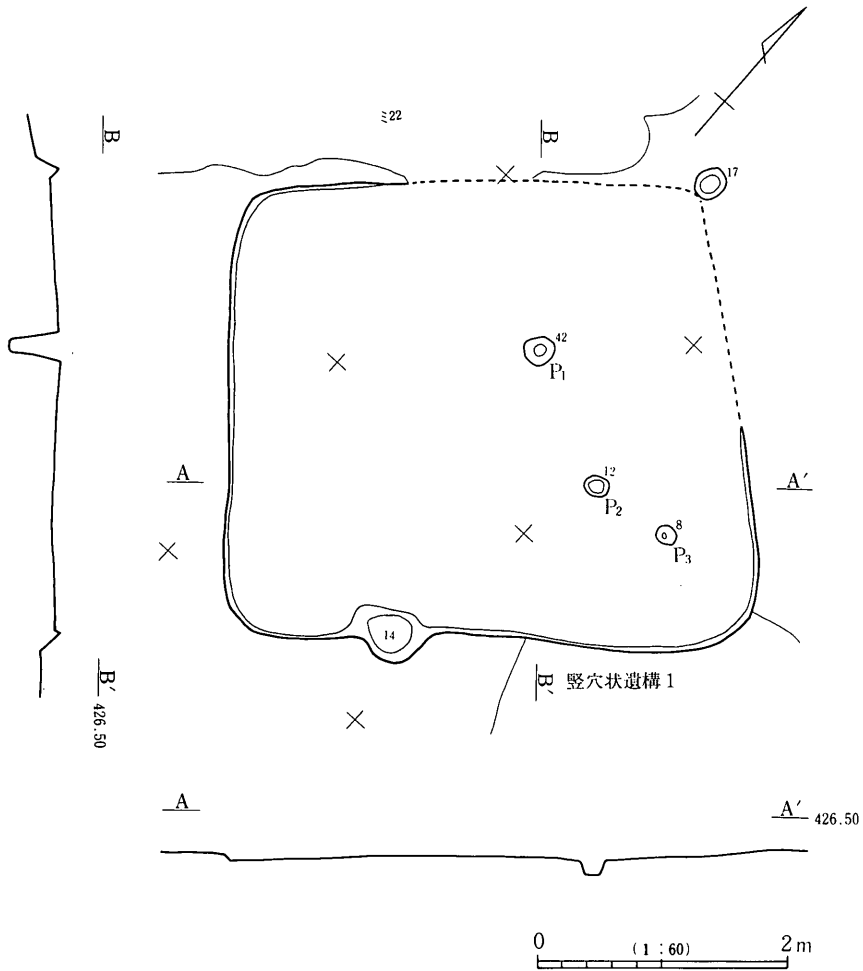
挿図183 153号住居址

② 152号住居址 (挿図185)

IXU18tを中心として検出し、ほぼ全体を調査した。溝址18を切る。4×3.1mと推定される隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN55°Eを示す。壁高は最大11cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は破線範囲内はしまっているが、全般的に砂土上に構築されておりしまりはなく、不良である。支柱穴等は確認できなかった。炉址は住居址中央部よりやや北側に位置する地床炉で、床面を32×30cmに掘り凹めている。覆土に炭・焼土が残存していた。

遺物は覆土中より出土した。

出土遺物より古墳時代前期に位置づけられる。



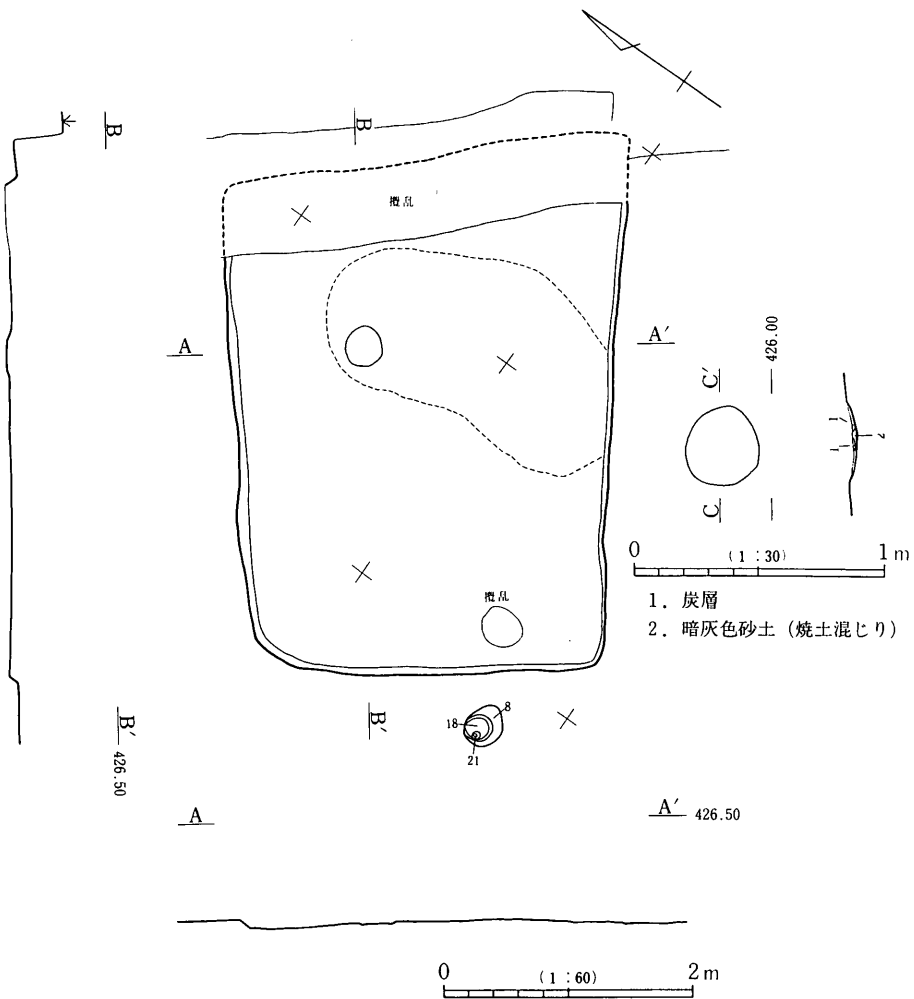
挿図184 151号住居址

③ 154号住居址 (挿図186)

IXV12b を中心として検出し、1/3 程度を調査した。溝址22 (湿地帯) を切る。上層が削平されており、状況はあまり良くない。5×5m と推定される隅丸方形の竖穴住居址で、主軸方向は N35°W を示す。壁高は最大20cm を測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は砂上に構築されており、しまりはなく、不良である。支柱穴は断定できなかった。炉址は住居址中央部よりやや北西側に位置する土器埋設炉で、上部は削平されている。底部を欠く甕を埋設し、底に土器片を敷いてある。覆土には土器の小破片が混在していた。

遺物は覆土中より出土した。

出土遺物より古墳時代前期に位置づけられる。



挿図185 152号住居址

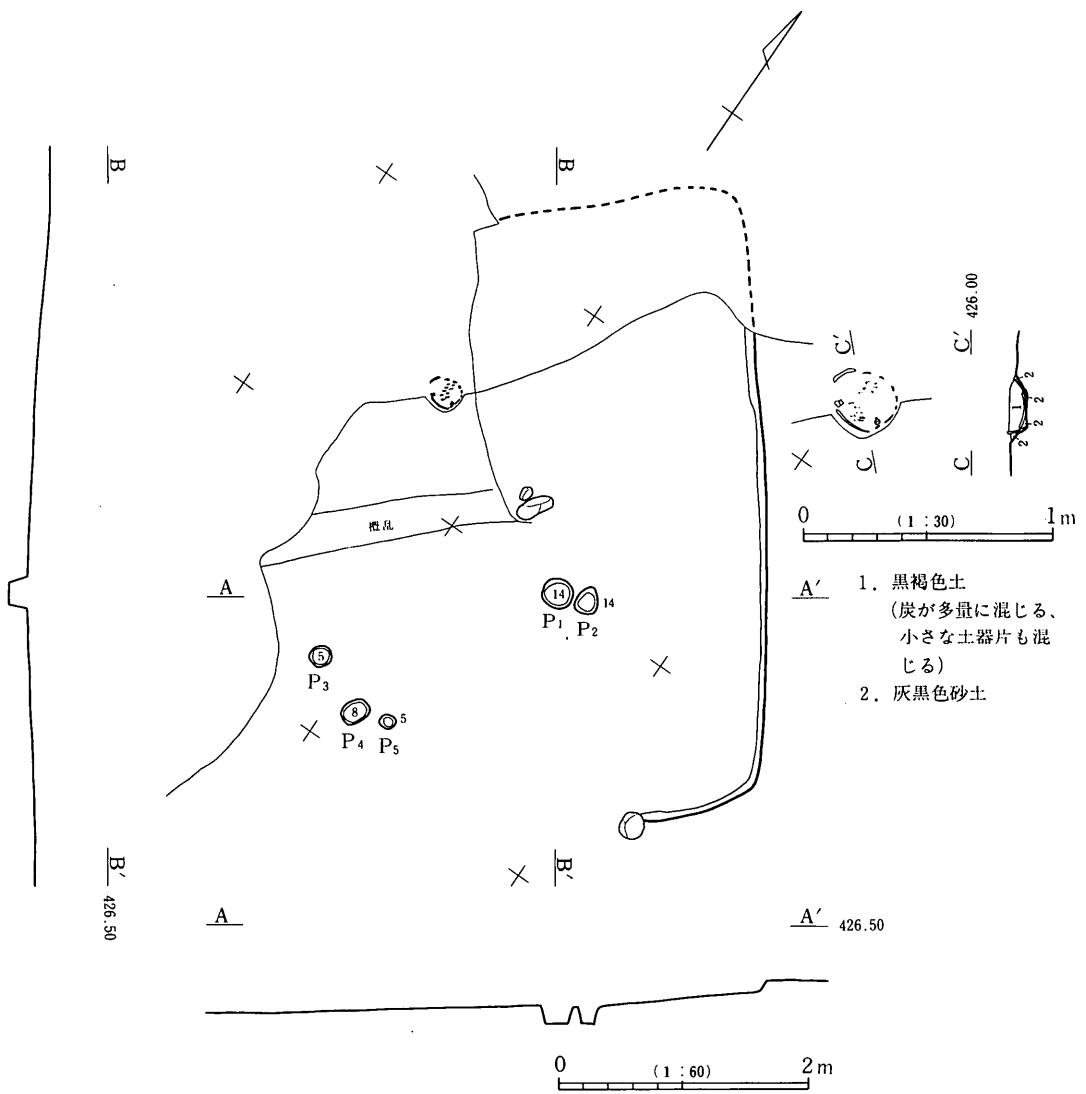
2) 竪穴状遺構

① 竪穴状遺構 1 (挿図187)

IXV15c を中心として検出し、2/3 程度を調査した。古墳時代前期の151号住居址・弥生時代後期の溝址18に切られる。2.3×2m を測る隅丸方形の竪穴状遺構で、主軸方向は不明である。壁高は11～5cm を測り、緩やかな壁面をなす。床面は砂上に構築されておりしまりはなく、不良である。ピットが2基検出された。遺構の性格は不明である。

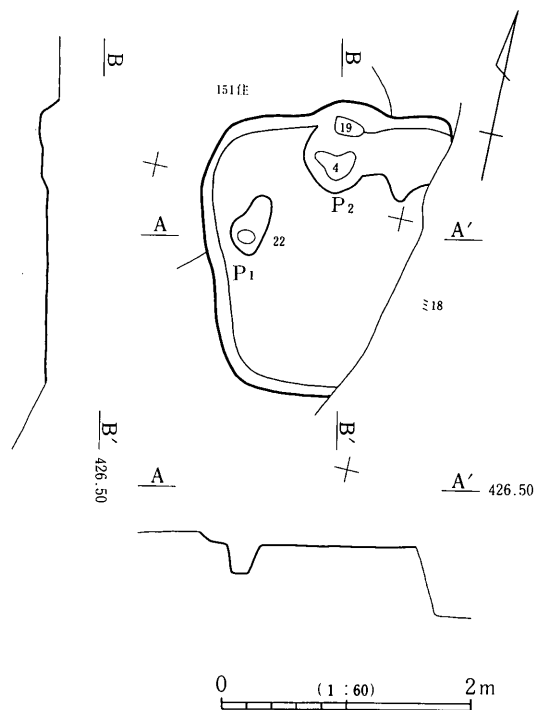
遺物は出土しなかった。

切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。



- A'
1. 黒褐色土
(炭が多量に混じる、
小さな土器片も混
じる)
 2. 灰黒色砂土

挿図186 154号住居址



挿図187 竪穴状遺構1

3) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址2 (挿図188)

IXU15W を中心として検出し、弥生時代後期の溝址18に切られるため、全容は不明である。桁行が2間の掘立柱建物址で、桁行4.4mを測る。柱間は桁行が2.18mと1.86m、梁行は1.6mを測り、桁行方向はN33°Wを示す。柱堀方は様々で径44~12cm・深さ22~7cmを測る。P1~P3は建て替えのものの可能性が考えられるが、詳細は不明である。

遺物は出土しておらず、切り合い関係からすると弥生時代後期以降の可能性がある。

② 掘立柱建物址3 (挿図188)

IXU15v を中心として検出した。153号住居址と切り合い関係がありそうであるが、不明である。全容が把握できなかったため数値は確認時のものである。桁行が2間の掘立柱建物址で、桁行2.6mを測る。柱間は桁行が1.54mと1.05m、梁行は1.3mを測り、桁行方向はN36°Wを示す。柱堀方は円形及び楕円形で径25~20cm・深さ35~11cmを測る。遺構の状況から掘立柱建物址2の建て替えの可能性もある。

遺物は出土しておらず、掘立柱建物址2の建て替えとすると弥生時代後期以降であろう。

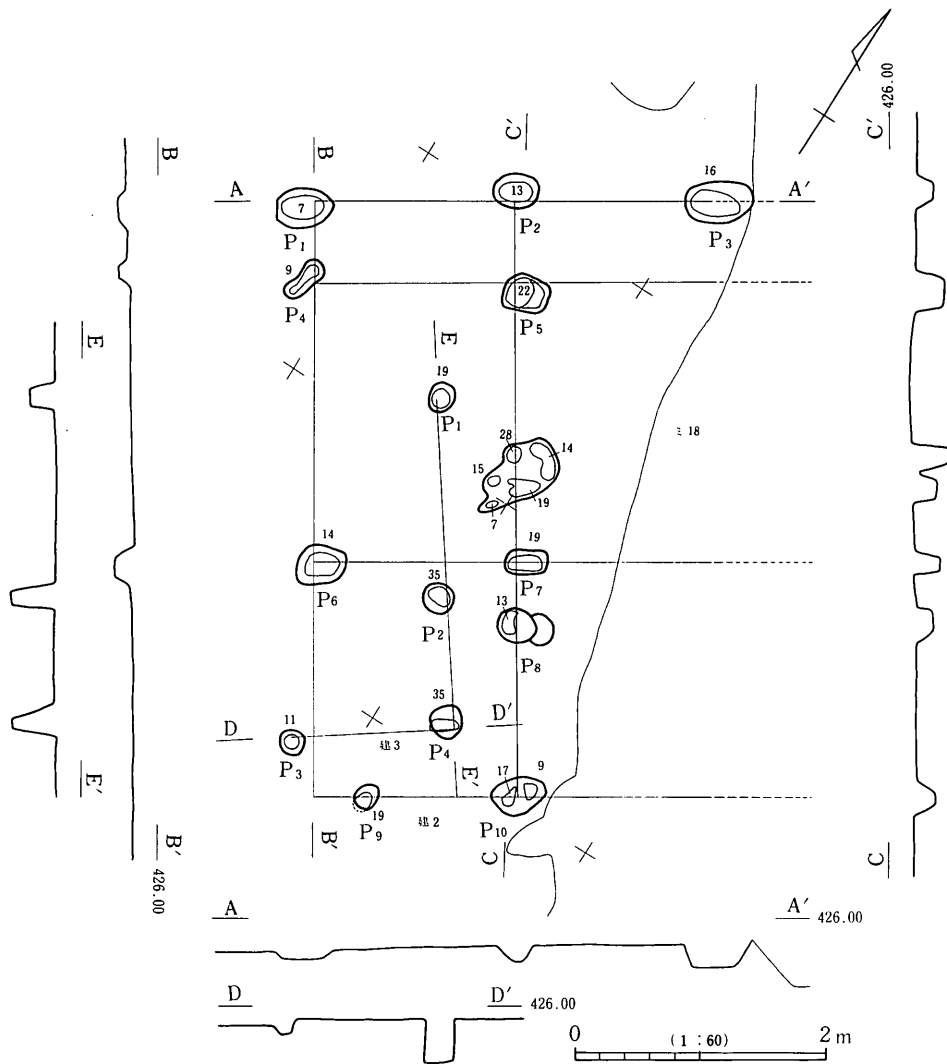


插图188 掘立柱建物址2.3

4) 溝 址

① 溝址18 (挿図189)

IXV16g から IXU19p にかけて検出した。古墳時代前期の152号住居址に切られる。溝址19とも切り合い関係にあるが、ほぼ同時期と考えられる。調査延長は32m で両側に延長するが、用地外となり、調査できなかった。方向は IXV16a 付近まで N3°E、方向を変えて N23°W を示す。幅196～104cm・深さ77～34cm を測る。断面形は基本的には逆台形である。遺構の状況から、環濠もしくは区画溝の可能性が強い。また、水の流路となった痕跡も認められた。

遺物は覆土及び底部から弥生時代後期の遺物を主体として出土した。

出土遺物から、弥生時代後期に位置づけられる。

② 溝址19 (挿図189)

IXV17a から IXU11w にかけて検出した。古墳時代前期の150号住居址に切られる。溝址18とも切り合い関係にあるが、ほぼ同時期と考えられる。また、溝址22 (湿地帯) に流れ込んでおり、プランが確認できなかった。調査延長は15m で、東側に延長するが用地外となり、調査できなかった。方向はほぼ直線的で N60°W を示す。幅652～196cm・深さ89～41cm を測る。断面形は様々である。遺構の状況から、小沢川の痕跡の様であるが、環濠もしくは区画溝が水の流路となった可能性も否定しきれない。

遺物は覆土及び底部から弥生時代後期の遺物を主体として出土した。

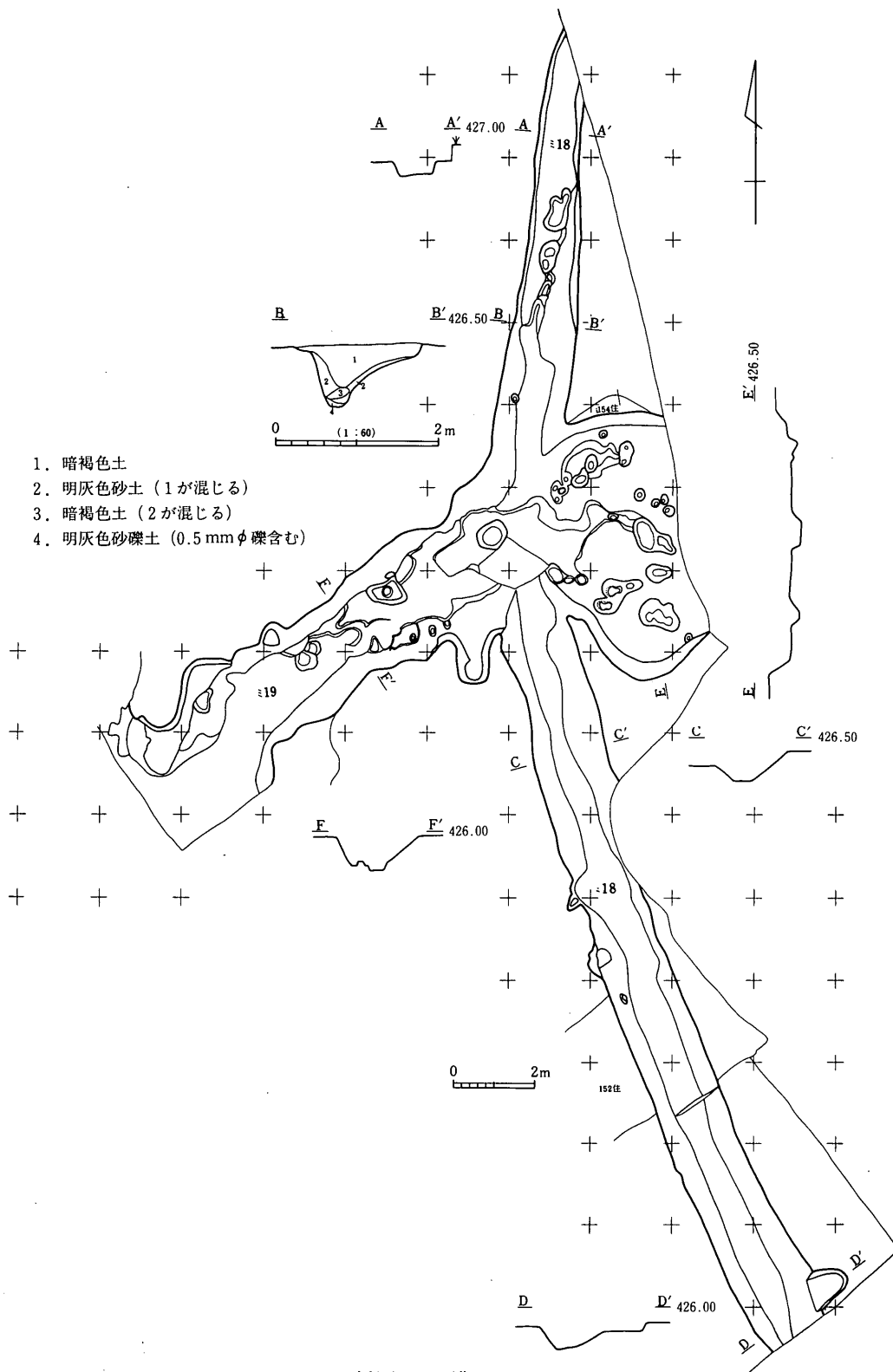
出土遺物から、弥生時代後期に位置づけられる。

③ 溝址22 (挿図190・全体図)

IXV15h から IXU15n にかけて検出した。全面の調査は時間的に不可能であったためトレンチを設定し、溝址22 I トレンチとして調査した。弥生時代後期の153号住居址、古墳時代前期の151・154号住居址に切られる。トレンチは落ち込みに直行するように幅1.5m で設定した。肩部から緩やかに落ち込む。湧水のため、基盤面まで調査できなかった。遺構の状況から、溝址としたが湿地帯である。なお、断面を精査したが水田址と思われる遺構は確認できなかった。

弥生時代の遺物を主体として遺物が出土している。

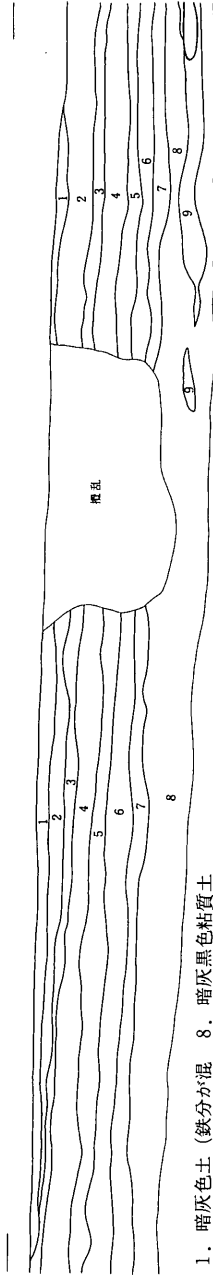
遺構の切り合い関係から、弥生時代後期以前に湿地帯が形成され、弥生時代後期から古墳時代前期の間は乾燥していたと思われる。



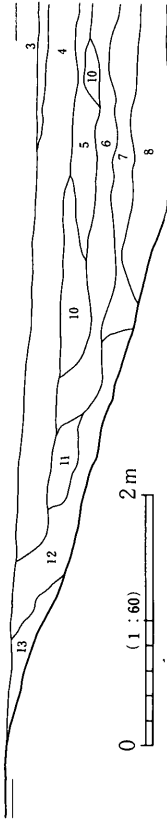
- 1. 暗褐色土
- 2. 明灰色砂土 (1が混じる)
- 3. 暗褐色土 (2が混じる)
- 4. 明灰色砂礫土 (0.5 mm φ 礫含む)

挿図189 溝址18、19

426.50



426.50



- 1. 暗灰色土 (鉄分が混じる)
- 2. 暗灰色土
- 3. 灰黑色土
- 4. 灰色土 (鉄分が混じる)
- 5. 暗灰色砂質土
- 6. 暗灰色土
- 7. 灰色砂土
- 8. 暗灰黑色粘質土
- 9. 明灰色砂土
- 10. 暗灰色砂土
- 11. 灰色砂土 (暗灰黑色土が混じる)
- 12. 乳白色砂礫土 (1~2 mm φ 礫が混じる)
- 13. 暗褐色砂質土

挿図190 溝址22 1トレンチ土層図

5. トレンチ

各地区以外で遺跡の状況を確認するため、トレンチを設定した。以下、トレンチ毎に記述する。

① I トレンチ (全体図)

III地区の北西側、IXU9h から IXT16w にかけて、幅2.2m・長さ25.5m で設定した。III地区の溝址17とIV地区の溝址22の中間に位置し、湿地帯であった。調査の安全上基盤面まで調査できなかった。

弥生時代の遺物が若干出土した。

② II トレンチ (全体図)

III地区の北西側、IXU9h から IXU1a にかけて、幅2m・長さ19.5m で設定した。III地区の溝址17とIV地区の溝址22の中間に位置し、I トレンチと同様、湿地帯であった。調査の安全上基盤面まで調査できなかった。

弥生時代の遺物が若干出土した。

③ III トレンチ (全体図)

IV地区の北側、IXV11k から IXV1p にかけて、幅2.2m・長さ23.3m で設定した。IV地区の遺構検出面まで調査したが、溝址22の覆土と同様であったので溝址22の範囲内であると考えられる。弥生時代の遺物が若干出土した。

④ IV トレンチ (全体図)

IV地区の北側、IXV8y から IXV2q にかけて、幅2.2m・長さ21.8m で設定した。IV地区の遺構検出面まで調査したが、III トレンチと同様、溝址22の範囲内であると考えられる。

遺物は出土しなかった。

⑤ V トレンチ (全体図)

IV地区の北側、IXW6c から VIII W8k にかけて、幅3.3～1.7m・長さ48.3m で設定した。黒色粘質土まで調査したが、湿地帯であると確認したので基盤面まで調査せずに終了した。

遺物は出土しなかった。

IV ま と め

今次調査によって検出された遺構はすでに述べてきたとおりである。時間等の制約によりほんの一部しか遺物の資料化ができず、十分な説明・検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは、調査によって得られた問題点を時代毎に指摘してまとめとしたい。

① 縄文時代

中期の竪穴住居址2軒と土坑が検出され、該期遺物は弥生時代の遺構中からも出土している。沖積段丘面において該期の遺構が検出されるのは少ないだけに、調査前には予想できなかった。

竪穴住居址2軒は離れた位置にあり、弥生時代の遺構に切られたものの存在や調査範囲外に存在するものを考慮に入れる必要があるが、大集落を構成するとは想定しにくい。洪積段丘面や扇状地に立地する該期集落との様相とは異なっており、今後の調査による類例の増加を待ちたい。

② 弥生時代

何と言っても今次調査における最大の成果は該期にあると言って良い。138軒の竪穴住居址等の遺構とそれに伴う多量の遺物が出土しており、当地方でも有数の資料と考えられる。調査によって得られた問題点は多岐にわたるが、現在で十分に整理できた訳ではない。各項目によって感想を記してみる。

中期の遺構・遺物について

ほぼ同時期と考えられる竪穴住居址が6軒調査された。出土遺物からみて、中期の阿島式期から北原式期と考えられ、遺物については後述するが、両者の様相を含んでいる。当該期の調査資料は、大規模発掘が多くなったにもかかわらず、決して増えているとはいえない状況である。数えてみても、北原遺跡（高森町教育委員会1772）・恒川遺跡群（飯田市教育委員会1986・1988）・的場遺跡（松川町教育委員会1973・1987）等である。

住居形態は隅丸長方形を呈し、床面がわずかに凹む地床炉が認められる。全体形が明らかにできなかったのが今一つはっきりしないが、炉址の位置は片側に偏る傾向が認められた。北原式期の住居形態と比較すると、平面形ではほぼ同様であるが、炉址の位置や構造に違いが認められる。時期的な差に起因すると考えられ、住居形態の変遷を考える上での好資料なる。

出土遺物には土器・石器がある。遺構の掘り込みが浅くかつ他遺構との重複が認められるため、該期の全組成を示す良好な資料は得られなかった。しかし、調査例が少ないだけに貴重である。土器は壺・甕（深鉢）があり、106号住居址では北原式土器に特徴的なへう描き連続山形文が施される壺と阿島式土器に主体をなす口唇部に刻みを持つ条痕文系の甕（深鉢）が共伴している。23号住居址でも同様であり、甕（深鉢）しか出土しなかったその他の竪穴住居址も同時期と考えられる。阿島式土器と北原式土器の両者の様相を持っているといえ、はっきりつかめなかった両者の関係を示唆することになる。従来は壺の様相にみられる断絶から、時期的な差があるというたら

えと、時期は断絶せず文化的な様相による差ではないかとの2つの考え方があった。後者を補強することになると考える。

後期の遺構・遺物について

132軒の竪穴住居址と溝址・土坑・囲溝址・ピットが調査された。遺物の状況から、後期の全般にわたる資料と考えられる。

竪穴住居址はほとんどが切り合い関係を有する。また、床面が何回にもわたって作られていたり炉址・支柱穴の状況から建替が考えられる例も多かった。従来の該期竪穴住居址は、切り合い関係も少なく建替えられることも少ない傾向が指摘できる。例えば、後期後半から終末の大集落である殿原遺跡（飯田市教育委員会1987）をみても、切り合い関係をもつのは12か所であり、単独で存在する竪穴住居址が圧倒的である。また、建替が考えられる住居址もほとんどみられない。その違いは遺跡立地条件に起因すると考えられ、総合的な検討が必要である。

竪穴住居址内施設の中で特筆すべき遺構に、14例検出した二重土器埋設炉がある。大型の壺もしくは甕を埋め、その中に甕を入れて二重にした土器埋設炉である。過去に、的場遺跡 号住居址（松川町教育委員会1973）・垣外遺跡 SA02住居跡（松川町教育委員会1987）等で調査されているが、数多く検出されたのは本遺跡が初めてである。個々に形態差がみられるが、基本的には大きな土器の中に甕を入れて、埋設土器底に炭が認められる。本来の用途で二重にする必要があれば、すべてがそうなるはずであるので、本遺跡の特殊事情による結果と考えられる。遺跡の中でも第Ⅰ地区に多く、第Ⅱ地区ではほとんどないという違いがみられる。その立地をみれば、二重土器埋設炉がみられる地域は地下水位が高く、湿気が多いという傾向が指摘できる。竪穴住居址内部も湿気が多かったと考えられ、水分の浸透防止で二重にした可能性を指摘しておく。

もう一つ特筆すべき遺構に囲溝址がある。高松原遺跡で注意されてから（飯田高等学校1977）、類例は増加しているのであるが、その用途・役割について深く考えられてこなかった。そのなか、酒井幸則氏が各遺跡の調査例から共通点・特徴を列記し、板塀で囲まれ屋根を必要としない家畜小屋ではないかとの問題提起をしている（松川町教育委員会1987）。

当遺跡でも数多く検出されており、それらを検討することが必要と考えられる。特徴を述べる以下のようなものである。

- (1) 検出された場所は、集落の中心地域と考えられる第Ⅰ地区西部・第Ⅱ地区南西部に多い。
- (2) ほとんど竪穴住居址と重複するが、切り合い関係を把握することは困難である。
- (3) 平面形は竪穴住居址や囲溝址相互の重複が著しく一単位の摘出が難しいが、溝が四角く巡ることはほとんどない。
- (4) 溝が途中で断絶したり、直角に曲がったりして複雑な形態を示す。
- (5) 多くはないが、溝にピットを伴うものがある。
- (6) 方向はほとんど竪穴住居址の主軸方向と同じ北西側を示す。
- (7) 規模は十分には把握できないが、長くて10m程と考えられる。

- (8) 周辺にはピットが検出されたが、それとの関連は不明である。
- (9) 溝で囲まれた内側に床面・炉址等の施設は認められない。
- (10) 直接関連する遺物の出土はない。
- (11) 時期は遺構の検出状況からみて弥生時代後期と考えられ、竪穴住居址とともに後期集落を構成すると推定される。

いわば、従来から指摘されてきたことを確認するのに過ぎないのかもしれない。囲溝址の性格を推定するには、こうした事実を積み重ねることによって解決可能と考えるが、現状では事実のみを指摘するにとどめておく。

遺物には主に竪穴住居址から出土した土器・石器がある。後期全般にわたる資料であり、切り合い関係を考慮したうえで検討を加える必要がある。十分に整理できなかったので詳細に位置づけられない。今後に残された課題である。

集落構成について

調査対象地域が広範囲に及んだため、結果的に丹保遺跡の遺跡範囲の中で調査可能な部分のほぼ全面の様相が明らかにできた。集落構成を考えるうえで絶好の資料と考えられるので、現状での素描をしておく。

本遺跡が集落域として利用され始めるのは、中期後半北原式期の古い段階からである。竪穴住居址が6軒あり、削平された遺構の存在も考える必要がある。弥生時代の前期、天竜川の氾濫源に近い場所を選んでイネを作っていたのが、より安定した場所を求めて沖積段丘上に進出した最初の段階といえる。

次の中期後半の竪穴住居址は検出されなかった。ただし、中期後半の竪穴住居址の掘り込みは浅いので、水田の造成で削平されたことも考えられ、集落は継続していた可能性が高い。それは、第一次調査で1軒の該期竪穴住居址が調査されていたり、後期の竪穴住居址の中に該期遺物がみられることが理由である。

後期になると、集落が継続して営まれる。時期を決定する上で欠かすことのできない遺物の分析が済んでいないので、詳細に位置づけることはできないが、切り合い関係からみても数時期に分けることが可能である。6m前後の大きな竪穴住居址を核として一単位としてのまとまりがありそうで、その摘出は今後に残された課題である。また、前述した囲溝址の役割や穀物貯蔵施設が未検出であり、解決のつかない問題が残されている。ただし、多数検出されたピットの中に、掘立柱建物址のものがある可能性は指摘できる。第II地区の溝址20・第III地区の溝址13・第IV地区の溝址18も問題となる。検出された位置は遺構が少なくなるかほとんどない箇所であり、1軒を除いた竪穴住居址のすべてがその内側に建てられる。第I地区の北東側には湿地帯をなす大きな溝址9もあり、それらが集落の回りに巡る環濠を構成したと想定できる。未調査部を想定すると、丹保遺跡全体では350軒位の竪穴住居址があったと想定でき、弥生時代における当地方の拠点的大集落といえる。これだけ長期間にわたる集落を支えたのは、周辺に広がる水田可耕地によ

る生産力の高さであろう。より安定した穀物の収穫が集落を継続させたのである。

集落の調査に主体を置いたために、近年目覚ましい進歩をとげて解明されている水田址等生産域の状況が明かにできなかった。集落と密接不可分であるだけに、心残りの点となった。

③ 古墳時代

竪穴住居址 6 軒・掘立柱建物址 1 棟・溝址 4 本が調査された。詳細な位置づけはできないが、弥生時代から継続する古墳時代前期初頭と、やや間を置いた古墳時代後期の二時期に分けられる。後者は第Ⅱ地区に 2 軒の竪穴住居址と 1 棟の掘立柱建物址が近接して位置しており、第Ⅱ地区の南側に該期集落が展開する可能性がある。

④ 中世

井戸址 4 基とピットが調査された。井戸址は第Ⅰ地区の南部に集中しており、その周辺のピットの中にも該期のものがあると考えられる。そのほかの遺構は検出されず、該期の様相は明確にできるほどの資料は得られなかった。

今次調査で得られた問題点を思いつくままに記してきた。今後に残された課題が多いことに呆然としている。丹保遺跡という貴重な文化財を破壊してしまった代償として、記録という形で調査報告書を後世に残すのであるが、その責が十分に果たせなかったことに責任を感じている。

引用・参考文献

- | | | |
|-------------|-------|--------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1986 | 『恒川遺跡群』 |
| 飯田市教育委員会 | 1987 | 『殿原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『恒川遺跡一田中・倉垣外地籍』 |
| 飯田高等学校 | 1977 | 『高松原』 |
| 上郷町教育委員会 | 1984 | 『高松原Ⅱ』 |
| 上郷町教育委員会 | 1987 | 『棚田遺跡Ⅱ』 |
| 上郷町教育委員会 | 1988 | 『矢崎遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989A | 『ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989B | 『中島・矢崎遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1991 | 『藪越遺跡』 |
| 高森町教育委員会 | 1972 | 『北原遺跡』 |
| 下伊那地質誌編集委員会 | 1976 | 『下伊那の地質解説』 |
| 松川町教育委員会 | 1973 | 『的場』 |
| 松川町教育委員会 | 1982 | 『的場一第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査報告書』 |
| 松川町教育委員会 | 1987 | 『垣外遺跡』 |

後 記

上郷町飯沼の丹保地区で実施された農業基盤整備事業の集落型は河岸段丘の最下段の天龍川沿岸を除く丹保地区全体に及ぶ広い範囲に及ぶものであります。当町の遺跡分布に見る埋蔵文化財包蔵地は過密状況にあります。特に丹保地区においても当町有数の包蔵地であり、堂垣外遺跡・丹保遺跡をはじめ蕨上遺跡、長橋遺跡等が相隣接する形で存在しております。したがって当該事業の実施に伴ってその殆どが破壊されることになるので、保護協議の結果、発掘調査を行って記録にとどめることにしたものです。ところで当町の埋蔵文化財発掘調査の体制は近年考古学関係者や県の御指導をいただきながら次第に充実して来ているところで大変有難いことです。おかげで大がかりな発掘調査もほぼ予定どおり実施することができ、その結果は本書にまとめたとおりです。座光寺地区の恒川（郡衙）との深いかかわりを思わせる堂垣外遺跡や弥生の村を彷彿させる丹保遺跡等又新しい多くの発見がありました。これらの成果は学術的な資料としても大切に保存流用して伝えるべきもので、考古学の上でも大きな貢献になると信じます。当調査について調査補助、発掘作業、整理作業に従事いただいた皆さんの御尽力、県教委文化課や研究者の皆さんの御指導と御協力、地元土地所有者・耕作者の深い御理解等それぞれのお立場における御支援に対し深甚の感謝を申し上げます。

平成5年3月19日

長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

丹 保 遺 跡

〈遺 構 編〉

— 農村基盤総合整備事業(集落型)丹保地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発 行／平成5年3月19日

編集・発行／長野県下伊那郡上郷町教育委員会

印 刷／日本ハイコム株式会社

長野県塩尻市北小野4724

TEL 0263-56-2111
